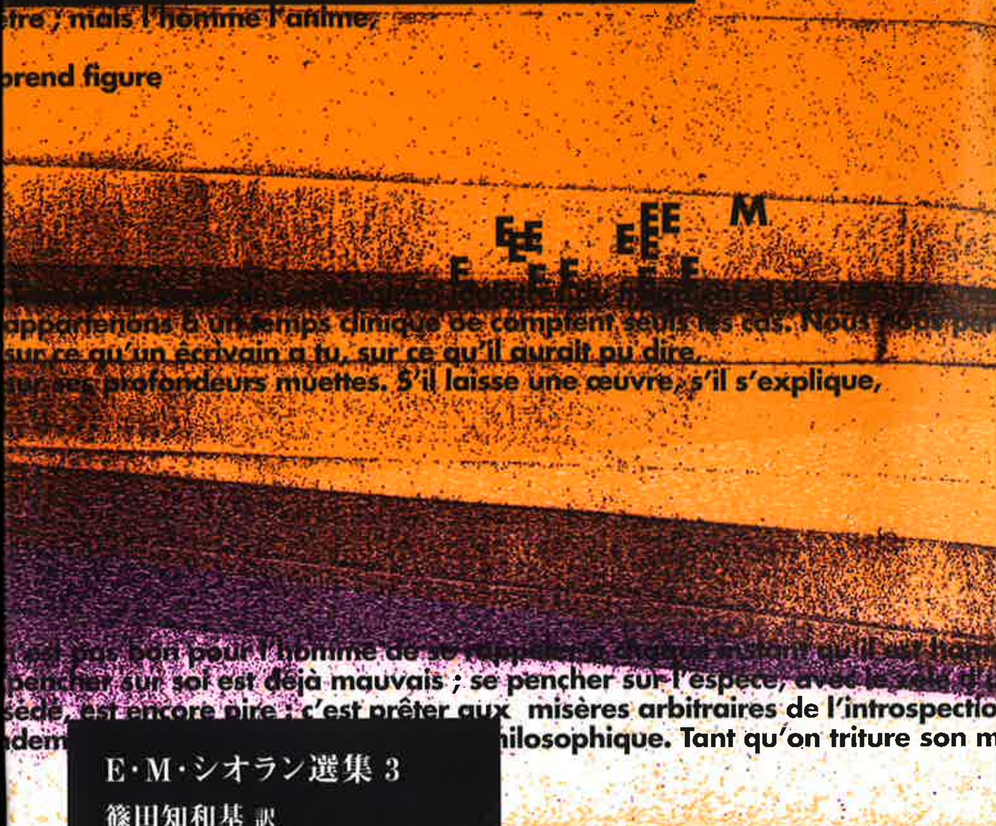
実存の誘惑



E・M・シオラン選集 3

篠田知和基 訳

国文社

実存の誘惑

E・M・シオラン選集 3

篠田知和基訳

国文社

目次

実存の誘惑

自己に反する思考

われわれの発見の大部分は、暴力、すなわち極度の不均衡に負っている。神にしても、それが興味を引くとしてのことだが、心の奥底に見い出されるようなものではなく、激情のぎりぎりの瀬戸ぎわ、まさにわれわれと彼が互いの憤怒をぶつけあう地点、そこに衝撃が生じ、その出会いは、われわれにとっても、彼にとっても破滅的であるような地点に見い出される。暴力者は、自然に反して自己の外に出ても、行為に付随する呪いをのがれられないから、怒れるもの、攻撃者として自己の中に戻らざるをえない。そのあとには彼の企てた仕事がついてくるが、彼は、それらの仕事をひきおこしたことによって罰せられるのだ。作者にほこ先を向けないような作品は一つもない。詩は詩人を粉砕するだろうし、哲学者は体系に、行動的な人間は事件に押しつぶされるだろう。なんらかの使命を感じ、それを遂行することによって歴史の内側で動きまわるものは、自分を破壊しているのだ。人間としての特性を脱して、存在の中に自由にふるまうために、資質も才能も犠牲にしたものだけが生きのびる。哲学的な生涯を望みながら、自己同一性を保つことは、

私にはどうしてもできない。その残りかすはほんの少し残っていても、一掃しなければならない。その逆に歴史的な役割を担うとしたら、私にふりかかってくる任務は、全能力をかたむけても遂行することができず、それとともに破裂してしまわなければならない。人はいつでも、自分で引き受けた自我によって身を滅す。名前を持つということ、それは崩壊のひとつの正確な様式を求めることだ。

暴力者は、外見どおり落胆を知らない。苦しみから免れることができない以上、彼は、つねにやりなおし、固執する。他者を破滅させるために熱中するのだろうか？　いやそれは、自分自身の破滅に達するためにたどる回り道なのだ。その確信に満ちた様子、堂々たる押し出しのかげに、不幸に取りつかれたものがひそんでいる。そのようにして、暴力者の中にこそ、自己に敵対するものが見られる。そしてわれわれすべてが、平安の鍵をなくしていらい、もはや苦しみの秘密にしかたどりつけない暴力者、怒れるものなのだ。

われわれは、時間にゆっくりと押しつぶされるよりは、時を追いこし、刻々の時にわれわれの時間を加えるほうがましではないかと考えた。この、古い時間に接木された新しい時、練りあげられ、計画された時は、やがてその有毒性を暴露しようとしていた。時は、自己を客観化しながら、歴史、すなわち、われわれ自身が自分の前に打ちたてた怪獣から脱れることのできない宿命となろうとしていた。それに対して受身の態度や、知恵の処方は何ものもなしえなかった。

無力の療法をこころみる、道士の道を瞑想する、放棄と放任と不在の崇高さを説くその教義を

考える、彼らにならって、意識が現世のきずなを脱し、彼らの好む元素、水のように、あらゆる鋳型にはまりこむときの、その意識の流れに従う、そんなことはいくらこころみても無駄だ。けっして成功するはずがない。彼らは、われわれの好奇心や、苦しみへの飢えを断罪する。その点に関して彼らは神秘家、それも奇妙にも中世の、あの、馬布の肌着や、針むしろや、不眠や、衰弱や、呻き声の美徳を巧みにわれわれに勧めた神秘家たちと袂を分かつのだ。

「緊張した生き方は道の対極だ」と、きわめて正常な人間だった老子は教える。しかしわれわれは、キリスト教というビールスに蝕まれている。苦行者たちの伝統を受けつぐわれわれが、自分自身の意識に目ざめるのは、まさに苦しみをとぎすましてゆくときだ。たとえ宗教が衰退してゆくとしても、われわれは苦行や、かつての僧房の叫び声を継承してゆくのと同時に、宗教の異常さをも継承してゆく。そこにおける苦しみへの意志は、絶盛期における修道院のそれと匹敵するものだろうか。地獄を専売するものは教会だけではないかもしれない。しかしわれわれは教会によって嘆きの鎖に、試練の信仰に、喜びをふみにじり、悲しみに歓喜する信仰にしばりつけられている。

精神も肉体と同じく、「緊張した生き方」の代償を払わなければならない。ニーチェや、ボードレールや、ドストエフスキーといった、自己に敵対する思考の技にすぐれた巨匠たちが、危険に賭けること、悪の範囲を広げること、実存を存在との絶縁によって求めることを教えてくれた。そして、あの中国の偉人の目には失墜や不完全性の錬磨の象徴のように見えたものが、われわれ

にとって自分を確保し、自分自身との接触を打ちたてる唯一の様式になっているのだ。

「何ものも愛することがなくなれば、人間は恐れるものがない。」(荘子)これは無意味であると同時に深遠な格言だ。われわれにとっては、無感覚自体が緊張であり、攻撃である以上、いったいどうやったら無関心の極致に達することができるのだろう? われわれの先祖の中には賢者など一人も見あたらない。いるのはせいぜい欲求不満者と、日和見主義者と、狂信者で、その失望や放埒をわれわれは継承しなければならないのだ。

これも中国人にならって言えば、解脱した精神のみが「道」の本質に達しうる。取りつかれたものは事の結果しか見ない。深みへの下降は沈黙を求め、能力としてのものも含めたいっさいの動きの停止を要求する。しかし、われわれにおいては、絶対の希求が行動、あるいは戦いの形において表現されるということ、キエルケゴールが自分を「信仰の騎士」と名づけ、パスカルがアジ・ビラ作者にしかすぎないということは興味深いことではなかろうか? われわれは攻撃し、戦い合う、すなわち「道」の結果しか知らない。そもそもヨーロッパにおいて道教に相当するものだった静観主義(キュイエチスム)が挫折したこと、それがわれわれの可能性と展望について雄弁に物語っている。

受動性の錬磨といったものほどわれわれの習慣から遠いものはないように思われる。(近代はドン・キホーテとルターという二人のヒステリー患者によって始まった)。われわれが時間を練りあげ、作り出したのも、本質の支配と、それが想定する瞑想的な屈服に対する反発によるもの

だった。道教は私にとって知恵の最初にして最後の言葉のように思われる。それにもかかわらず、私はそれに抵抗し、私の本能はそれを拒否する。あたかも、われわれに反逆の遺伝子が働いているかぎり、いかなるものに対しても屈従することを本能が拒絶するかのようだ。われわれの病いは、時というものに注意を払い、未来を崇拝してきた諸世紀の重みなのだ。われわれはそこから、中国やインドに救いを求めることによって脱出できるのだろうか？

われわれには内部からとらえることも、日常的な本質に変形させることも、ひとつの体系の中に包みこむことさえもできないような知恵と解脱の形が存在する。真にそれを欲するなら、解脱はわれわれ自身から生じなければならない。それは外部、すなわち既成の体系や、なんらかの東洋の教義の中に捜すものでは少しもないのだ。その誤りを、しかし、絶対に飢えていると言っていいような数多くの精神が往々にして犯している。彼らの知恵は偽もので、その解脱はまやかしなのだ。私は神智論者やその信奉者のみならず、自分の本性と合致しがたい真実を鼻にかけるものたちすべてを告発したい。たとえば、インドを手軽に発見し、その秘密を見破ったように思いこんでいるものが一人や二人ではないが、彼らの性格も教養も不安も、いっさい、そんなものを求めてはいないのだ。なんと多くの「解脱者」が、彼らの救済の高みからわれわれを見下ろしていることだろう！　彼らは良心に恥じるところもなく、行為より〈高度の〉ところにいると称していないだろうか？　許しがたい欺瞞。その上、彼らが見つめているところはあまりに高いから、あらゆる伝統的な宗教が、すべて家庭的な偏見で、彼らの「形而上的精神」には満足できないも

ものように思えるのだ。インドを引きあいに出すこと、そのほうがおそらくまだましだ。しかし、インドが観念と行為の一致、救済と諦念の同一をめざしていることを彼らは忘れている。「形而上的精神」を持ったものにとっては取るにたらないことだとでも言うように、彼らはそれを無視する。このように偽瞞やまやかしが満ちているのを見たあとで、一人の乞食でも眺めることは慰めになる。乞食は少なくとも嘘もつかなければ、自分もあざむかない。理論というものを持っているなら、彼はそれを実践しているのだ。仕事など好まない。そしてそのとおりにしている。所有などいっさいのぞまず、自分の欠乏を耕していればいい。それが自由の条件だ。思考は存在の中に解消し、存在は思考の中に解消する。彼にはあらゆるものがない。しかし彼は彼であり、永遠に続いてゆく。なぜなら永生とはその日その日を生きることだからだ。彼から見れば、他の人間たちは幻影に閉じこめられている。他者に依存してはいても、彼らを観察することで報復している。彼は「高貴な」感情の裏面に通じているのだ。彼の怠惰は、きわめて貴重な特質のひとつだと言ってもいい。そのおかげで、馬鹿とお人よしばかりの世の中で、彼だけが本当の「解脱者」たりえている。自己放棄について彼は、世の幾多の秘教の書物より、はるかに多くのことを知っている。信じなければ通りに出てみればいい……いや、人々は、乞食について説いている書物のほうを好むのだろう。その瞑想からいかなる実践も出てこないなら、ただの浮浪者のほうが、われわれよりすぐれていても驚くにはあたらない。自分の真理や宮殿に執着している仏陀など考えられるだろうか。所有者にして、かつ「生きながら解脱した」者などありえない。私は嘘がまか

り通っていることに、また「救済」を見せびらかし、奥底からのものではない教理でそれを支えているものたちに対して、腹立ちをおさえられない。彼らの仮面をはぎとり、よじのぼった台座からひきずりおろして絞首台にかけるべきだ。そのようなキャンペーンに対しては、だれでも無関心でいることは許されない。なぜなら、平安のうちに生き、かつ死んでゆくことを信じて疑わないものたちを、これ以上のさばらせておくわけにはいかないのだ。

★

われわれに対して何かと言えばすぐに「絶対」を持ちだすとき、きみたちはまるで遠い世界で奮闘しているような、ちょっと深遠な顔つきをする。一条の光をたよりに、きみたちに属している暗闇の中で、きみたち以外のものには近づくことのできない王国のあるじとして、きみたちは、そこで経験してきたばかりの大発見のかけらや、そこで知ったことの残りかすをわれわれ凡人にもお裾わけしてくれる。でも、どんなに努力しても結局は、読書と、衒学的な軽薄さと、書物上の虚無と、借りものの不安の産物である、その貧しい語彙を吐き出すだけではないか。

絶対なるものに対して、どんなに努力しても、それはかえって、そこに達すべき感受性をすりへらすことにしかならない。われわれの知恵——あるいは無・知と言うべきだろうか——は、絶対を拒否する。知恵はわれわれに、永遠の中ではなく、時間の中における相対論的な均衡を教える。〈進展〉する絶対、このヘーゲルの邪説がわれわれのドグマになった。それこそ、われわれの悲劇的な正統性、〈われらが条件反射の哲学〉なのだ。そこから逃れられると思うのは、空い

ばりか、あきめくらかにほかならない。われわれは、表象の世界に追いつめられて、夢と猿まねのまざりものである不完全な知恵にすがろうと思うに至る。更にヘーゲルを引用すれば、インドは「無限の精神の夢」、感受性のひだと同様、知性のひだであり、具体化し、歴史の歩みに限定された精神、すなわちひとことで言って精神そのものを思い描くことを、われわれに強要するものだ。その精神が包括するものは、世界そのものではなく、世界の〈瞬間〉、分断された時間だ。そこから脱出するには、表象の世界を捨てて、一気にとびだすよりほかにない。

意識の領域は行動の中において縮小するから、行動するものは普遍であろうとしても、それはできない。行動するということは、まさに、存在を犠牲にすることによって存在の本質に、現実を犠牲にすることによって現実の形態にしがみつくことだ。われわれの解放の度合いは、あらゆる対象を非対象に転化させる能力と同じく、どれだけの企てから解放されているかによる。しかし、人生を取り戻すことも、それを初めから諦めずに楽しむことも忘れてしまった抑圧された人類に関して、解放を語ることは何ものをも意味しない。

われわれは、物を、それ自体の内に捕え、そのはかなさを告発しようとあせりすぎる。渇望が物を求め、変形し、作りあげ、変貌させ、それにわれわれが引きずられてゆく。私は興奮することによって世界を作り出す。それは、その世界を正当化する私の瞑想と同じく、いかがわしい。私はひとつの運動を体現するとき、存在の母体、仮構の職人になる。一方、私の宇宙創造的興奮は、私が、行為の渦に巻きこまれた、時間の一介の助手、老衰した世界の一代理人にしかすぎな

いことを忘れさせる。
われわれは感覚と、その必然的帰結、すなわち将来を背負った、生まれつきの、かつ理論的な非・解脱者であり、自ら選んだ死刑囚、見えるものに対する熱狂に捕われたもの、衰弱ないし痙攣の度合いに応じた表象の謎の探求者だ。
自由を取り戻そうとするなら、感情という重荷を下ろすこと、感覚によって世界に反応することをやめること、そしてあらゆるきずなを断ち切ることを考えねばならない。ところで、すべての感情が、すなわちきずななのだ。苦しみと同じく快楽も、悲しみと同じく喜びも。存在や物とのあらゆるつながりから離れて、空無のために鍛練する精神のみが解放をかちえる。
幸福に抵抗することは大部分の人がなしとげる。不幸のほうはそうはいかない。相手は狡猾だ。読者は不幸を味わったことがあるだろうか？　人間が不幸に満足することはけっしてないだろう。人は好んで、それをありえない所に貪欲に求める。そして不幸をそこに投影する。不幸なくしてはあらゆるものが無駄で退屈に見えるからだ。不幸はどこにあっても神秘を追い出し、あるいはそれを単純、明白なものにしてしまう。物の味わいや鍵、事故や妄執、気まぐれや必要、そういった、もっとも強力で永続的で真実なものの内に、不幸は表象の世界を愛させる。そしてそこに永遠にわれわれをしばりつける。自然の「きびしさ」である不幸は、あらゆる「緊張」のつねとして、隷属と屈従だからだ。無関心で空無な魂、解脱した魂——どうすればそこまで自己を高めることができるのだろう？　どうやれば不在と不在の自由を獲得できるのだろう？　そ

い。

のような自由は、「無限の精神の夢」同様、われわれの風習の中には存在しないものにちがいない。

遠方から来る教義を同化するには、それを無条件に受け入れねばならないだろう。仏教の真理に同意しながら、諦念の思想の根底である輪廻の思想を捨てたら、いったい何になるのだろう？ヴェーダンダ哲学派に共鳴し、事物は非現実であるという思想を受け入れながら、あたかも物が存在するかのようにふるまうのはなんだろう。しかしそれこそ、現象を信仰するように教えられてきた精神にとって避けがたい矛盾なのだ。だから、はっきりと告白しよう。われわれの血の中には〈現象〉がひそんでいると。現象を侮蔑し、嫌悪することはできる。でも、それが、われわれの世襲資産、渋面の資本、この世における痙攣の象徴であることに変わりはない。われわれは、宇宙的な規模の道化芝居のまっただ中の痙攣派として、世界の中に自分たちの歴史の痕跡を記してきた。われわれは、悠然たる寂滅に到るような悟りには、けっしてたどりつけないだろう。われわれが消え去ることを選んだのは、作品によってであり、沈黙によってでない。われわれの未来は、われわれの表情に現われる冷笑の中に、傷つき、多忙な予言者のような顔立ちの中に読みとれる。仏陀の微笑、世界の上にさしのばされたその微笑は、われわれの顔を照らしてはくれない。われわれはせいぜい幸福を認識することはできる。しかし至福ときたら、とても味わうことはできない。それは救済の観念と、悪をたのしんだり歓喜したりすることとの拒否の上に打ち建てられた文明の特有物なのだ。われら苦しみのシバリス人（享楽者）、マゾシスムの伝統の落とし

子のだれが、ベナレスの説教とエオートンティモルーメノス（「われとわが身を罰する者」ボードレールの詩）のあいだで、どちらを選ぶべきか、ためらったりするだろうか？　「我は傷であり刀である」、これがわれわれの絶対であり、われわれの永遠なのだ。

　贖罪者たち、彼らはわれわれのところに最大の劫罰を与えるためにやってきた。われわれは、その彼らの希望と救済手段の毒を愛し、彼らがわれわれの悪を助長し、ふるいたたせることに注ぐ熱意を愛し、彼らの命の言葉がわれわれの上にふりそそぐ病菌を愛する。われわれが、終りなき苦しみの熟達者となったのは彼らのおかげなのだ。明晰さは、なんという誘惑、なんという極限へわれわれを導いてゆくのだろう！　いっそそれを捨てて無意識の中にのがれようか？　眠りによってのがれることはだれにでもできる。〈眠っているときには〉だれもが天才だ。詩人の夢と肉屋の夢にいかなる相異もありはしない。しかし目が覚めてみれば、そんな驚異が永続することも、霊感が万人の手に届くことも許されない。昼になれば、夜のあいだ手にしていた能力は消え失せる。狂人だけが、夜の存在から昼の存在へ、衝撃なしに移行する特権を持っている。狂人において、夢と目覚めのあいだにいかなる相異もない。ちょうど浮浪者が所有を放棄したように、狂人は理性を捨てたのだ。両者とも苦しみの外へ達する道を見つけ、われわれの問題をすべて解決してしまう。そこで彼らは、ついていけない模範、信奉者なき救い主にとどまるのだ。

　自分の悪をさぐるときには、他者の悪も必要とされなくはない。伝記の時代には、他者の悪を引きずり出し、白日のもとにさらけださずには、自分の傷を隠しおおすことはできなかった。そ

れもできないときには、われわれは落胆して、それをよけて通ったものだ。あの十字架上で死んだものにしても、〈われわれのために〉苦しんだからこそ、われわれの目に価値があるのではなく、ただ単純に苦しんだからであり、また、底意のないだけにいっそう痛切な叫び声をあげたからなのだ。われわれが神々の中にあがめるものは、〈美化された〉自分たちの敗北なのだから。

★

われわれは知恵の退廃した形に身を捧げ、時間の経過を気に病み、魅惑的であると同時にぞっとするような、この不具性と戦い、時と戦っている。われわれを構成しているものは、すべて、われわれを反逆者にしたてあげようとしている。あの、歴史とはなんの関係もない神秘な呼び声と、その象徴であり、後光である、血まみれの夢とのふたつに引き裂かれた反逆者に。もしわれわれにひとつの世界が与えられるなら、信仰の世界であろうが、冷笑の世界であろうが、そんなことはどうでもいい。ところが、それが与えられることなどけっしてないのだ。実在の中のわれわれの位置は、懇願と嘲弄との交叉するところ、嘆息と挑発のまざりあった不純な地帯だ。あまりに明晰で讃美ということのできないものは、破壊することもできないだろう。……あるいは自分の反逆だけは破壊するかもしれない。なぜなら、いかに反逆をしてみても、宇宙が〈無きず〉なままならどうしようもないではないか？　嘲弄的な独話。正義と不正について、平和と戦争について、同胞について、神々について反乱する。そのあとで、ただのお菓子のほうがプロメテウスよりずっとましだと思うに至る。しかし内面の反抗の声は押し殺すことができない。そしてあ

らゆることに対して、なんでもないことに対しても荒れ狂いつづける。われわれが、統計的に一人残らずルシファーであることを証明する哀れな無意識の動作。

われわれは、行為という迷信に汚されていて、自分たちの観念は必ず〈成功する〉ものだと信じている。受動的な世界の観想に対して、それ以上に有害なものがあろうか？　しかし、それこそわれわれの宿命なのだ。〈抗議する〉不具者、病床のアジ・ビラ作者であることが。

知識も経験も、ともにわれわれを麻痺させる。そして圧制といったものに対しても、恒常的なものであれば寛大になってしまう。武器を捨てようという誘惑に勝つには、われわれには先見の明がありすぎる。しかし、反逆反射が疑いに勝ちを収める。そして、たとえ完成したストア派哲学者のふりをすることができても、アナーキストがわれわれの内で目を覚まして、屈従することに背くのだ。

「われわれは歴史をけっして認めない」、こんな言い方は、本当の賢者にも、また本当の狂人にもなれない無力さの格言のように思える。われわれは知恵、ないし狂気の道化なのだろうか？　何をしようとも、われわれは行為に対する抜きがたい不誠実さにしばられている。

信者なら、自分の行動と信仰に、ある点まで一致しているのはあきらかなことだ。彼においては明晰さの極と、行動と思考の極のあいだに顕著なへだたりはない。それが偽信者や、信じてもいない確信をかかげているものにあってはおそろしいほどへだたっている。その信仰の対象は代用品なのだ。ここではっきりと言っておこう。私の反逆は、それを信じずに帰依した信仰である

と。しかしそれでも私は帰依せずにはいられないのだ。キリロフがスタヴローギンについて言っている言葉は、あまり、十分に考えられていない。「やつは信じているときには、信じていることを信じない。信じていないときにも、信じていないことを信じない。」

★

それぱかりではない。われわれにあっては生の様態、あるいはリズム自体が反逆の〈尊厳〉の上に打ち建てられている。普遍的人格を嫌うあまり、われわれは個性や特異性を根源的な現象のように考える。反逆するということは、この特異性を要求すること、その特異性を、いわば、存在と物の生起以前のものとして認識することになる。私が唯一の真実である単一性に対して、必然的にまやかしにすぎない多様性を置くこと、言いかえれば〈他者〉を亡霊と見なすのは、私の反逆に意味がまるで欠けているからなのだ。私の反逆が存在するためには、個の不分割性、そのモナドとしての条件、その限定された本質から出発しなければならない。あらゆる行為が多様性を打ちたて、復活させる。そして人格に現実性と自律性を与え、暗黙裡に絶対の退廃と細分化を認める。精神の緊張が生じるのは、まさにその行為と、それに付随する信仰からだ。そして爆発の欲求と、〈持続のただ中において〉自分を破壊しようとする欲求もそこから生じる。近代哲学は自我の盲信を創始し、それをもってわれわれのドラマのゼンマイ、われわれの不安の軸とした。不弁別性の中の休息、特性のない生き方の中性の夢をなつかしむことはなんの役にも立たない。われわれは主体であろうと欲したのだが、あらゆる主体は、単一性の静けさと決裂しているのだ。

われわれの孤独や苦しみを和らげようとこころみるものは、本来の興味と天職にさからって行動するものだ。われわれは個人の価値を測るのに、物との不一致の総和、無関心であることの不適応性、対象をめざすことの拒否をもってしようとする。そこから善の観念の失墜、悪魔の流行が生じる。

優雅な恐怖のただ中に生きていたかぎり、われわれは神に満足していた。ほかの、もっと深遠であるからこそもっと卑劣な恐怖がわれわれをとらえたとき、ほかの保証の体系、ほかのパトロンが必要になった。悪魔は理想的な存在だった。それはどんな事件の本性とも一致する。悪魔こそその代理人であり、調整原理なのだから。〈彼の属性は時間の属性と一致する。〉だからこそ、われわれは彼を呼びよせるのだ。なぜなら、それは主観性の産物であるどころか、むしろ瀆神と孤独の必要の産物だからだ。彼は疑いと恐れを支配し、迷いを煽り立てる。彼の断言や暴力には、いかがわしいところもけっして不足していない。この「大いなる悲哀者」は、疑う反逆者なのだ。彼がもし単純で、融通のきかないものだったら、われわれとしても彼に影響されることはないだろう。しかし彼の逆説や矛盾はまさにわれわれのものなのだ。彼はわれわれの不可能性も併せ持っている。それは、自分自身に対する反逆と、自分自身に対する憎悪のモデルなのだ。地獄のきまり文句？　地獄を捜すのは、まさにこのような反逆と憎悪の形式の中であり、くつがえされた傲慢の苦しみの中、〈恐るべき〉無用な多量の一部であるというこの感情の中、「私」の苦しみ、われわれの終りがそこから始まるべき「私」の苦しみの中なのだ……

あらゆる仮構の中で、黄金時代のフィクションほど、われわれを途方にくれさせるものはない。どうやってそんなものを人間の想像力は思い浮かべたのだろう？　〈人間の人間に対する攻撃である〉歴史が、発展をとげ、形をとるに至ったのは、それを告発するためであり、それに対する敵意が原因だったのだ。だから、歴史に身を捧げるということは、自分に反逆し、悪魔にならうことになる。自分の存在を犠牲にして時間を作り出し、外に送り出し、それを事件に変化させること以上によく悪魔をまねることはありえない。「これよりのち、もはや時間はないであろう」、この黙示録の天使という、即席の哲学者は、この言葉によって悪魔の終りを、歴史の終りを告げる。そこで神秘家たちが、反逆まで身を落とすことができない以上、彼らの内か、あるいは彼らが一掃しさったこの世をのぞいて、その他のところに、神を求めるのは当然なことなのだ。彼らは諸世紀の外へ飛びだしてゆく。それはわれわれ、時間の中の囚人たちには、めったに抱きえない狂気だ。せめて彼らが神にふさわしいのと同じほど、われわれが悪魔にふさわしいならまだしも！

★

反逆が不当な名声をかちえていることを納得するには、反逆にふさわしくない精神を一般にどのように定義しているかを見ればいい。すなわち無気力だ。われわれが、あらゆる形の知恵を、すべて変化した無気力であるとしか見ず、それに対して心をとざしているのは、ほぼ確かだろう。それがどんなに不公平な反応であれ、道教に対してさえそのように反応することをやめることは

できない。私は、道教が消滅と諦念を勧めているのは卑劣さからではなく、絶対の名においてなのだと十分、承知していながら、それを受け入れるその瞬間に、拒絶してしまう。幾度、老子が正しいのだと考えても、それでも、一人の殺人者のほうがよく理解できるのだ。静けさと血のあいだでは血のほうに傾くのも〈自然〉なことだ。殺害者は反逆を仮定し、それを完遂する。殺害の欲求を知らないようなものが世をくつがえす意見を説いても空しい。それはことなかれ主義者でしかないだろう。

知恵と反逆、それはどちらも毒だ。われわれはその二つを素樸に同一視することができず、そのどちらにも救済の方式を見いだすことができない。残るところは、ルシファー的な冒険の中に、知恵の中ではけっして持てないような支配力をかちえたということだ。われわれにとっては、〈知覚〉こそ反乱であり、不安や失神のはじめなのだ。それはすなわち、生命力の消滅、自己の自由を浪費する意志なのだ。あらゆるものに対して反逆することは、自己と自分の力に対する不敬にあたる。瞑想のための、このような〈静的〉な浪費、不動性の中への集中は、いったいどこから持ってくればいいのだろう? 物をあるがままにしておく、それをまねようともせずに眺める、その本質を知覚する。こんなこと以上にわれわれの思考方法にさからうものはない。われわれはその逆に、物をこねあげ、痛めつけ、それにわれわれの怒りを与えようとする。その結果は当然、身ぶりや遊びや錯乱を偶像化し、哲学的にも詩的にも、あらゆるものの危険を好んで冒すようになる。『老子道徳経』は『地獄の一季節』や、『この人を見よ』よりも遠くへ行く。しかし、

ランボーやニーチェは、ぎりぎりの限界まで軽業をやりながら、われわれを彼らの危険まで導いてくれるのに、老子はわれわれにいかなる目まいも与えてくれない。自分の生に意味を与えようとして自分を破壊した精神だけがわれわれを引きつける。

★

時を超越しながら、しかもそこにもぐり込んでしまうもの、ぎりぎりの孤独に一気にとびこんで行きながら、しかも表象にしがみつくものには、いかなる出口もない。そのような人間は不決断のまま、分裂し、時間病の病人であるとともに、未来と永遠の誘惑にさらされながら生きてゆく。エックハルトを信ずるなら、時間には「匂い」があるそうだが、それなら歴史にも匂いがあるだろう。それをどうして感じずにいられよう？　もっと直接的に言えば、私は「文明」の幻と無効性と腐敗を見る。しかも私は、その腐敗と一体であることを感じるのだ。〈私は腐肉の熱愛者だ。〉解放されてもなおつきまとうほどわれわれを征服してしまった今世紀を私は恨む。時事的な感想や、事に臨んでの考察からは、見込みのあるものは何もでてこない。もっと幸せだった時代には、精神はいかなる時代にも属さないかのように、また、まるで年代記の恐怖の種でもあるかのようにのびのびと自由に錯乱することができた。彼らは世界の瞬間を世界そのものと混同してその中にもぐりこんでいった。彼らは、その仕事がその場かぎりのものであろうとは夢にも思わず、全身をそれに打ちこんでいた。けっして尽きることのない天才的な愚行、分裂した意識に邪魔されたりすることのない豊穣な興奮。それに対して、いまなお永遠を占い、しかも、われ

われが時間で〈ある〉こと、われわれが時間を作り出していることを知る、永遠性の観念を抱きながら、われわれの些細なものを大事にする。滑稽なことだ。そこから反逆と、反逆に対して抱きつづける疑惑が生じる。

罪の贖いを避けるために苦しみを求めること、解放の道を逆にたどること、それが宗教の面でわれわれのなしえた寄与だ。苦虫を嚙みつぶした幻想家、貧しいものに苦しみの楽しさを説き、救済に敵意を抱く仏陀やキリスト。言わば薄っぺらな種族。それでもわれわれの最初の先祖は、唯一の遺産として楽園の恐怖を残してくれた。物に名前を与えることで、先祖の先祖は、彼とわれわれの失墜を準備したのだ。そこから立ち直ろうと思うなら、宇宙に別な名前を与え、物の貼札をはがすことから始めなくてはならない。そうしないかぎり、われわれは神経細胞のすみずみに至るまで、楽園を嫌悪しつづける。苦しむこと、それが生の感覚を獲得する唯一の方法であり、生きること、それがわれわれを破滅から守る唯一の方法なのだ。永遠の解決がわれわれを未来の毒から解放してくれないかぎり、また中国の仏教徒によれば、「瞬間は一万年にまさる」という状態に近づかないかぎり、そのままなのだ。

★

そして、われわれには発展させることのできなかったひとつの意味に、絶対というものが対応する以上、われわれはあらゆる反逆に身をゆだねるだろう。反逆はやがて反逆自身に、われわれ自身にふりかかってくるだろう。たぶんそのとき、われわれは時間に対する優位を回復するかも

しれない。意識の災からのがれようとして、逆に、動物や、植物や、物と同じに戻ってしまわないかぎり。歴史のあやまちによって、思い出すら失ってしまった原初の愚かさに。

息切れのした文明

ひとつの文明に有機的に属しているものには、その文明を蝕んでいる悪がどんなものであるか知ることはできない。その診断は、少しもあてにならない。文明批判は、結局、自分を判断することになるからだ。エゴイズムがそれを手加減する。

より気楽で自由な新参者は、その社会を計算なしに検討し、その衰弱をよりよく把握する。文明が滅びるときには必要とあれば、彼も滅び、そして文明と自分とについて〈宿命〉の結果を見ることもいとわないだろう。彼は、治療薬など持ってはいないし、提供しもしない。彼は宿命を〈治療する〉ことはできないと知っているから、いかなる治療者のふりもしない。その唯一の野望、それは「不治のもの」の高みに登ることだ……

★

西欧世界は、その積みあげられた成功を前にして、歴史を讃え、それにひとつの意味作用と究極性を与えることに少しも苦労を覚えなかった。歴史は西欧世界に属していた。西欧はその代理

人だった。だからこそ歴史は合理的な歩みを続けねばならなかった……彼らはそこで歴史をかわるがわる〈摂理〉や、〈理性〉や、〈進歩〉の保護のもとに置いたのだった。彼らには宿命の感覚が欠けていた。しかし彼らは、来たるべき欠乏や、衰退の展望におびやかされて、ようやくそれを獲得しようとしている。国という主体に対して、国民という客体がある。彼らは、いままで西欧世界をつぐないきれぬほど閉ざしていたあの喜び、みごとな誇大妄想を永久に失ってしまった。彼らは今日、そのことを十分に認識し、精神の愚かさを測るのに事物に執着する度合でもってする。出来事が〈よそで〉起こっている以上、それは当然すぎることではないだろうか？人はイニシアチブを取るのでないかぎり、歴史に身を捧げはしない。しかし栄光の昔の思い出がどんなに乏しくとも、人はなお抜きんでることを夢にみる。それが混乱の中にでしかないとしても。

フランスや、イギリスや、ドイツの背後には繁栄と狂気の時代がある。現代は〈狂気の終末〉であり、防衛の戦いの発端なのだ。集団の冒険も市民もおしまいだ。残っているものは、蒼ざめ、迷いから醒め、しかもなお、ユートピアに対しては、それが外部から持ちこまれ、自分では考えなくてもいいのなら答えようとする、個々人たちだけ。かつて無意味な栄光のために死んだように、彼らはいま、熱狂的な復権の要求のために身を投げ出す。「幸福」が彼らを誘惑する。マルクス主義という楽天主義の罪が、彼らの最後の偏見の中にその力を汲み取る。なんらかの滑稽な理念や愚行のために盲目になったり、仕えたり、身を捧げたりすること、それは彼らには、も

はや耐えられない蛮行だ。衰退しはじめた国家は、集団の条件に向かってゆく。たとえ千人のナポレオンがいても、その国は、自国と他国を問わず、休息をおびやかすようなことは拒否するだろう。あやふやな反射作用を持っているものが、いったい恐怖政治などを、それもどうやって、やるだろうか？　もしあらゆる国の国民が皆同じ程度に化石化し、臆病であれば、容易に理解しあえるだろう。不安定のあとには卑怯者の契約が永続する……戦争の要求を消滅させようとすること、衰退や牧歌の普遍化を信じること、それは遠くを見ることだ、あまりに遠くを。古い国の人たちの老眼の世界であるユートピア。若い国民はいつわりの逃げ道を捜すことを嫌って、ものごとを行動の角度から眺める。彼らの視野は、その仕事の大小に応ずる。安楽さを冒険のために捨て、幸福を能率のために捨ててきた彼らは、反対概念の正当性や二律背反的な立場の共存を認めようとはしない。われわれの不安を……恐怖政治によって少なくし、われわれをふみにじって堅固にすることでなくて、何を彼らはのぞむのだろう？　彼らの成功はすべてその未開性から来る。彼らにとって大事なのは夢ではなく、衝動だからだ。彼らがなんらかのイデオロギーに頭を下げるとしようか？　それは彼らの激昂をかきたて、その野蛮な本性を開拓し、彼らを目ざませる。古い国の民衆が、ひとつのイデオロギーを採用するときには、それは、彼らを呑みこんでしまう。いくぶんでも生きていると思いこませておく、このわずかな熱狂の残りかす、ささやかな幻影の発現を彼らに与えながら……

★

文明は挑発的な行為なしには存在せず、確立されもしない。文明はいま賢明になり始めているのだろうか？　いやそれは崩壊しつつあるのだ。絶頂の瞬間は恐ろしい瞬間だ、その間、力は蓄積されるどころか、存分に使われる。フランスはひたすら衰退をめざして、力を浪費することに専念した。ほこりと攻撃的な熱心さが（この千年の間、フランスはどこの国よりも多くの戦争をしてはいないだろうか？）その成功を助けた。フランスは平衡の感覚——それは過多であっても良い結果しかもたらさない——を持っていたにもかかわらず、自らの本性を犠牲にしなくては優位に達することができなかった。力を使い果すこと、フランスはそこにおいて、みごとな成績をあげた。フランスは形式や、爆発的な観念や、思想上の大騒ぎが好きで、その才能と虚栄を、この十世紀間に起こったありとあらゆる事件に奉仕した。そして花形であった時代をすぎ、いまや忍従し、恐れ戦き、悔いと不安を反芻し、栄光と過去の上に休息する。フランスは、自分の顔を避け、鏡の前で震え戦く……一つの国の皺は、一人の人間の皺と同じによく見えるものだ。

一つの偉大な革命ののちには、同じような大きさの革命はもう起こすことができない。長いあいだ趣味の審判者であったものが、一度その地位を失えば、それを取り戻そうとはけっしてしない。無名であることを望むのは、モデルとしての役に立ち、追随され模倣されるのに疲れたときなのだ。そのときにもなおサロンを開いて世界中を楽しませようとして何になるだろう？

このわかりきったことをフランスは知りすぎるほど知っていて、二度言う必要はない。身ぶりの国家、演劇的な国家であるフランスは、その演技を観客とともに愛したものだ。でもフランス

はそれに疲れはて、いまや舞台を下りること、〈忘却の背景〉しかのぞまない。

フランスがどんなにそのインスピレーションや才能を発揮しようと、それはもう疑いようがない。でもそれを責めるのは公平だとは言えないだろう。それよりはフランスが、かつて理想を実現し、完成したことを責めたほうがいい。フランスをして特権的な国家にした原動力は、いまや開発されすぎ、かつ大事にされすぎたために無力なものになってしまった。その才能が今日、蒼ざめ消え去ろうとしているのは、鍛練が足りないからではないのだ。快適な生き方の理想がこの国を覆い、とりつき、もっぱらそそのかしているのは、(それは衰退期特有の狂熱だが)、フランスがもはや各成員全体にとって一つの名前でしかなく、一つの歴史的な意志であるより一つの社会にすぎないからだ。普遍であり、遍在であろうとした、かつての野望に対する嫌悪はあまりに強く、フランスを一地方としての宿命から救いうるのは、奇跡でしかない。フランスは支配と征服の野望を捨てていらい、憂鬱と倦怠に蝕まれている。守勢一方の国にとりつく災が、その生命力を衰退させる。そのような国ではそれを防ぐかわりに、屈従し、なくてはならなくなるまで慣れ親しんでしまう。そのような国は生と死のあいだでも、その双方をごまかし、生きることを避け、死ぬことを避けようとする。明晰な硬直におちいって、永遠の現状維持を夢みている国は、どうやって周囲の闇に、また、混濁した文明の侵出に対して戦うことができようか?

ある国民の過去を知り、どうしてその現在が過去にふさわしくないのか知るためには、過去にもっとも強い刻印を押した人々を検討してみるだけでいい。英国がいかなるものであったかとい

うことは、かの国の偉人たちの肖像が十分に語ってくれる。大英博物館であの男性的な、あるいは繊細な、そして往々にして怪物的な顔を見ることは、なんという感動だろう。そこからは精力がほとばしり出ている。独創的な顔つき、尊大で確固たる視線！　ついで今日の英国人の小心さ、常識、端正さを思えば、なぜ彼らがもはやシェークスピアを演ずることができないか、なぜシェークスピアを退屈にし、去勢してしまったかがわかろうというものだ。彼らとシェークスピアとのへだたりは、アイスキュロスに対する後代のギリシャのへだたりと同じだ。彼らの内にはエリザベス朝的なものは何もない。彼らは表面をつくろい、玄関をかざるために「特性」の残りかすを使う。「文明」をまじめに取り扱ったこと、それを余りに自分のものにしてしまったことの代償はつねに高くつく。

一つの帝国の形成に参与するのはどのような人間だろうか？　冒険家、乱暴者、ごろつき、いずれにしろ、「人間」についての偏見を持たないものたちではないか。中世の終りごろ、生命力の溢れていた英国は、獰猛であり、かつ悲しかった。いかなる名誉に関する心づかいも発展の欲求をさまたげたりはしなかった。そこからは、あの、シェークスピアの人間に特有な、力の憂愁がにじみでていた。ハムレット、あの夢想的な海賊のことを考えてみよう。彼においては、疑いは少しも怒りを弱めていない。そこには、屁理屈をこねる人間の弱さはかけらもない。逡巡？　それは精力の浪費、成功欲、無尽蔵なほど病的な欲求の緊張から来ている。苦しみについて彼ほど気前よく寛大なものはいないし、彼ほどその苦しみをふんだんにふりまくものもいない。堂々

たる苦悩！　現在の英国人に、どうしたらその高みまで達することができよう？　それに彼らはそんなことは考えもしない。彼らの理想は〈きちんとした〉人間になることなのだ。彼らは、その理想に危険なくらい近づいている。このなりふりかまわぬ世界の中で、いまなお「スタイル」に固執しているほとんど唯一の国民。そこでは、卑俗性の欠如が警戒すべきほどひろがっている。非個性的であることが至上命令であり、他人を退屈させることが掟なのだ。英国は上品と退屈の極致にいたって、ますます近づきがたくなり、明白な事実を無視して与えられる神秘的なイメージによって人を当惑させる。

英国はそれ本来の基盤と、かつての流儀に背いて行動し、慎重さと謙譲に蝕まれているうちに、自分の才能に反するような生き方と処世術を作りあげてしまった。かつての厚顔と尊大の装い、そのあなどりと傲慢さはどこへ行ったのだろう？　その最後の痙攣はロマン主義だった。いらい英国はひっこみがちに行いを正し、かつてはあれほどほこりにしていたと思われる破廉恥と厚顔無知の遺産をくさらせている。かつての野蛮人の面影はどこを捜してもない。あらゆる本能は、その品位によって抑えつけられている。それを鞭打ち、狂気を勇気づけるかわりに、哲学者たちは、英国を幸福の袋小路に追いやったのだ。幸福になろうと決心した英国は幸福になった。その、豊満さも、危険も、あらゆる悲劇のかけらも持たない幸福をもって、英国は包みこむような凡庸性を作りだし、それに永遠に満足するのだ。北方の人間が熱愛するもの、青白きヴァイキングのモデルと理想に、英国がなったことは驚くべきことだろうか？　英国は強大であったかぎり

嫌われ、恐れられた。いま、それが理解され、やがて愛されるようになるだろう……英国はもはやだれにとっても悪夢の種ではなくなった。行きすぎや錯乱は自ら慎しみ、まちがいか非礼であるとみなしている。かつての放埒さと、現在たどっている賢明さとのあいだにはなんという対照が見られるのだろう！　ある国民が正常になるためには、大いなる放棄が必要なのだ。

★

「太陽や月は、疑いを持ったとき、ただちに消え去るであろう」（ブレイク）ヨーロッパが疑いだしたのはもうだいぶ前のことだ……そしてわれわれが、その蝕にとまどっているとき、アメリカ人や、ロシア人は、平静に、あるいは喜びをもってそれを眺めている。

アメリカは世界の前に激しい虚無、実質のない宿命として立ちはだかっている。その覇権は何ものによっても準備されてはいなかった。それでもアメリカは、いくらかためらいながらではあるが、それに手をのばすのだ。屈辱と敗北をたえまなく味あわねばならなかった他の国々に対して、アメリカはいままで、好運の連続という不毛さしか知らなかった。未来においても、同じようにすべてのことが成功するならば、その出現はなんでもないただの偶然になるだろう。アメリカの運命を司るものたち、アメリカの利益を気にかけるものたちは、苦しい日の用意をアメリカにさせなければならないだろう。実質のない怪物からぬけでるためには、とほうもない巨大な試練が必要だ。それはおそらく遠いことではないだろう。いままで地獄の外に生きてきたアメリカはいまそこに下りて行こうとしている。アメリカが宿命を捜すなら、それはいままで存在理由で

あったものすべての荒廃の上にしかないだろう。

ロシアはと言えば〈第一級〉の恐怖と戦慄をおぼえずには、その過去を検討することはできない。ロシアは、待機と地下的な不安に満ちた聾者、光かがやくもぐらのように思われていた。ロシア人たちの出現は諸国を震憾させるだろう。すでに彼らは絶対なるものを政治に導入した。それは疑惑に蝕まれた人類に対する挑戦なのだ。彼らは人類に止めの一撃を与えずにはおかないだろう。魂は、われわれにはもはやなくなってしまっても彼らには売るほどある。精神がまだ大地と血と肉に属していた感性的な世界の始原の時から遠くはない彼らは、考えるかわりに〈感覚〉する。彼らにおいては、真理も、誤ちも、同じく感情であり、刺激であり、行為なのだ。事実、彼らは考えるかわりに爆発する。彼らは知性がいまだ偏執を弱めも抹殺もしない段階にいて、思考の有害な結果も知らなければ意識が根だやしや、無気力の要因になるような極限も知らないのだ。だから彼らは安心して出発できる。彼らが立ち向かうところはリンパ質の世界でなくてなんだろうか？　彼らの前には何もない。彼らがぶつかっていけるような生きたものは何もない。一切の障害がないのだ。十九世紀のさ中に西欧について「墓場」という言葉を使ったのは彼らのうちの一人（ドストエフスキー）ではなかったか？　まもなく彼らは集団をなして西欧の亡骸を見物しにやってくるだろう。敏感な耳は、もう彼らの足音を聞いている。前進してくる彼らの迷信に対して、たとえ確信のふりだけでももっているものがいるだろうか？

光の世紀いらい、ヨーロッパは一時も休まずに、その偶像と寛容の思想を信じ、それを守るた

めに戦ってきた。そのときには疑いでさえ、仮装された確信でしかなかった。それが力を証明してくれた以上、ヨーロッパは疑いを要求する権利と同時にそれを解消する手段をもっていた。しかしいま、疑いは無力さの兆候、やせおとろえた本能の漠然とした衝動にしかすぎない。

偶像の破壊は偏見の破壊を招来する。偏見——すなわち文明の機構的なフィクション——は偶像の存続を保証し、その外観を維持する。文明は偶像を大事にしなくてはならない。少なくともその文明に固有のもの、そして、過去において、迷信とか祭式の重要性を持っていたものは。もしそれらの偶像を、たんに自分の都合のために保持しているのなら、文明は自分の力ではそれにとってかわることができない以上、しだいにそれから離れてゆくだろう。文明が何らかの信仰を、気まぐれや、自由や、個人にゆだねたら？　それこそ無定見というものだ。文明がそれに服従すれば、気まぐれも、自由も、個人も、死んだ言葉になるだろう。

歴史の中に身を保とうと思えば必要最小限の無意識がいる。行動するということと、人が行動していると知っていることは別なものだ。行為は予見に取りまかれ、忍びこまれれば、攻撃し、そこに崩壊し、それとともに偏見も崩れる。なぜなら偏見こそ、意識を行為に従属させ、奉仕する役をするものだからだ。行為の仮構の仮面をはぐものは、まるで自分自身を捨てるように自分の手段を失ってしまう。そして自分の根底から出てこない以上、自分を否認することになる。その他の仮構を受け入れる均衡を持っているものならだれでも、ある程度以上の明晰さと分析を持ってはいけないだろう。文明について言えば、それは一層真実だ！　なぜなら、文明というもの

は、その発展と栄光を許してきた誤りを告発されるだけで、また〈その〉真実をほんの少し問題にするだけで、揺らいでしまうものだからだ。

疑いの能力を乱用することには、危険がともなう。懐疑主義者が自分の問題と問いから、どんな行動的な徳も引き出せなくなったとき、彼の最後は遠くない。なんという言い方をするのだろう？ 彼みずから最後を求め、そこへ駆けてゆくのだ。彼のあいまいさをだれかが断ち切ってくれればいい！ 倒れるのを助けてくれればいい！ 彼は不安や自由をどのように使っていいかわからず、死刑執行人に郷愁をはせ、それを呼びよせさえする。何ものにも答を見つけなかったものは、あらゆるものに答を見いだしたものよりも、よく暴政の結果に耐えることができる。だからディレッタントのほうが狂信者よりも死にあたってじたばたしないのだ。フランス革命のあいだ、貴族のうちで口に笑みをうかべて首斬台にのぼったものは一人や二人でないのに対し、ジャコバン党の番になると、みな、放心したように暗い顔をしてのぼったものだった。こんにち、どこを向いても、真理や偏見の代用品しか見あたらない。そしてこの代用品さえ見つからない人たちはずっと落ちついているように見える。しかし彼らの微笑は機械的だ。哀れな微笑、最後の条件反射的な気取り……

★

ロシア人にしろ、アメリカ人にしろ、十分には成熟していなかったし、知的にも、ヨーロッパを「救い」、そのデカダンスを復活させるほどには腐敗していなかった。それとはちがったふう

に汚されていたドイツ人は、ヨーロッパに見かけだけでも持続や未来の色調を与えることもできたはずだ。しかし、ささやかな夢と、ルネサンス以来のあらゆる価値に敵対するイデオロギーを名のった帝国主義者たちは、その使命を逆に完遂し、すべてのものを永遠にだめにしてしまったのだ。ドイツ人は、大陸を支配すること、そして、わずか数世代の間だけでも、それに繁栄の相貌を与えることを要請されながら（十八世紀がフランスの世紀であったという意味において、二十世紀はドイツの世紀になることもできたはずだった）、それにひどく無器用に着手して、むしろ崩壊を早めただけになった。彼らは大陸をひっくりかえして、混乱におとし入れただけでは満足できず、その上、それをロシアとアメリカへの贈り物にしたのだ。彼らがかくもみごとに戦い、壊滅したのはまさにロシアとアメリカのためだったのだから。かくて彼らは、他者の利益のためのヒーロー、悲劇的などたばた劇の演出者となって、その任務、本当の役割を演じそこねたのだ。近代社会のテーマを考え、練りあげ、ヘーゲルとマルクスを生みだしたあとで、たんに部族のヴィジョンではなく普遍的な観念に奉仕することこそ彼らの義務だったはずだ。それでも、それがどんなにグロテスクなものであれ、そのヴィジョン自体は、彼らの特権的な位置を証明するものだった。そのヴィジョンこそ、西欧において彼らのみが若干の新鮮さと野性味の残滓を保存し、彼らがひとつの偉大な計画、あるいは激烈な気ちがいざたを思いつくことができたのだということを明らかにしてはいないだろうか？　しかし、彼らには、もう新しい冒険に飛びこもうという意欲も能力もなく、そのほこりは若さを失って、彼らと同じく虚弱になり、彼らまで放棄の魅力

にとりつかれて、世界的な失墜につつましく貢献しようとしていることを、われわれはいまや知っている。

かかる情勢において、西欧は無限に生きつづけるわけにはいかないだろう。思いがけぬ一時期を経験するにしても、いまや西欧はその最後を準備をしている……五世紀から十世紀のあいだの西欧の姿を思い出してみよう。まさに容易ならぬ危機が待っている。別な生活様式が生まれようとする。新しい国民が形成されようとする。いまのところは混沌を予期しよう。すでに大部分のものはそれに服している。彼らはそこに滅びるために歴史をよび起こし、〈未来の名によって〉譲位し、〈自分に反して〉格下げされ、ふみにじられ、「救助される」ことを夢に見る……同じような感情が、古代世界の自殺、すなわちキリスト教の希望を招いたのだ。

〈疲れた知識人〉が、漂流し出した世界の醜さと罪を要約する。彼は、行動するかわりに懊悩する。寛容の観念に転じても、そこに必要な刺激剤はみつからない。刺激を与えてくれるのは恐怖であり、恐怖を究極の形とするような説教だ。その最初の犠牲者は彼だろうか? そうなっても彼は不平は言うまい。彼は粉砕する力にだけひきつけられるのだ。自由でいようと思うことは、自分自身であろうとすることだ。しかし彼は、自分自身であること、不確定の中を歩くこと、真理のあいだをさまようことに疲れはてている。「おれを幻影の鎖でしばってくれ」と彼は熱望する。そして〈知識〉の遍歴に袂別する。そうやって彼は、束縛の保護と平和を与えるような、あらゆる神話に、一目散にとびこんでゆく。自分自身の不安の責任を引き受けることは拒否し、自

分の中からは出てこない興奮を期待して冒険に乗りだす。その結果、倦怠の行きすぎとして専制政治の擁護が生じる。教会やイデオロギーや警察の起源は、集団の愚かさの中によりは、彼が自分の明晰さのために養う恐怖の中に求められる。この出来損いは、愚者のユートピアの名において知性の埋葬者に変身する。そして有用な仕事をしているものと信じて疑わずに、「愚者になれ」という孤独者の悲劇的な格言を冒瀆する。

当惑した聖像破壊者、パラドックスと挑発の迷いからさめ、非個性と慣例を求め、ほとんどへりくだり、月並みさに習熟したものは、特異性を捨てて、卑俗な群衆と手を結ぶ。自分以外にはもはや覆すべきものはない。打ち倒すべき最後の偶像……自己の崩壊が彼を引きよせる。彼はその崩壊を眺めながら、新たな神々の顔をこねあげ、あるいは古代の神々に別の名前をつけて復活させる。困難さに堂々と立ち向かうことができず、しだいに真理を軽視しようとする彼は、与えられた真理で満足する。彼の自我の副産物である彼は——疲れた破壊者として——祭壇またはその代用品の前にひれふしに行く。寺院やミーティングでの彼の席は皆が歌を歌うところ、彼の声を包みこんでくれるところ、自分でも自分の声が聞こえないところだ。信仰のパロディ？　そんなことは彼にはどうでもいい。というのは、要するに、自己を断念することしか彼は求めないからだ。彼の哲学が行きつくのはきまり文句であり、〈ホザンナ〉の中にそのほこりは消え去る！

正確に言おう。このような状態の中で、ほかにいったいどんな態度が取れるというのか？　彼

の鋭い批判精神、その戦闘的、攻撃的な懐疑主義には、ヨーロッパの魅惑と独創性が住みついている。その懐疑主義は刑に服している。疑いの欲求不満にかかった知識人は、ドグマの中に償いを求める。分析の限界に達し、そこで虚無を発見して圧倒される彼は、自分の地盤に戻って、ありとあらゆる確固たるものにすがりつこうとする。しかし、それにしっかりとしがみつくには純真さが足りない。そのときから彼は、〈確信を失った〉狂信者として、ただのイデオローグ、一個の雑種思想家にすぎなくなる。どんな移行期にも同じようなものが見出される。二つの相い異なる様式に参加する彼は、その知性の形態のゆえに、消え去ってゆくものの奴隷に、また擁護する思想によって、生まれでてくるものの奴隷となる。彼をよりよく理解するには、なかば改宗し、ぐらぐらと回り道ばかりし、キリスト教からは古代世界への憎悪しか汲みとらないといった聖アウグスティヌスを想像してみればいい。われわれはまさに、『神の国』が生まれた時代と対照をなす時代にいるのではないだろうか？　精神にとって必要なのは単純な真理、彼らをその疑問から解放する答、一冊の福音書、一個の墓なのだ。

洗練の時代には死の原理が潜んでいる。繊細さほどはかないものはない。その乱用は公教要理を招き、弁証法の遊戯の結論と、本能が加わらない知性の衰退に行きつく。その懐疑によって難解になった古代の哲学は、知らずに下層社会の単純な論理に道を開いた。そこでは諸宗教のセクトがひしめきあっていた。各学派のあとには各宗教の信仰が続いた。同じような敗北がわれわれをおびやかしている。すでにわれわれを卑小化し、無にしようとするイデオロギーや、退廃した

神話が猖獗をきわめている。矛盾を誇示することはもう続けられない。だれもが、なんらかの偶像を崇拝し、どんな真理にでも仕えようとしている、その双方を押しつけられて、恥と災いのあいだでどちらかを選ぶ労をとらなくともすむのならそれでいいのだ。

どんな世界がやってくるにしても、西欧人はその中で、ローマ帝国におけるギリシャ人の役割を演ずるだろう。新しい征服者から求められ、侮蔑される彼らは、知性の軽業か、過去の虚飾によってしか、征服者をだますことができるまい。〈生きのびる術〉において、彼らはすでにその力を示してしまった。枯渇の兆候はいたるところにある。ドイツは音楽にその力量を示した。しかしいまなお音楽にすぐれた力量を見せていると信ずることができようか？　ドイツはその深い貯えを使いはたしてしまったのだ。同じようにフランスは、その優雅さを失った。そのどちらも――そしてこの二国とともに世界の隅々まで――古代いらい、かつてないようなけたはずれの破産に直面している。やがて清算の時代がくるだろう。なおざりにできない展望。猶予の期間はどのくらいだかわからない。それは、とうとうやってきた解放を前にして、希望と期待の苦しみを背後にする幸福を、だれもが味わう安易な時代だ。

★

ヨーロッパは惑いと無気力の中でも、ひとつの確信を保持している。それだけはどんなことがあっても手離すまいとする唯一のもの、すなわち犠牲者、いけにえの未来が待っているという確信。ヨーロッパは、はじめて、確固として、強情に、敗れたことを自認している。まさにそうな

ることを欲し、そうなったのだ。それにずっと大昔から、新しい種族がやって来て、ヨーロッパを征服し、愚弄するだろうと教えられていたのではなかったか？　その絶頂期にいると思われていた十八世紀に、僧ガリァーニ（一七二八―八七、イタリアの経済学者、聖職者。）は、ヨーロッパが衰退期にあることを見ぬき、それを告げているのだ。ルソーは彼なりに予言していた。「タルタル人たちがわれわれを支配するだろう。この革命は私には間違いがないと思われる。」彼の言っていたのは本当だった。そのつぎの世紀になるとナポレオンがコザック兵について言った言葉や、トックヴィルやミシュレやルナンの不安な予言が思い出される。これらの予感は現実のものとなり、それらの直感はいまや常識になっている。退位は分秒のうちにおこるものではない。そのためには細心に用意された後退の雰囲気と、敗北の伝説が必要なのだ。そしてその雰囲気と伝説が作り出されたのだ。コロンブス以前の原住民が、遠くから来る征服者たちの侵入を受け入れる用意をし、観念し、彼らが到着したときにはすでに屈服していたように、西欧人たちは、その将来の隷属状態についてあまりに教えられ、信じこみすぎているために、おそらくそれを避ける努力はいっさい企てないだろう。そもそも彼らには、そのための手段も、意欲も、大胆さもないだろう。十字軍騎士たちは庭師となって、後代の出無精な人々の中に消えてしまった。そこにはもう放浪性のかけらも残っていないのだ。しかし、歴史とは空間への郷愁であり、マイホームの恐怖であり、遠くで死にたいという欲求の結実だ……そしてそのような歴史こそ、まさに、もうわれわれの周囲には見られなくなったものなのだ。

発見と、神話や行動を煽るような嘘の発明にかりたてる飽満がある。それは満たされない情熱であり、対象がありさえすればただちに健康なものになる病的な興奮だ。その他に、精神を能力から切り離し、生命をその原動力から切り離し、貧しく乾いたものにする飽満もある。倦怠の戯画的な実体、それは神話を解体し、あるいはその使用法をゆがめる。結局ひとつの病気だ。その症状と、重さを知ろうと思うものは、遠くまで捜しに行く必要はない。自分を観察してみて、どこまで《西》が刻印を押しているかを見ればいい。

★

力というものが伝染性のものであるなら、弱さというものも同じでないはずがない。弱さには人をひきつける力がある。それに抵抗することは容易なことではない。柔弱なものは集団となったとき、人を魅惑し、押しつぶす。無為症患者たちの大陸に対して戦うには、どのような方法があるのだろう？　それに意志の病ほど快適なものはないから、だれもが、それに身をまかせる。雑事のかなたに逃れることより心地よいものはないのだ。それにそれ以上に〈理屈にかなった〉ものもない。しかしそこでは、かなり強度の錯乱に落ちないかぎり、いかなる決断も、冒険も、動作もできない。理性、それはわれわれの生命力につく錆だ。われわれを冒険にかりたてるのは、身内にひそむ狂気だ。狂気に見捨てられればわれわれはもうおしまいになる。あらゆるものが身内の狂気に依存している。われわれの植物的な生さえもが。われわれに呼吸をするようにしむけるもの、呼吸することを強いるもの、さらには、血管の中に血をかけめぐらすもの、それらすべ

てが狂気なのだ。狂気が手を引けば、われわれはひとりぽっちだ！〈正常である〉ということ、そして〈生きている〉ということ、それは両立しえない。私が垂直な姿勢を保っていること、来たるべき瞬間を充実させようとすること、そして、つまりは未来を認識すること、それらは、精神の巧みな逸脱からやってくる。私は錯乱し、うまく夢遊することによって生き、行動している。正常になってしまったら、私はあらゆるものに気おくれを覚える。私は不在のほうに、流れ出ようとしない泉のほうに、あの、生が運動を知る前に置かれていた、脱力の状態のほうに滑り落ちてゆく。私は〈卑劣さのきわみ〉において、物の底部に近づく。私は深淵に追いつめられる。しかし、その深淵が私を生成から遠ざける以上、私はそれに関心ももたない。国や大陸と同じく、一人の人間が消滅するのは、無分別な計画や行為を嫌い、危険を冒しても存在のただ中にとびこもうとするかわりに、そこにうずくまり、身を潜めるときだ。後退と此岸との形而上学、原始への逆行！ ヨーロッパはその恐るべき均衡の中で、それ自身を、その無礼と挑発の過去を、そして、敗北の最後の名誉である〈不可避性の情熱〉までをも拒否している。あらゆるゆきすぎの形態、あらゆる生の形態を拒否するヨーロッパは、ぐずぐずと思案を重ね、生きることをやめたのちまで思案を続ける。それはすでに、亡霊の密議の相を呈してはいまいか？

……ある哀れな男が、朝遅くまで床の中にぐずついていながら、断固たる調子で、「欲するべし！ 欲するべし！」と唱えていたのを思いだす。喜劇は、毎日くりかえされていた。彼は実現不可能な仕事を自分に課していたのだ。少なくともその亡霊のような状態に対して反抗し、仮死

状態の中の恍惚を侮蔑していたのだ。ヨーロッパについてそれ以上のことを言うのはむずかしい。ヨーロッパは、努力を重ねたのちに、無意識の王国を見出して、有頂点になっている。というのは、その破滅には官能の原理が隠されていることをヨーロッパはさとり、それを楽しもうとしているからだ。放棄がヨーロッパを魅惑し、満足させる。時はなおも流れているのだろうか？ヨーロッパはそんなことに心を配ったりしない。それはほかのものが考えればいいことだ。ほかのものたちの仕事なのだ。あの連中は、どこにも到達しない現在の中にのたうちまわることが、どんなに心を軽くしてくれるか気づいていないのだ……

この世に生きることは死だ。あの世に行くことは自殺だ。どこに行けばいい？　この天体の上で、生きることがいくらかでも正当であると認められる唯一の部分は癌にむしばまれている。この超文明の人種たちはわれわれに絶望を配ってくれる。たしかに絶望しようと思えば彼らを眺め、その精神の動きと、弱まり、ほとんど消え果てた欲望の貧しさを観察するだけでいい。この遊牧民は――それが彼らの出発点であるが――その起源に対してかくも長いあいだ罪を重ね、野性をおろそかにしたあげく、彼らの東方に対して、もはやそこには一滴もフン族の血はないことを認めさせるのだ。

古代の歴史家が、ローマに対して、もはや悪徳も薬も受けつけないと言ったとき、それはその時代を定義するよりは、われわれの時代を予見していたのだ。ローマ帝国の疲弊はたしかに大きなものだったろう。しかし、それは秩序をのがれた創造的な疲弊であり、そこでは苦しみをまぎ

らすために、破廉恥と、豪奢と、残忍さを育てることが、まだ、できたのだ。それに対して、われわれが直面している疲弊には、圧倒的な凡庸さばかりで、幻影を与えてくれる魔術はかげさえもない。あまりに明白で、あまりに確固たるその疲弊は、避けられない進行によって、逆説的に、医者と患者の双方を安心させるような病患を呼びおこす。それは契約書のように正確で、正式な苦悶で、気紛れも分裂もない、取りきめられた苦悶、生を刺激する偏見を捨てただけでは満足できず、その上、生を正当化し、その基盤となるもの、すなわち未来という偏見までも捨てた民族にぴったりあった苦悶なのだ。

空漠の中へ集団で入って行く！　しかし、思いちがいはするまい。それは仏教で「真理のすまい」と規定するものとはまったくちがっていて、完成でもなければ、解放でもなく、否定辞で表現された肯定性でもなく、瞑想の努力でも、除去と裸になることの意志でもなく、救済の獲得でもなく、高貴さも熱情もない、ただの落下なのだ。貧血性の形而上学から出たそれは、何かの探究の報酬でも、不安の究極でもありえない。〈東洋〉は自らの空漠に進み、そこに花開き、勝利を得る。その間、われわれは、われわれの空漠にのめりこみ、そこに最後の方策までも失う。われわれの意識の中ではあらゆるものが絶対に頽廃し、腐敗している。そこでは空虚さえ不純なのだ。

★

数々の征服や、発見や、思想はどこまで生きつづけるのだろう？　ロシアで？　北アメリカで？

そのどちらもヨーロッパの悪い面の結果を受けついでしまっている。……ラテン・アメリカ？南米？　オーストラリア？　交代はこちらのほうに期待しなくてはならないように思われる。漫画的な交代。

未来は地球の辺境に属している。

★

精神の分野において、ルネサンスから現在に至るまでの成功を測ってみると、哲学の方面は問題にならないだろう。西欧哲学は絶対に、ギリシャや、インドや、中国の哲学に及ばない。せいぜい、いくつかの点で価値を認められるだけだ。それは一般的な哲学的努力の一変種をなしているにすぎないから、場合によってはなしでもすませられるし、サンカラ（シバ教の婆羅門）や、老子や、プラトンの瞑想をもってきてそれに代えてもいい。しかし音楽についてはそうではない。この、近代社会を大いに弁護してくれる現象は、他のいかなる伝統の中にも類を見ない。他のどこにモンテヴェルディやバッハやモーツァルトに代わりうるものを見つけられるだろう？　西欧は音楽によってその相貌をあらわし、深みに達する。西欧は、絶対に固有のものであると言いきれる知恵や形而上学を生み出さず、また、他に較べるものがないとまで言える詩は作らなかったとしても、そのかわりに、音楽の分野において、その独創性を、繊細さを、神秘を、そして、言い表しがたい能力を、十分に発揮している。西欧は理性を倒錯に近いくらいまで愛した。しかしその本当の才能は感性的なものであった。それを、もっとも有難がるのはどのような悪であろうか？　それ

は魂の肥大にちがいない。
音楽なしには、西欧はどこにでもあるような、見ないさきからわかっているような文明の様式しか作りださなかっただろう……西欧がその総決算をするとき、音楽だけが、西欧は空しく身をすりへらしたのではなく、まさに失うべきものをもっていたのだということを証言するだろう。

★

人間はときおり、欲望の責め苦や、生存本能の猛威からのがれることがある。そのとき人は、失墜の予感に歓喜し、意志を捨て、無関心の中に溺れ、自己に背き、邪しまな霊の助けを求める。仕事に追いまくられ、自己を損うような無数の活動に仕えているうちに、彼はいままでその魅力に気がつかなかった活力を発見する。崩壊の活力を。彼はその発見をとても誇りに思う。彼はついに、自分を犠牲にして自身を更新することができるようになったのだ。
集団における場合と同じく、個人においても、そのもっとも深いところには破壊的なエネルギーがあって、それによって、人はいわば、みごとに崩壊することができるのだ。酸っぱい興奮、破壊の快感！ 彼らはおそらく、この意識という病いから癒えようと期待してそれに身を委ねるのだ。たしかに、あらゆる意識的な状態がわれわれを疲れさせ、力を吸いとり、すりへらそうとする。それが力をふるいだすにつれて、われわれは目覚める前の夜を取り戻したいと思い、自我が働きだし、攻撃をしかけてくる前の不活動状態にもぐりこみたいと思うだろう。疲れ果てた精神の望み、それは、たえず自己を当てにし、他者との差異を咀嚼しなおすことにいらだった人間

が、いまだ世界と一体で、同朋を裏切りもせず、人間として頽廃してもいなかったころに戻りたいと思う時があることを説明してくれる。恐怖である歴史は、意志の飢えと、人間という不具な動物が自分の使命を遂行しようとする意志と、それをやりとげることの恐れの双方を伝えてくれる。それは当然な恐れだ。なぜなら、冒険の終りには、なんという失寵が待っていることだろう！　われわれが生きているのは、彼が与えられた空間の中で究極の変容を見せる瞬間のひとつではないのか？

★

ヨーロッパの功績を総覧していると、感動に襲われて、それを悪く言う自分が憎らしくなる。逆にヨーロッパの欠点を数えあげるときには、それがすぐに崩壊し、思い出もなくなってしまえばいいと思う。しかしそれ以外の場合、ヨーロッパのよい所も、恥ずかしい所も描いていると、一体どっちの側に傾くのかわからなくなる。そして、選択の余地のない感情においつめるヨーロッパを、許せなく思う。せめてヨーロッパの傷の繊細さ、魅力を、無関心に眺めることができたらと思う！　私はたわむれにヨーロッパとともに滅びようと思った。そして私は、そのたわむれにとらえられてしまった。かつてヨーロッパのものであり、いまもその名残りをとどめる優美さ、それを自分のものにし、そこに生き、その秘密を永遠のものにする、そのためにはどんな努力もしてしすぎることはないようにも思えた。無駄骨だった！――レースにくるまった穴居人……

★

精神は吸血鬼だ。それはどのように文明を攻撃するのだろう? そいつは、文明を平伏させ、打ちのめし、息もたえだえにし、血に相当する精神の糧を失わさせる。文明をけたはずれの行為と、スキャンダルにかりたてた衝動は、その本質とともに奪いとられてしまった。何ものも邪魔をすることのできない崩壊の過程に入った文明は、われわれの危険の姿と、未来の渋面を見せてくれる。それは、われわれの空漠であり〈われわれ自身だ〉。そこにはわれわれの不十分さと、悪徳と、不安定な意志と、本能が見られる。われわれがそれに対して覚える恐怖は、われわれ自身に対する恐怖なのだ! そして、われわれもまったく同じように平伏し、敗北し、息もたえだえなのは、われわれもまた精神の吸血性を知り、その影響を受けたからなのだ。

★

償いえぬものを一度も想像したことがなかったら、ヨーロッパを一目見ただけで、戦慄をおぼえただろう。ヨーロッパは私からあいまいさをうばい、私の恐怖を正当化し、かきたて、おだてあげ、修道僧の瞑想の中で死骸が果たした役割を、私のために演じてくれる。

フィリップ二世はその死の床の傍に息子を呼びよせて言った。「見よ、ここにすべてが終る。王国も終るのだ。」ヨーロッパの枕もとで私に警告する声がどこからか聞こえる。「見よ、ここにすべてが終る。文明も終るのだ。」

★

虚無を論争して何になろう? いまこそ正気にかえり、悪の魅惑からのがれねばならぬ。まだ

おしまいではない。ローマに対して蛮人がいたように、異郷の民がいるのだ。どこからあらわれるのか？　そんなことはどうでもいい。いまのところ、彼らの発進は遠くはないこと、そしてわれわれの壊滅を祝う準備をしながら、われわれを再教育し、われわれの屁理屈と文句にけりをつける方法を彼らは考えているのだということを認識しよう。彼らは、われわれをはずかしめ、ふみにじるために、われわれの死、あるいは再生に力をかそうと、大いなる努力をかたむけるだろう。彼らがわれわれの無力を鞭打ち、影のような生に活力をよみがえらせてくれ、沽れはてた樹液を復活してくれる。しおれはて、青ざめたわれわれは、宿命に対して反発する力がない。瀕死の病人は同盟もしなければ反乱もしない。どうすればヨーロッパの覚醒と怒りに期待できるだろう？　その運命と、そしてその反抗までがよそで規制されている。持続することに疲れ、これ以上われとわが身に語りかけることに疲れはてたヨーロッパは、いまやひとつの空漠だ。その空漠へむけて、まもなくステップがおそいかかってくるだろう……もうひとつの空漠、新しい空漠が。

運命についての小論

ある種の国民、たとえばロシア人やスペイン人は、自分自身に熱中して、自分たちのことを唯一の問題のように考える。彼らの何といっても異常な発展が、その一連の異常さについて、また運命の奇跡、あるいは無意味性について考えるように、彼らに強いるのだ。

前世紀におけるロシア文学の誕生は、ロシアをも揺るがさずにはおかなかったような、一種の絶頂、電撃的な成功であった。それが、ロシアそれ自身にとってひとつの驚きであり、自らその重要性を誇大に考えたことは当然であった。ドストエフスキーの人物たちはロシアを神と同じ地盤の上に置く。すなわち神に対する問いかけの様式を、ロシアにまで適用するのだ。ロシアを信じるべきか？　否認すべきか？　それは現実に存在するのか、それとも口実にすぎないのか？　そのような疑問の提起は、一地方的な問題に神学の用語をあてはめることだ。しかしまさしくドストエフスキーにとって、ロシアは一地方の問題であるどころか、神の実存の問題と同じ、ひとつの普遍的な問題であったのだ。このような誤った異常な考え方は、その異常な発展の中に、人

人の精神を驚嘆させたり、当惑させたりするようなものがある国においてしかありえないものだ。英国人が、英国は意味を持っているか否かを問い、あるいは修辞法を駆使して英国にひとつの使命を与えたりするということは考えられない。英国人は自分が英国人であることを知っており、彼らにとって、それで十分なのだ。自国の発展は根本的な問題とはならない。

ロシア人において、メシア教が出てくるのは、高慢によって深刻化された内的な不確定さや、その欠陥を肯定し、他人に押しつけ、疑わしい過剰物をぶちまけようとする意志からなのだ。世界を「救おう」という熱望は若い国の住民の病的な現象だ。

★

スペインは反対の理由から自己に没頭する。ここにも電撃的な登場があった。でもそれは遠い昔のことだ。スペインは、やって来るのが早すぎて、世界を揺るがしたのちに自分から失墜した。この失墜について、私はあるとき、啓示を受けたことがあった。それはバリャドリードのセルバンテスの家だった。そこで、一人の立派な様子の老婦人がフィリップ三世の肖像を見ていた。私が「狂っている」とつぶやくと、彼女は私の方をふりむいてこう言ったのだ。「この人のときから私たちのデカダンスが始まったのです。」それこそまさに問題の核心だった。「私たちのデカダンス！」それでは、と私は考えた。スペインでは、デカダンスというのはだれの口にものぼる国家的概念、きまり文句になった公式のスローガンなのだろうか。十六世紀には世界に対して豪奢と狂気を示した国家が、いまや、その惰眠を成文化するまでになっているのだ。最後のローマ人た

ちも、時間が与えられていたら、おそらく同じようにした。ただ彼らには自分たちの最後をいつまでも考えつづけることはおそらくできなかった。すでに蛮人（西欧人）たちが彼らを取り囲んでいたのだ。スペイン人たちはずっと恵まれていた。彼らはその悲惨を思い、そこにひたりきるのにたっぷりと（三世紀も！）時間を与えられていた。彼らは絶望によって多弁になり、幻影を即興しながら、一種の歌うようなきびしさ、〈悲劇的なまじめさ〉をもって生きてきた。それが彼らを通俗性から救い、幸福と、成功から遠ざけている。彼らがいつの日か、古い道化の笏杖をより新しいものと代えることがあるとしても、かくも長い不在によって押された刻印は消えることがないだろう。信心家であれ、アナーキストであれ、彼らは「文明」のリズムに合わせて生活することができないから、その反時代性がなくなることはないだろう。どうやったら他の国家に追いつくことができるだろう、どうやったら当世風になることができるだろう、彼らは死について反芻しつづけ、その垢にまみれ、それを生理的な経験にすることに、最大の努力をはらっているというのに？　彼らはたえず本質的なものの方に後退して行った結果、あまりに深く入りすぎて、道を失ったのだ。デカダンスの観念は、それが虚無に対する彼らの大いな弱みと、骸骨に対する強迫観念を、歴史の用語に置きかえることがなかったら、これほど彼らの心を占めはしなかっただろう。彼ら一人一人にとって、その国が〈自分の〉問題であることは少しも驚くにはあたらない。ガニベット（一八六二〜一八九八、作家）やウナムノやオルテガを読めば、彼らにとってスペインとは心の底をゆさぶり、しかも合理的な形式に還元できない、ひとつのパラドックスであることがわかる。彼

らはスペインが体現している解けない謎の魅力にとりつかれて、たえず、そのパラドックスに戻ってゆく。彼らはそれを分析によって解決することができないからこそ、ドン・キホーテについて考えをめぐらす。彼においてはパラドックスは一層、解きがたい。それは象徴なのだ……たとえば、ヴァレリーやプルーストが、自分自身を発見するために、フランスについて考えるなどということは想像もできない。できあがってしまった国、不安をかきたてるような重大な裂け目もない国、悲劇的でない国であるフランスは問題にならない。成功し、運命を完結してしまった国がどうして「興味をひく」ものになるだろう?

急激な発展の典型となり、天才的で未完成に終った運命を示したということは、スペインの功績だ(それは集団の中に表現されたランボーとも言える)。スペインが金の発見のためについやした熱狂と、無名になったときの意気銷沈を考えてみるがいい。ついで、あの冒険家たちを、彼らの海賊ぶりと敬虔さを、また彼らが福音書と殺人、十字架像と短刀を結びつけるやり方をみるがいい。その絶頂期において、あらゆる真の啓示宗教にぴったりするほどにカトリック教は血にまみれていた。

コンキスタ(征服)と宗教裁判——それは、壮大なスペインの悪徳が生んだ平行的な現象だ——スペインは強かったうちは虐殺に卓越していた。そしてそれに華麗さを盛りこもうと心を配ったばかりか、もっとも深いところにある感受性をもそそぎこんだ。残酷な国民だけが生の根源そのものに近づくことができる。その鼓動と、ぬくもりの秘密に。血ばしった目だけが生の本質を見

ぬくことができる……哲学がどんなに生気を欠いたまなざしの反映であるかを知っていればどうしてそれを信ずることができよう? 推論と思索の習慣は、生命力の不足と情感の鈍化の指標なのだ。栄養不良の結果、自己を忘れ、観念と一体化することができなくなったものだけが、系統だった考えをする。哲学とは、〈生物学的に〉実質のない個人や国民の特有物だ。

スペイン人と、その国以外のことで話しあうのはほとんど不可能だ。それは閉ざされた世界、彼らの抒情と思考の主題であり、世界の外に位置する絶対的な地方なのだ。ときに高く持ちあげられたかと思うと、つぎには低く打ち倒されてきたスペイン人は、自分の国に対して眩しい視線と、暗く曇った視線とをともに持っている。八裂きがその未来の形だ。スペイン人は、一つの未来に執着したとしても、それを心底信じることはない。彼らにとって、発見とは、暗い幻影と絶望の誇りであり、才能とは、悔恨の力だ。

スペイン人やロシア人は、その政治的な方向はともかく、自国について考えるときには、彼らが見て価値がある問題だけを取りあげる。スペインにしてもロシアにしても、スケールの大きな哲学者が生まれなかったわけは容易に理解される。哲学者というものは、観念に対して観客の立場で迫っていかなければならないからだ。観念を同化し、自分のものとする前に、まず外から眺め、それと縁を切り、重さをはかり、そして必要とあればそれと〈遊ば〉ねばならない。そのうちに思考の成熟を待って、自分とけっして同化することのないような体系を練りあげる。ギリシャ人について感心するのは、自分の哲学に対するこの種の優越性を持っていることだ。認識の問

題に取り組み、それを自分の思考の根本的な対象とするものについては、つねに同じことが言える。ロシア人にしてもスペイン人にしてもこの種の問題には興味を示さない。知的瞑想に向いていない彼らは、〈観念〉に対して奇妙な関係を結ぶ。彼らは、観念と戦うときには、いつでも負けてしまう。観念が彼らを取りおさえ、服従させ、抑圧する。彼らは、自主的な殉教者として、観念のために苦しむことしか求めない。彼らにとって、精神が、自己や事物とたわむれるようなところや、系統だった悩みなどは遠い世界なのだ。

ロシアとスペインにおいて、その異常な発展は、自分たちの運命について考えるように彼らを導いていった。しかしこの二つの国は、その成長のしかたに、むらや事故があったにしても大国なのだ。小国の住民にとって、国家の問題はいかばかり悲劇的であったろうか！　小国においては突然の繁栄も、緩やかなデカダンスもありえない。彼らは、未来にも過去にも支えを見出せず、自分の上に小さくちぢこまる。その結果、不毛な長い思索が生じる。その発展は異常なものなどではありえない。彼らは発展などしないからだ。彼らには何が残されているのだろう？　彼らの外に全歴史があり、まさにそこからのけものにされている以上、それは、自分自身に対する忍従でしかないのだ。

彼らのナショナリズムを、われわれはふつう滑稽なこととして受けとるが、それはむしろ仮面であり、そのおかげで彼らは自身のドラマを隠し、どんなに熱望しても、世界を動かす出来事の中に入りこめないということを忘れるのだ。それは悲しい嘘であり、当然の侮蔑に対する絶望的

な反動であり、自己のひそかな妄執を人の目からそらさせる方法なのだ。もっと簡単に言えば、自分自身が苦痛のたねであるような国民は病める国民だ。しかしスペインが、歴史からはじきだされたことを苦しみ、ロシアが、なんとしてでもその中に地位を占めようと苦しんでいるときに、小国のほうでは、こんな絶望や焦ら立ちの理由が少しもないことによって苦しむのだ。彼らを本質的に苦しめている欠陥は、幻滅によっても、夢によっても癒されることはない。彼らには自分自身に執念を抱くという方法しかない。しかしその執念には美しさがないわけではない。それは何ものも生みださないし、だれの興味もひかないからだ。

★

国によっては、ある種の至福や恩寵のようなものを享楽しているところがある。どんなことでも成功する。不幸であっても、破滅であっても、それらの国では成功する。それに対してどうしても成功できないという国がある。それらの国では、勝利でさえ失敗に等しい。そういった国は自己主張をしようとし、一気に前進しようとしても、外的な宿命が介入して、その跳躍を打ちくだき、出発点に引き戻してしまう。あらゆる機会が遠のいてゆく。滑稽さの機会でさえもが。

フランス人であるということはひとつの明証性だ。そのことで苦しむ人もいないし、それを喜ぶにもあたらない。「いかにしてペルシャ人たりうるか?」という、あの古い問いを当然のものにするような確信をフランス人は持っている。

ペルシャ人であるというパラドックス（場合によってはルーマニア人でもいい）は、十分に活

用しなければならない苦悩であり、利用すべき欠陥なのだ。昔、私は、白状すれば、特定の国民、それについていかなる幻影を抱くことも許されていなかったような起源を持った敗者の集団に属していることを、恥のように思っていた。私たちは蛮族の残りかすの出であり、大侵攻の落ち穂、〈西〉への歩みを続けるのに無力なために、カルパチア山脈とドナウ河に沿ったあたりに倒れ、そこにしがみついて眠りにおちた部族、ローマ帝国の境界にいた脱走者の集団、ラテン社会のぼろ屑で装った賤民の出であるように思っていた。それはおそらくまちがってはいないだろう。この過去にしてこの現在ありだ。ついでにこの未来か。それは私の尊大な若さにとって、なんという試練だったろう。「いかにしてルーマニア人たりうるか?」それは、たえ間ない忿懣を覚えずには答えられない問いだった。自分の一族を、自分の国を、あの無気力にとりつかれ、鈍麻ではちきれそうになった永遠の農民たちを嫌い、彼らの出であることに顔を赤らめ、彼らを否認し、彼らの半・永遠性を拒否し、彼らの化石化したうじ虫としての確信と、彼らの地質学的な夢を拒否した。彼らの表情に生気か、せめて反逆のふりだけでもないかと思って捜してみても無駄だった。猿は、彼らのうちで死んでしまっていた。本当に、彼らは鉱物から出て来ているのではないか?どうやって彼らをせきたて、愛してやれるかわからず、私は皆殺しを夢に見た。石ころは虐殺するわけにはいかない。彼らが見せてくれていた光景は、私のヒステリーを正当化するとともに、当惑させ、それに糧を与えるとともに、むかつかせた。そして彼らのうちに生まれたという偶然を私はたえず呪った。

彼らにはひとつの大きな観念が取りついていた。運命の観念がそれだった。私はそれを払いのけるのに全力をかたむけた。私はそこに臆病者の言い抜けと、あらゆる放棄の言いわけ、ひとつの良識と、陰気な哲学の表現しか見なかった。何にすがったらいいのだ？　私の生国の存在は、明らかに、なんの意味も持たなかった。それは、私には虚無の要約か、不可解性の物質化のようにしか見えなかった。ちょうど、一種の黄金の世紀も、コンキスタも、狂気も、われらの苦しみのドン・キホーテも持たないスペインのように思えたものだ。そこに属しているということは、なんという屈辱と嘲弄の学習だったことだろう。なんという災、なんというレプラ！

そこを支配していた大いなる観念、その起源と深みと、あるいは、それが仮定していた災禍の経験とシステムを認識するには、私はあまりに生意気で、うぬぼれが強かった。その観念を理解するようになったのは、ずいぶんあとになってからだった。それがどうやって私のものになったのかはわからない。それをはっきりと感じるように至ったとき、私は生国と和解した。そのときそれは、〈ようやく〉私につきまとうのをやめたのだ。

抑圧された民衆は、行動することを免れるために「運命」に身をまかせる。それは出来事を説明する方法であると同時に、裏返しの救済なのだ。すなわち〈日用〉歴史哲学、感情を基盤とする決定論的ヴィジョン、状況の形而上学……

ドイツ人も運命に敏感ではあるが、それを外部から介入してくる原理とは見ず、自分の意志から生まれ、やがて外へぬけ出し、彼らを押しつぶしに戻ってくる力として考えている。シックザ

ール（運命）は彼らのデミュルゴス（創造者）的な食欲に結びついて、世界の内側によりは自我の内面に宿命の機能を仮定する。ある点までそれは彼らに依存していると言ってもいい。

宿命を、われわれの外側にある、万能で崇高なものと考えるには、きわめて長い破産の過程が必要だ。その条件を私の国は完全に満たしている。ルーマニアにとって、努力や行為の有効性を信ずるということは、ふさわしくないだろう。そこでルーマニアはそれらを信じないし、事を荒だてまいとして不可避なものに忍従する。絶望の体系とともに、この生活の知恵や、必然性を前にしたときの落ちつきや、無数の困難さと、それに服従する方法を贈ってくれたことを、私はルーマニアに感謝している。ルーマニアは、私の失意をただちに永続させ、それを維持する秘密を、怠惰な私に教えてくれたばかりか、私を外見にこだわるのらくらものにしようと努め、それほど身を汚さずに堕落する方法まで指示してくれたのだ。私はルーマニアのおかげで、いままでに一番見事で、一番確実な失敗をしたばかりか、私の怠惰をごまかし、悔恨を蓄える能力さえも獲得したのだ。ほかにもなんと多くの利点を、私は自分の国に負っていることだろう！　どんなに恩になっているかはほんとうのところ、あまりに多様であって、それを列挙するのは退屈にちがいない。

私自身がどんなにがんばってみたところで、ルーマニアなしには、かつての日々をあれほど美事に無駄にすることがはたしてできただろうか？　ルーマニアはそれを助け、あと押しし、力づけてくれた。人生をやりそこなうということは、すぐに忘れられがちだが……そんなに生やさし

いことではない。それには長い伝統と長い訓練、数世代にわたる作業が必要なのだ。その作業さえ終れば、あとはおもしろいように進む。そして無用であることの確信が民族の遺産としてわれわれに与えられる。それは祖先が額に汗し、数限りない屈辱のはてにわれわれのために獲得したものなのだ。運のいい事だ。われわれはそれを享楽し、誇示している。屈辱のほうはいつでも美化し、ごまかすことができるし、優雅な出来損いのふりをし、立派に最低の人間になることができる。不幸の〈慣例〉である礼節は、破産者として生まれ、人生を最後のところから始めたものの特典なのだ。かつて一度も存在したことのない種族の一人であると知ることは、何がしの快さと、官能のよろこびさえともなう苦しみだ。

だれもが、なんでもないときに使う「運命」ということばに対して、昔、私が覚えた激昂は、いまになって見れば子供じみたことのように思える。そのころは、いつか私も同じように言うだろうとは思いもしなかった。その言葉をかさに着、運、不運も、また、どんなに些細な幸、不幸もそのせいにし、それればかりか、溺れるものの恍惚をもって〈宿命〉にとりすがり、日々の恐怖に立ち向かう前に、まず、そのことを考えようとは。「空に消え去るだろう、おおわがロシアよ」、とチュッチェフ（一八〇三〜七三 ロシアの詩人）は前世紀の終りに叫んだ。その言葉は私の国に一層ぴったりあてはまるように思えた。が、それは消え去るために特別に作られ、呑みこまれるようにみごとに構成され、理想的で無名の犠牲者の特質をすべて備えた国だった。終りもなければ、理由もない苦しみの習慣、災禍に満ちみちて、押しつぶされる部族の、なんという学習だったのだろう！

ルーマニアのもっとも古い歴史家は、つぎのようにその年代記を始めている。「人間が時を支配するのではない。時が人間を支配するのだ。」そっ気ない言葉ではあるが、それがヨーロッパの片隅のプログラムであり、墓碑銘であった。南東の国の民衆の感受性の調子を知るには、ギリシャ悲劇のコーラスの詠嘆を思い出せばいい。意識されない伝統によって、その社会の全員がその影響を受けている。ため息と不運の慣習、大国の残忍性を前にした小国の民衆の嘆き節! しかしもう泣き事はよそう。混乱した世界に対して、つねに変らぬ悲惨と敗北を持っているということは、力強いことではなかろうか? それに私達には、世界中がディレッタンティスムにおちいっているときに、悲しみの分野において、皮を剝がれたもの（生体標本）と、博学者の権威をあわせ持っているという慰めがありはしないだろうか?

亡命の利点

亡命者について、放棄するもの、隠れ、消え去ろうとするもの、悲惨と失墜の条件に服従しているものといったイメージを抱くのはまちがっている。亡命者を一人観察してみればわかる。それは野心家で、攻撃的な失意者、征服者の裏を持った気むずかし屋なのだ。われわれは持っていたものを奪いとられればそれだけ一層、食欲も幻覚も激しくなる。私は、不幸と誇大妄想のあいだに関係があるとさえ思っている。すべてを失ったものは最後の望みの綱として、栄光の希望か、文学的なスキャンダルを保有する。あらゆるものを捨てることを承知しても、〈名前〉だけは捨てない。しかし、文明人には知られていなかったり、軽蔑されたりしている言葉で物を書いているかぎり、どうやってその名前を周知させることができるだろう？

ほかの言語をこころみたらどうだろう？ しかし自分の過去を引きずっている言葉を捨てさるのは容易なことではない。ほかの言語を身につけるために自分の言語を否認するものは、自己を、あるいはその失意をさえ変えることになる。彼は英雄的な裏切り者として、自分の思い出を断ち

切り、ある程度まで、自分自身と絶縁する。

★

このようなものが小説を書いて、たちまち有名になる。彼はそこに自分の苦しみを物語る。同国人たちは外国でそれを羨望する。彼らだって苦しんだのだ。それもおそらくずっと多く。そうやって無国籍者は小説家になり――あるいはなろうと夢みる。その結果、不安が山と積まれ、恐怖だの、戦慄だのが氾濫して、つぎつぎに〈時代遅れ〉になってゆく。いつまでも地獄の光景ばかり描いているわけにはいかない。地獄の特性というものはまさに単調だからだ。流謫の様相であっても同じだ。文学の中では恐怖が何にもまして興奮させる。生の中では事実が勝って、恐怖はいつまでも興味をひくことはできない。しかし、作家のほうは存在する。しばらくの間、彼は自分の小説をひきだしの奥にしまっておく。そして時期が来るのを待つ。世間をあっと言わせる夢、束の間の名声の夢、彼はそれに期待し、それが彼を支えているのだ。彼は非現実の中に生きる。しかしこの夢はきわめて強力で、たとえばどこかの工場で働いていても、ある日突然、考えられないような名声が彼をその工場から引きさらってゆくだろうという夢が、それを支えているのだ。

★

同様に悲劇的なのは詩人の場合だ。彼は固有の言語に閉じこめられて、友人たち、十人、あるいは、せいぜい二十人のために書いている。彼の、読んでもらいたいという欲求は、にわかじた

ての小説家に負けるとも劣らないほど激しい。しかし彼は、自分の詩を、移民の小雑誌に発表することができるだけ恵まれていると言える。そういった雑誌は、ほとんど不釣合いなほどの犠牲と献身によって刊行されている。雑誌の編集長は、こんな詩人がつとめる。それを継続させるために彼は飢えも我慢し、女たちからも遠ざかって、窓もない部屋にとじこもり、種々の欠乏が、たがいに相乗して恐ろしいものになってもじっと我慢する。自慰と結核、それが彼の分け前だ。

移民というものは、どんなに数が少なくとも、群れをなす。それは彼らの利益を守るためだけでなく、彼らの悔恨と、叫びと、反応のない呼びかけを出版する金を出しあい、身を削りあうためなのだ。これより悲痛な無償の行為は捜してもありえない。彼らが散文家としてはぱっとしないのに、詩人としてはすぐれている理由は簡単だ。過去を偽造しようという幼稚さを持たない小国の文学作品を見てみるがいい。そこで一番、目につくことは詩が圧倒的に多いということだ。散文が発達するのには、なんらかの厳密さ、確固たる社会形態、それに伝統が必要なのだ。散文は熟考され、構成される。詩は〈浮かび上って来る〉。それは直接的、ないし完全に人為的なものだ。詩は穴居時代人か、洗練された人間の持ち物で、現在以前か、以後か、いずれにしても文明の埒外に存在する。散文が思慮に富む才能と結晶した言語を要求するのに対し、詩は野性的な才能と定着していない言語にとってもまったく可能なのだ。

★

文学をなすとは散文を作ることだ。

これほど多くの人間が詩以外に表現手段を持たないということはきわめて当然のことではないだろうか？　こういった、特別、才能があるというわけではない人たちが、その根絶やしにされた生活と、彼らの例外的な条件の自動反射の中に、正常な環境では見つけられそうもない余りものの才能をつかみとるのだ。

亡命とはどのような形で表われるにしろ、またどんな原因を持っているにしろ、そのはじまりは目まいの習得だ。目まいというものに近づく機会はだれにでも与えられるものではない。それはひとつの局限状況であり、詩的状態の極点のようなものだ。たった一度の宿命の好意によって、一気にそのような地点まで、学習の回り道なしに運ばれてしまうということはなんという特典だろうか？　たとえば、あのぜいたくな無国籍者、リルケのことを、そして彼がつながりを断ち切り、見えないものの中に足をふみおろすために、どれほどの孤独を積み重ねなければならなかったかを考えてみるがいい。外的な条件が何も強要しないときに、どこにも属さないものになるということはなまやさしいことではない。神秘家ですらおそるべき努力をつみ重ねなければ、完全な裸には到達できないのだ。この世から脱出するということはなんとつらい廃棄作業だろう！　無国籍者は歴史によって——敵意の助けといってもいい——大した努力もせずにそこにたどりつく。彼にとってあらゆるものを脱ぎ捨てることは、いささかの苦悩も、一回の徹夜も必要としない。諸事件が彼にそれを強いる。ある意味では彼は病人にも似ている。病人は同じように少しも自分の力によらず、事物の力によって、病気の好意によって、哲学ないし詩の中に身を据える。

粗製の絶対？　そうかもしれない。努力によって得られた結果が、質において、不可避の休息から生じたものより優っているという証明はなされてはいないのだから。

☆

根無し草（デラシネ）の詩人にはひとつの危険が待ちかまえている。運命に適応してしまって、もはや苦しむより、それを楽しんでしまうことだ。悲傷の新鮮さはだれにも救えない。悲しみはすりへらされてゆく。異国暮しのせつなさ、あらゆる郷愁とてその例外ではない。悔恨は光沢を失い、色あせてゆく。そして哀歌と同じ定めをたどって、ほどなく古びてしまう。亡命、この無の都、裏返しの母国に身を落ち着けることほど自然なことがあるだろうか？　詩人はそこに喜びを見出すにつれ、感動の材料と、不幸の源、それに栄光の夢とを浪費してゆく。誇りもし、利用もしていた呪いが、もはや力をふるわなくなると、彼はそれとともに例外者としてのエネルギーと、その孤独の理由とを失ってしまう。地獄から投げ返された彼は、そこに再び居を構え、そこにひたりきろうとしても無駄だろう。その賢明すぎる苦しみは、彼を地獄に対して永遠にふさわしくないものとしてしまうだろう。かつてはまだ誇りにしていた叫びは、いまや苦渋に変わる。苦渋は詩にはならないのだ。それは詩人を詩の外に連れ出してしまう。もう歌もなく、行き過ぎもない。傷はふさがれ、そこから何がしの響きを取り出そうと揺すぶってみても虚しいだけ。せいぜいそれは偽物の苦しみにすぎないだろう。そこには名誉ある失墜が待っている。彼の詩想は多様性も独創的な不安も持たず、ただ枯れてゆくばかりだ。まもなく無名に甘んじるようになり、ま

るで凡庸さの魅力に誘われたかのように、彼は〈どこにもない国〉の市民のマスクをかぶるだろう。いまや彼は、詩的生涯の終り、落魄の中でもっとも安定した地点にいるのだ。

★

「落ちついて」気楽な失墜の中に安住した彼に、いま何が残っているだろう？　救いはふた通りある。信仰とユーモア。まだ不安が名残りをとどめているなら、無数の祈りによって少しずつ清算する。毒にも薬にもならない形而上学、枯渇した作詩家のひまつぶしに時をすごすのが気に入らないかぎり。その逆に皮肉にむいている人間だったら、自分の敗北を卑小化してそれを楽しむ。そのいずれの場合にも、もっと高い目標、すなわち礼儀正しい敗北者、きちんとした背教者になるには、不運も野心もともに克服していなければならないだろう。

ある孤独者の集団

私はここに、ある国の人々に課せられた試練について語ろう。〈歴史〉を混乱に陥し入れるその歴史について、そして未曾有なものと現実、奇跡と必然がまざりあう超自然の論理の結果とも呼ぶべき彼らの運命について物語ろう。だれもそれを人種とは呼ばない。一般には民族と呼ばれ、あるものは部族と呼ぶ。彼らは分類されることを好まないから、どんなに厳密に言ってみても、不正確のそしりを免れない。どんな定義も彼らにはあてはまらない。より正確に言おうと思ったら、何か別のカテゴリーに頼らなければならない。なぜなら、彼らにおいてはすべてが尋常ではないからだ。天空を植民地化し、そこに〈自分たちの〉神を置いたのは彼らがはじめてではなかったろうか？　神話を創造することにかけて、それを破壊することと同様、熱心であった彼らは自分たちのための宗教をひとつ作りだし、それを援用し、それに顔を赤らめる……彼らはその先見の明にもかかわらず、喜んで幻影に身を捧げる。彼らは待つ。いつでも、あまりに多くのことを……精力と分析、渇きと皮肉のふしぎな結合。これほどの敵に囲まれたら、だれでも武器を捨て

るだろう。しかし、彼らにとって甘ったるい絶望などあろうはずもない。彼らは千年紀の疲労も、運命に教えられた結論をも乗りこえて、待つことの狂気の中に生きている。屈辱からは、いかなる教訓も引き出すまい、謙譲の法則も、無名の原則も学ぶまいと、固く心にきめて。彼らは世界の流謫（ディアスポラ）を予告する。彼らの過去は、われわれの未来を要約する。われわれは、明日をのぞき見れば見るほど、彼らに似てくる。そして一層、彼らから逃げようとする。われわれは皆、いつか彼らと同じになることを恐れている……「おまえたちはわれわれのあとに従うだろう」と彼らが言うように思える。そして彼らは、われわれの確信の頭上に、ひとつの疑問符を投げかける。

★

人間であるということは、ひとつのドラマであり、ユダヤ人であることは、また別のドラマだ。従ってユダヤ人は、〈二重に〉人間の条件を生きるという特権を持っている。彼らは特別に選り分けられた存在を代表する。あるいは、神学者が神を定義するときに使う表現を借りれば、〈まったき別人〉なのだ。彼らはその特異性を自覚し、たえずそのことを考え、けっして自分を忘れない。そこから、あの窮屈なこわばった表情、あるいはよく秘密の重荷を背負ったものたちに見られる、うわべだけ落ち着いた表情が出てくる。彼らは自分たちの起源を鼻にかけ、看板にかかげて大声で宣伝するかわりに、それをカムフラージュする。しかし彼らの定めは、ほかのどんな場合ともちがって、卑しい人間たちの群れを高みから見下す権利を彼らに与えているのではないだ

ろうか？　犠牲者としても、彼らは彼らなりの方法で、すなわち特有の敗北者として反応する。彼らは、ひとつの人格、ひとつの象徴であるあの蛇に、ひとかたならず似ている。しかし、彼らも同じように冷血動物であろうなどとは思うまい。それは彼らの本来の性質、その熱狂、愛と憎しみの能力、復讐の好み、または極端な慈悲心を無視することになるだろう。（ハシド派のある種のラビは、その点においてキリスト教の聖者にいささかも劣ることはない）。あらゆる点で並外れ、風土の束縛と土着の愚劣さから解放され、つながりもなく非宇宙的な彼らは、断じて〈この世の〉人間などではなく、外から来たもの、本質的な異邦人なのだ。彼らが、土着のもの、すなわち〈万人の〉名において語ることはあきらかに不可能だ。万人の感情を翻訳し、その通訳となろうなどと考えたとしても、彼らにとってそれは大変なことだ！　彼らには群衆を導いたり、率いたり、立ち上らせたりすることはできない。彼らには進軍ラッパは似合わない。ほかの国、ほかの大陸の遠いところに眠っている親類や祖先について攻撃されることもあるだろう。彼らには人に見せるべき墓もない。開くべき墓もない。いかなる墓地の代弁者となるてだてもない。彼らはだれにも代わりえない。彼ら自身以外には。まさに彼ら以外には。彼らは、決定的なスローガンを要求したり、革命の原理を見出したりしても、それらの観念が勝利を収める瞬間に、そしてその言葉が法の力を獲得する瞬間に、地面に投げ倒されるだろう。なんらかの理念に仕えても、それを最後まで利用することは彼らにはできないだろう。やがてそれを観客として、失意のものとしてみつめなければならない日が来るのだ。それから彼らはまた別の理念を、それはそれで輝

かしい幻滅とともに奉じてゆくだろう。国を変えたらどうだろう？　ドラマがまた始まるだけなのだ。流浪こそ彼らの土台であり、確信であり、日常なのだから。

★

彼らはわれわれよりすぐれてもいれば劣ってもいる。われわれが熱望はしても到達のできない極点を彼らは体現している。彼らはわれわれを越えたところにおける〈われわれ〉なのだ……彼らの絶対の濃度は、われわれの濃度を越えているから、よいにしろ、悪いにしろ、われわれの能力の理想的な姿を彼らは見せてくれる。彼らの不均衡の中における落ちつき、そこで彼らが獲得した習慣、それが彼らをして一種の狂人、あらゆる治療法に通じた精神病医、彼ら自身の悪の理論家にしたてあげる。彼らはわれわれのように、事故や、あるいはスノビスムからではなく、自然に、努力もせず、伝統によって異常になるのだ。このようなものが、一人間集団の尺度における天才的な宿命の特典なのだ。不安から行為のほうに向かい、なんであれ手放すことのできない病人である彼らは、〈前進しながら〉自分たちの体をいたわる。彼らの裏返しがわれわれに似ているわけではない。不幸の中においてまでも、彼らはなれあいを拒否する。彼らの歴史——それは絶えまない分裂の歴史だ。

★

贖罪の名のもとに迫害されてきた彼らは、キリスト教が権力を握っているかぎり、いつまでも非キリスト教徒としてとどまるだろう。しかしパラドックスを好む彼らは——そこから彼らの苦

しみも出ているのだが――おそらくキリスト教が世界中から辱しめられるようになったそのときに、キリスト教に改宗するのではないだろうか。そのときに、彼らは、また、その新たな信仰のために迫害されるだろう。宗教的な宿命の担い手である彼らは、アテネの後にも、ローマの後にも生きつづけたように、また西欧世界の後にも生きつづけ、つぎつぎに生起し、滅びてゆく国々のだれからも、ねたまれ、憎まれながら、その歩みをつづけてゆくだろう……

★

教会が最終的にさびれはてるとき、ユダヤ人たちはそこに戻ってゆくか、別の教会を建てるだろう。さもなければ、これが一番ありそうなことだが、シナゴーグの上に十字架を建てるかもしれない。それまで彼らは、イエスが捨てられる瞬間を待っている。そのときになって彼らは、イエスの中にほんとうのメシアを見るのだろうか？　教会の最後の時にならなければわかるまい……というのは予測もできない愚行によるのでないかぎり、彼らはキリスト教徒たちにまじって跪くことも、彼らと同じ身ぶりをすることも承知しないだろうからだ。キリストがどこの国にも受け入れられず、共通の富にも、輸出のメシアにもなっていなかったら彼らが認めていただろう。ローマの支配下において、寺院の中に皇帝の肖像を置くことを許さなかったのは彼らだけなのだ。それを強制されたときには、彼らは反乱を起こした。彼らのメシア待望の希望は、他の諸国家を征服しようという夢であるよりは、むしろエホバの栄光のために諸国家の神々を破壊しようという夢なのだ。懐疑論的形態の多神教の前に立ちはだかる不吉な神権政治。ローマ

帝国の中で特別な一国をなしていた彼らは、悪辣な行為をするといって批難された。人々には彼らの排他主義や、異国人と一緒のテーブルに着くことを拒否したり、ゲームにも見せ物にも加わらず、ほかの人たちにまじったり、人々の習慣を尊重したりすることを嫌う理由がわからなかったのだ。彼らは、自分たちの偏見しか信じていなかった。そこから「人間嫌い」という非難が出て来た。それは、キケロや、セネカや、ケルセウスや、それらの人々の言うところに従って古代のすべての人々がユダヤ人たちに着せた罪であった。すでに紀元前百三十年に、アンティオコスがエルサレムを攻めたとき、友人たちは彼にこう言ってすすめた。「全力をつくして街を攻めろ。そしてユダヤの民を滅せ。これこそあらゆる国家の中で他といかなる交わりを持つことも拒み、他の人々を敵のように見るものだ」(アパメオスのポシドニオス)。彼らは、望まれないものの役割に満足していたのだろうか? 最初から地上に孤独であることを望んでいたのだろうか? 確かなことは、彼らが長いあいだ、あたかも狂信の体現のごとく見られていて、自由思想への傾倒は、生得的なものより、後天的なものであると思われていたことだ。彼らの中でも、とりわけ、非寛容で、もっとも迫害を受けた人々は、普遍救済説に、きわめて厳格な特殊神寵説を結びつける。生まれつきの矛盾、それを解きほぐそうとしたり、説明しようとしたりしても無駄なことだ。

キリスト教はすっかりすり切れてしまって、驚きとスキャンダルの源であることをやめてしまったし、恐慌をおこしたり、知性に糧を与えることもなくなった。キリスト教は、もはや精神を

わずらわさず、わずかの問いで拘束することもない。キリスト教がよびおこす不安は、その答や解決と同じく脆弱で退屈なものだ。いかなる未来の分裂も、いかなるドラマもキリスト教からは発しない。キリスト教はその時を終えた。すでにわれわれは十字架に対してあくびをする……それを救おうとすること、その命をひきのばそうとすること、われわれはそんなことはすこしも考えない。場合によってはそれはわれわれの……無関心を呼びさますのがせいぜいだ。心の深い所を占めていたあとで、いまはわずかに心の表面を占めている。そいつはまもなく追いたてられて、われわれが経験しなかったものの総体を増大させようとするだろう。大聖堂を見てみるがいい。大聖堂はかつて質量を支えていた飛翔力を失ってただの〈石〉になり、小さくなり、くずおれかかっている。その尖塔でさえ、かつては大胆に天空に向かってのびていたものが、重力の影響を受けて、われわれの疲労の謙譲をまねている。たまたまどこかの大聖堂に入ってみると、かつてそこでなされた説教の無益性に、むなしく浪費されたかくも多くの熱情と狂気について考えさせられる。まもなくそこを空虚が占めるだろう。材質の中にもはやゴチックはなく、われわれの中にもゴチックはない。キリスト教がいまもなお名声に類するものを保っているのは、遅れてきたものたちのおかげだ。彼らは回顧的憎悪を追い求めて、キリスト教がいかなる手管でか精神の同意を得ていた二千年を粉砕しようとするのだ。この遅れてきたものたち、憎しみを抱くものたちの数はますます少なくなってゆき、教会はこれほど長く続いた人気が途だえてしまうことをあきらめきれず、四方八方を見回してニュースの第一面に出るような事件はないかと血眼になって

いる。キリスト教がふたたび「好奇心をそそる」ものとなるためには、呪われたセクトの尊厳を回復しなくてはならない。ユダヤ人だけがそれをなしうる。彼らはキリスト教を更新し、その神秘を若返らせるために、多くの奇妙なものを投入するだろう。彼らは、キリスト教をほどよい時期にとり入れていたら、歴史にはほとんど名も残らないような数多くの民族と同じ運命をたどっていたにちがいない。そのような運命からのがれるために彼らはキリスト教をしりぞけたのだ。そして「異邦人」たちに救済の束の間の利点を与え、自分達は長い不自由な喪失を選んだのだ。不誠実？　聖パウロいらい、人々は彼らにその非難をなげつづける。滑稽な非難、なぜなら、彼らの誤ちはまさに自身に対してあまりに忠実であることだからだ。彼らに較べたら初期のキリスト教徒たちは慣例主義的に見える。彼らは自らの理念を信じきって、晴ればれとした心で殉教を待っていた。それに殉教に赴いても、大規模な流血の趣味のために、崇高な行為が容易だった時代の風俗の犠牲になるにすぎなかった。

ユダヤ人の場合には、まったくそれと異なっていた。時代の思想と、世界を覆っていた大いなる狂気に追随することを拒否して、彼らは一時のがれに迫害をのがれていた、しかし、それはなんと高くついたことだろう！　彼らは、新たな熱狂の束の間の試練を共有しなかったばかりに、のちに十字架の重みと恐怖を担わねばならなかったのだ。まさに十字架が苦難の象徴となったのはキリスト教徒たちのためではなく、ユダヤ人たちのためだったのだから。

彼らは、中世を通してずっと虐殺されてきた。それも彼らが、仲間の一人を十字架にかけたか

らなのだ……たったひとつの軽はずみな、しかし説明可能で、結局、自然なものであった行為のために、これほど高価な償いをしなければならなかった民族はほかにない。少なくともオーベラムメルガウ（十年ごとに受難劇を上演するので有名なドイツの村）の『キリスト受難』の上演を見た日に私はそう思った。イエスと権力者たちとの争いの中で、大衆が涙を流して支持するのは、もちろんイエスのほうだ。私も同じようにしようと必死になってみたが無駄だった。私はホールの中で〈一人ぼっち〉なのを感じていた。何が起こっていたのだろう？　私はひとつの裁判に列なっていたのだ。そこで交わされている弾劾の論旨の正確さが私を撃ったのだ。アンナスとカヤパ（イエスを裁いた祭司長）は良識を代表しているようにさえ私の目に映った。彼らは正直な方法を用いながら、まかされた事件をとりあつかっていた。もしかしたら、彼らは改宗することを望んでいるのではあるまいか？　私は被告のあいまいな答に対して、彼らと同じ怒りを覚えた。彼らは、いかなる点においても非難の余地はなく、神学的にも法律的にも、いかなるごまかしもなかった。それは完璧な質疑だった。彼らの誠実さが私を捕えた、私は彼らの側についた。そして私はユダを認めた。その悔恨には侮蔑を覚えながらも。そのときから対立の解消は私にはどうでもいいことになった。そしてホールを出るときには、観客はその涙によって二千年の誤解を継承したのだと私は考えていた。

　その結果がどんなに重いものであれ、キリスト教の放棄こそ、ユダヤ人のもっともみごとな行為、彼らの名誉を高めるべき〈否（ノン）〉としてとどまる。かつて必要から孤独な道を歩んだ彼らは、今後、未来に対して取っておいた唯一のものである偉大な破廉恥を身につけて、背教者として決

然と歩むだろう。

★

良心の病に溺れきったキリスト教徒たちは他者が彼らのために苦しんだことに満足して、カルヴェリオの丘の陰で勿体ぶっている。彼らが、その行程をやり直そうとこころみることがあっても、そこからどんな効用を引き出すことができるのだろう！　教会では、彼らは便乗者の表情をもって笑い、そこから出るときには、苦しまずに手に入れた安心からくるほほえみを、ほとんど隠そうともしない。恩寵はたしかに彼らの側にあるのではないだろうか？　彼らからあらゆる努力を免除してくれるあやしげな大安売によって。見せ物の「済度者」たち、贖罪のほら吹きたち、屈辱によってくすぐられた享楽家たち、罪と地獄。彼らが自分たちの良心を苦しめるのは、そのことによって興奮を得ようとするためなのだ。彼らはわれわれの良心を苦しめることによっても同じ興奮を手に入れる。彼らはそれに対して、なんらかのためらいとか、痛みとか、あるいは誤ちや罪の妄執を見せることがあっても、われわれを放しはしないだろうし、また、困惑をさらけだすように、あるいは罪障を叫ぶようにわれわれに強いるだろう。その間、彼らはサディスティックにわれわれの取り乱した光景を眺めるだろう。それができるなら泣くがいい。それこそ彼らが待ち望んでいることなのだ。彼らはわれわれの涙に酔いしれ、慈悲深くも残忍に、われわれの屈辱の中にころげまわり、われわれの苦しみを存分に楽しもうとじりじりしている。彼ら、疑いを知らない人たちは、みな、あやしげな興奮にひどく飢え、それをいたるところに求める。

そしてそれが外部に見つからないときには自分たちの内部に殺倒する。キリスト教徒たちは真実を求めるどころか、自分たちの「内的な争い」と、その悪徳と徳と解毒力とに驚嘆する。彼らは十字架のまわりで随喜の涙を流し、戦慄のエピキュリアンとして快楽を、それとはすこしも関係のない感覚に結びつける、彼らは悔恨の〈オルガスム〉を発明したのではなかったか？　そうやって彼らは一度にすべてのものを得るのだ……

ユダヤ人たちのほうは、選ばれた民ではあるものの、選ばれてあることはなんの利益にもならない。平和であれ救済であれ……それどころか、この選出は彼らに試練として、また罰として与えられたのだ。〈恩寵なき選民たち。〉そこで彼らのいのりは赦すことのない神に向けられるだけに一層、価値があると言えよう。

異邦人たち（ヘブライ人から見ての）をひとまとめに断罪しようとは言うまい。しかし、やがては、彼らには誇りにしうるものが何もなくなり、おとなしく「人類」の一部をなすようになるだろう……そしてそれこそ、ネブカドネザルからヒトラーに至るまで、人々がユダヤ人に対しては許そうとしなかったことなのだ。不幸にしてユダヤ人たちは、それを自慢する勇気がなかった。彼らは神々の尊大さをもってその特異性を誇りにし、似たようなものはいないし、いてもらいたいとも思わないことを世界の面前に宣言し、諸民族や諸帝国に唾を吐き、彼らを中傷するものたちの論拠を自己破壊の発作的な欲求をもって支持し、彼らを憎むものたちに根拠を与えてやるべきだったのだ……後悔や錯乱はやめにしよう。だれが自分のために敵の言い分を取りあげたりするだろう？

こんな偉大さは、一人の人間についてなら、場合によっては考えられなくもないが、一つの民族においてはけっして認められない。自己保存の本能が集団と同じく個人をも台なしにしてしまうからだ。

職業的なユダヤ人排斥主義者たちにだけ対決すればいいのだったら、彼らの悲劇はふしぎなくらい軽減されるだろう。事実、彼らは、人類のほとんど全部と事を構えているから、反ユダヤ主義というものが、たんに一時期の現象ではなく、恒常的なものであり、昨日彼らを処刑したものたちはタキトゥスと同じ言葉を使っていたということも知っている……地球の住人はふたつの種類に分けられる。ユダヤ人と非ユダヤ人に、その双方の功績をはかりにかけてみれば、前者が勝つことは疑いがない。彼らは人類の名において語り、その代表者をもって任ずることのできるだけの資格を持っている。しかし彼らはほかの人類に対して敬意、あるいは弱みを持っているあいだはそうしないだろう。ほかのものたちに愛してもらおうなどと、どうして考えるのだろう! 彼らはひたすらそれに努めながら、けっして成功しない。これほど実りの少ない努力を重ねたのだから、もうこのへんで明白な事実を認めたらどうなのだろうか、彼らの失望が根拠のあるものであることを?

★

どんな事件でも、犯罪でも、災禍でも、彼らの敵は、必ず、彼らにその罪をなすりつける。愚かしい名誉。彼らの役割を過少に見ろというのではない。ただ公平であるためには彼らの本当の罪

だけを責めるべきなのだ。その中でももっとも重大な罪は、われわれに夢を見させるに充分な力を持った——それは宗教の歴史の中で唯一の例だが——一個の神を作り出したことだ。これほどの成功を許すようなものを、その神は持ってはいなかったのだ。けんか好きで、粗野で、空想家で、おしゃべりだった彼は、せいぜい一部族の必要に応じられるくらいだった。それがいつか、博学な神学の論議の対象になり、洗練された文明の保護者になるなどとだれが考えたろう。たとえ、われわれにその神をおしつけなかったとしても、彼らはそれを考えついたというだけで責任があるだろう。彼らの才能についた汚点。彼らはもっとうまくやることができたのだ。このエホバは、どんなに活力にあふれ、男らしくわれわれの目に映ろうと（キリスト教はわれわれにエホバの修正された顔を見せている）われわれはある種の警戒を抱かずにはいられない。自ら行動して、人人に尊敬の念を強要するかわりに、彼はその任務にふさわしく、もっときちんとして、もっと上品に、そしてとりわけもっと堂々としていなければならないはずだ。頼りなさが彼をだめにしている。彼は叫んだり、怒号したり、爆発したりする……そんなものが力のしるしだろうか？　その尊大な様子のかげには、たえず危険におびえ、自分の王国の安否を心配し、臣下のものたちを恐怖に陥し入れる僭主の不安が隠れている。何かといえば掟をふりまわし、人々が服従することを求める卑劣なやり方だ。モーゼス・メンデルスゾーン（一七二九〜八六、ドイツのユダヤ人哲学者）が主張するように、ユダヤ教が宗教でなく啓示律法であるのなら、かかる神、まさに律法家的なものは何ももっていないものがその作者でもあり象徴でもあるのは奇妙だと思われる。彼には客観的な態度はいささかも

とることができず、好き放題に賞罰を行なう。そのでたらめや気まぐれはどんな法典によっても規制されることはない。攻撃的であるとともに臆病な独裁者、コンプレックスに満ちた、精神分析の好個の対象。哲学は彼の中に、自己に立脚した本質的な存在の痕跡を見ることができない以上、彼に対して何もできない。天空から力を継承した道化、彼は天空に地上のごく些細な伝統を持ちこみ、自分の能力にすっかりびっくりしながら、その効果に得意になって、大権をふりまわす。しかし彼の激しさや、急激な気分の変化、みだらさ、発作的な爆発などには納得はできないまでも気を引かれることはたしかだ。彼は永遠の中におとなしくしているかわりに、事件や不和があればすぐにやってきて混乱や大騒ぎをまきおこす。人々は彼によって狼狽させられ、腹を立て、誘惑される。彼は狂ってはいても、自分の魅力は知っていて、それを思いのままに使う。しかしあの旧約聖書という、その傍では新約などはちっぽけで感傷的な寓話でしかない熱狂的な本の初めから終りまで、この神様の欠点が列挙してあるのにそれを一々あげつらってみてなんになろう？　旧約の詩と鋭さは新約に求めてみても無駄だ。新約では、あらゆるものが崇高なまでに穏やかで、「美しき魂」のためのお話になっている。ユダヤ人は、新約の中に自分たちの姿を認めることを嫌った。そうすることは幸福の罠の中に落ちこみ、自分たちの特異性を捨て、「立派な」運命のためにならない、本来の使命と異なるものでもすべて引き受けることを意味していただろう。

「モーゼは国をよりよくまとめるために新しい典礼を設けた。それは他のあらゆる人間の典礼に反するものであり、そこではわれわれがあがめているものはすべて罵倒され、われわれのとこ

ろでは不純とされているものが認められるのだ」（タキトゥス）
「他のあらゆる人間」という統計的な言い方は、古代の人々が乱用したものだが、その規定から近代のものも免れることはできない。その言い方は過去において有効であったし、今後とも有効だろう。われわれはそれをユダヤ人の利益になるように裏返し、彼らの栄光を打ち建てるために使わなければならないのだ。彼らが砂漠の住人であったこと、いまなお砂漠を内的な空間として持っているということ、そして「他の人間」に含まれる人間という樹木の驚きをしり目に、歴史を通してそれを持ちつづけてきたということを、人はすぐに忘れてしまう。

おそらく彼らはこの砂漠をもって、彼らの内的空間とするにとどまらず、ゲットーの中においても〈物質的〉に延長させていったのだ。ゲットー、（それもなるべく東側諸国のものがいいが）を訪れたものは、そこには草木がなく、花の咲くものは何もなく、すべてが乾いて荒涼としていたことに気がついただろう。それは奇妙な小島のようだ。天使か亡霊たちかのように、地上の生命から遠くへだたった、彼ら、住民たちに合わせて作られた〈根のない〉小さな世界。

★

「人々はユダヤ人に対して恨みを抱く、それは、じっとしているのを邪魔すると言って小麦粉がパン種に対して抱くにちがいない感情と同じ憎しみだ」と彼らと同じ宗派のもの（ショーペンハウエル?）が言っている。〈休息〉、それこそわれわれが望むすべてなのだ。ユダヤ人だっておそらくそれを望むだろう。しかし彼らにはそれは禁じられている。彼らの興奮はわれわれを刺激し鞭打ち、押

し流す。怒りと苦汁のモデルとして彼らは、われわれに怒りと、癲癇と、刺激的な錯誤の趣味を与えてくれる。そしてわれわれに興奮剤としての不幸をすすめる。

一般に考えられているように、もし彼らが頽廃しているというならば、あらゆる古い国にこのような頽廃が望まれるだろう……ペギー（一八七三〜一九一四、フランスのカトリック詩人）は「五十世紀間の神経衰弱」と評した。その通りだ。しかしそれは、ならずものの神経衰弱であり、だめになったものや、虚弱なものや病人の神経衰弱ではない。あらゆる文明に固有の現象であるデカダンスを彼らは知らない。だから彼らの履歴は歴史の中で展開しているにもかかわらず、少しも歴史の性質を持っていないというのは嘘ではない。彼らの発展には成長も老化も栄枯盛衰もない、彼らの根はいったいどんな地面に根ざしているのかわからない。しかしまちがいもなく、それはわれわれの地面ではない。彼らの中には少しも〈自然なもの〉、植物的なものがないから、どんな「樹液」もなく、したがって枯れる可能性もない。その永続性の中には、何か抽象的なものがある。しかしそれは血の気を失ったものではない。ほんの少しの悪魔性、したがって非現実で同時に行動的なもの。彼らを永遠に個別化する裏返しの後光にも似た不安な暈。

彼らは頽廃を免れえたのだから飽満だって避けることができるだろう。飽満、それは、古い民族がひとつとして防ぎきれなかった傷であり、それに対してはいかなる治療も効果がないのだ。それに蝕まれたものは、帝国であれ、魂であれ、組織であれ、少なくないのではなかろうか？それに対して彼らは奇跡的に無縁だ。猶予とか、豊富な時代とか、嫌悪こそ生んでも、欲望や、

意志や、行為には好ましくない時代をいささかも知らなかった彼らが、いったい何に対して飽満を覚えることがあったろう？　どこにも立ちどまることができない彼らは、欲求し、望み、行動し、不安と郷愁の中に身を維持すること以外に何ができよう。何かひとつの対象に執着したりするだろうか？　対象は長くつづかないだろう。あらゆる事件は彼らにとって「エルサレム神殿の破壊」の舞台稽古にすぎないのだ。崩壊の思い出の展望。休戦という麻痺が彼らを襲う恐れはない。貪欲な状態にじっとしていることは難しいにもかかわらず、彼らは、言ってみれば、そこを、けっして出ずに、〈病的な快適〉にも似たものを感じている。それは恍惚の風土に育ち、かつ神学と病理学に属する神秘を持った集団に特有なものだ。といってその神秘は、その双方を組み合わせても解明されるものでもない。

自己の深みまで追いつめられ、それを恐れ、彼らは埒もない会話にしがみついて、それを避け、逃れようとする。彼らはしゃべりにしゃべる……しかしこの世で一番簡単なこと、自己の表面にとどまることが彼らにはできない。彼らにとって、言葉は逃避なのだ。社交性は自己防衛だ。われわれは戦慄を覚えずには、彼らの沈黙や独白を考えることができない。われわれにとっての悲運や、人生の転機は、彼らにとっては、なじみの災悪なのだ。慣習と言ってもいい。彼らにとって時代とは、克服された危機か、来たるべき危機かでしかない。宗教とは、生物がその不安によって身を高めようという欲求であると考えるなら、彼らはみな、信者でも、無信仰のものでも、宗教的な基盤を持っている。それは甘さや、自己満足や、落ちつき、そしてけがれないもの、弱

いもの、純粋なものにへつらうものをすべて細心に排除しようと努める敬虔と言ってもいい。無邪気のない敬虔。なぜなら、彼らのうちにだれ一人として、無邪気なものなどはいないのだ。それを別の面から言えば、彼らのうちに一人として愚かものがいないようにとも言える。（愚かさというものは彼らにおいては通用しない）。ほとんどみな目先がきき、そうでないものはきわめて稀な例外だが、愚かさの域にとどまらず、もっと遠く、すなわち痴呆まで行く。

受身の、弛緩した祈りが、彼らの趣味に合わないということは理解できる。それは、それ以上に彼らの神様に気に入らないのだ。彼らの神は、われわれの神とは反対に、退屈ということにがまんがならない。あわてずに落ちついて祈ることができるのは、定住民族だけだ。遊牧民や、追いつめられたものは、すばやくやって、平伏の時間まで早く切り上げなければならない。というのは、彼らが呼びおこす神も遊牧の神であり、追いつめられていて、人々にそのいらだちと恐慌を伝えるからだ。

われわれがあきらめようとするときには、彼らの忍耐はなんという教訓、なんという対照になるだろう！　私も、徐々にだめになりかけたようなときには彼らのがんばりや強情、説明はできないがはげましになるような生に対する貪欲さを思ったものだ！　幾度、運命の曲り角を迎えるたびに、また生きることになんの明白な意味も見出せなくなったたびに、彼らのおかげをこうむったことだろう。それなのに、私は彼らに対してつねに公平であったろうか？　とんでもない。二十歳のときには、彼らのあいだに生まれなかったことを悲しむほど彼らを愛していても、しば

らくすると、歴史の中で彼らが重要な役割を演じたことを許せなくなり、愛と憎しみのまざりあった狂暴さで彼らを嫌うようになったものだった。どこにでもいる彼らの輝きは、私に自分の国の暗さを一層つよく感じさせるのだった。私は知っていた。私の国は息づまり、消え去るべく定められていたのだということを。私はまた、それに劣らずよく知っていた。彼らのほうはどんなことが起こってもあらゆるものの後に生きのびてゆくことを。それにそのころ私は、彼らの過去の苦難については、書物から得た憐れみの感情しか持っていなかったから、彼らが受けようとしていた苦しみについては想像もつかなかったのだ。その後、彼らの、その苦難と戦うときに見せた苦悩と決然たる態度を思えば、私は彼らの実例の価値を知って、すべてを捨ててしまおうとする誘惑と戦う理由をそこに捜すべきだった。しかしさまざまな時期において、私の彼らに対する感情がどのようなものであったにせよ、ひとつの点についてだけは少しも変わっていない。それは旧約聖書への愛着、すなわち、私の狂乱、または苦しみの庇護者であった〈彼らの〉書物に対する信仰だった。旧約のおかげで私は彼らと、そして彼らの悲傷の最良のものと、心を通じ合うことができたのだ。そのおかげで、そしてまたそこから私が引きだした慰めのおかげで、どんなに耐えがたい夜も、どうにかすごせたのだった。彼らがその汚辱にふさわしいように思えたときにも、そのことだけは忘れることができなかった。どんなに感謝してもしたりないと思うのは、あのころの夜の思い出があるからだ。あのころ、夜になれば、ヨブやソロモンの悲痛な機智とともに、彼らはしばしばその姿を現したのだ。彼らは自分たちのことをもっともらしく話すといっ

て非難される！　私としてはそんなことができないのだ。われわれの基準をあてはめることは彼らから特権をはぎとることであり、彼らをただの人間、人類の中のなんでもない一変種にしてしまうことだ。幸いにして彼らは、われわれの基準と、常識の探究とをともに馬鹿にしている。この深淵（彼らの深淵だ）についてよく考えると、足場を失わないこと、漂流物になろうという官能のさそいに負けないことがどんなに大切なことかがわかるのだ。彼らは難破を拒否してきたのだと考えれば、彼らにならってみようと誓いを立てることにもなる。もちろんそのときも、そんなことは言っても不可能で、われわれの運命は沈没することであり、深淵の呼び声に答えることにほかならないと知ってはいる。それでもほんの一瞬のことであっても、溺れたいという暗黙の意志にさからったとき、彼らはわれわれに、目もくらむような、耐えがたい世界と一致することを教えてくれるのだ。それこそ〈存在の教師〉だ。長い奴隷の時期を経験したものたちの中で、彼らだけが無為の呪いに抵抗することができた。力を蓄えていた無法者たち。革命が彼らに地位を与えたとき、彼らは他のいかなる国民より重要な生物的能力を保持していた。十九世紀になって、彼らがついに自由をかちえて、日の光の中に出て来たとき、世界は驚愕した。コンキスタドール（征服者）の時代いらい、これほどの大胆さ、これほどの突然さを見たものはなかった。奇妙で不意の電撃的な帝国主義。かくも長いあいだ引きこもっていた彼らの活力が爆発したのだ。そしてかくも目だたず、つつましく見えていた彼らが、いまや、力と、支配と、栄光の飢えにとりつかれてしまったのだ。その飢えは、目を覚ました社会をおびえさせた。そこに彼らは地歩を固め始

めていた。手に負えない老人たちが、社会に新しい血を注入しようとしていたのだ。貪欲であるとともに気前よく、ありとあらゆる商売と知識の枝の中に入りこみ、あらゆる企ての中に、金を貯めるためではなく、あり金全部を賭けることに熱中するものとして、金を使うために、浪費するために入っていったのだ。腹いっぱいにつめこんでなお飢えたもの、日常の中に道をまちがえて入りこんだ永遠の探究者、黄金と天空とに基盤を持ち、たえずその双方の輝きを混ぜ合わせるもの――光輝あるどえらい混合、卑小なものと超越したものとの渦巻――彼らは、その矛盾の中に本当の財産を持っているのだ。彼らは、消耗のうちに生きていたあいだ、ひそかにカバラ学を深めていたのではなかったか？　金と神秘。それは近代的な職業の中で彼らが保っていた妄執であり、解消することの困難なコンプレックスであり、力の源なのだ。彼らを迫害し、攻撃することは、頭のおかしいものだけが犯す危険だろう。彼らが備えている〈見えない〉武器に立ち向かっていこうとするのは、そのようなものだけなのだ。

現代の歴史は、彼らなしには考えられない。彼らはそこに加速度的な速さを導入した。本物の息切れ、崇高な息吹きを。それとともにわれわれを絶えず狼狽させる予言的な毒をもたらした。彼らがいるところでどっちつかずでとどまっていられるものがいるだろうか？　彼らに近づいて、まったく影響を受けないでいることはできない。心理学の多様な光景の中で、彼らの一人一人がそれぞれのケースにあてはまる。そして彼らをある面から知りえたとしても、その謎の内面に迫るにはもっと深く踏みこまねばならない。死をさえたじたじとさせ、〈もうひとつの〉健康、す

なわち、危険な健康、救いに至る病の秘密を発見した彼ら、不治のものたちは、われわれに取りつき、狂わせ、彼らの意識と勤勉の高みまではいあがることを要求する。他のものたちの場合はまったくちがう。彼らのかたわらでは眠りこんでしまう。なんという安全、なんという平和だろう！ われわれは一挙に「仲間うち」の雰囲気に入ってしまい、何の心配もなくあくびをし、いびきをかく。そんな人々とつきあっていると、大地的な無関心にとらわれてしまう。もっとも洗練されたものでも、農夫のように、無格好なのろまのように見える。彼ら、哀れなものたちは、ふんわりした宿命の中にころげまわる。才能を持っていればまだましだ。不運が彼らについてまわる。彼らの存在は、大地や水の存在と同じく明白であり、承認されている。眠たげな元素たち。

★

彼らより無名性から遠い存在はない。彼らがいなかったら、都市は呼吸ができないだろう。都市の熱病的な状態は彼らが保っている。それがなかったら、あらゆる都市は田舎と同じになってしまう。死んだ街とはユダヤ人のいない街のことだ。彼らは酵母やビールスのように、効率的に、魅惑と不快との二重の感情をかきたてる。彼らに対するわれわれの反応は、ほとんどつねに、当惑であると言っていい。彼らはわれわれより上にいるか下にいるかのどちらかで、けっして同じ平面にいないのなら、厳密に言って、いったいどんな態度で彼らと折り合うことができるのだろう？ そこから生じる、悲劇的で避け難い誤解に対してはだれも責任がない。彼らがある特定の

神に拘束されるようになったのはなんという愚挙だったのだろう。そしてまた、虫けら同様のわれわれを見て、なんという悔恨を味わうことだろう！

われわれが双方ともにとじこめられている迷宮からぬけでることは、だれにもできまい。彼らを救いに行こうと思っても、われわれには彼らに何も与えることはできない。そして、彼らのほうでさし出すものは、われわれの力を越えてしまう。彼らはどこから来たのだろう？　何者なのだろう？　できるかぎりの困惑をもって彼らに近づいてみよう。彼らに対して、はっきりした態度をとるものは、彼らを誤解し、単純化してしまい、その極端さに対してふさわしくなくなるのだ。

面白いのは、失敗したユダヤ人だけがわれわれに似ていて、「われわれの一員」になっていることだ。彼らは、われわれのほう、われわれの、昔ながらで、はかない人間世界のほうに後ずさりしてきたのだろうか。それでは、人間とは〈成功しなかった〉ユダヤ人と言わねばならないのだろうか？

★

辛辣で飽くことを知らず、明晰で情熱家であり、たえず孤独の最前線にいる彼らは、失墜を〈運動の中に〉体現している。あらゆるものが絶望を強いるときにも、彼らは絶望に身をゆだねない。ほかのものが夢を見るあいだに、彼らは計画をしているからだ。彼らには計画の病いがある。彼らは、それぞれ一日のあいだに計算できないほど多くの計画を心に描く。すすけた種族とは反対に、彼らは直接的なものにとりつき、可能性の中に突き進む。彼らの気まぐれの効率と、

あらゆる知的安逸に対する恐怖とを説明する、新奇なものに対する自動反射。どんな国に住んでいても、彼らはその国の精神状態の先端に位置する。彼らは結束して一群の例外を形成する。それは、他のいかなる国民のあいだにも見られない能力と才能の集積となる。なんらかの職業に従事しても、彼らの好奇心はそこに限定されない。それぞれが、外に飛び出して行こうとする情熱と気まぐれを持っている。それは彼らの知識を広げ、彼らにもっとも多種多様な職業を選ばせる。そこで彼らの年代記は、唯一の意志で結び合わされた一群の人物像を含むことになる。それもまた世に例のないことだ。「存在の中にじっと耐える」という思想は、彼らの中のもっとも偉大な哲学者（スピノザ）によって考えだされた。彼らは、その存在を厳しい戦いののちに勝ちとったのだ。彼らの計画癖も、理解することができるだろう。彼らは、眠りこみがちな現在に対して、明日という興奮剤的な力を対置させる。生成というものもまた、彼らの中の一人がその哲学の中心としたものだ。このふたつの観念のあいだにいかなる矛盾もない。生成は物と自己とを計画する存在に、〈希望によって〉解体した存在に帰着するからだ。

　要するに、彼らはこれこれであると哲学で定義するのは虚しいことではないだろうか？　彼らが合理主義に傾くのは、本来の傾向というよりは、排斥され、それによって苦しまねばならなかったある種の伝統に対して反応する必要からなのだ。事実、彼らの才能はどんな形の理論にも、どんな系譜の思想にも、実証主義から神秘主義まで広く合致する。彼らの分析癖にだけ照明を与えることは、彼らを過小評価し、彼らに対してきわめて不公平な態度を取ることになるだろう。彼

らはいずれにしてもきわめて多く祈ってきた人々だ。彼らの顔を見れば一目でそれがわかる。それは大なり小なり『詩編』を読みつづけて蒼ざめた顔だ。また彼らのところでは〈蒼ざめた〉銀行家にしか出合わない……それは何か意味のあることにちがいない。財務と〈深淵より〉！――この前例のない矛盾こそ、万人にとっての彼らの謎の鍵かもしれない。

★

彼らは趣味としての戦闘家であり――彼らは文明人の中ではもっとも戦闘的な人たちだ――事業においても戦術をもってあたり、往々にして負けても、けっして負けたとは言わない。呪われたものたち……あるいは祝福されたものたち、彼らの本能と知性はたがいに中和しあうことがない。彼らの欠点まで、すべてのものが強壮剤として役に立つ。彼らの錯誤と目まいを織りまぜた狂奔を、のんびりした人類の中にどうやって含めたらいいのだろう？　彼らは、人類に対して、絶えることとのない失意と、成功しないことのより完成した方法においてしか優越性を持たないとしても、それだけで、彼らの相対的な不死性を保証するには十分ではないだろうか？　彼らのバネはしっかりしている。それは、〈永遠に〉たわんでいる。

行動的で、辛辣な、そして、知性の神経症にかかった弁証法家（それは彼らをその企てにおいて拘束するどころか、あと押しし、精力的にし、緊張のもとで働かせるものなのだ）。彼らはその明晰さにもかかわらず、冒険のとりこになってしまう。彼らを後退させることはできない。地上生活者の悪風であり、土地に根ざした文明の偏見であり、儀礼本能でもある触覚というものは、

彼らの得意ではない。その原因は、彼らの、皮を剝がれたもの（生体標本）の誇り、その攻撃的な精神にある。彼らの皮肉は、他人の犠牲の上に成り立つなぐさみとか、ひとつの社交術、あるいは気まぐれなどにはほど遠く、抑制された苦悩を感じさせる。大昔からの怨恨。その毒は死に至る。それは解放の笑いではなく、辱しめられたものの痙攣と報復の嘲笑に属する。ところで、これは認めなければならないことだが、ユダヤ人は、嘲笑においてだれにも負けないのだ。彼らを理解するには、あるいは彼らを見抜くには、自身、一度ならず祖国を捨て、彼らと同じように、あらゆる国の住民になり、〈いかなる旗の下でもなく〉全世界に対して戦い、彼らにならって、あらゆる理念を抱くとともに、同時に裏切ることができなくてはならない。難しい仕事だ。というのも、どんなに試練に耐えたものでも、彼らの前では、幸福と地理学の中に埋もれた哀れな人間、不幸についての新米、あらゆるジャンルにおける不器用者にすぎないからだ。彼らが必ずしも繊細さを独占してはいないとしても、彼らの知性の形態は、ありうるものの中でもっとも人の心を乱すものであり、またもっとも〈古い〉ものなのだ。彼らはまるで、大昔からすべてのことを知っているようだ。アダムの昔から……神の昔から……

★

彼らを成り上りものと非難することはできない。これほど多くの文明を横切り、そこに刻印を押してきたというのに、どうして成り上りものであったりするだろう？　彼らの中に、つい近頃のものとか、即席のものは何もない。彼らが孤独を獲得した時は、歴史のあけぼのと一致してい

る。彼らの欠点さえも、その古さの活力、その極度の巧みさ、そして精神の鋭さと、そのあまりに長い経験に基づいている。彼らは限界の心地よさを知らない。彼らが知恵を持っているとしたら、それは流謫の知恵、いかにして世界の村八分に打ちかつか、あらゆるものを知っているときに、いかにして自分が選民であると信ずるかを教えてくれる知恵、すなわち挑発の知恵だ。それなのに人々は彼らを卑怯者と呼ぶ。たしかに彼らには、あっと言わせるような勝利はない。とは言え、その存在こそがひとつの勝利ではないだろうか？　絶えることのない、恐るべき、けっして完了する希望のない勝利。

彼らの勇気を否定することとは、彼らの恐怖の価値とすぐれた性質を誤解することになる。彼らにおける運動は、収縮でなくて拡張であり、攻撃のはじまりだ。なぜならこの恐怖を、彼らは臆病者や賤しいものとは反対に、ひとつの力、誇りと征服の原則に変えてしまっているのだ。それは、われわれにおけるような無気力なものではなく、しっかりした羨しいものであり、行為に転化した数千の戦慄から出来ているものだ。彼らがどうしても教えてくれない秘密の調法を使うと、われわれの否定的な力は肯定的な力にかわり、われわれの無気力は民族移動になる。われわれを金縛りにしているものが彼らを前進させ、跳躍させる。いかなる障害も彼らの恐慌的な移動を助長するばかりだ。彼ら遊牧民にとって、空間は十分なものではない。諸大陸を越えて、いったい、いかなる祖国を彼らはめざしているのだろう。彼らが諸国を経めぐるときの軽快さを見るがいい！　ロシア人として生まれたものが、いまやドイツ人であり、フランス人であり、ついでアメ

リカ人になり、さらには何にでもなってしまう。そしてその変容にもかかわらず、彼らはその個性を保持している。彼らには特性がある。彼らはだれでもそれを持っている。そうでなくていったいどうやって、手ひどい失敗のあとで新しい生き方をはじめ、その宿命を手中にとりもどすような能力が説明できるだろう？　それは驚異と言ってもいい。彼らを観察すれば、驚嘆し、唖然とせざるをえない。この世に生きながら、彼らは地獄の経験をしていたにちがいない。それが彼らの長寿の代償なのだ。

彼らは失墜が始まり、もうだめだと思われたときに、平均を取り戻し、身体を立て直し、失敗の静謐を拒否する。祖国を追われた生まれながらの無国籍者でありながら、彼らは一度として勝負を捨てる誘惑にかられたことはなかったのだ。しかし、私達のような亡命の見習い、近ごろ根だやしにされたばかりのものは、硬化症とか、没落の単調さとか、見晴らしもきかなければ約束もない均衡とかに冒されることを望み、自分の不幸の背後に這いつくばる。私達の条件が私達を越えてしまう。私達は恐ろしいものには向いていない。せいぜいが夢のバルカン半島を這いまわるようにできていて、唯一の国の運命を分ち持つために作られているのではないのだ。不動性で腹いっぱいになり、虚脱し、不安な私達が、眠たげな欲望と、風化した野望をもって、いかにして流浪の民を構成する素質を作りうるのであろう？　大地にかがみこんでいた私達の祖先は、そのような素質をほとんど持たなかった。彼らは少しも急がない。そもそもどこへ行くというのだ？　その速度は鋤の速度だった。永遠の速度……しかし歴史の中に入るということは、多少な

りとも急激な動きや焦らだちや活力を求めるものだ。それらはすべて、慣習にとじこめられた農耕民族の緩漫な未開さとは異なったものだ。慣習という規制は、彼らの権利ではなく、悲しみだった。最後には、そこに少しでも楽に永眠できるようにと大地を掻き削り、人生を墓場まで導いてゆく人々、その人生にとって死こそ報酬であり、特典であるような、そんな祖先たちが、私達に遺産として残してくれたものは、終りなき眠りと、沈黙の、いささか酔わせるような悲傷と、半分しか生きていないものの長いため息とだったのだ。

私達は腑ぬけのようになってしまった。私達にふりかかっている呪いが麻酔のような働きをする。そいつがしびれさせる。その反対に、ユダヤ人たちの呪いは刺激的な働きをする。それは、彼らを前へ前へとかり立てる。彼らは、その呪いからのがれる工夫をするだろうか？　それは微妙な問題だ。おそらく答はないだろう。たしかなことは、彼らの悲劇はギリシャ人のそれとは異なっていることだ。アイスキュロスなら、一個人、あるいは一家族の不幸をとりあつかうだろう。全体の救済ということではなく、国家的な呪いを認識することは、ギリシャ的なものではないのだ。悲劇の主人公が非人称的な、盲目の運命に対してその責任を問うといったことはめったに起こらない。むしろ彼は、運命の命ずるところに誇りを持って従う。したがって彼、およびその一族は滅びてゆく。しかし、たとえばヨブは、神をへとへとに悩ませ、説明してもらおうとする。そこから崇高なほど悪趣味な催促が生まれる。ギリシャ人ならおそらく尻ごみするだろうが、われわれは感動させられ衝撃を受ける。この感情の溢出、天に条件をつきつけ、呪いで天をいっぱ

いにしてしまうペスト患者のわめき声、それに対して、われわれはどうしたら無関心でいられるだろう？　放棄しようとすればするほど、この呻き声はわれわれをゆすぶる。ヨブはまさに彼らの民族にふさわしい。彼のすすり泣きは力の誇示であり、攻撃だ。「夜は私の骨を激しく悩ます」(ヨブ記三〇—一七)と彼は嘆く。彼の嘆き声は高まって絶叫にまで達する。そしてその絶叫は天空をつき破って神を慄えさせる。われわれも沈黙と弱さを越えて、試練を大声で求めるときには、この偉大な癩者の後裔、ヨブの悲傷と呻き声の継承者ともなりうる。しかし大抵のばあい、われわれの口は閉ざされている。そして彼がわれわれに、声を高めて、彼の叫び声の強さまで達するすべを教えてくれても、われわれの無気力がゆり動かされることはない。実際、彼はみごとな勝負をしたものだ。彼はだれをくさし、だれに頼みこみ、だれに打撃を与え、だれに祈ればいいか知っていた。しかしわれわれは、いったいだれに対して叫べばいいのだろう？　われわれの同期に対してだろうか？　それは滑稽なことのように思える。われわれの反逆はわずかに声になりかかっただけで、口のはしで消えてしまう。ヨブにどんなに共鳴しようと、われわれには彼を祖先と見なす権利はない。われわれの苦しみは、あまりにも臆病だ。われわれの努力も同じだ。恐怖を楽しもうという意欲も、大胆さもなくて、どうしてそれを、刺激や、快楽にすることができるのだろう？　慄えることはやってみればできる。でもその慄えを思いのままに支配することはひとつの技術なのだ。あらゆる反逆は戦慄から生じる。屈従を避けようと思うものは、自身の恐怖を手なずけ、大切にし、それを身ぶりや、言葉に変えなくてはならない。戦慄の楽園である旧約聖書を学

ぶものならば、なおさらそれをうまくやらねばならない。キリスト教は過度の言語の恐ろしさと、あらゆるものに対する敬意と服従を教えこむことによって、われわれの恐れを貧しいものにしてしまった。キリスト教は、われわれを永遠につなぎとめておこうと思ったのなら、われわれを手荒に扱って、危険な救済を約束するべきだったのだ。二十世紀の跪拝から何を期待するのだ？われわれは、ようやく〈立ちあがった〉いま、目まいにとらわれている。空しく解放された奴隷、悪魔も顔を赤らめるか、馬鹿にでもするような反逆者。

　ヨブは、その活力を、彼の一族に伝えた。彼らは、ヨブと同じく正義に飢え、不当な世界の横行にけっして屈しない。本能的な革命家、あきらめという思想は彼らの心をかすめることもない。ヨブ、この聖書におけるプロメテウスが神と戦ったのなら、彼らのほうは人間たちと戦うだろう……宿命が彼らに滲みこめば滲みこむほど、彼らはそれに対して反抗する。アモール・ファティ（宿命の恋）、この英雄伝の愛好者たちのきまり文句は、すでにあまりに多くの運命を担っていて、それ以上、そんな考えに執着できないものにはふさわしくない。……人生に執着するあまり、それを改革しようとし、人生に対して不可能なもの、善の勝利を望む彼らは、彼らの幻影を強化してくれるものならどんな体系にでも飛びこんでゆく。いかなるユートピアであっても、たちまち彼らを盲目にし、その熱狂をかきたてる。進歩の観念を説いただけでは満足できない彼らは、官能的でほとんど淫らでさえある熱情をもって、それにとりついてしまった。彼らはその思想を全面的に受け入れるとき、それが人生全体に約束している救いを享受し、恩寵と世界的な神格化

の分け前にあずかろうと考えていたのだろうか？　すべての災禍は、われわれがよりよいものの可能性をのぞき見たときから始まっている。この自明の理を、彼らは承認しようとしない。彼らは苦境におちいったときには、思念によってその苦境をしりぞける。不可避性に反逆し、自身の悲惨に反逆する彼らは、より悪いものが彼らの精神を引きずってゆく筈のときになって、もっとも自由であると感じるのだ。ヨブは、その堆肥の上で何を期待していたのか？　彼らは皆、何を期待しているのだろう？　ペスト患者たちの楽観主義……精神病理学の古い論文によると、彼らはもっとも高い自殺率を示している。もしそれが本当なら、彼らにとって、人生は袂別をつげる努力を払うに足るだけのものであり、〈最後まで〉絶望するには、あまりに人生に執着していることを、それは示しているのではないだろうか。彼らの力、それは絶望に慣れ親しんだり、満足したりするよりは、それに終りをつげるものだ。彼らは、自ら命を絶つことによって自己を確認する。それほど彼らは、譲歩したり、あきらめたり、疲労を告白したりすることを恐れるのだ。かかる激しさは、おそらく上方からやってくるにちがいない。それ以外には私には説明がつけられない。そして彼らの矛盾にまごついたり、彼らの秘密に迷ったりするとしても、少なくとも、彼らがパスカルからロザノフ（一八五六—一九一九、ロシアの宗教思想家。）に至る宗教的な精神をどうして誘惑しなければならなかったのかはわかるのだ。

★

これら亡命者たちが、あらゆる亡命において支配的な観念である死というものを、その考えか

ら、まるで彼らと死のあいだにはどんな共通点もないと言うように、斥けている理由をよく考えて見た人がいるだろうか？　死が彼らを無関心にしておくのではなく、死の感情を斥けるあまり、彼らは死に対して断固として優越的な態度をとるに至ってしまったのだ。おそらく遠い昔、死をあまりに大事にしすぎて、その結果、いま、死が彼らを苦しめているのかもしれない。もしかしたら、彼らは自分たちの半・永久性のゆえに死を考えないのかもしれない。束の間の文明だけが、虚無の観念を進んで抱くものだから。いずれにしても、彼らの前には生しかない……われわれにとって生とは、「すべては不可能である」という定義で要約されるようなものであり、その最後の言葉が、彼らを喜ばせるために、われわれの敗北と、無気力と、不毛性に向けられるとき、彼らにおいては、同じ生が、障害の楽しみと、解放や、あらゆる形での静観主義の恐怖とを呼びさます。この戦士たちは、もしモーゼが彼らにむかって仏陀の言葉、寂滅と救済の分配者である形而上学的倦怠の言語で語りかけたりしたら、彼に石を投げたことだろう。放棄ということを学ぶことのできないものにとって、いかなる平安も浄福もありえない。絶対とはあらゆる郷愁を捨て去って、降伏を自らに強いるもののみが与えられる報酬なのだ。このような種類の報酬は、彼ら強情な戦闘家たち、呪いの志願兵たち、欲望の民らの嫌悪をひきおこす……　どんなまちがいから、彼らに破壊欲があるように考えたりしたのだろう？　彼らが破壊者なのだろうか？　むしろ彼らが十分に破壊者でないことこそ非難するべきだろう。〈われわれの〉希望のうち、彼らの責任でないものはどれだけあるだろう？　破壊それ自体を考えつくどころか、たとえアナーキ

ストであっても、彼らはたえず未来の仕事を、おそらく不可能ではあろうが望ましい建設を考えている。それに彼らが彼らの神ととりかわした契約、無神者であれどうであれ、だれもがその思い出と痕跡を持っている、他に類を見ないような契約を過小評価するのはまちがっている。この神に対してわれわれがいかに必死になって攻撃してみても無駄だ。彼はあいかわらず現存し、肉体を持ち、相対的に効果的でありつづける。それは一部族の神がすべてそうであるとおりだ。それに反して、われわれの神はもっと普遍的で、したがって、もっと貧血性で、あらゆる精神と同じく、遠く、無効だ。新約よりずっと断固たる旧約は、イスラエルの子らにその騒々しい父と共に前進することを許しても、そのかわりに破壊の本質的な美しさを教えるときには、それを許さない。

★

「進歩」の理念、彼らはそれを、自分たちの明晰さの破壊的な効果と戦うために用いる。それは、彼らの計算された逃走であり、〈意識的な〉神話なのだ。彼ら、この明晰な精神でさえ、疑惑の最後の結果の前では尻ごみをする。人間は自分の運命の外に身をおくか、運命などを持つことをあきらめるのでないかぎり、本当の懐疑者にはなれない。彼らはそこからのがれるにはあまりに自分たちの運命に深入りしすぎている。彼らの中には一人として、すぐれた無関心者はいない。宗教の中に間投詞を持ちこんだのは、まさに彼らではないか? 彼らが、懐疑という奢侈にふけってみせても、それは、せいぜい潰瘍病みの懐疑にすぎない。ソロモンは、憔悴して抒情的になったピ

ュロン（前三六〇―二七〇頃、懐疑派の哲学者）を思わせる……彼らの祖先のうちのもっとも悟りきったものでさえ、そのくらいであり、ほかのものはおして知るべしだ。彼らはなんという喜びをもって苦しみを述べたて、その傷を開いて見せることだろう！　この告白の仮装行列は、自分を〈隠す〉ひとつの方法にすぎない。無遠慮で、しかも近づきがたい彼らは、その秘密のすべてを物語るときでさえ、なおつかみがたい。苦しんだ人間の試練を細分し、分類し、説明することは不可能だ。彼が〈存在する〉ということと、彼の現実の苦しみとが、われわれを越えてしまう。近づけば近づくほど彼は近よりがたく見えるだろう。〈気の狂った〉集団というものについてなら、ゆっくりとその反応をしらべてみることもできるだろうが、未知の人々の集団の前では、自分自身の姿を見出すだけだろう。

★

彼らの精神はどんなに光り輝くものであっても、そこには地下的な要素がひそんでいる。いたるところに現存する彼ら、遠いものたち、つねに警戒をおこたらないものたち、危険を逃げるとともにそれを呼びよせ、まるで待っている時間がなく、楽しみの瀬戸ぎわで恐ろしいものが待ちかまえているとでも言うように、死刑囚のあわただしさで快楽にとびかかってゆくものたち、彼らはどこからともなく突然出現する。彼らは幸福にしがみつき、留保もためらいもなく貪り食う。他人の財産を横領するのだと言ってもいい。エピキュリアンであるにはあまりに熱烈な彼らは、自分の楽しみに毒を盛る。そしてそれを、大急ぎで、夢中になって呑みこんでしまう。だから、

そこからは、いかなる力も得られないのだ。もっとも通俗的な意味から、もっとも高尚な意味まで、あらゆる意味での忙しい人々。〈その後〉の固定観念が彼らを悩ませる。ところで生きる術は——予言的ではない時代、アルキビアデスやアウグストゥスや摂政期などの時代の特有のものだが——現在を完全に経験することの中にある。彼らの中にはゲーテ的なものは何もない。彼らはどんなに美しい瞬間をもけっしてとどめようとはするまい。たえず神の雷光を呼ぶ彼らの予言者たちは、敵の町が破壊されることを望み、〈灰〉について語ることができる。あの古代の、もっともみごとに難解な書物を書いたときに、聖ヨハネは、彼らの狂気の中に想を得たのだ。『黙示録』は、奴隷たちの神話から出発し、考えつくかぎり、もっとも巧みにカムフラージュされた鬱憤ばらしをする。そこでは、すべてのものが訴えであり、怒りであり、不健康な未来なのだ。エゼキエル、イザヤ、エレミヤが十分に土地を準備していた……錯乱や幻覚を立派に見せることにすぐれていた彼らは、以来、だれにもまねのできない技巧をもって取りとめのないことを書き綴った。彼らの強靱でしかもあいまいな精神が大いに助けになった。彼らにとって、永遠というものは痙攣やひきつけの口実であった。呪咀と頌歌を吐きだしつつ、彼らはヒステリーに飢えている神の眼の下で身をよじったのだ。これこそ、人間と造物主との関係が形容詞の氾濫の中に、また瞑想や、争いの徹底的な究明や、解決をさまたげる緊張の中に枯れはててゆくような宗教だ。形容詞と、言語の効果を基盤とした宗教、そこでは文章だけが天と地の唯一のつなぎ目になる。

★

これら予言者たち、ちりあくたの狂信者たち、災禍の詩人たち、彼らがつねに災厄を予言するのは、彼らには、確実な現在や、なんらかの未来に執着することができなかったからだ。彼らは、偶像崇拝から覚醒させるという口実のもとに、民衆の上に自分たちの怒りをぶちまけ、民衆をたまげさせて、彼らと同じ気ちがいの怪物にしたてようとしたのだ。したがって民衆をたえず悩ませておかねばならなかったし、彼らを試練によって変わりものにしたて、彼らが、凡人たちの国家を作ったり、寄り集まったりすることを妨げねばならなかった……これら予言者たちは、叫びと脅迫をくり返したあげく、苦痛の中における権威と、定住民たちをいらだたせ、その安らかな眠りを妨げる、流浪の、不眠症的集団の表情とを手に入れるに至ったのだ。

★

彼らは生まれつき例外的なわけではない、と反論するものがあったら、運命によって例外的なのだと答えよう。それは絶対の運命、純粋な状態の運命で、彼らに力と、けたはずれの大きさを与え、彼ら自身より高く彼らを持ちあげ、彼らから無価値であることのすべての能力を奪ってしまうのだ。運命によって定義されるものは彼らばかりではない、ドイツ人でも同じではないかと反論するものもあろう。たしかにそうだろう、しかしドイツ人に運命があるとしても、それは最近のものであり、時代の悲劇、あるいは相い続いた二度の失敗に還元されるものだということを忘れてはならない。

この二つの民族は、ひそかに引かれあいながら、たがいに理解しあうことができない。宿命における出世主義を持っているドイツ人が、彼らよりすぐれた宿命を持っているユダヤ人をどうして許せよう? 迫害は憎悪から来ているもので、侮蔑から来ているわけではない。ところで憎悪というものは、自分に対して向ける決心のつかない非難、あるいは理想が他人のうちに実現されていることに対する非寛容と同じものなのだ。郷里を出て世界を征服しようとするときには、すでに国境を遠くはなれてしまっている者たちのことを悪く言う。そんな人たちが容易に国を捨てていってしまったこと、彼らが遍在性を持っていることが気にくわないのだ。ドイツ人が憎むのは、ユダヤ人の中に彼らの夢が〈実現〉されてしまっていること、彼らには到達できない普遍性をユダヤ人が持っていることだ。彼らもやはり選民になりたかったのだ。現在のような状態は必ずしも宿命的なものではない。歴史をねじまげ、それをのがれ、超越しようとこころみたあとで、彼らは前より一層、その中に潜りこむことになった。そのときから形而上学的、あるいは宗教的な宿命に到達する機会を永遠に失ってしまった彼らは、記念碑的で無益なドラマに溺れこまねばならなかった。その、神秘も超越性も持たないドラマには、神学者も哲学者も関心を持たず、歴史家しか注目しない。彼らはその幻影の選択にもっと心を配れば、挫折した諸国家の中でも最大で第一級の実例のかわりに、もっとほかの例をわれわれに見せてくれたかもしれない。時を選んだものは、そこにのめりこみ、そこに自己の才能を埋葬する。人間は〈選ばれる〉のだ。決断によっても政令によっても選民になることはできない。とりわけ特定の人間たちを、永遠と共犯し

ているといって嫉妬し、迫害することにおいておやだ。選民でもなければ追放者でもないドイツ人たちは、そうであることを正当な権利をもって主張するものたちを激しく攻撃する。彼らの繁栄の頂点は、遠い将来にはユダヤ人たちの叙事詩の中の一挿話として数えられるだけになるだろう……たしかにそれは叙事詩だ。なぜなら、あの、一連の驚異と武勲、その悲惨のただ中で彼らの神を最後通諜で脅かしつづけている部族の英雄物語は、ひとつの叙事詩にちがいないではないか？　その叙事詩の結末は予測することもできない。それはあの世で完結するのだろうか？　それともわれわれの恐怖がいまだかつて予見もしなかったような災厄の形をとるのだろうか？

★

祖国というものは永遠の催眠薬だ。ユダヤ人がそれをまったく持っていないこと、あるいはイスラエルを筆頭として、仮のものしか持っていないことは、いくらうらやんでも——あるいは憐れんでも——足りないことだ。何をし、どこへ行こうと、彼らはつねに眠ってはならぬという使命を持っている。大昔の外人居住規定が彼らに要求していたように。その運命に対してはいかなる解決もありえない。ただ取りかえしえぬものとの調整だけが残っている。いままでのところ、彼らはそれ以上のものは見つけていない。この状況は時の終りまで続くだろう。そしてこの状況のおかげで、彼らは滅びることができないという不運を持つのだろう。

★

結局、彼らはどんなにこの世に執着していても本当の意味ではその一員ではない。彼らの地上

の生の中には非地上的なものがある。大昔の至福の光景の証人である彼らは、その郷愁を抱いているのだろうか？　そしてそのとき、われわれの認識の及ばないどんなものを彼らは〈見た〉のだろうか？　彼らのユートピアへの傾斜は、未来に投影された思い出、理想に転化された廃墟にすぎないのだ。しかし、楽園を待望しながら嘆きの壁にぶつかることこそ彼らの回り合せなのだろうか。

彼らなりに哀歌詩人である彼らは、悔恨をあおり、それを信じ、それを興奮剤、補助薬とし、また、歴史の回帰によって、最初の、そして昔の、幸福にたどりつく手段としている。彼らは、その昔の幸福へ向かってなだれこむ。そこへ向かって駆けてゆく。この競争が彼らに、亡霊のような様子とともに、勝ちほこった様子を与える。それがわれわれを恐れさせもし、ひきつけもする。落伍兵であるわれわれ、あらかじめ何かの宿命に屈従し、永遠に悔恨の〈未来〉を信ずることのできないものたちを。

行きづまりの状況についての手紙

友よ、私はきみが土地を愛するものとして、そこで超越と、軽蔑と沈黙にふけっているものとつねに思っていた。きみがそこで一冊の著作を準備していたと聞いたときの驚きようを想像もしてくれ！　私はとっさに、きみの中に未来の怪物を思い描いた。きみがなろうとしている作家の姿を。「また一人、失われてしまった」と私は思った。きみは恥ずかしさから、落胆の理由を私に聞かなかった。いずれにしても、大きな声できみにこう言うことは私にはできなかった。「また一人、失われてしまった、また一人、〈才能によって〉だめになってしまった」と、私は何度もくり返して言ったものだ。

きみは文学の地獄に入っていって、そこで虚構と毒を知るようになるだろう。きみは直接性を失って、きみ自身の戯画となり、うわべだけの間接的な経験しかしなくなるだろう。きみは言葉の中に消え去ってゆくだろう。書物が行動の唯一の対象になるだろう。文学者たちとつきあっても、少しも為にはなるまい。ただそのことを悟るのは、厚みもなければ実質もない世界で、一番

大切な年令をすごしたのちのことになるだろう。文学者？　それは自分の悲惨の価値をおとしめ、暴露し、いつまでもむしかえす慎しみのない者であり、そして破廉恥――下心のパレード――こそ、彼の方法なのだ。それこそ〈自分を売る〉ものだ。才能というものはどんなものであっても、ある種の図々しさをともなう。本当にすぐれたものは何も生みださない。それは自分の秘密をさらけだすことを嫌って、それとともに消え去るからだ。表現された感情は皮肉にとっての苦痛であり、ユーモアにとって平手打ちにも等しい。

自分の秘密をしまっておくこと、それ以上に実り豊かなことはない。秘密は人を悩ませ、蝕み、〈脅迫する〉。告白というものは神に向かってされるときでさえわれわれ自身に対するひとつの犯罪であり、われわれの存在の原動力に対する犯罪なのだ。困惑とか、恥辱とか、戦慄とかいったものを、宗教的なものも、非宗教的なものも含めて、すべての治療術がわれわれから取りのぞこうとするが、それこそどんなことをしてでも失ってはならない父祖からの遺産なのだ。われわれは治療師たちから身を守らなければならない。そしてそれによって滅びてしまうとしてもわれわれは自分の悪と罪とを守っていかねばならないのだ。告解とは、天の名において遂行される意識の侵害だ。もうひとつは精神分析だ！　告解所は俗化し、淫売化して、やがて街角に腰を据えるようになるだろう。少数の犯罪人を除いてだれもが公けの魂、広告ビラ的な魂を持ちたいと思うようになるだろう。

文筆家とは創作力を消費し、自分の影をすりへらす亡霊であって、一語一語を書くごとに痩せ

細ってゆくものだ。虚栄だけがいつまでも減らない。それが心理的な虚栄であれば、そこには自我という限界があるだろう。しかしそれは宇宙的で、かつ悪魔的なものであり、作家を呑みこんでしまうものだ。作品という観念が彼につきまとう。彼はたえずそれを口にする。まるでその他には注意や好奇心をそそるに足るものは、この天体の上に何もないとでも言うように。文筆家に対して、彼の作品以外のことを話すような、不注意や、悪趣味を持った人間は大変なことになる！　ある文学者たちの昼食会の終りに、文筆家たちの聖バルトロマイの虐殺があわや起ころうとしたのを見たと言っても信じてもらえるだろう。

ヴォルテールは、自己の無能力さを方式と方法にしたてあげた最初の文学者だった。彼以前には、作家たちは事件のわきにいられることで十分に満足していて、もっと慎しやかだったものだ。彼らは限定された分野で仕事をし、自分の道を歩んで、そこにしっかり足をおろしていたものだ。彼らはいささかもジャーナリスティックなところを持たず、せいぜい何がしかの孤独の挿話的な様相にしか関心を示さなかったものだ。彼らの好奇心は〈無力〉だった。

それが、この大ぼら吹きとともに事態は一変してしまった。時代の関心を引いていた話題で、彼の嘲弄と、しったかぶりと、馬鹿さわぎの欲求と、普遍的な通俗性をまぬがれるものはひとつとしてなかった。ヴォルテールにおいてはあらゆるものが不純だった、その文体をのぞいては……きわめて上っつらだけの精神で、〈本質的なもの〉に対しても、また現実がそれ自身の中に提示する興味に対しても、少しも関心を示さなかった。彼は、文学の中に観念の冗談を導入した。

そのおしゃべりと、教訓癖、守衛なみの知恵は、彼をして売文家の原型、モデルとした。彼は自分についてすべて物語り、自分の本性の富をとことんまで開拓しているから、われわれのほうでは困惑させられることは少しもない。ただ彼の文章を読み、忘れてしまえばそれでよい。それとは反対に、パスカルのような人は、自分についてぶちまけて言っていないような感じを与える。われわれをいらだたせるときでさえ、彼はけっして、われわれにとって〈作家〉ではない。

書物を著わすということは、原罪と無関係なことではない。なぜなら、一冊の書物というものは純粋さの喪失、攻撃行為、われわれの失墜の反復でなくてなんだろう？　人を楽しませるために、あるいは絶望させるために、自分の欠点を公表するとはなんということだろう！　われわれの心の底に対する野蛮な行為、冒瀆、汚点。それ以上に誘惑といってもいい。私は事情をよく承知して話しているのだ。少なくとも私は、自分の行為を憎んでいる、という言い訳、信じずに行為しているのだという言い訳ができる。きみはもっと正直だ。きみが書物を書けばそれを信ずるだろう。きみは言葉の現実と、この幼稚な、あるいはみだらなフィクションを信ずるだろう。文学というものはすべて嫌悪の深淵からの罰のように私には思える。私は人生について駄弁を弄するのが恐いから、それを忘れようとつとめるだろう。あるいは絶対の覚醒に到達することができない以上、陰気な軽薄さに身を落とすかもしれない。しかし、本能のかけらが、言葉にしがみつくように私を強いるのだ。沈黙は耐えがたい。言いあらわしえぬものの簡潔さの中に腰を据えるにはなんという力がいることだろう！　言葉を放棄するよりは、パンを捨てるほうがずっとた

やすい。不幸にして、言葉は駄弁と、そして、文学に傾斜してゆく。思考でさえ、つねに広がり、ふくれあがろうとするものである以上、同じ方向に向かってゆく。思考の鼻先をたたき、アフォリズムや機智に限定することは、そのひろがりと自然の動きに、あるいは、拡散へ向かう活力にさからうことだ。簡潔な文体という悪夢は、精神の運動を麻痺させる。精神は、〈大量の〉言葉を要求する。それがなければ精神は内面に戻ってゆき、自分の無力さをいつまでも嚙みしめることになる。考えるということがひとつのことを繰り返して言うことであり、本質的なものを損うことであるのは、精神というものが〈教師〉だからだ。それはまた、……才ばしった人たちや、パラドックスや、勝手な断定の好きなものたちの敵でもある。そういった人たちは、通俗的なものや、「普遍的に有効なもの」を嫌うあまり、事物の偶然的な側面や、だれの注意もひかない明白なことを攻撃する。彼らは、確実ではあるが退屈な推論より、不正確ではあっても派手な文章を好んで、道理などはどうでもよく、「真実」を犠牲にして楽しむのだ。現実は抵抗できない。どうして彼らが、現実の確実性を証明するような理論をまじめにとるだろう？　あらゆる点において、彼らは、他人も、自分も、ともに退屈することの恐怖で金しばりになっている。この恐怖がとりついたら、きみの仕事は全部だめになってしまうだろう。きみは文章を書こうとしている。きみもなくきみの前には読者の姿が立ちあがってくるだろう……そしてきみはペンをおくのだ。きみが展開しようとした思想がきみを超えてしまう。その思想を検討し、深化して何になるだろう？　それはたったひとつの文章で翻訳できるものではないのだろうか？　それにきみがすでに

知っているものをひけらかしてどうなるというのだ？　言葉の簡潔さにとりつかれたら、どんな本を読んでも、あるいは読み直してみても、必ずそこに技巧とむだな言葉が目につくだろう。ある作家を繰り返し読んでみると、彼が文章をふくらませ、ほとんどひとつの観念に倒れかかるようにして、それを平らにひきのばそうとしているのが見えてくるにちがいない。詩でも、小説でも、評論でも、芝居でも、あらゆるものが長すぎるように見えるはずだ。作家というものは、それが彼の仕事なのだが、つねに言うべき以上のことを言う。作家は自分の思想を水まし し、言葉でくるむ。一つの著作の中で二つか三つの〈瞬間〉だけが残っている。がらくたの中のいくつかのひらめきが。私だって、きみに向かって心を打ちあけているだろうか？　あらゆる言葉は余計な言葉なのだ。それでも書かねばならない。書いてみよう……お互いに化かしあってみるのだ。

倦怠が精神を堕落させ、皮相にし、散漫にする。内面を侵蝕し、崩壊させる。倦怠は、ひとたび、きみにとりついたが最後、どんなところにもついてゆく。私自身にも、思いだせないくらい遠いところまでつきまとったように、私の傍らに、空中に、私の言葉の中に、またほかの人の言葉の中に、あるいは私の顔やあらゆる人の顔の上に、倦怠が存在しなかった時があっただろうか。それは仮面であるとともに本質であり、表面であるとともに現実なのだ。生きていようと、死んでいようと、倦怠なしの私は想像できない。倦怠のために、私は口を開くのも恥ずかしいようなおしゃべり、老人子供や、女のような男や、哲学的に更年期をすぎてしまった人間向けの理論家になってしまった。創作者の残骸、幻覚を持った操り人形。倦怠は私に与えられたほんのわずか

の存在を蝕み、たとえそこにいささかの残りかすを許してくれても、それは、倦怠が働くべき土台が必要だからに外ならない……倦怠は行動性を欠き、大脳を傷めつけて、それを腰くだけの概念の山にしてしまう。どんな観念も、倦怠によって他の観念と結びつくことを邪魔されて、孤立し、ふみにじられてしまう。その結果、精神活動は断続的な時間のつながりに落ちてしまう。概念や、感情や、感動は、ぼろくずのようになる。それが倦怠の通っていったあとのありさまなのだ。倦怠は聖人を凡人にし、〈ヘラクレスのような剛力を腑抜けにする。それは、空間より〈更に遠く〉ひろがった悪だ。きみはそれから逃げなくてはならない。さもなければ、きみの思いつく計画は、すべて狂ったものになるだろう。私も倦怠に弄ばれるときにそうなるように。そのとき私はひとつの鋭い思考を夢に見るのだ。事物を解体し、そこに穴をあけ、貫通するために、事物の中にもぐりこんでゆくような思考、あるいは各音節が紙面にぶつかってゆきながら、文学や読者を排除するような本、文字のカーニバルであり、黙示録であり、言葉の汚染に対する最後通牒であるような本を。

亜流こそ必要とされるような時代に、名を成そうというきみの野心はまったく理解に苦しむ。ひとつの比較がどうしても思いうかぶ。哲学や文学の面でナポレオンに匹敵したようなものはいろいろいた。ヘーゲルはけたはずれに大きなその体系によって、バイロンはその天衣無縫さにおいて、ゲーテはその〈前例もない〉ような凡庸さにおいて。こんにち文学の中に、世紀の冒険家とか、暴君に匹敵するものを捜してもまったくの無駄骨に終るだろう。政治の分野では、いまま

で知られなかった狂気が現われたとしても、精神の分野には微小な運命がうごめいているにすぎない。文筆による征服者は一人としていない。みな出来損いか、ヒステリー患者か、いわゆる〈症例〉であってそれ以上ではない。われわれは現在も、将来も、われわれの失墜の作品、地獄のドン・キホーテを持たないのではないかと恐れる。時が拡散すればするほど文学は薄っぺらなものになる。そして未曽有のものの中に溺れてゆくとき、われわれはピグミーとなりはてているのだ。

われわれの美的な幻影に力を回復させるには、幾世紀かの苦行があきらかに必要だ。無言の行、非文学の時代。目下のところはあらゆるジャンルを腐敗させ、それを否定する極限までおいつめ、見事にできあがっているものを解体しなくてはならない。この作業に若干の仕上げを怠らなければ、おそらく文明破壊の新しいタイプを作り出すことができるかもしれない……

われわれは様式の外におかれ、敗北に調和をもたらすことが不可能になり、もはやギリシャ文明との関係において自らを定義することができない。ギリシャはもうわれわれの目標でも郷愁でも追憶でもなくなり、われわれの中で消え去ってしまった。ちょうどルネサンスと同じように。ヘルダーリンやキーツからウォルター・ペーター（一八三九―九四、英国の批評家）に至るまで、十九世紀は自らの暗さと戦い、それに対し光明の療法、楽園として、驚異的な古代のイメージを対置させることができた。作りあげられた楽園、それは言うまでもない。大事なことは、それを人が熱望していたことだ。近代とその渋面に対して戦うためであろうとも。そのころ人は、他の時代に対しても身

を捧げることができたし、そこに追憶の激しさをもってしがみつくことができたものだ。過去はなお〈機能していた〉。

われわれにはもはや過去はない。というより、われわれのものである過去にはもう何もないのだ。すぎ去った時の中にはもはや愛する土地もなければ、偽りの救いもなく、身を寄せるところもない。われわれの展望？　それを見抜くことは難しい。われわれは未来のない未開人なのだ。表現というものは現実とは較べられるべくもないものだから、書物を作り、それに得意になるということは、きわめて哀れな光景を展開することになる。たとえば、すでに五十冊の本を著した作家が、もう一冊書くべき必然性がどこにあるのだろう？　どうしてそんなに沢山書くのだろう、どうして、そんなに、忘れられてしまうのが恐ろしいのだろう、どうして、こんなにできの悪い媚態を示すのだろう？　貧乏な売文家、ペンにしばりつけられた囚人ならまだ勘弁できる。いずれにしても、文学においても、哲学においても、〈構築すべき〉ものなど何もないのだ。それによって生きている類の人たちだけが、もちろん物質的な意味でだが、文学に身を捧げるべきなのだろう。われわれは破壊された形、裏返しの創造の世紀に足をふみ入れている。どんな者でも幸福をつかむことができるようになるだろう。そんなに先のことを言っているわけではない。野蛮というものはだれにでも到達できるものなのだ。その趣味を持つだけでいい。われわれは陽気に諸世紀を崩壊させようとしている。きみの本がどんなものになるか、私にはあまりによくわかりすぎている。

きみは田舎に住んでいる。それほど腐りはてていない。純粋な不安を持っている。きみは「感情」などというものがどれもこれも、どんなに時代おくれのものになっているか知らないのだ。内面のドラマは、まさにその最後に来ている。「魂」とか、先史時代的な無限から出発して作品をひとつ書こうなどという危険をどうして冒すことができよう？

それに調子というものがある。きみのは——杞憂ではないことを恐れるが——良識と、節度と、上品さに感染した「高貴」で、「落ちついた」ものではないだろうか。書物というものは、われわれの非人間性に、奇矯性に、〈高度〉な破廉恥性に対して書かれねばならないのだということ、そしてまた、あまりに承認しやすい観念に身を捧げる「人間的な」作家は、自分で自分の文学者としての死亡通知に署名をするものだということを胆に銘じてほしいのだ。

われわれの興味を引きえた人々の精神を検討してみたまえ。彼らは事実につくどころか、とうてい支持できないような立場を擁護するのだ。彼らが生きているのは、その〈視野の狭さ〉と、詭弁への情熱による。彼らが「理性」に対してした譲歩は、われわれを落胆させ焦らだたせる。賢明さは天才にとって好ましくないものであり、才人にとっては致命的なものだ。これできみが、「高貴な」ジャンルに手を染めていはしないかと恐れているわけがわかってもらえるだろうと思う。

きみは若干の優越感をもって、実際家的な様子を装い、よく私の「破壊欲」ときみが呼ぶものを非難したものだ。私は何も破壊していないということをわかってほしい。私は記録するのだ。

消滅しようとする世界、その明証性の廃墟の上に異常なもの、広大無辺なもののほうへ、痙攣的な文体のほうへ走ってゆく世界の渇きを、〈直接的に〉記録するのだ。私は一人の狂った老女を知っている。彼女はたえず自分の家の崩壊を待っていて、昼も夜もそれを待ち構えてすごしている。部屋の中をぐるぐる回り、ひび割れの音に耳をすましている彼女は、〈事件〉がなかなか完結しないことにいらだっているのだ。この狂女の行動をもっと広いスケールにしたものがわれわれの態度だ。われわれは少しもそれを考えてもいないのに、崩壊に期待している。いつまでもこんな状態が続くものではない。もっと広い恐怖の結果としてのわれわれ自身についての恐怖が、将来の教育の基本理念、教育論の原則になるだろう。私は恐しいものの未来を信じている。きみはそれに対してほとんど心構えをしていないからこそ、文学の中に入ってこようなどとするのだ。私には、きみを別の道に向ける資格はない。せめてきみが幻影なしにその道に進んでもらいたいと思う。きみの中で気負い立っている作家をなだめ、クリマコスの聖ヨハネ（六世紀のギリシヤ正教の教父）のつぎの言葉をもっと意味を広げてきみのものにするがいい。「坊主にとって落胆より以上に栄冠を与えてくれるものはない。」

私がそれをよく考えた上で、なお、破壊することによろこびを見いだしていたのはきみの考えているのとはちがって、つねに自分を犠牲にすることにおいてだったのだ。人間は何も破壊しない。ただ〈自分を〉破壊するのだ。私はいかなるものを憎悪するときにも、その中で自分を憎んでいる。私は全滅の奇跡を想像し、私の時間を粉粋し、知性の癌を経験した。まず、懐疑という

ものが、手段にしろ、方法にしろ、私の中に腰を据えてしまい、私の生理、肉体の運命、内臓的な原則になってしまった。それは、どうやったらそれから直るか、どうやったらそれで死ぬことができるかもわからない病気なのだ。私は成功したり、生き残ったりするあらゆる機会を失ったもののほうへ——これは本当のことなのだが——傾いてゆく。ここまでくれば、どうして、私がいつも西欧のことを気にかけているかわかってもらえるだろう。この関心はきみには滑稽なもの、あるいは無責任なものに思えたかもしれない。「西欧と言ったって、きみはそれに属していないじゃないか」と、きみは言ったものだ。悲しみを求める私の心がほかに対象を見つけなかったのは私のあやまちだったろうか？　これほど執拗な放棄の欲求をいったいどこに捜せるだろう。西欧が、それによって死ぬことのできる器用さを持っていることが、私には羨ましい。私は自分の失望を強化しようとするとき、自分の精神を、この否定的な無尽蔵の富というテーマのほうにふり向ける。フランスや、イギリスや、スペインや、ドイツの歴史をひもとくと、それらがかつてあった姿と、いまある姿との間のコントラストが、目まい以上に、夕闇の公理をついに見出したよろこびを私に与えてくれる。

きみの希望を裏切ろうなどとは決して思わない。それは、人生がやってくれることだ。すべての人と同じく、きみも失墜から失墜へと歩んでゆくだろう。きみの年頃の私は、世間に慣らしてくれ、幻想をうちくだいてくれる人たちを、ありがたいことにじかに知っていた。彼らこそ、私を本当に教育してくれたのだ。彼らがいなかったら、その後の年月に立ち向かい、それを耐える

勇気を私は持てただろうか？　彼らはその苦汁を私に押しつけ、それによって私の苦しみを準備してくれたのだ。彼らはみな偉大な野心を持って、それぞれさまざまな栄光の征服に乗り出していった。その彼らを待っていたのは失敗だった。繊細さ、明晰さ、無為？　そのうちのどんな悪徳が、彼らの計画を横切ったのかはっきり言うことはできない。彼らは、あの大都会で見うける、機智で生きている人たち、見つけても長つづきしない働き口をつねに捜している人間の種類に属していた。私はほかのどんなつきあいよりも、彼らの話から一層の教訓を引き出したものだ。ほとんど皆、自分の中に一冊の本を持っていた。彼らの裏面の本だった。彼らは文学の魔にそそのかされても、それには負けなかった。それほど敗北が彼らをおおいつくし、その人生をいっぱいにしていたからだ。人は彼らを「落伍者」と呼んだ。それは特別な人間の典型を形成していた。それをこれから、単純化しすぎるおそれがあるかもしれないが、きみに証明してみよう。失敗することに夢中になり、あらゆるものに自分を落としめるものを捜し、未来の予定は決して実現せず、いかなる計画のしきいもまたがない。無為においては天使と匹敵し、行為の秘密について瞑想しながら、放棄という行為ひとつしか行なわない。信仰は、それを持っているとすれば、新たな降伏や、垣間見てあこがれている堕落の言い訳に用いる。つまり神にもたれかかる……彼が「神秘」について考えるのはどこまで彼の無能を押し進めることができるかを他者に見せるためなのに、彼は果物に虫がつくように、自分の確信に巣食っている。そしてその確信とともに倒れる。力をとりもどすことがあっても、それは悲しみの残り火を自分に向けてかきたてるためだけ

でしかない。自分の能力を逼塞させるとすれば、それは彼のあらゆる力の中で、倦怠が一番好きだからだ。彼は自分の過去に向かって進んでゆく。〈才能の名のもとに〉道を逆に進む。

彼がこのように行動するのは、敵に対してかなり奇妙な態度を取るためだけなのだと言ったら不思議に思うだろう。説明をしよう。われわれは、うまくいっているときは敵の注意と関心の中心に置かれていることを知っている。彼らは、自分たちより、私たちのほうを好み、私たちの仕事について気をもむ。そして私たちのほうでも彼らの世話をしてやり、彼らの健康を気づかい、彼らの憎しみも気づかってやる。その憎しみだけが私たちについて若干の幻影を持つことを許してくれるのだから。彼らは、われわれを助けてくれる。われわれに属し、われわれの家の一員になる。ところが、落伍者の敵に対する反応はそれとはちがう。彼はどうやって敵を保っていたらいいかわからなくなり、それについて興味を失い、敵を矮小化し、やがてまじめに考えなくなってしまう。それは重大な結果を引きおこす超越だ。あとになってから、敵を挑発し、ちょっとでいいから興味を持ってもらおうとし、無礼や、怒りをかきたてようとしても、もう遅いのだ。彼の状態を憐れんでもらい、彼に対する恨みを育て、また活発にしてもらおうと思ってもだめなのだ。そこで彼は、だれに対しても自分を確認することができない以上、孤独と不毛性の中に閉じこもる。孤独と不毛性、それを私は、この敗北者たちの中で高く評価していた。彼らこそ、くりかえして言うが私の教育の責任者だったのだ。中でも彼らは、真実の信仰に固有の愚かさを教えてくれた……真実が、私の主要な関心でなくなったときに感じた、ほっとした気持を、私は一生忘

れることができないだろう。私はあらゆる錯誤を手なづけて、とうとう仮象の世界、軽薄な謎の世界を開拓することができるようになったのだ。無の追求以外、もはや何も追い求めるものはなくなった。真実？　青年の気まぐれ、ないし、老衰の兆候にすぎないではないか。しかし、かすかに残っていた郷愁から、あるいは隷属することの必要から、私はそれをなおも捜すのだ。無意識に、愚かにも。私はちょっと気をゆるめればすぐに、偏見の、いとも古く、もっとも嘲弄的な王国に落ちてしまう。

自分を破壊すること、できることならそうしたい。それまでの間、この確信が作りだす喘息病みの空気の中で、抑圧者の世界の中で、私は呼吸をする。私は私なりに呼吸をするのだ。ある日、だれがそんなことが起こらないと言えよう？　きみはおそらく、ひとつの観念にねらいをさだめ、引き金を引き、それが倒れるのを見るというよろこびを知るだろう。そしてほかのものについて、すべての観念について、それをくり返すだろう。ひとりの人間の上にかがみこみ、その人間を以前の欲望や悪徳から引き離して成仏できるような新しい悪徳、もっと有毒な悪徳を与えようという欲望、ひとつの時代、ひとつの文明を激しく憎もうという欲望、時に飛びかかって、時の瞬間を苦しめること、そしてつぎにきみ自身にふりむいて、きみの思い出と野望とを責めさいなみ、きみの霊感をめちゃくちゃにし、もっと息づまるために空気を有毒にしようという欲望……ある日、おそらく、きみはこのような形の自由を知るだろう。自己とあらゆるものからの解放である、このような形の呼吸を。そのときぎみは、どんな道であっても執着せずに、進んでゆくことがで

きるだろう。

★

私の考えは、きみを糞まじめという、何ものをもってしても償うことのできない罪に対して用心させることだった。そのかわりに、きみに軽薄さをすすめたかったのだ。ところで——隠しておいてもしようがない——軽薄さというものは、この世で一番むずかしいものなのだ。私の言うのは、意識的で、自分のものになった、意志的な軽薄さのことだが。私は厚かましくも、懐疑主義を実現すれば、それに到達できるだろうと思っていた。しかし、この懐疑主義というものは、われわれの性格にぴったりあてはまり、われわれの欠点や情熱や狂気にまでもついてくるものなのだ。それは人格化してしまう。（数々の性格と同じだけの懐疑主義がある）。疑いはそれを傷つけ、あるいはそれと戦うものすべてによって繁殖する。それは悪の内部の悪であり、妄執の中の妄執なのだ。祈るときには、そいつはきみの祈りの中に立ちあがってくる。きみの錯乱を、そいつはそっくりまねしながら、監視する。目まいのさなかで、さらに目まいがするほど疑う。すなわち糞まじめを捨てることは懐疑主義でさえできないことなのだ。そればかりではない、詩でさえもできないのだ！　私は年をとればとるほど、詩にあまり多く期待しすぎたことを思いしらされる。私は自分の健康をそこなってまでそれを愛したのだ。それは信仰のようなものだった。私はそれに負けてしまおうとさえ思っていた。詩（ポエジー）！　その言葉はそれだけで、かつては私に無数の世界を想像させたものだが、いまはもう私の心に、ぶつぶつ言う声、はかなさと退屈な神秘と、

気どりのイメージを思い浮かばせるだけなのだ。私がおろかにも、多くの詩人たちとつきあっていたということも付け加えねばならないだろう。二、三の例外をのぞいて、彼らはむなしく、もったいぶったうぬぼれ屋か嫌なやつかだった。彼らもまた化け物であり、専門家であり、形容詞の拷問官であるとまったく同時に、その殉教者でもあった。その彼らのディレッタンチスムや、明晰さや、知的遊戯のひらめきを私は買い被っていたのだ。軽薄さはひとつの「理想」にしかすぎなくなるのだろうか？　それこそ恐れねばならないことであり、私はけっしてそれに屈服することはできないだろう。私は、自分が物に重要さを与えていることに気づくたびに、自分の頭脳を責め、警戒し、いくらかぼけているのではないか、堕落しているのではないかと疑う。私は、あらゆるものから離脱し、根を断つことによって身を高めようと努める。軽薄になるには、自分の根を断ち、形而上的に〈他者〉にならねばならない。

きみは、自分の愛着を正当化し、かつ、その重荷を早く担おうと急ぐあまり、ある日、こう言ったものだ。私は、歴史のない国から来て、何ものの〈重み〉も感じないのだから、空中を滑ってゆくことも、波の中に泳いでゆくことも簡単なのだと。

私はたしかに、一小国に属し背景もなしに、道化師のような、あるいは白痴か聖者のような気楽さで生きることの利点を認めよう。気楽さ、それは言いかえれば、自分自身の上にとぐろをまいて、何年ものあいだ、まるで衰弱のように、あるいはその愚鈍の優しさの中に、何かいとわしい太陽を隠しているように、食物をとらずに生きている蛇の超越なのだ。

重荷となるような伝統を少しも持たない私は、まもなく万人の持ち前になるはずの、この離郷の好奇心を養っている。われわれは自らの意志であれ、強制されてであれ、混沌の命令法であるひとつの歴史的な蝕の経験を知るだろう。すでにわれわれは、われわれ自身との相違の中で消滅しようとしている。われわれの精神は、たえまなく自分を否定し、自分を偽るあまり、その中心を失って、さまざまな〈姿勢〉の中に、すなわち不可避ではあるが無用な変容の中に霧消するのだ。そこからわれわれの行動の、下劣さと、変わりやすさが出てくる。われわれの不信と信仰さえもがその刻印を押されている。

神を攻撃し、それを引きずりおろし、それに取ってかわろうとすることは趣味の悪い行為であり、唯一の、しかも不確実な敵と事をかまえることに虚栄心を満足させる、ねたみ深い人間の仕事だ。無神論というものは、どんな形で表われようと、ある種のぎごちなさを示す。ちょうどその逆の理由で、護教論がそうであるように。なぜといって、神を擁護しようとし、神に、なんとしてでも永生を保障してやるために骨を折ることは、偽善的な慈善や不敬と同じく、気の利かないことではないだろうか？　われわれが神に対して抱く愛や憎しみは、われわれの不安の質よりはわれわれの恥しらずのがさつさをよりよく示しているものだからだ。

このような事態について責任があるのはわれわればかりではない。テルトゥリアヌス（一六〇―二二二頃カルタゴの教会著述家）からキエルケゴールに至るまで、信仰の愚劣さを強調するあまり、キリスト教の中に形成されたひとつの底流はいま、白日のもとにさらされて教会をあふれ出てしまったのだ。明晰さの発

作のうちに、自分は狂人に奉仕していたのではないかと思わない信者がはたしてあるだろうか？神はそれによって苦しんだにちがいない。現在に至るまで、われわれは彼に、われわれの美徳を与えてきた。われわれには、彼に悪徳を与える勇気がなかったのだ。神は人間化して、いまやわれわれに似てきている。われわれの欠点のうちで、彼のものでないものはなにもない。神学の拡大や神人同形論的意志がこれほど進んだことはかつてない。天空の、この近代化がその最後を示している。進化した、当世風な神をあがめることはどうしたらできるだろう？　神にとって不幸なことに、その「無限の超越」を取り戻すことは一朝にしてはできないだろう。

「私に反抗しようとも、礼を失わないように気をつけるがよい。おまえたちは無神論を告発しても、それをより一層信奉するだけだ。」

私は、時の刻印の強さをひしひしと感じる。私には神をそっとしておくことができない。私はスノッブたちと一緒になって、神は死んだとくり返して言っては喜んでいる。まるでそれが何かの意味を持っているように。われわれは不当にも、孤独と、それに巣食っている崇高な亡霊を追い払ったつもりになっている。しかし実際のところ、孤独はいや増し、われわれを孤独の取り巻きに近くしているだけなのだ。

私はちょっとしたことに圧倒され、東洋の表現に従えば、「空の空」に達するようなとき、そんな極限に耐えきれずに神のほうに駆けだすことがある。それが私の疑いを踏みにじり、自分に矛盾し、戦慄を増大させ、そこに刺激を求めるにすぎないとしても。空無の経験は不信者の神秘

的な誘惑であり、祈りの可能性であり、充実の瞬間だ。われわれの限界にひとりの神、あるいはその代わりになるものが立ちあらわれる。

★

われわれは文学から遠いところにいる。単に外見的に遠くにいる。そこにあるものは言葉と、言葉の罪だけだ。私はきみに懐疑の尊さをすすめた。その私がいま、絶対のまわりをうろついている。反語的な表現の技巧だろうか？　むしろフロベールの言葉を思いだしてもらいたい。「私は神秘家であり、何も信じない。」私はそこに現代という、無限に緊密で、実質のない時代の格言を見る。われわれにはひとつの快楽がある。〈あるがまま〉の衝突の快楽だ。われわれは痙攣的な精神として、ありそうもないことに熱中し、ドグマとアポリー（矛盾）に引きさかれ、神の中に〈怒りにかられて〉飛びこんでゆく用意ができていながら、その中に無為に生きることは、けっしてありえないという確信も持っている。専門的な異端、生まれつきの被追放者、正統の嘔吐であり、また恐慌である者しか、現代の人間ではない。かつて人間は、その信奉する価値によって規定されていた。こんにち、人は、何をしりぞけるかによって規定される。否定の豪奢がなければ人間は哀れなものだ。自己の崩壊の資本主義者、破産の愛好者としての宿命を完遂することもできないみじめな「創造者」だ。知恵？　こんにちほどそれと無縁な時代はない。すなわち、人間がこんにちほど、自分自身であり、かつ知恵に背く存在であったことはない。動物学の裏切り者、道をまちがえた動物である現代人はちょうど異端者が伝統に反抗するように自然に対して

反抗する。これは、したがって第二段階の人間なのだ。ありとあらゆる種類の改革が彼の仕事となる。彼の情熱は、根源に戻ること、なんでもいいから出発点に戻ることなのだ。どんなに賤しいものであっても、彼は他人に屈辱の効果を感じさせようと願い、すべての宗教的、哲学的、政治的体系は打ちこわされ、新しくされるべきだと考える。なんらかの断絶のただなかに身をおくこと、それが、彼の望むすべてだ。彼は、均衡と諸制度の冬眠状態を嫌い、それらをついて最後を早めさせる。

賢者は新しいものに対して反感をもつ。覚醒したものは放棄する。それが彼における抗議の形なのだ。〈規範〉の中に、孤立化する傲慢なものは、〈後退しながら〉自分を確認する。どこへ向かってか？　矛盾を超越ないし中性化しようとするのだ。しかしそれに成功すればその矛盾には厳密さが欠けていたことを証明することになる。それに挑戦する前にそれを越えてしまっているのだから。彼には本能などないのだから、自己を抑制することも容易にできる。そして貧血性の静謐の中でもったいぶっていられるのだ。

ちょっと、我れを忘れてみればわかることだが、自分の矛盾を抑制したり、緩和したり、隠しおおしたりすることは、われわれの能力では、とてもできない。矛盾はわれわれを導き、刺激し、死に至らしめる。賢者は矛盾をはるかに越えたところに立って、それを利用し、それで苦しむことはなく、死ぬことにおいても何も〈獲得〉しない。彼は生きながらにして半ば死んでいるのだ。かつては、彼が人の模範であった時期もあったが、われわれにとっては、それは生物学の屑

であり、ひとつの、魅力のない異常にすぎない。

きみが知恵というものを悪く言うのは、そこに到達できないからであり、またそれを「禁じられている」とおそらく考えているからなのだ。きみがそう考えているのはたしかだと言ってもいいだろう。それに対して、賢者になるにはあまりに〈遅すぎる〉し、いずれにしても、つまり、賢者であれ、狂人であれ、みな同じ深淵に呑みこまれてしまうことは別にしても、それはなんの役にも立たないと私は答える。また私は、自分がけっして到達しない賢者であることも認めよう……あらゆる救済の方法は、私に対して毒のように働く。それは私を解体し、困難を増大し、他人との関係を悪化させ、傷口を刺激するばかりか、節約した時間の上で有益な徳を実践するかわりに、好ましくない役割を演じる。そうだ、あらゆる知恵は、私に対して〈劇薬〉のように働く。きっときみは、私がこの時代と「うまく」やりすぎていると思うだろう。時代に対してあまりに妥協しすぎていると。本当のことを言えば、私はこの時代に喝采を送るかと思えば、つぎは、ありとあらゆる情熱と、支離滅裂をもって、それを拒否したりするのだ。時代は私に、実体を伴った極限の行為の興奮を与えてくれる。そこから、時代は結末をつけるまい、それは終りなきものとして未完成のまま続くだろうと、結論する必要があるだろうか？　そんなことはない。私は来たるべきものを予測する。そしてそれをよりよく知るには、アラリクス（西ゴート王）によるローマ劫略ののちの聖ヒエロニムス（三四〇—四一九 教父、聖人）の手紙をくり返し読むだけでいい。そこには帝国の危機のときに、その崩壊と無気力とを観察していた人間の、驚きと、不快が表われている。

その手紙についてよく考えてみるがいい。これこそ、前もって書かれたわれわれの墓碑銘ではないだろうか。私は人間の最後について語ることが、正当なことかどうか知らない。しかし今日まで、われわれがその中に生きてきた虚構がすべて崩れ去ることはたしかだと思う。歴史が、ついにその暗黒の面をさらけ出すのだと言えようか。さらに流行にしたがって言うなら、ひとつの世界が破壊されるのだとも言えるだろう。結構！　もしそれが私一人の力で起こることだと仮定すれば、私はいかなる身ぶりもしないだろう。小指一本立てるまい。人間は、私を引きつけると同時におびえさせる。私は、人間を愛するとともに、憎悪する。受動的な立場に釘づけになるような激しさをもって。人間から宿命を遠ざけるために一生懸命になったりすることが私にできようとは思えない。人間を圧倒したり、守ったりできるには素樸でなければならない！　自分に対して、はっきりした感情を持つことができるものは幸いだ。そういうものたちは、〈救われて〉、死んでゆくだろう。

恥をしのんで白状すれば、私も一時期、そのような幸せなものたちに属していた。人間の宿命というものを、私は心にかけていた。彼らとはちがうやり方ではあったが。私は二十歳だったと思う。きみと同じ年頃だった。裏返しの「ユマニスト」だった私は——まだ汚されていない傲慢さによって——人類の敵になることは、人間が抱きうるものの中でもっとも高貴な尊厳であると思っていた。私は自分をけがらわしいものでつつもうと思っていて、他人の嘲笑や毒舌に身をさらしている人たち、恥に恥を上ぬり、孤独になるべきチャンスはどんなものでものがさない人たち

のことを、羨ましく思っていた。そして私は、ユダを理想化するに至っていた。なぜなら、無名の奉仕をそれ以上続けることを拒否した彼は、裏切りによって自分を主張しようとしたからだ。彼がイエスを〈売った〉のは、金のためではなく、野心のためだと考えてみるのが楽しかった。彼はイエスと肩を並べ、悪において匹敵することを夢みていた。なぜなら、善においてこのような競争者を相手にしては、どうやっても勝ち目はないからだ。彼には十字架にかけられるという名誉が拒否されたので、アケルダマ（血の畑）の木をもって十字架のかわりとした。私の考えはあげて、首吊りに至るまでの彼の足どりをたどるのだった。いっぽう私も、私の偶像を売ろうとしていた。私には彼の恥ずべき行為と、みずから憎まれるようなことをする勇気が羨ましかった。しかるべき人間であるということ、人々の中の一人の人間であるということは、なんという苦しみだろう！　あの、昼も夜も隠遁のうちに瞑想をつづける修道士たちのことを考えるときには、彼らは大なり小なり、不成功に終った罪や誤ちを反芻しているのではないかと思ったものだ。まったく、孤独であるということは疑わしいことだと私は考えていた。〈純粋な〉人間は孤立しない。僧房のひそやかな生活を希望するには、良心の重荷がなければならないだろう。自分の良心に恐怖を抱かねばならないだろう。私は修道制度の歴史が、けがらわしい人間になりたいという欲求を覚えることもできなければ、山々がひきおこす悲しみを感じることもできない正直な精神によって始められたことを残念に思ったものだ……錯乱のハイエナであった私は、あらゆる被造物から憎まれる人間になろうとした。彼らを団結して私にあたらせる、彼らを粉粋するか、私が彼

らに踏みにじられるか。簡単に言えば、私は野心家だったのだ……そのときいらい、私の幻影はおだやかなものになって、その鋭さを失い、つつましく、嫌悪と、あいまいさと、茫然自失のほうに歩きはじめたのだと思う。

★

この長話を終るにあたって、私はどうしても、これだけは、くり返しておきたい。私には、きみがこの時代にどのような場所を占めようと思っているのかよくわからないということを。現代の中に割り込むに十分な柔軟さ、ないし、軽薄さの欲求をきみは持っているだろうか？　きみの平衡感覚はなんの役にも立ちはしないだろう。きみには、今あるがままの状態で進むべき道があるのだ。きみの過去と純粋さを精算するためには、目まいの学習が必要だ。物質と一緒になった恐怖が人に飛躍を与えること、われわれはその最後のこだまなのだということを、理解するものには、それは容易なことだろう。時などというものはない。展開し、瞬間ごとに姿を変える、この恐怖しかない……それは、われわれの内にも外にもいる、普遍性であり、目に見えないものだ。それは、われわれの沈黙と、叫びと、祈りと、冒瀆の神秘だ。ところで恐怖が、花ひらき、その征服と成功とに、得意になって、絶頂に近づいたのはまさに二十世紀になってからだった。われわれの熱狂も、破廉恥も、それについてはそれほど期待しなかった。われわれがいま、ゲーテ、あの宇宙の最後の市民の偉大な素樸家からかくも遠いことにもはやだれも驚きはすまい。彼の「凡庸」は、自然のそれと踵を接する。それは諸精神の中でもっとも根こそぎにされていない

もの、諸元素の友なのだ。ことごとに彼の対極にいるわれわれは彼に対して不公正になること、彼をわれわれのうちでふみ砕くこと、そして〈われわれ〉を破壊することこそ、必要なことであり、ほとんど義務とさえ言っていい……

もしきみに、この時代とともに堕落し、それと同じだけ、低く遠く行くだけの力がないのなら、時代に理解されないといって嘆いてはいけない。とくに自分を先駆者であると思ってはいけない。この世紀にはおそらく光はないだろう。もしこの世紀にどうしても何か新しいものを持ち込もうとするなら、夜の闇をさぐってみるがいい。さもなければそんな職業をあきらめるかだ。

いずれにしても、きみに対して私が厳しい調子で物を言うことを責めないでくれ。私の確信は言い訳なのだ。どんな権利をもって、きみにそれを押しつけることができるだろう？　ためらいについては同じではない。それは私が発明するのではない。それを信ずる。我にもあらず信ずるのだ。きみに、このような当惑せざるをえない教訓を垂れたのはきみのためを思ってのことであり、本意ではないのだ。

冒険としての文体

純粋に言語的な思考の技術に慣れていた詭弁家たちは、言葉について、その意味と富について、また推論の運びにおいて言葉に帰せられる機能について考えた最初のものたちだった。自己内の目標として、内在的な究極として認識された文体の発見の主要な第一歩が踏み出されたのだ。あとは、この言葉の探求を転位させ、それに対象として文章の調和を与え、抽象の遊戯のかわりに表現の遊びを置くだけでよかった。表現手段について考える芸術家は、つまり詭弁家たちの恩恵を受けているのだ。この両者には体質的に共通したところがある。彼らはそれぞれちがう方向に、同一の種類の活動を追求している。彼らは〈自然〉であることを捨てて、言葉の機能の中に生きる。彼らにおいて本源的なものは何もない。経験の源と彼らのあいだにつながりはないのだ。いかなる素樸さも、いかなる「感情」もない。詭弁家は考えるときにも、あくまで自分の思考を支配して、自分の欲するとおりのものにしてしまう。詭弁家は思考に引きずられたりすることはなく、それを自分の気まぐれ、ないし計算に従って動かす。彼は自分の精神に対して戦術家のよ

うにふるまう。じっくり考えこんだりすることはない。抽象的で人工的なプランに従って、知的な作戦を練り、概念の中に切りこむ。弱点を発見したり、それに思いのままに固さや意味を与えることができると得意になる。「現実」には少しも迷わされることがない。現実は、それを表現し、支配する記号に依存していることを承知しているからだ。

芸術家もまた、言葉から経験へ向かう。〈表現〉のみが、芸術家にとって可能な、唯一の本源的な経験となる。形式上の作戦の均衡や、組み立てや、仕上げが、自然な環境を形づくる。彼はそこに住み、そこで呼吸する。そして、言葉のあらゆる可能性を汲みつくそうとするあまり、表現よりも、むしろ表現性のほうに傾いてゆく。彼が生きている閉ざされた世界の中では、ひとつの遊びが想定するたえざる革新によらなければ不毛性をまぬがれることはできない。そこでは、ニュアンスが偶像的なひろがりを獲得し、素樸な芸術には考えられないような、言葉の錬金調合が可能になる遊び。このような任意的な活動は、経験の対極に位置すると同時に、逆に知性の極限にも近づく。そして、それに奉仕する芸術家は、文学の詭弁家となる。

精神の生において、文字が自動的な原則として立ちあがり、宿命となる瞬間がある。言葉が、哲学的観想の中でも、文学創造の中でも、その力と虚無とを表わすのはそのときだ。

★

一人の作家の生き方は、生理的に制約される。彼には切実で、てこでも動かない固有のリズムがある。サン＝シモンのような作家が、意識的変容によって自分の文章の構造を変えたり、簡潔さ

を目指して、自分を切りつめたりすることは考えられない。彼においては、からみ合い、繁茂し、動きまわる文章の中に手足をのばすことをあらゆるものが要求する。構文法の要求は、あたかも苦痛か妄念かのように彼についてまわったにちがいない。息、呼吸のリズム、息切れ、それらが彼に、言葉の堅さと垣根を強要するような、流動的で豊かな動きを求めていたのだ。彼には、フランス語を特徴づけるフルートの音色とは、はなはだしく異なったオルガン的な側面があった。そこから、あの、〈終止符〉を恐れ、たがいに重なりあって、回り道を重ね、終結することを嫌う総合文が生まれる。

そのまったくの対極として、ラ・ブリュイエールを考えてみるがいい。彼は文章の境界を明確にすることに細心の注意を払って、文章を細分し、切りつめ、停止させる。セミ・コロンが彼の妄執だ。彼の魂の中には句読点がある。彼においては、意見にしろ、感情にしろ、みな〈堅実〉だ。彼は、意見、あるいは感情を、かき立てたり、刺激したり、興奮させたりすることを恐れている。息が短いから、その思考の輪郭ははっきりしている。彼は自分の性質より遠くに行くよりは、その内側にとどまろうとする。彼はその性質の中で、知性の嘆息にぴったりした言葉と、才能とを結びつける。したがって、彼の性質にとって、頭脳的でないものは疑わしいか、無なのだ。それは完璧さを求めるあまり、無味乾燥を余儀なくされ、『イーリアス』も、『聖書』も、シェークスピアも、『ドン・キホーテ』も、吸収もできなければ翻訳もできない。その完璧さは、あらゆる感情の重荷を捨て、その起源からも遠ざかり、根源的なものであれ、宇宙的なものであれ、

人間に先行するすべてにも、それを超越するものにも扉を閉ざしている。しかし、『イーリアス』や、『聖書』や、シェークスピアや、『ドン・キホーテ』は、人間現象の上下双方に同時に存在する、一種、素朴なる全知に関わるものなのだ。フランス語は、崇高なもの、恐ろしいもの、冒瀆、あるいは叫び、そういったものに近づくとき、それらを修辞法によって変質させてしまう。それはまた、錯乱にも、生のユーモアにも適していない。その厳格さには、アキレウスも、プリアモス（トロイア最後の王）も、ダヴィデも、リア王も、ドン・キホーテも、みな息ができなくなり、馬鹿か、まぬけか、異常な存在になってしまう。しかし彼らは、どんなに異なっていても、いまなお〈魂〉の世界に生きつづける。——それこそ彼らの共通項なのだ。——ところで、そのような〈魂〉が自己を表現するためには、ひとつの忠実な言語が必要なのだ。反射的で、瞬間に結びつき、非具象的ではない言語が。

★

即興や混乱が好きで、明快さに適していないために、行き過ぎやあいまいさに向かう傾向のある奔放な外人を考えてみよう。彼が、造形性のために無制限の力を持っているように錯覚させる言語をいくつか学んだのちに、フランス語におずおずと接近したら、そこに救いの手段ないし、苦行と治療法とを見ることがあるだろう。彼はフランス語を使っているうちに、その過去から回復し、それまでしがみついていた、いっさいの暗い基盤を犠牲にすることができるようになり、単純になり、〈他者〉になり、自己の異常さを捨て、かつての迷いを超越し、いっそう良識や理

性に合致するようになる。それに理性を持たなかったら、誤用であれなんであれ、理性の訓練を要求するような道具を使いこなすことができようか？　このような言語の中で、どうやって狂者に、――あるいは詩人に――なることができるのだろう？　この言語の言葉はすべて、それが伝える意味作用に精通しているように思える。明晰な言葉。それを詩的な目的のために用いることは、ひとつの冒険、ないし殉教にもひとしい。

「それは散文のように美しい。」この上もないフランス語の機智ではないか。世界は文章の分節に限定される。〈唯一の現実としての散文〉、対象からも世界からも解放されて、それ自身の中に引きこもった語彙、外界から分断された自己の中の音の響き。それ自身の最期にまで追いつめられた言語の、悲劇的なイプセイテ（形而上的個別性）。

★

こんにちの文体を考えると、なぜ、そんなに堕落したのか不審に思わないわけにはいかない。芸術家が書くのは、自分自身のためか、さもなければ、それについてはいっさい明確な観念を持てない大衆のためなのだ。ひとつの時代に拘束されている彼は、その特徴をつかみとろうと苦心する。しかし、この時代には、当然のことではあるけれど、〈表情がない〉。彼はだれに向かって語りかけるべきか、わからない。読者というものが考えられない。十七世紀と、そのつぎの世紀と、そのつぎの世紀には、作家は狭いサークルを目の前にしていて、そこでは何を要求されるか、それはどの程度の繊細さや鋭さを持っているかも知っていたものだ。そこでは、作家は自分の可能

性の中に閉じこめられていて、明文化されてはいないものの、現実のものであることにちがいはない趣味の規則をのがれることができなかった。こんにちの批評家のそれより、ずっと厳しかったサロンの批判は、完璧で小粒の、かつ、優雅さと、細かさと、有限なきものに拘束された才能のみを発達させたのだ。

趣味というものは、ひま人たちが文芸にかける圧力によって形成されるものだ。それはとりわけ、社会が十分に洗練されていて、文学に影響を与えることができる時代に形成される。かつては、たったひとつの隠喩の失敗のために作家が失墜し、たったひとつ単語を不適当に使ったために某アカデミー会員が面子を失い、遊び女の前で言った機智のひと言で地位、それも修道院長とか(それがタレーランの場合だ)、を獲得したこともあったと考えると、そのころと現在のへだたりがどのようなものであるかがよくわかる。趣味の恐怖時代は終り、それとともに文体の迷信も終った。それを嘆くのは滑稽である以上に無用なことだ。われわれの背後には、かなり堅固な通俗性の伝統がある。芸術は、それに満足し、忍従するか、あるいは、まったく主観的な表現に孤立するかしなければならない。万人のために書くか、あるいは、だれのためでもなく書くか、めいめいが自分の本性にしたがって決めなくてはならない。しかし、どの立場をとろうとも、その進む道の上に、かつては趣味の欠如であったはりぼての化け物に出あうことはまちがいがない。

★

散文におけるビールス、詩的文体は、それを分解し、崩壊させる。詩的散文は病気にかかった

散文だ。それ以上に、そんなものはもうだいぶ前から時代遅れになっている。ひとつの世代が好んだ隠喩は、次の世代には滑稽に見える。われわれがサン＝テブルモン（一六一四頃—一七〇三、『格言集』ほか、懐疑的、自由思想家。）とか、モンテスキューとか、ヴォルテールとか、スタンダールとかを、現代の作家のように読むのは、彼らが抒情とか、イメージ過多症といった罪を犯していないからだ。散文というものは、調書にも使われるものだから、散文家は、最初の感動を抑え、誠実たろうとする誘惑に打ち勝たねばならない。あらゆる趣味のあやまちは「心情」から来る。〈大衆〉は、感情の爆発や行きすぎに対して、われわれに責任をかぶせる。しかし、実際は、感情ほど庶民的なものはないのだ。

★

目に見えない束縛の総体であり、調合と割合いの感覚、われわれの能力に対する監視、分別、言葉に対する羞恥、それらの総体である趣味というものは、「深遠」であろうとする狂気にいささかも冒されず、ある種の無気力に自分の力を一部、委ねてしまうような作家に固有のものだ。言うまでもないことだが、このような種類の作家を現代に見つけることはできないだろう。人間が、みごとにうわべだけでありえた時代は永遠に過ぎ去ってしまったのだろうか？　繊細さの衰退は、文体の衰退をもたらさずにはおかなかった。絵画的で複雑であった文体は、その本来の富の重さのもとに崩れ去るのだ。もし罪があるとしたら、だれの罪なのか？　おそらくそれはロマン主義の罪だろう。しかし、ロマン主義自体にしてからが、全体的な下降の結果にしかすぎなかったのだ。〈繊細さを犠牲にした〉解放の努力の。本当のことを言えば、十八世紀の洗練は、月

並か、気どりか、硬化症におちいらずには永続できないものだったのだろう。

★

坂をころげ落ちる国では、あらゆるものが衰退してゆくものだ。「あらゆる堕落は、個人のものであれ、国家のものであれ、言語の中における厳密に計算された堕落によってただちに予告される」、とジョゼフ・ド・メーストルは言っている。われわれの欠乏は文字の上に感染してゆく。ひとつの国家について言えば、ますます不確実になってゆく本能が、あらゆる領域において、その国を不確定のほうに導いてゆく。フランスは、この一世紀間に、かつての完璧な理想を捨てた。ローマ帝国においても、それは同じだった。その勢威の退潮は、ラテン語が無味乾燥になってゆくのと時を同じくしていた。本来の能力に反する教義や夢に柔順に仕えていたラテン語は、公会議が利用する道具になっていった。タキトゥスの言葉は変形され、陳腐になり、三位一体についてのアホダラ経を担うように強いられたのだ！　言葉は数多の帝国と同じ運命をたどってゆく。

フランス語は、普遍的なものになりうる冷たさと透明さを、サロンの時代に獲得した。その後、複雑化し、自由を獲得しはじめたときに、その堅牢さは打撃を受けざるをえなかった。そしてついに、普遍性を犠牲にして、フランス語は解放されたのだ。その、過去と本性の対極へ向かう歩みは、フランスのそれと同じだ。避けがたい二重の崩壊。ヴォルテールの時代には、だれもが、みなと同じように書こうとつとめた。しかも、だれもが完全な言葉を書いていたのだ。こんにち、作家は独自の文体を持とうとし、表現によって自分を他と区別しようとする。しかしそれは、言

語を解体すること、言語の規則を冒し、その構文と、みごとな単調さをくつがえすことによってしか到達できない。このような展開からのがれようとするのは愚かなことだ。人はみな、知らずにそれに力をあわせている。文化的な死刑を覚悟しなければ、それを避けることはできない。フランス語が衰退してゆくときに、われわれはフランス語の運命と一体であることを宣言し、それが広げてみせる深みと、限界の羞恥心を打ち破ろうとする熱狂とをともに利用しよう。その美しい秋、その最後の光線に非難を向けることほど無駄なことはない。言葉がそれぞれ勝手な意味に使われ、あらゆる拘束から解放されている時代に生きていることを喜ぶべきだろう。そのような時代には、意味作用など、必要でもなければ、妄執にもならない。そこにいささかの疑いもない。われわれはいま、ひとつの言語のみごとな崩壊を目前にしているのだ。そこに未来はあるのだろうか？　もしかしたら、何度か、繊細さが立ち直ってみせるかもしれない。あるいは、そのほうがもっとありそうなことだが、昔のものよりいっそうひどい、新しい公会議の用語となりはてるかもしれない。さもなければ、あっという間に死に果てる運命だろう。それが荒廃への道を歩もうと歩むまいと、その語彙がひとつ、またひとつと、最後の活力までも失ってゆくのを見ることに変わりはない。散文の天性は、ほかの言語のほうに逃げてゆくのだろうか？

★

言葉の国であるフランスは、言葉に対して持っている心づかいによって確立されたのだ。そのような心づかいの跡は、いまも残っている。一九五〇年に、ある雑誌が、過去半世紀の総決算を

して、それぞれの年の最大の事件を並べたことがあった。ドレフュス事件終結、カイザーのタンジュ訪問、等々……一九一一年の分としては、たんに、「ファゲ（アカデミー会員、文芸批評家）、malgré que（〜にも関わらず）を承認」とだけ記してあった。ほかの国で、はたして言葉について、これほどの心づかいをするだろうか？　言葉の日々の生について、その存在の些細なできごとについて？　フランスは言葉を、その悪徳に至るまで、しかもその対象を犠牲にしてまで愛したのだ。フランスは、人間の知覚能力については、かなりの疑いを持っていながら、その疑いを〈作りあげる〉能力については、少しも疑わず、その結果として、真実そのものと、真実に対して抱く警戒の念を翻訳するやり方とを、同一視するのだ。あらゆる繊細な文明において、現実と言葉の間に根本的な分離作用が働く。

絶対の中における衰退について語ることは、何も意味しない。衰退は文学と言語との双方に結びついているものだから、その双方ともに属していると感じる人間にしか関係のないものだ。フランス語はだめになってしまうのだろうか？　フランス語を、唯一で、かけがえのないもののように考える人だけがそう心配する。そんな人たちにとっては、将来、もっとほかの、使いやすく、これほどうるさくない言葉が発見されるかどうかということは、どうでもいいことなのだ。ひとつの言語を愛するとき、その言語の死後まで生きのびることは不名誉なことだと言っていい。

★

この二世紀のあいだ、あらゆる独創的な才能が、古典主義に対してのろしをあげてきた。しかし、それに対しては、どんな形式も定式もまるで生まれてきていないのだ。既存のものを吹き

とばすこと、それこそが近代精神の根本的な傾向であるように思われる。芸術のいかなる分野においても、すべての様式が〈文体〉に対して確立されている。われわれが自分自身についての認識を持つのは、理性や、秩序や、調和の観念を侵蝕することにおいてなのだ。ロマン主義は、もう一度、それについて語るなら、もっとも実り豊かな解体へ向かう衝動にしかすぎなかった。古典主義の世界はもはや効力を失っている。それは、われわれから払いおとさなくてはならない。そこに、未完成という観念を示唆しなくてはならない。「完璧さ」は、もはや、われわれを困惑させることはない。生活のリズムが、そのようなものを感じなくさせてくれるのだ。「完璧な」作品を生み出すには、〈待つこと〉、すなわち、作品の内部で、それが世界に取って代わるときまで生きることを学ばねばならない。それは、なんらかの緊張の産物であるにはほど遠く、受動性の結実と、長期間にわたって蓄積された精力の成果なのだ。しかしわれわれは、自分を消費する留保なしの人間であり、それによって不毛であることもできず、自動的に制作活動に入り、すべての作品を未完成に終らせる用意のできているものなのだ。

★

「理性」は、たんに哲学の中でだけ死ぬわけではない。それは芸術の中でも死ぬのだ。ラシーヌの描く人物たちは、あまりに完全で、ほとんど考えられない世界に属しているように思われる。フェードルに至るまで、「私の美しい苦しみを見るがいい。私はおまえたちが同じような苦しみを覚えることを許さない！」と言っているように思われる。われわれはもはや、そんなふうには

苦しまない。われわれの論理はその様相を変え、もはや明証性なしにもすむことを学んだのだ。そこから、あいまいなものに対する情熱と、行動と懐疑のあいまいさが出てくる。われわれにおいて、疑いは、確信との関係において規定されるものではなく、もうひとつの、もっと〈しっかりした〉疑いとの関係において規定される。つまりその疑いを、もう少し柔軟にすること、もう少しひ弱にすることなのだ。ちょうどわれわれの計画が、なんらかの真実を確立することには関心がなく、仮構の階級制度、錯誤の段階を作ることであったように。われわれは「真実」というものの限界と、それがわれわれの気まぐれや新しいものの探索にブレーキをかけることを憎悪する。ところで古典主義とは、唯一の方向に、その深化の作業を続けながら、新しいものや、独創的なもの、それ自体を警戒していたのだ。

われわれは、精神がその法則や、昔ながらの必要性を犠牲にしなければならないとしても、どんなことをしても空間を求める。それにもかかわらず、所有しなくてはならないいくつかの明証性を、われわれは現実には信じていない。それは、ただの目標なのだ。われわれにおいては理論も態度も、皮肉によって命を与えられている。そして、どうしてわれわれが、本来の歩みとちがった前進をするのかを、生命力の根源のところで説明してくれるのも、その皮肉だ。

あらゆる古典主義は、自分の中に法則を見出し、それに執着する。それは歴史のない現在の中に生きる。そのようにして、たんにわれわれの文体だけではなく、時間も破壊されてゆく。われわれは平行的に思考を破壊せずには時間を破壊できなかったのだ。われわれの観念は、たえずわ

れわれ自身といさかいを続け、いまにもたがいに破壊しあってちりぢりになろうとしている。それは、われわれの時間同様、こなごなになってゆく。

★

作家の生理的なリズムと、その表現方法のあいだに関係があるのなら、当然、その時間的な世界と、文体とのあいだにも、もっと強い関係があるだろう。古典主義の作家は、直線的な、涯のない時間の住人であり、時間の境界をこえることなどなかったのに、どうやって、あのようにぎくしゃくと、ごつごつした文章を書くことができたのだろう？ 彼は言葉を節約して、そこに永遠に生きつづける。それらの言葉が、彼にとって永遠の現在を反映していた。この完成の時間すなわち彼の時間を。しかし、時間の中に、もはや場所を持たない現代作家は、痙攣的な、てんかん性の文体を好まねばならない。このような状態に落ちいっていることを、われわれは嘆くことはできる。また、かつての偶像を踏みにじることで生じる被害を、悲しみをもって測ることもできる。しかし、いわゆる「理想的な」文章に同意することはできない。「気どった文章」に対する不信は、ある種の文学全体に及ぶ。「魅惑」を弄んだ文学、誘惑の手管を用いた文学。それらを、いまでも用いる作家たちの文学は、ちょうど、彼らが過ぎ去った時代を永続させようとするかのように、われわれを当惑させる。

あらゆる種類の文体崇拝は、現実が、その言語的形象より、なおいっそう空疎であるという信仰から出発している。ひとつの観念の音色は、観念そのものより勝り、巧みに作り出された口実

は確信よりも、練りあげられた表現は反射的な感興より勝っているという信念から。それらは、詭弁家、文芸の詭弁家の情熱を表わしている。均斉がとれた文章、その平衡に満足し、音響性に得意になった文章のかげに、あまりに往々にして、〈感動〉をもって本質的な世界に近づくことのできない精神の、居心地の悪さが隠されている。文体が、同時に、ひとつの仮面であり、告白であることより驚くべきことがあるだろうか？

小説のかなたに

芸術家が、あらゆる欠点を総動員して、〈自分を隠すような〉作品を作っていた時代には、私生活を人目にさらすなどということはまったく考えられないことだった。ダンテやシェークスピアが、自分の実生活の細状を記録して、他人に周知させるなどということは、思いもよらないことだった。おそらく彼らは、自分たちの姿について、まちがったイメージを与えようとさえしただろう。彼らは、現代の知能欠陥者たちが持たないような、強大な羞恥心を持っていた。日記と小説は同じ誤ちを犯すものだ。一人の人間の生活が、どんな興味を引きおこせるのだろう？ほかの本から出発する本や、ほかの精神に頼る精神に、どんな興味を抱きえよう？私は、文盲と接触したときほどの真の興奮、あるいは、存在の戦慄を、その後、感じたことはない。カルパチアの牧夫たちが与えてくれた印象は、ドイツの教授たちや、パリの抜け目のない人たちの印象とは、別種のものだった。スペインで出会った乞食は、伝記を書いてみたいほどの人物だった。彼らにあっては、生活を作り出す必要など少しもないのだ。彼らは〈実存〉していた。それこそ、

文明人にはけっして起こらないことだ。なぜ、われわれの祖先が、洞穴の奥深くじっと閉じこもっていなかったか、どうしても理解に苦しまざるをえない。

だれでも、自分にはひとつの宿命があると思う。だからだれでも、自分の宿命を描くことができる。心理学がわれわれの本質を明らかにしてくれるのだという信仰は、われわれを行為に結びつけ、また、その行為には本質的、ないし象徴的な価値があるのだという考えに結びつけてくれた。そのあとで、この「コンプレックス」の知ったかぶりがやってきて、なんでもないことを大げさに考えることと、彼らに眩惑されること、そして、彼らには、明らかに欠けている能力と深さを、われわれの自我に与えるすべを教えてくれたのだ。それでも、われわれの無能さに対する内的な認識は、それによって、ほんの一部しか揺るぎはしなかった。自分の私生活を探究する小説家は、たんにそれを信じているふりをしているのだということ、そこで発見する秘密には、いかなる敬意も持っていないことを、われわれは十分に感じている。作家もそのことはよく承知しているし、われわれ読者は、なおいっそうよく知っている。作家の作る人物たちは、裏側の人類、抜け目なく、虚弱で、手管と工作を弄すれば弄するほど、疑わしく見える人類に属している。〈世故〉にたけたリア王など、想像することもできない。……小説の通俗的な面、成り上がった面が、彼らの顔立ちを固定する。宿命の失墜、大文字では書かれなくなった運命、ありそうもない不幸、落ちぶれた悲劇。

不運を、永遠の財産、父祖伝来の資産として背負った小説の人物が、悲劇のヒーローのかたわ

らに登場する。なんとか身を滅そうと汲々とし、しかも、どうしてもそうできないことにふるえ戦く破壊の志願者、恐怖の行商人。彼は、自分の不幸に確信が持てず、そのことで苦悩する。作家なら彼を救えるだろうというのが、われわれの印象だ。それが居心地の悪さを覚えさせ、読書の楽しみをこわしてしまう。こう言ってよければ、悲劇は、ひとつの絶対的な局面の上に展開する。悲劇作家は、その主人公に対していかなる影響も及ぼせない。作家は、主人公の召使いであり、道具でしかない。命令をするのは主人公のほうで、彼らの行為、動作の調書を書くように作家に命ずるのも彼らなのだ。主人公は、彼が口実にすぎないような作品においても、それを〈支配する〉。そして、こういった作品は、われわれには、作家にも、心理の葛藤にも関係のない現実のように思えるのだ。われわれが小説を読む読み方は、それとは、まったく、ちがっている。小説家のことを、われわれはたえず考える。その存在が、われわれにとりつく。作家がその人物たちと格闘しているのが見える。とどのつまり、彼だけが、われわれを必要とするのだ。「作中人物のほうはどうするのだろう？　どうやってやっかいばらいするのだろう？」と、われわれは憐れみのまじった困惑を覚えながら考える。バルザックは、彼の〈落伍者〉たちで自分のシェークスピアを作ったのだと言うことができたとしても、もっと色あせた人間の典型を、研究しなければならない、現代の小説家たちについては、どう考えたらいいのだろう？　小説の人物たちは、宇宙的な霊感を失って卑小化し、その知識と、透視の意志と、「性格」の欠如との破壊的な効果に匹敵することができないのだ。

すぐれて現代的な現象が、〈知的芸術家〉の出現において見られる。かつての芸術家たちが、抽象や繊細さに向いていなかったというのではない。彼らは、作品の中心に一挙に腰を拠え、作品をあまり考えもせずに、また、理論や、方法についての考えにわずらわされずに、作っていたのだ。まだ新しいものだった芸術が、彼らを〈担っていた〉。いまはもうそうはいかない。どんなに知的能力の狭い芸術家も、何より審美家であり、霊感についても、その外側に位置し、それを準備し、それに断固として従う。詩人は、自分の作品を注釈し、説明しても、われわれを納得させることはできないから、発明し、新しくなるためには、自分にはない本能を模倣する。詩という観念が、詩の材料になり、その霊感の源となったのだ。詩人は〈自分の〉詩を歌う。重大な過失、詩的ノンセンス。詩学によって詩をつづることはできない。疑わしい芸術家だけが芸術から出発する。本当の芸術家は、ほかのところにその材料を捜す。たとえば自分の中に。……現在の「創作者」と、その苦しみや不毛性のかたわらに置くと、過去の作家たちは健康によって失墜するようにさえ見える。彼らは、こんにちの作家のように哲学によって無力化されることはなかった。だれでもいいから、画家や、小説家や、音楽家に聞いてみるがいい。いかに〈問題〉が彼らを蝕んでいるか、いかにその問題が、その根本的な刻印である不安を与えているかがわかるだろう。彼らはまるで、その企画や運命の戸口にとどまるべく罰せられたかのように、手探りをする。こんにち、このような、知性の過剰をまぬがれることはだれにもできない。その程度に応じて、本能も付随的に堕落する。記念碑的なもの、反射的な偉大さはもう不可能だ。逆にカテゴリーの

水準において、〈人の注意を引くもの〉が増大してくる。芸術を作るものは個人であって、もはや、芸術が個人を作るのではない。ちょうど問題になるのが作品ではなく、それに先行し、あるいはその後に従う注釈であるように。そして、一人の芸術家が作りうる最良のものは、完成させ得たかもしれぬものについての観念なのだ。芸術家は自分自身の批評家になる。ちょうど普通の人が自分の心理学者になるように。これほど自己の意識の強かった時代はあるまい。このような視点からすると、ルネサンスは野蛮に見え、中世は先史的にさえ見える。この前世紀までが幼稚に見えてしまうのだ。われわれは、その点、自分たちのことをよく知っている。それなのに、われわれは何物でも〈ありえない〉のだ。われわれには素樸さや、新鮮さや、希望や、愚行が欠けている。われわれの最大の持ちものは、「心理学的感覚」だ。それが、われわれを自分自身の観客に変えてしまった。われわれの最大の持ちもの？　われわれに形而上的な能力が欠けているなら、それはたしかにそのとおりだろう。それが、われわれにとって感知しうる唯一のジャンルの深みであるように。しかし、われわれの、あらゆる「内的な生」は、心理学を超越したところでは感情の天気予報のような様相をとる。それがどんな高低を示そうと、何も意味しないのだ。亡霊の曲馬、外見だけの競技場になど、どうして興味が持てよう？　また、『見出された時』のあとで、自我を要求したり、自分の秘密に賭けたりすることがどうしてできようか？　"hollow men"、すなわち空虚な人間たちの予言者は、エリオットではなく、プルーストなのだ。彼は記憶の作用によって、われわれを未来に対する勝利者にしようと努める。記憶作用がなくなったら、もはやわ

われわれには、段階的な崩壊のリズム以外、何も残らない。そのとき虚無化を拒否することは、自分に対する非礼と同じことになるだろう。だれも被造物の身分には満足しない。われわれはそのことを、プルーストからよりも、マイスター・エックハルトによって、よく知っている。プルーストとともに、われわれは時間による空隙の愉悦の中に入り、エックハルトとともに、永遠によるそれに入るのだ。心理学的空隙と形而上学的空隙。一方は内省の究極であり、他方は瞑想の究極だ。「自我」というものは、自分の内奥を探らないものの特権になる。しかし、この、神秘家たちにとっては豊穣な極限である自我の内奥は、作家にとっては好ましくないものだ。プルーストが、彼の作品と、それをしめくくるヴィジョンののちまで生きのびるなどということは考えられない。それに彼は、心理学的な繁瑣主義を、無用で、いらだたしいものにしてしまった。長い目で見れば、分析の異常発達は、小説家にも、その作中人物にも、ともに迷惑なものなのだ。性格や、作家が巻きこまれている状況を無限に複雑化してゆくことはできないだろう。それはすべて知られてしまっているし、少なくとも、予測することができるのだ。

倦怠より悪いものはただひとつしかない。すなわち倦怠の恐怖だ。私が小説をひもとくたびに覚えるのは、この恐怖だ。私には主人公の性格など興味がないし、それに同意することもなければ、いかなる方法でも、それを信じることもない。小説というジャンルは、その本質を濫費し、もはや対象を持たない。作中人物は死に、物語の筋も同じく死んだ。そこで興味を引く唯一の小説は、世界が確認されたのちには、何ごとも起こらないような小説だけだということは、

意味のないことではあるまい。そこでは作家でさえ姿が見えないように思える。それらは、みごとなほど解読不可能な小説で、頭もなければ尻尾もなく、最初の文章で終ってしまってもいいし、数万ページになってもいっこうにかまわないように思える。そういった小説についてひとつの問いが浮かんでくる。たったひとつの経験を際限もなくくり返すことができるものだろうか？　素材のない小説を書くこと、それは結構だ。しかしそれを、十も二十も書いて何になるのだろう？不在の必然性を提起したのちに、どうして、その不在を水まししたり、それに満足したりできるのだろう？　このような種類の作品を暗黙のうちに認識することは、存在の目減りに対して、虚無という無尽蔵の現実を対比させることになる。このような考え方は、論理的にはなんの価値もなくとも、少なくとも感情的には価値があると言える。（虚無について、感情以外の言語で語ることは時間の無駄だ）。それは裏づけのない探求、無限の空無の内部における経験を要求する。それは、感動を通して感じられ、考えられた空無性だ。それはまた逆説的に、固定され、動きをなくした弁証法、すなわち単調さと空無の機構を要求する。それこそまさに堂々めぐりではないだろうか？〈非・意味作用のよろこび。〉崇高な袋小路。不在を神秘に変えるのではなく、神秘を不在に変えるために不安を用いること。無効な神秘、それ自身にすがり、背景もない神秘、それは、それを思いついたものをノンセンスの啓示のかなたまで連れさってゆく力もない。

物語も対象も抹殺した叙述は、知性の苦行、すなわち、〈内容を欠く〉瞑想に対応する……精神は、それによって精神が精神たりうる行為に限定され、それを出ることはない。精神のすべて

の活動は、自己、あるいは、事物に関りあうことをさまたげる停滞的な回転に還元される。いかなる認識も、いかなる行動もない。内容のない瞑想は、不毛と拒否の礼讃だ。

時間の外に出る小説は、空間的な広がりを捨て、その機能を放棄する。二度くり返すことは滑稽な英雄的行為だ。自分の妄念を疲れさせ、探求し、いやというほどくり返して言う権利が、われわれにあるだろうか？　こんにちの小説家で、神を超越してしまった神秘家を思わせるものは一人にとどまらない。その地点まで、ということはどこでもないということになるが、そこに達してしまった神秘家は、もはや祈ることができない。というのも、祈る対象より、ずっと先に行ってしまったからだ。それなのに、小説を越えてしまった小説家は、どうして小説を書きつづけるのだろう？　小説の魅力はそれほど強くて、それを解体しようと努力するものまで屈服させてしまうのだ。物語や心理学の妄執を、小説より以上によく翻訳できるものがあるだろうか？　時間的現実の中で精根尽き果てるときには、その人間は小説の作中人物、その主体でしかなく、それ以上ではない。つまりは、われわれの同類ということだ。それに、小説など、形而上学の盛んな時期には考えられないものだっただろう。たとえば中世とか、ギリシャとか、インドとか、中国の古典時代に、小説が盛んであったとは考えられない。なぜなら形而上学的経験は、年代記や、われわれの存在の様式を飛び越えて、絶対との親密な世界に生きるからだ。小説的人物は、その絶対にどうしても到達することができず、あこがれるばかりだ。小説的人物が、なんらかの宿命を手に入れるのは、この条件の下のみであり、その宿命が文学的に有効であるためには、未完

の形而上的経験を必要とする。あえて付け加えれば、意識的に未完の。それはドストエフスキーの人物たちについてさえ言いうることだ。彼らは救われることができずに、失墜を待ちのぞみ、神と偽りの関係を保つかぎりにおいて、われわれの興味を引く。彼らにとって聖性とは、大いなる苦しみの口実、混沌の付け足し、よりよく崩壊するための回り道にしかすぎない。聖性を持っていたら、彼らは作中人物たることをやめねばならないだろう。彼らは、それを押しのけるために、また自己の中に落ちこむ危険を味わうために、それに違反する。てんかん病みの貴公子が物語の中心に位置を占めるのは、失意の聖人としての資格においてだ。聖性の〈実現〉は小説の技巧と相い容れない。聖人というより天使に近いアリオシャの純粋さは、宿命の観念を呼びおこさない。それなのにどうして、ドストエフスキーが、この人物を『カラマーゾフの兄弟』の続篇の中心人物にすることができたのか、よくわからない。物語の恐怖である天使は、障害物であって、小説を殺してしまうものでさえあるのだ。それでは、語り手の領域を失墜の以前にまでひろげてはいけないと考えるべきだろうか？　小説家にとって、それは奇妙にも本当のようだ。小説家の使命と、効用と、唯一の存在理由は、地獄を模倣することなのだから。

★

私は、小説を終りまで読めないという栄誉を求めはしない。私はたんに、小説の横柄さと、それがわれわれに与える習癖と、われわれの関心の中に占める位置に腹を立てるのだ。さまざまな仮空の人物をめぐる議論に、何時間もつきあわされることくらいたまらないことはない。これは

よくわかってほしい。私の読んだ本の中で、もっとも偉大なとは言わないが、もっとも感動的であったものは小説だったのだ。そうだからと言って、小説を生みだす幻影を憎んでならないことはない。希望なき憎しみ。なぜなら、もうひとつの世界、この世以外のあらゆるものをあこがれても、その別世界にはけっして達しないことを私はよく知っているからだ。自分の「経験」よりも上位の原則に立とうとするたびに、その経験が興味において原則より勝っていること、そして私のあらゆる形而上的な考えの切れはしは、私の軽薄さにぶつかってしまうことを認めざるをえなかったものだ。私はそれが正しかったのかまちがっていたのか知らないが、そのジャンル全体に責任をかぶせ、それを怒りでつつみこみ、それに私自身の障害を見、私と他者すべての崩壊の原因を見、時間からわれわれの実体にしのびこんでくるための手管と、永遠というものはわれわれにとってひとつの言葉か、ひとつの悔恨にすぎないのだということの証拠を、ついに手に入れるにいたるのだった。「みんなと同じくおまえも小説の子なのさ」、それが私のきまり文句であり、私の敗北だった。

呪いをのり越えるか、それによって罰せられるか、どちらかを覚悟しない攻撃はありえない。私は、かつての取るにたらぬ賢者より、どこにでもいる小説家のほうに、自分が内的に近いことをけっして許そうとは思わない。西欧文明、この小説の文明の詭弁に熱中した報いは、必ずやってくる。文学によって心を曇らされた西欧文明は、古代世界が賢者に与えていたのとほとんど同じほどの信用を作家に与えている。しかしストア派やエピキュロス派の哲学者を傭ったローマ貴

族は、その奴隷とともにいることで、当代の作家のものを読んでいる近代のブルジョワにはとても及びもつかない高い位置に達していたはずだ。もし、この賢者たちが、欺偽師ではないとしても、宿命とか、快楽とか、苦痛といった、あまりに使い古されたテーマばかり論じていたのだと言うなら、その種の凡庸さのほうがわれわれの凡庸さよりもまだましであり、偽の知恵のほうに、偽の小説の活動よりはいっそう真実があるのだと答えようと思う。それに、偽と言っても、詩という、もっとすぐれて、もっと現実のものがあったことを忘れるまい。あまりに明らかなことではあるけれど、手あたりしだいのもので詩を作るわけにはいかない。詩はあらゆるものに適しているわけではない。詩は気むずかしいものであり、一種の……地位を要する。詩からその富を奪うことは、なんらかの危険を伴う。論述の中に移しかえたら、これほどか弱いものはない。ロマン主義や、象徴主義や、シュルレアリスムの色彩を持った小説には、雑種的性格があることは周知のとおりである。たしかに小説というものは、本来盗作をするものであり、根本的に詩的な衝動から適当な手段を自分のものにしてしまうことをためらわないものだ。小説はその適応能力からして不純なものであり、詐欺と略奪で生きてきたし、いまも生きている。それはまた、あらゆる動機から身を売ってきた。小説は文学の売淫をしてきたのだ。いかなる儀礼の心づかいもしなければ、どんな内緒ごとでもすべて暴露する。ごみためであろうと、人の意識であろうと、まったく同じ気軽さでかきまわす。小説家は聴診と悪口をもってその技とし、われわれの沈黙をゴシップに変える。どんな人間嫌いでも、小説家なら人間に対する情熱をもっている。彼はそこ

にもぐりこむ。神秘家と、その狂気と、その「非人間性」のかたわらでは、彼はなんとみじめに見えることだろう！　それに神というものはやはり別なものだ。それを気にするのはもっともだと思う。しかし私には、人が人間にしがみつくわけがわからない。私は〈地底〉の深みを夢みる。時間が腐敗する以前の基盤、そこにおいては、神の孤独より高度の孤独が、私を私から、私の同類から、愛という言葉や、他者への好奇心がひきおこす冗長さから引き離してくれるようなところを。私が小説家を非難するのは、何かの材料、あるいは、われわれ全員を取り扱いながら、われわれよりも冗長になり、また冗長でなければならないことなのだ。それでもひとつの点においては、彼らのことも認めよう。つまり、冗長さを犯す勇気をもっていることだ。小説家の豊かさ、力は、そのおかげだ。叙事的才能は、必ず、平凡な世智と、非根本的で、付随的で下賤なものの本能とを持っている。いくらページをめくってみても、虚無がつみ重ねてあるばかり。大河詩というものが誤りであるのに対して、大河小説は、小説というジャンルの法則、そのものの中に記されている。〈言葉、言葉、言葉……〉ハムレットはおそらく小説を読んでいたのだろう。

些末な人生を反映すること、われわれの驚愕をゴシップに格下げすること、それは精神にとって、いかなる苦しみであろうか！　小説家はこの苦しみを感じない。ちょうど、「異常さ」の無意味さと素樸さをそれ以上に感じないように。物語られる価値のあるような事件が、はたしてひとつでもあるのか？　私がだれにもまして数多くの小説を読んでいる以上、それは不条理な問いだ。しかし、それもほんの少しでもわれわれの意識の上に時がたち、われわれのうちに沈黙しか

残らないならば、すじ道のたった問いになるかもしれない。われわれを存在と、この、実存が規定される各瞬間の領域にひろがる、認識不可能性とからひきはなす沈黙。

★

〈意味〉というものは時代遅れになりつつある。製作意図が読みとれるような絵をわれわれは長いあいだみつめたりしない。わかりやすい性格の、輪郭のはっきりした音楽はやりきれない。あまりはっきりしすぎた、わかりすぎる詩は……理解しがたいように思える。明瞭さの時代は終りに近づいている。明白な真理などわざわざ口に出して言う必要がどこにあるだろう？　互いに伝達しあえるものには、そこに立ちどまるだけの必要がない。それでは、「神秘」だけがわれわれを引きとどめるのだと言えるだろうか？　神秘といったところで明証性より退屈でないわけではない。私の言うのは、われわれの時代まで認識してきた〈全的な〉神秘のことだ。われわれの神秘は純粋に形式的で、明白さによって失望した精神の頼みの綱でしかない。それは空っぽの深さであり、もはやだれもたぶらかされないような、そしてまた文学においても、音楽においても、美術においても、あらゆる種類の様式をあわせもっているような、この芸術の状態に合致した深さなのだ。折衷主義は霊感のさまたげになるとしても、一方で、われわれの視野を広げ、あらゆる伝統を享楽することを許してくれる。それは理論家を解放し、創作者を麻痺させる。それがあまりに広大な展望を見せてくれるからだ。そこにおいて、作品は、知識のかたわら、ないし外側で作られる。もしこんにちの芸術家が暗闇に隠れることがあるとすれば、それ

は彼が〈知っているもの〉によって新しくなることができないからだ。彼の知識の総体は彼をして註釈者、覚醒したアリスタルコス（前二一七〜一四五 ギリシャの文献学者）にする。独自性を保つには、知覚不能なものの中への冒険しか残っていない。そこで彼は、知識に富んだ不安な時代が強要する明証性を放棄するだろう。詩人が目の前にしている言葉は、そのどれをとっても、公式な意味においては、未来を担っていない。それらを生かそうと思えば、その意味を破壊し、語の〈誤用〉に走らなくてはならない。文芸一般において、われわれは言葉の降伏を目のあたりにしている。言葉は、どんなに奇妙に見えようと、われわれよりずっと使い古されている。そうである以上、その生命力の下降線をたどり、その過労と衰弱の程度に調子を合わせ、その死への歩みについていこう。奇妙なことだが、言葉がいまほど自由だったことはない。辞職はその勝利なのだ。現実と経験とから解放された言葉は、言葉遊びの二義性以外、何ものも表現しないというぜいたくを味わっている。この苦悶と、この勝利、われわれが関係するジャンルは、その影響を受けざるをえなかったのだ。

筋のない小説の登場は、小説に致命的な打撃を与えた。もはやプロットも人物も筋も因果関係もない。対象は追放され、事件もなくなった。それでもなお、生き残り、存在したことを思い出している自我が存続する。〈明日なき〉身の自我、無定形なものにしがみつき、小説をこねくりまわし、それをひとつの緊張に改変する自我。その緊張はそれ自体にしか行きつかない。文芸の境界における恍惚、叫びに発散することのできないつぶやき。空無の連禱とひとりごと、こだま

を拒否する分裂症的な呼び声、弱まりゆく極限への変容、それは悪の抒情も、祈りのそれも求めない極限。あいまいさの根底まで冒険をこころみる小説家は、存在しないものと存在しえないものとの地層を探り、摑みえないものを掘りさげ、それをわれわれの共犯者的な困惑した目の前にさらけ出してみせる不在の考古学者になる。自分を知らない神秘家？　まちがいもなくそうではない。なぜなら神秘家は、われわれに期待の恍惚を物語っても、その期待は、そこに定着できる対象に帰着するのだ。彼の緊張は、それ自身の外へ向かうか、あるいは、あるがままの姿で神の内面にとどまって、そこにひとつの支えと、ひとつの根拠とを見つける。緊張は、それ自身に還元されてゆき、現実の基盤がないために疑わしいものになり、心理学の興味をしか引かないようになるだろう。それでも、その緊張を支え、変容する現実が、幻であることを認めよう。そのことを神秘家は、鬱病（アケディア）の発作の中で納得するだろう。しかし、かかる源泉をもち、かかる緊張の自動性を持つ以上、彼は無定形のものに身をゆだねたり、そこに溶けこもうとするよりは、それを実体化し、それに厚みと顔を与えるのだ。彼は、自分の失墜を否認し、日々の夜を実体にではなく過程と化したあとで、もうあの興奮、あらゆるものの中でも一番つらいもの、すなわち、〈存在〉が禁じられているという感覚、存在との契約はもはやどうしても不可能だという感覚を覚えることのない地帯に入ってゆく。それに対して人は、その存在の輪郭と境界しか知らない。そのためこそ、人は作家になるのだ。ノーマンズランド（無人中間地帯）は、この種の境界と、文学の境界のあいだにひろがり、小説家は彼の最良の瞬間にそこを経めぐる。そこまで

達してしまうと、心理学は、適用されうる内容と対象を持たないために無効になってしまう。その実践と両立しない地帯に入ったのだ。作中人物が、たがいに対しても、自分に対しても機能を果たさない小説を考えてみるがいい。相手のいないアドルフとかイワン・カラマーゾフとかスワンとかを。そうすれば小説の命数がすでに尽きかけていること、それが、なおまだがんばろうとしても、死者の経歴で満足しなければならないことがよくわかるだろう。

おそらくは、もっと先へ行かねばならないだろう。ひとつのジャンルの終末をこえて、すべての、そして芸術の終末を願うこと。あらゆる出口をふさがれてしまったいま、たとえ数世代のあいだだけでも、その窮状を訴えて、競争をひと休みするのがよき趣味にかなったことではないだろうか？　競争に再び加わる前には、驚愕によって再生する必要があるだろう。すべての現代芸術が、それ自身の破壊を希望しているかぎりにおいてだが、われわれをその驚愕に参加させようとしている。

形而上学の未来とか、その他あらゆる種類の未来を信じなければいけないというわけではない。そんな気違いじみたことはとうてい考えられない。それでも、最後というものはすべて何かの約束を隠していて、新たな地平を切りひらくものであることもたしかなのだ。本屋の店先で、一冊の小説も見られなくなったら、一歩が踏みだされたと言えるだろう。——もしかしたら前へ、もしかしたら後へ……少なくとも、無価値の探求の上になりたっていた文明の全体が崩れるのだから。ユートピアだろうか？　錯誤だろうか？　原始状態だろうか？　私にはわからない。しかし、

私はどうしても、最後の小説家のことを考えてしまう。

中世の終りごろ、叙事詩が後退して、まもなく消え去っていった。その衰退を目のあたりにしていたものたちは、きっと、ほっとした感じをもったにちがいない。彼らは、まちがいもなく前より自由に息をすることができただろう。キリスト教的、騎士道的神話がひとたび力尽きると、宇宙と神の水準で考えられていた英雄物語が悲劇に先をゆずった。ルネサンスにおいて、人間は、自分の限界と、運命とに挑み、破裂してしまうまで自分自身になっていたのだ。それ以後、長く崇高なものの抑圧に耐えられなかった人間は、小説という、ブルジョワジーの時代の叙事詩、代替の叙事詩の世界にまで下がってきたのだ。

われわれの前には哲学的代用品、あいまいな象徴主義の宇宙開闢説、あやしげな幻で埋められるはずの空隙が開いている。精神は、それらで大きくひろがって、ふだんもっているものよりずっと多い材料をつめこむだろう。ヘレニズム時代や、グノーシス派の諸派の興奮を思いだしてみよう。帝国はそのはてしない好奇心から、いくつかの矛盾する体系を包含し、東方の神々を馴化させようとしたあげく、多数の教義と神話を受け入れるに至ったのだった。疲れきった芸術が、それまで別のものだった表現形式に抵抗できなくなるのと同じように、力尽きた宗教は、他のあらゆる宗教に侵略されるがままになる。古代の諸教混淆とはかかるものであり、現代の諸教混淆も同じものに他ならない。さまざまな芸術や宗教の吹きだまりになっているわれわれの空隙は、ほかの地方の偶像を呼びよせる。われわれの偶像は、あまりに年を取りすぎ、もはやわれわれを

守ってくれる力がない。しかし、どんなに、よその天空を学んでも、そこから、いかなる利益も引きだすことはできない。なぜなら、欠落と、生の原則の不在から出たわれわれの知識は、上っ面の普遍であり、粗野と恐怖の中に統一された世界が到来することを予告する支離滅裂なのだから。われわれは古代において、グノーシス派の気まぐれに対して、教理が、いかにして歯止めを与えたかを知っている。そこから、われわれの百科全書的放逸がどのような確実さに帰着するかも予想することができる。芸術史が芸術のかわりになり、宗教史が宗教のかわりになった時代の破産。

★

空しく絶望はすまい。ある種の破産は、ときには豊かな実りをもたらすのだ。小説の破産もそうだ。だからそれに敬意を表し、祝ってさえやろうではないか。われわれの孤独はそれによって力づけられ、確固たるものになるだろう。出口をふさがれ、ついにわれわれ自身にまで追いつめられたいまこそ、われわれの使命について、われわれの限界について、そしてまた生を持つことの無用さと、一人の人間になること、あるいはそれをひとつ作り出すことの無用さについて、よりよく考えることができるのだ。小説？　それは、仮象の崩壊に対する拒否であり、起源からもっとも遠ざかった地点であり、真の問題をごまかす技巧であり、そして本質的な現実と心理学的なフィクションの間に介入する幕なのだ。小説に、それを否定するテクニックや、それを不具にする雰囲気、あるいは、それを超越する要求を課して、小説と、さらには、われわれの時間の崩壊を早めるものは、すべて、いかに賞讃してもしたりないだろう。小説こそ、時間の顔であり、

本質であり、渋面なのだ。小説はそれらすべての顔を翻訳し、そのすべての表現の可能性を独占する。本来、少しもそれに向いていない多くの人々がそれを採用している。この時代に生きていれば、デカルトもおそらく小説家になっただろう。パスカルだったらこれはまちがいない。何も強要しないのに、多くの精神がそれに引きつけられるときには、そのジャンルは普遍的なものになる。しかし、皮肉屋は、それらの人々こそそれを掘りくずすのだと言うだろう。彼らは小説に、その本性とは異質な問題を持ちこみ、それを変化させ、腐敗させ、構造を破壊するまで重荷を担わせるのだ。小説の未来を心配しないものなら、哲学者が小説を書くのを見てよろこぶにちがいない。哲学者たちが文芸の世界に侵入してくるのは、きまって、そこで混乱を誘発し、その崩壊を早めるためなのだ。

★

文学が滅びるように約束されているということは、ありうることだし、結構なことでさえある。そうならば一体、問いだの、問題だの、不安だのという道化芝居が、なんの役に立つのだ？　いずれにしても、操り人形的な条件のほうに進むことは好ましいことではあるまいか？　われわれの重すぎた個人的悲しみの後には、一連の同じ形で、耐え忍ぶのも容易な、大量生産の悲しみが続くだろう。独創的な作品も、深遠な作品ももはやなく、私生活もなければ従って夢もなく、秘密もない。幸福も、不幸も、〈そこから〉出るべきところを持たない以上、意味を持たない。われわれは、それぞれ、理想的に完全で、無用なものになる。すなわち〈だれでもないものに〉。

運命の最後の日の夕暮れに……波のまにまに漂う神々を眺めてみよう。彼らはわれわれにふさわしかったのだ。哀れなものたち。われわれはおそらく、彼らより後まで生きるだろう。おそらく彼らは力を失い、姿を変え、おどおどと帰ってくるだろう。公正を期するためにつけ加えるなら、かつてわれわれと真理のあいだに立ちはだかった彼らが、立ち去ってゆくいまになっても、真実を眺めたり、それに立ち向かったりするのを禁じられていたころより、特にそれに近くなったわけではない。彼らと同じようにみじめなわれわれは、虚構の中で働きつづけ、それが正しいことのように、ひとつの幻影を他の幻影で置きかえつづけてゆく。われわれのもっともはっきりした確信は、まさに〈行動的な〉嘘にほかならない……

どんなものであれ、文学の素材は弱まってゆき、それよりいっそう限定された小説の素材は、われわれの目の前で消え去ってしまっている。それは本当に死んでしまったのか、それともたんに死にかかっているだけなのだろうか？　私にはそれを判断する能力がない。小説は終ってしまったと主張したあとで、悔恨がどっとおそいかかってきた。まだ見込みがあるのだったらどうしよう？　その場合には、他のすぐれた専門家が、どの程度の状態か正確に判断してくれればいい。

神秘家の営み

体系以外ならどんなものでも目指した精神の、錯綜した思想を整理してまとめた書物、そんなものほど腹立たしいものはない。ニーチェの思想などに、それがひとつの中心的なモチーフのまわりに転回しているからと称して、見せかけのまとまりを与えることがなんの役に立つのだろう？　ニーチェというのはさまざまな態度の総体だから、彼に秩序や、まとまりの考えを与えようとすることは、彼をおとしめることになるのだ。彼は、自己の気分のおもむくままに、その変動を記録したのだ。その哲学は、気まぐれについての瞑想だから、学者たちがそこから、その哲学が拒否している常数を引き出そうとするのはまちがっているのだ。

体系についての執念は、神秘家たちの研究に適用されるときには、かなり疑わしいものになってくる。それも、自分の考えを整頓しようとしていたエックハルト師についてはまだ通用する。だいたい彼は説教師ではないか？　説教というものはどんなに霊感に満ちたものであっても、〈授業〉の部類に入る。それは、ひとつの説を提示し、その基盤を十分に示そうと必死になるものだ。

しかし、あのアンゲルス・シレシウス（一六二四〜七七 ドイツの神秘詩人）のような人についてはなんと言えばいいのだろう？　彼の二行詩は好んで矛盾したことを言い、ひとつの共通のテーマをくりかえしてばかりいる。すなわち神のことを——それはあまりにさまざまな角度から描かれていて、そこから本当の人物像を引き出すことは難しい。『ケルビム天使的旅行者』は両立しがたい話と、実にみごとな混乱の連続であり、その著者の純粋に主観的な状態をしか表明しない。そこに統一とか、システムとかを見ようとすることは、この本の魅力をだいなしにしてしまう。その中で、アンゲルス・シレシウスは一般的な神についてよりも、自分の神について多くを語っている。そこからは詩的な錯乱の群れが出てくる。それは学者を尻ごみさせ、神学者におじけをふるわせるようなものにちがいない。ところが、事実はその逆なのだ。その両者とも、これらの問題を整頓し、単純化し、そこから正確な観念を導きだそうと努める。彼らは厳密さにとらわれて、作者が永遠と死について何を考えているか知ろうとする。何を考えているのか？　〈あらゆること〉を。それは個人的で絶対的な彼個人の経験なのだ。彼の神はといえば、これは決して〈完結〉せず、つねに不完全で変わりやすいものであり、彼はその各瞬間を捕え、その生成を必ずしも不完全でも変わりやすくもない思念の中に翻訳しているのだ。決定的なものは警戒するにこしたことはないし、何に対してでも、つねに正確な視点を持っていると称するものは避けたほうがいい。アンゲルス・シレシウスが、これこれの二行詩の中で、死を悪と同じに見、ほかのところでは善と同一視しているからといって驚いていたら、誠実さも、ユーモアも、ないことになるだろう。死自身、わ

れわれの中で〈生成する〉ものである以上、その諸段階と変容を見きわめねばならないのだ。それをひとつの定式の中にはめこんでしまうことは、動きを停め、貧しくし、機能をさまたげることになるだろう。

神秘家たちは、なんらかの定義の範囲内で、恍惚や嫌悪を生きるわけではない。彼らは自分たちの思考の要求を満たすのではなく、感覚の要求を満たそうとしている。彼らは、その感覚のほうに、詩人よりもはるかにより多く傾いている。なぜならそれによって、神に隣りあうからだ。同じ戦慄、思うようにやりなおしのきく戦慄などはあるわけもない。ひとつの語彙の性質は、さまざまな経験を、事実、多量に含んでいる。虚無を認識するには無数の方法がありながら、それを翻訳するにはたったひとつの言葉しかない。語法の貧しさが、かえって世界を理解しうるようにしている……アンゲルス・シレシウスにおいては、二つの二行詩の間隔は、たえずくり返される同じ言葉の、なじみのイメージによって、あるいはまた、ため息や、恐怖や、恍惚の個別性を喪失させる言葉の貧しさによって消え去りはしないまでも、弱められている。神秘家は、自分の経験を表現することによって、その性質を変えてしまう。学者が、神秘を注釈することによってその性質を変えてしまうのと、ほぼ同じように。

★

神秘学は本能のゆるみや、妥協した精気から出てくると考えるのは、それを不当に評価することになる。ルイス・デ・レオン（一五二七〜九一、スペインの神秘学著作家）といった人、ファン・デ・ラ・クルス（一五四二〜九一、スペインのカルメル会修道士）

といった人たちは、いくつかの偉大な企画の時代を飾る人たちであり、必然的にコンキスタ（征服）の時代の同時代人なのだ。

彼らは知能欠陥者であったどころか、自らの信仰のために戦い、神を正面から攻撃し、天を自分のものにした人たちだった。彼らの無欲と優しさと受難性に対する崇拝は、彼らをほとんど支えきれないほどの緊張から守ってくれる。それはまた彼らの非寛容、宗教熱、そして現世と彼方との双方における彼らの力の源である〈超豊富〉なヒステリーから、彼らを守ってもくれる。彼らを想像するには、見えない地図の中のエルナン・コルテス（一四八五―一五四八 メキシコ征服者）を考えてみればいい。

ドイツの神秘家たちと言えども、けっして、征服者でなかったわけではない。彼らの異端傾向、個人主張や抗弁への傾きは、精神的分野で個性を発揮しようという全国民的な意志表現なのだ。ドイツに歴史上の役割を与えた宗教改革は、そのような意味を持っていた。エックハルトは中世のさ中に、伝統をはずれ、自分の道を進んでいった。彼の活力は、ルターのそれを予告している。彼はまた、ドイツの思想が取るべき方向も指示している。しかし、彼に独自な地位を与えるものは、彼こそ宗教の領域における逆説の父として、人間と神との関係に知的なドラマの調子を持ち込んだ最初の人間だったということだ。それは、あらゆる人々がわきたつような、そして自分自身を捜し求めているような時代に、特別にマッチした緊張だった。

これら神秘家たちには、騎士的な一面があった。ひそかなる鎧に身をかため、自己嗜虐の情熱に至るまで強情な彼らは、呻きのほこり、伝染的、火災的な錯乱を持っていた。ゾイゼ（一二九五〜一三六六、

ドイツの神秘思想家。）は、いかほど異常な苦行者にも、けっしてひけをとらない。それほど彼は、苦痛を多様に変化させることに通じていた。そこでは、永遠を目ざした騎士道精神が、冒険心を養っていた。なぜなら、神秘学というものは、ひとつの冒険、垂直な冒険であり、言いかえれば、高みへの冒険をこころみ、別の空間形態を手に入れることなのだ。それによって神秘は、あのデカダンスの教義と袂を分つ。それらデカダンスの特性は、源泉から流れ出ないこと、〈よそから〉やってくることなのだ。ちょうど、東方からローマに移入されたデカダンスがそうであったように。そこでそれらデカダンスは、新しい宗教を作ったり、神話の驚異になおも執着したりすることのできない、文明の沈滞した食欲にしか答えなかったのだ。同じことが、こんにちの神秘家たちについても言えよう。弱者と失意の者のための、〈輸入された〉絶対にすがる神秘家たち。

　被造物の大胆なあこがれとしての敬虔さは、活力と、たくましさとから切りはなしえないものだ。ポール・ロワイヤルは、その牧歌的な外見にもかかわらず、溢れるばかりの精神性の表現であった。フランスは、そこに最後の時を刻んだ。その後、フランスは、世俗の中にしか逸脱と力とを見いだせなくなった。大革命こそやりとげはしたが、それが、甘ったれたカトリック教の登場以来、フランスが企てえたすべてだった。異端の誘惑を失って以来、フランスは、宗教的な霊感において不毛になった。

　生まれつきの強情さと、祈りにおける熱狂を持った神秘家たちは、〈慄え戦きながら〉天と勝負をするものだ。教会は、彼らを超自然の懇願者に格下げし、腹立たしくも文明化して、「モデ

ル」として役立つようにした。それでもわれわれは、彼らの生と著作の中に、自然の諸現象が見られたこと、彼らにとって司祭たちの手に落ちることより大きな不幸はありえなかったことを、知っている。彼らを司祭たちの手からひき離すことこそ、われわれの務めなのだ。その犠牲を払うときのみ、キリスト教は、今後、わずかばかりの時期を生きのびることができるだろう。

それを「自然の諸現象」と呼んだとしても、私は彼らの「健康」が、あらゆる試練に耐えるものだと言うつもりは少しもない。彼らが病者であったことは周知のとおりだ。しかし病気は、彼らの上に拍車のように、けたはずれの要素のように働いていた。彼らは病気によって、われわれのものとはちがった生命力の形を見ていた。アルカンタラのペドロ（一四九九―一五六二スペインの聖人）は、一日に一時間しか眠らないことができた。それこそ力のしるしでなくてなんだろう？　そして、彼らはみな、強いものたちだった。彼らが自分たちの身体をいためつけるのも、そこから、もう少し余分な力をひき出すためだったのだから。一般に、彼らは温和であると考えられている。しかし実際には、彼ら以上に厳しいものはいないのだ。彼らはわれわれに、何を与えようというのだろう？それは〈不均衡の力〉なのだ。あらゆる種類の傷に飢え、異常なものによって、催眠状態に入って、苦痛に価する唯一のフィクションの征服にとりかかった。すなわち、神が彼らにすべて、栄光も、神秘も、永遠も負っているのだというフィクション。彼らは不可能なものに実体を与え、無を犯して生動させる。温和なものが、はたしてこのような企てをなしうるであろうか？

哲学者たちの、抽象的で、偽りの虚無とは反対に、彼らの虚無は、豊かさではちきれるばかり

だ。それは世界の外の歓喜であり、時間の中の隆起であり、思考の限界をそのむこうからつきやぶるような光輝く破棄だ。自己を神にすること、自己を見出すこと、自分を殺すこと、自分自身の光の中に溺れること、そのためには、それ以外のどんな行為にも必要のない力と大胆さがいる。そのとき、恍惚——感覚の局限状況、〈崩壊による意識の〉完遂——を味わえるのは、自分の外へふみだし、生の基盤である幻影を、他の崇高な、すべてを解決し、すべてを超越するようなもののために捨てるものだけだ。そのとき、精神は停止し、思考は消滅し、それとともに困惑の論理もなくなる。われわれも神秘家たちにならって、明証性と、その結果としての行きづまりを乗り越え、光かがやく神のような錯誤を体現し、彼らのように〈本当の〉虚無にさかのぼることができないのだろうか！　彼らはなんという巧みさで、神の正札をつけかえ、略奪し、その属性を奪いとって身につけ、……神を再現しようとするのだろう！　彼らの狂った熱情に対抗できるものは何もない。つねにもうひとつの天、もうひとつの地を作ろうとしている、彼らの魂の発展には、何ものも抵抗できない。彼らがふれるものはすべて存在の色彩をおびる。事物をあるがままに見、あるがままにしておくことの不都合さを悟っていらい、彼らは事物を改変しようと努力してきた。そして、視覚のあやまりに、全精力をかたむける。いかなる現実も、明晰さの通過と略奪のあとには残らないことを彼らは知っている。〈何もない〉、それが彼らの出発点であり、〈すべてはある〉という断定に到達するために、彼らが打破し、払いのけることに成功した明証性なのだ。彼らがかくも驚くべき結論に達した道を経めぐることが、われわれにはできないなら、彼らと肩を

並べることはけっしてできないだろう。

★

すでに中世から、同一のテーマ、同一の表現を繰り返すことにあきたある種の精神は、信仰を新たにし、公式の用語から解放しようとして、逆説や、ときに乱暴であり、ときに微妙な、魅力的な形式に頼ってきた。エックハルト師がその例だ。彼は、あれほど厳格で、しかも緊密さを心がけていながら、神学から疑いの目で見られるに十分なほど作家だった。思想よりむしろその文体によって、異端と断罪される名誉にあずかったのだ。彼の論文や説教、あるいは告発された命題を検討してみると、うまい言いまわしをしようと苦心している様子があまりに明瞭なのに、驚ろかざるをえない。そこには彼の信仰の天才的な面が露呈されている。彼は根からの異端者として、形式によって罪を犯している。宗教においても、政治においても、正統派というものは、言語の敵として、既存の表現を要求するものだ。ほとんどすべての神秘家が、教会とうまくいかないのは、彼らに才能がありすぎるからなのだ。教会はそんなものを少しも要求していない。<様式(文体)>への服従と屈服しか求めていないのだ。教会は硬直した言葉の名において火刑台を打ちたてる。異端者たちは、そこから逃れるためには、表現形式を変え、その意見をほかの言葉、<慣用で認められた言葉>で言い現わさなければならなかった。カトリシズムが言語の生命と、その偏差と、多様さと、創意に対して、もう少し寛容と理解を示していたら、異端糾問などというものは決して存在しなかっただろう。逆説が追放されたときには、殉教を避ける道は沈黙か平

凡さでしかないのだ。

神秘家たちが異端になるには、その他の理由もあった。彼らは、神との関係を外的な権威によって規制されることを嫌ったが、それ以上に、上方よりの干渉も認めなかったのだ。彼らにとって、イエスを許容するのがせいいっぱいだった。彼らは少しも妥協的な人間ではないが、ある程度の譲歩はしなければならず、新しいものをいつでも考えだせるというわけではないので、求められるままに規定の祈りをつぶやかねばならない。この弱さは許してやろうではないか。彼らが譲歩するのも、通俗の水準まで身を落とすことができ、その言葉を使うことができることを示すためであり、また、おそらくは、彼らも屈辱の誘惑を知らないわけではないことを立証するためなのかもしれないのだ。しかし、彼らが、そこにまで身を落とすことはめったにないこと、祈りながら新しいことを考え出すことを好み、跪きながら発明し、そうやって、世間並みの神と袂を分つのだということはよくわかっている。

彼らは信仰を蘇生させ、回復させ、それを神慮のような、内なる敵として脅迫し、切り崩す。彼らなくては、信仰は滅び去るだろう。いまや、なぜキリスト教が死に、なぜ教会が擁護者も、仲介者も、ともに失い、賞讃するものも迫害するものも持たなくなったかのわけがわかる、異端者を失った教会も、それをあえて攻撃し、まじめに取りあつかい、何がしかの希望、何がしかの警告の種を与えるような熱狂者を身内に見出すなら、服従を求めることも、よろこんでやめるだろう。これほど多くの偶像を抱えながら、見渡すかぎり一人の偶像破壊者も見ないとは！　信者

たちは自分たちのあいだで競争することもないし、そもそも不信者と争うこともない。救いにしろ、劫罰にしろ、だれも一番に到着しようと争うものはない……

重要なことは、近代のもっとも偉大な二人の詩人、すなわちシェークスピアとヘルダーリンが、キリスト教の〈外に〉生きていたことだ。教会の誘惑を受けていれば、彼らは独自の教会神話を作っただろうし、そうすれば、教会は、異端の開祖の列に二人を加えるという幸福を覚えたにちがいない。十字架を攻撃することも、さらにはそれを彼らの高みに立てることも嫌って、そのうちの一人は、神々などを無視していったし、もう一人はギリシャの神々を復活させたのだ。シェークスピアは、祈りなどよりはるか高いところに登り、ヘルダーリンは、無力であることをよく知っている天、死んだものとして愛していた天を招きよせたのだ。一人は現代の無関心の先駆であり、もう一人は現代の懐古趣味の先駆だった。

★

隠者は彼なりの流儀で戦闘家であって、その孤独を、現実の、あるいは空想の敵で埋める必要を感じるものだ。往々にしていささかの幻影も抱かない現実について信じているときは、その孤独を悪霊で埋める。悪霊どもがいなかったら、彼は退屈になってしまうだろう。彼の精神生活はそれに耐えられまい。ヤコブ・ベーメが悪魔を「自然の調理人」と呼んだのはまちがっていなかった。悪魔の技は、あらゆるものに味をつけることなのだ。神自身でさえ、その原則からして、敵の必要を提起し、戦い、攻撃されずにはすごせないことを認めていたのだ。

神秘家は、往々にしてその敵をみずから作り出すものだから、その思考は他者の実存を計算と技巧によって確定することになる。それは結果を持たない戦術なのだ。彼の思念は、その最後の希望として、自分自身の論争に帰着する。彼は、自分を群衆でありたいと思い、たとえ、それが、つねに他者の顔を自己の内に作りだすことでしかなくとも、自分の顔を多様化しながら群衆になる。そこにおいて彼は彼の創作者に似てくる。彼はその芝居をいつまでもつづけるのだ。

★

神秘という現象には永続性がない。それは、花ひらき、全盛期に達したかと思うと、もう衰退を始め、やがて戯画となりはてる。スペインや、フランドルや、ドイツにおける宗教の興隆がその例だ。芸術の分野においてはエピゴーネンがまかり通っても、二流の神秘家とか、崇高の寄生虫や、恍惚の偽作者ほどみじめなものはない。詩の遊戯は可能だ。独創的という錯覚を与えることもできる。それにはメチエの秘密を知るだけでいいのだ。ところがこの秘密は、芸術が〈手段〉でしかない神秘家の目には、なにものにもならない。神秘家は人々の気にいろうとは思わないし〈彼岸〉でこそ読まれようと望む以上、彼が語りかけるのはかなり限定された、気むずかしい読者、才能や天才以上のものを彼に求める読者に対してになるだろう。彼は何に対して努力するのだろう? 経験が崩壊するとき、それを逃れ、生きのびるものを捜すこと。すなわち、自我の活動ののちに残る、超時性的なもの。彼は、破壊しえないものとの触れあいの中に、感覚をすりへらしてゆく。それは、かりそめのものとのふれあいの中に感覚をすりへらす詩人の逆と言え

よう。一方は至高の中にほとんど肉感的に溺れる。(神秘学は〈本質の生理学〉だ)。他方は、自分自身の表面において喜びにひたる。二人ともそれぞれちがった平面における享楽者だ。仮象の世界を味わった詩人は、その甘美を忘れられない。それは沈黙の喜びまで身を高めることができずに、言葉の喜びに満足した神秘家だと言える。上質の饒舌家、〈高度の〉おしゃべり。

★

マルガレータ・エーブナー(一二九一〜一三五一 ドイツの修道女)の啓示を読み、その発作と、みごとな地獄とをのぞき見するものは嫉妬にとらえられる。彼女は、何日ものあいだ、くいしばった歯をゆるめることができない。そして、ついに口を開けることができたときには、修道院中を興奮させ、震憾させるような絶叫がほとばしり出る。それにフォリーノのアンジェラ(一二四八〜一三〇九 イタリアの修道女)については何と言ったらいいだろう? むしろ彼女の言うことを聞いてみよう。「私は深淵の中に落ちて、そこに私の邪悪さがみちみちているのを見つめる。私は何によってそれらをさらけ出し、世に誇示すればいいかわからない。私は街や広場を、首から肉や魚をぶらさげて、裸で歩きまわって、叫びたい。これこそ悪しき被造物なりと?」

堕落にしても、純粋さにしても、あるいは深淵の目まいでも、高みの目まいでも、それを極限まで押し進めなければ気がすまないような多血質の性質をもった聖人たちは、われわれの分別や卑怯さにはどうしてもなじめない。彼らのうちに瞑想的な性格を見ることは、まったくまちがっている。(自己抑制は、すなわち血の凡庸さを示すものだ)瞑想にとどまるには、あまりに奔放

で、狂暴な彼らは、事物の基盤にまで下りてゆこうとするときにも、必ずしも「反省的な」行動に導かれるわけではない。行動においても、言葉においても、いかなる抑制も、いかなるストイシズムの痕跡もとどめない彼らは、あらゆることが許されているように思う。また、恐怖のうちにこそ心の平安を得、〈悟りきった〉魂に我慢できない彼らは、人々の心をかき乱し、その中を無遠慮に横行する。彼ら自身、自分を認めるよりは、むしろ自分を断罪するだろう。もう一度フォリーノのアンジェラの言うことを聞いてみよう。「地上のあらゆる賢者と、天国にましますあらゆる聖者たちが、私を慰めと約束でいっぱいにしてくれ、神さま、おんみずからまで、私にふんだんにおめぐみをたれて下さっても、私自身が変わらず、私の奥底で新しい業が始まらないかぎり、賢者や、聖者や、神さまは、私によいことをして下さるどころか、言いようのないほど、私の絶望と、怒りと、悲しみと、盲目とをおし進めるだけなのでした。」このような言い方と、こんな要求の前では、われわれは最後の良識までも一掃し、「光明の闇」のほうへ、野蛮人のように向かって行かねばならないのだろうか？　無力な慎しさに釘づけにされているわれわれに、どうやったらそんなことができるのだろう？　われわれの血はあまりになまぬるいし、食欲は飼いならされすぎている。われわれを越えて行く可能性は少しもないのだ。われわれにあっては狂気までが計算されている。精神の隔壁を引きずりおろし、ゆさぶり、その破壊を欲すること——それこそ新しいものの源だ！　現在の状態では、見えないものに対して強情な精神は、すでに知っているものしか認識しない。精神が真の知識に対して開かれるためには、ばらばらに分解し、

限界を突破し、無化の狂宴を経験しなければならない。確信と小心の上にあえて抜きんでようとするなら、そのとき、無知は重荷ではなくなるだろう。その小心さこそが奇跡を行なうことをさまたげ、われわれをわれわれの中に埋没させてしまうものなのだ。われわれにはなんと聖者たちの傲慢さが欠けているのだろう！

聖者たちが夜を徹して祈るのは、神から、その権力の秘密を盗むためなのだ。悪霊が好んでそのまわりをうろつく、これら反逆者たちの祈願ほど、腹黒いものがほかにあろうか。彼は巧みに、悪霊そのものからさえ、秘密を奪いとり、彼らのために働くようにしむけるのだ。彼らに取りついている悪の原則から、彼らは高く登るための材料を手にれ入る。彼らのうちで、くずれおち、悪にへつらうものは、犠牲者としてではなく、悪魔の協力者となって落ちるのだ。彼らは救われるにせよ、破滅するにせよ、みな非人間性の刻印を持ち、みな、彼らの企てに限界を設けることを嫌う。放棄？　それは全的な放棄だ。しかし、彼らは、放棄によって卑小化し、弱くなるどころか、彼らが捨てた罪を大事にとっておくようなわれわれより、いっそう強くなってしまう。この、魂も、肉体も雷撃を受けた巨人は、われわれを恐れさせる。彼らを見つめていると、ただの人間でしかないことが、恥ずかしくなる。そして、われわれのほうが見られるときには、われわれの凡庸さが引きおこす憐れみの言葉を読みとることができる。「ユニークなものや、怪物になる勇気のない哀れな生きものよ。」まさしく悪魔が彼らのために働いていて、その後光にも無関係ではない。まったく無駄な契約を悪魔と結んだわれわれにとって、それは、なんという屈辱

だろう！

★

人生に奉仕する破壊者であり、〈善のほうを向いた〉悪霊である聖者は、自己に対する努力の偉大な導師なのだ。彼は、自分への恐怖からとともに、その自分の性癖を打ち破るために、善に専念する。そして、自分と同じような人々がいるだろうと考え、そういう人たちに対して義務があると考えて、憐れみの苦行を引き受ける。彼は苦しむだけではなく、苦しむことそのものを好む。しかし、苦しみの極限で、彼は人間たちを玩具にし、未来を経めぐり、他者の考えを読みとり、不治の病人を治し、自然の法則を軽々と犯す。彼が祈り、誘惑に抗してきたのは、この自由、この力を獲得するためだったのだ。快楽は緊張をゆるめ、鈍らせることを彼は知っている。もし快楽に走ったら、もはや異常なるもののほうへ近づくことも、それを欲することもできなくなるだろう。彼の力と能力は弱まってしまうだろう。欲望は活力を失い、野望は弾性を失うだろう。彼が願っているものは、もうひとつの別の種類の満足であり、模範的な快楽のようなもの、すなわち、神と比肩する喜びなのだ。彼は、感覚に対する恐怖を計算し、それに関心を持っている。彼はそれらの感覚をせめ苛なみ、投げ捨てても、また別なところで、ちがう形で見つけることを知っている。

神の座に坐ろうと考え始めたときから、彼はその代償を払う覚悟をしている。これほど大きな結果は、あらゆる手段を正当化する。永遠というものは、破壊された肉体の持ちものであること

を承知している彼は、あらゆる種類の不具性を求め、安楽さに対して陰謀を企て、破壊の中に救いと勝利を待望する。本性の赴くままにしたら、彼は滅びてしまうだろう。しかし、彼は、ないがしろにされていた生命力を利用して立ち直る。あまりに長いあいだ抑えつけられていたその力が爆発する。彼はそのとき、天をふりあおぎ、そこから僭主を追いはらうような恐るべき不具者になる。苦痛によって創造の秘密に立ち入ったものが持つ、かかる恩寵は、健康が失寵と同一視されていた時代にしか見られない。

★

すべての、霊感に満ちた状態は、開拓された、意識的な衰弱から出てくる。聖性——絶えまなき霊感——は飢え死にしそうになりながら……しかも死なないでいる技術であり、五臓六腑に対する挑戦であり、恍惚と消化作用の対立の誇示のようなものだ。満腹の人類は、懐疑者は生んでも、けっして聖者は生まない。絶対？　それは節食の問題だ。いかなる「内的な火」も「炎」もほとんど完全に近い絶食なしにはあり得ない。食欲に抵抗するがいい。そうすれば体内の器官は焼け、われわれの肉体は燃えあがるだろう。腹一杯食うものは、精神的にだめになってゆく。

野性の衝動に駆り立てられた聖者たちは、それを制御し、したがってそれを秘かに保存することに成功したのだ。彼らは、信仰心がわれわれの生理的なドラマから力を汲み出すこと、そして人間に執着してゆくためには、肉体に対して戦いを挑み、それを堕落させ、犠牲にし、克服しなければならないことを知らないわけではない。彼ら一人一人が、突然、愛に目ざめたかと思うと、

次の瞬間には憎悪に走るような攻撃者の性格を表わす。彼らには、とことんまで憎むことができた。しかし、いったん、この自己の憎しみを吐きだし尽くせば、彼らは自由になり、あらゆる束縛から解放される。禁欲は、彼らに、感覚と破壊の有効性を顕示し、純粋さと解放の近いことを教える。われわれもまた、自由になることを欲するなら、いかなる苦しみを経ねばならないかを、彼らが教えてくれる。

われわれの生は、いかなる水準に展開されようと、その外的な形を破壊する努力に応じてしか、本当にはわれわれのものにならない。倦怠と、絶望と、無為そのものさえもが、それを全的な経験とし、そこに溺れこむ瀬戸ぎわまで行って立ち直り、生命力の補助剤に変えてしまう瞬間まで生きるかぎりにおいて、その試みの助けになるだろう。それを望むものにとっては、最悪のものより以上に実り豊かなものがあろうか？　なぜならわれわれを解放してくれるものは苦しみではなく〈意志〉なのだから。

★

中世の狂気をどうして笑うことができようか？　人間は僧房の中でため息をつき、吠え猛っていた。それを他人が尊敬していた……錯乱しても、人は精神病院へなど行きはしなかった。人は直ってしまうことを恐れて、それを亢進させつつ、健康を恥ずかしいことのように、また悪徳のように隠していた。病気は万人の頼みの網、大いなる薬であった。いらい、病いは信用を失い、ボイコットされはしても、なお力をふるいつづけている。しかし、だれもそれを愛しもしないし、

求めもしない。病者でありながら、われわれは病気をどう扱っていいかわからない。われわれの狂気のうちで、使いみちのないままになってしまうものがひとつやふたつではない。

もうひとつの狂気、これも負けず劣らずみごとなものだ。それは、死と未知なものへの讃歌を生みだす。エジプトの夜明け、ギリシャのあけぼの、神話の狂熱、諸元素との最初の接触から生まれる歌！ われわれは、そのまったくの対極にいて、起源の光景を前にしても、感動にうちふるえることができない。われわれの問いは、リズミカルに跳ねあがるかわりに、概念の低さの中に身を引きずり、あるいは嘲笑的なシステムの中に変容をとげてしまう。讃歌に見られるような感受性、原初の陶酔、驚愕のあけぼのはどこに行ったのか？ ピュティア（アポロン教の巫女）の足もとに身を投げ、かつての恍惚に立ち帰ろう。〈唯一の瞬間〉の哲学のみが、唯一の哲学なのだ。

★

神に内的な生活を打ちあけることをやめるなら、そのときわれわれは、神秘家の恍惚と同じほど有効な恍惚の域に達し、彼岸の力を借りずにこの世を克服することができるであろう。それでも、彼岸の妄念がわれわれにとりついて離れないのなら、見えないものを求める必要を満足するためだけであろうと、その彼岸を、ひとつ、間にあわせに作ること、それを計画することの自由だけは認めてほしいものだ。大事なのは、われわれの感激であり、その感激の強さであり、その力であり、非聖的な狂気の中にとびこむ能力のようなものなのだ。未知のものの中で、彼らの方法は使わずに、われわれは聖者と同じほど遠くへ行くことができる。理性に長い沈黙を課すだ

けでいいのだ。われわれ自身になりきってしまったときには、もうわれわれの中の何ものも、あらゆる能力の甘美な使用停止に達することをさまたげはしないだろう。この状態をのぞき見たものは、そこではわれわれの動きが日常の意味を失うことを知っている。われわれは深淵へ向かってはいのぼり、天空へ向かって下ってゆく。われわれはいまどこにいるのだろう？　対象のない問い。われわれはもはや〈場所〉を持たない……

怒りとあきらめ

言葉の履歴

思想の歴史が、同じ数だけの絶対に変えられた語彙の羅列にすぎないことは、一世紀来のもっとも重要な哲学的事件を列挙するだけで納得できる。

実証主義の時代には「科学」の勝利があった。科学の名を持ちだすだけで、どんな無茶も安心してできた。「厳密さ」とか「経験」とかを口にするだけであらゆることが許された。その後少したって、質料や、エネルギーが登場した。それら大文字の偉力は長くは続かなかった。無遠慮で、どこにでも入りこむ進化がそのかわりに地歩を占めた。「進歩」の学問的な同義語であり、宿命の楽天的な偽作であるそれは、あらゆる神秘を排除し、知性を牛耳るのだと称した。かつて「人民」に対して捧げられたと同じ信仰が、それに捧げられた。それは流行の去ったあとも幸運にも生き残れはしたが、もういかなる抒情的な歌もよびおこさなくなった。それをほめあげるものは、身を危うくするか、あるいは時代遅れになるのだ。

今世紀のはじめごろ、概念に対する信頼がゆらいだことがあった。直覚がその従属概念とともに登場した。すなわち、持続、飛翔、生命などが、それを利用し、一時期を支配しなければならなかった。それから新しいものが必要になり、実存の番がやってきた。この魔術的な言葉は、専問家やディレッタントを興奮させた。とうとう鍵が手に入った。もはや人間は個人ではなく、実存者になったのだ。

時代別の語彙辞典、哲学的流行の人口調査をやるものはないだろうか？　その仕事は、ひとつの体系が、その用語によって時代づけられること、それが、つねに形態によって使い古されてゆくことを教えてくれるだろう。まだわれわれの関心を引くに足ると思われる思想家でありながら、もう読むことを拒否されるようなものがある。彼の思想が装っている道具としての言葉が、耐えられないのだ。哲学からの借用は、文学にとって好ましくないことだ。（ノヴァーリスのいくつかの断片がフィヒテ的な用語のために損われていることを考えてみればいい。）理論は、かつてそれに成功を与えた同じもの、すなわち文体によって滅びる。それらが生き返るには、われわれの隠語で考えなおしてみるか、さもなければ、それらを完成の前の状態、すなわち根源的で、不定形の現実として想像してみなくてはならない。

重要な語彙の中で、ひとつだけ、例外的に長い命を持ったものが、悲しい考えを引き起こす。私はそれを魂と呼んでいた。その現状と、哀れな最後を考えれば、愕然とせざるを得ない。それでも、その〈すべりだし〉は順調だった。新プラトン派がそれに与えていた地位が想起される。

それは、知覚できる世界から出てきた宇宙的な原理だった。古代の理論で、神秘主義の刻印を押されたものは、すべてそれに頼っていた。キリスト教は、その性質を規定するよりは、信者のための使い方を決めるのに熱中して、それを人間的な規模に限定してしまった。魂は、かつて自然を包含し、広大な現実と、説明的な原理とを同時に兼ねるという特典を享受していた時代のことを、どんなに惜しんだことだろう！　近代社会になって、それは少しずつ地歩をとりもどし、地位をかためるに至った。信者も、不信者も、それを考慮しなければならず、それを大事にし、利用しなければならなかった。唯物主義が猛威をふるったときにおいてさえ、それは攻撃されるためであっても、とにかく引用されたものだ。そして指導者たちは、それに対してどんなに沈黙を守っていても、いちおう、彼らの体系の中の一隅をとっておいてやったものだ。

こんにち、いったいだれが、魂のことなんか心にかけてくれるだろう？　不注意からでなければ、口にすることさえない。それはシャンソンの中にしかいる場所がない。メロディーだけが、それを耐えられるものにし、その古めかしさを忘れさせてくれる。弁論においてはもはや許されない。あまりに多くの意味をしょいこみ、あまりに多くの用途に使われたのち、破れ、傷つき、無価値になってしまったのだ。その擁護者だった心理学者は、それを引っくりかえし、こねくりまわしたあげく、すっかり息の根を止めてしまったにちがいない。その結果、それがいまもわれわれの意識の中に呼びおこすものは、永遠にすぎてしまったみごとな成功を惜しむ心だけなのだ。かつては賢者たちがあがめ、神々の上に置き、思いのままに使うようにと宇宙をさえ贈り物にしたほどなのに！

ソクラテスの巧妙さ

彼が自分のダイモン(霊)について、はっきりした性格規定をおこなっていたら、彼の栄光はほとんど失われていただろう。彼は、賢明にも、古代人のあいだだけではなく、近代人の内にも、彼に対する興味を呼びおこすような用意をしていた。それにそのおかげで、思想家たちは、彼らの関心からはまったく遠いケースに、長く立ちどまることにもなった。このケースはもうひとつのケースを思いださせる。パスカルのケース。〈ダイモン〉と〈深淵〉、哲学にとっての二つの刺激的な弱み、あるいは二つの言いのがれ……この深淵は、はっきり言えば人を迷わすことがまだ少ない。理性に公開の戦いを挑む精神にとって、それを認め、自分のために要求することくらい自然なことはないのだ。しかし、概念の発明家、合理主義の推進者が「内的な声」を自分に与えることは自然なことだったただろうか?

それでもこのような種類のあいまいさは、後世を念頭においている思想家にとっては実りの多いものだ。われわれにとって、首尾一貫した合理主義者など面白くもない。相手が何と言うかわかってしまうし、どういう結論におもむこうとしているのかも知っているから、彼をその体系の中に放置してかえりみない。ソクラテスは計算が巧みであったばかりではなく、霊感にも富んでいたから、われわれを驚かし、まごつかせるには、その矛盾にどんな言いまわしを与えればいいか知っていた。彼のダイモンは、いったい、純粋に心理学的なものだったのか、それとも反対に、深い現実に合致するものだったのだろうか? それは神的な起源を持っていたのか、それと

も精神的な要求にしか答えないものだったろうか？ 彼はそれを本気で考えていたのか、それとも幻覚にすぎなかったのか？ ヘーゲルはそれを、外的なものを一切もたない、主観的な神託として受けとっている。ニーチェは道化役者の技巧と考える。

人間がその一生を「声なき声を聞く人間」のふりをして過すことができるなどとどうして考えることができるだろう？ ソクラテスのような人間にとってさえ、そのような役割を演じぬくことは不可能ではないまでも、困難なことだったろう。結局、彼がそのダイモンによって支配されていたのか、それとも、それをたんに、何かの理念の必要のために利用したのかなどということはどうでもいいのだ！ 彼が、それをあらゆる材料によって作りあげたのは、おそらくそうせざるをえなかったからだろう。たとえ、自分を他人にはうかがいしれぬものにするためでしかなくとも。人々に取り囲まれた孤独者であった彼の第一の義務は、現実のものであれ、あるいは偽りのものであれ、なんらかの神秘に立てこもって、その取り巻きから逃れることだった。真のダイモンと、まやかしのダイモンのあいだから出発するにはどんな手段がありえよう？ ひとつの秘密と、みせかけの秘密のあいだから出発するには？ ソクラテスはうわごとを言っていたのか、それとも術策を弄していたのか、それをどうやったら知ることができるだろう？

それでも、彼の教えが関心を引かなくなっても、彼が自分自身の問題についてひきおこした論争は、いまなおわれわれを引きつける。彼こそ〈特殊ケース〉の内に立ちあがったはじめての思想家ではなかっただろうか？ そして、誠実さについての説明不可能な問題が始まったのは、ま

さに彼からではなかったろうか？

庭の内側

幸福の問題が知識の問題にとってかわるとき、哲学は、その固有の領域を捨てて、いかがわしい活動にふける。つまり人間に興味を持ちはじめる……前は近よってみようともしなかった問題に、いまや引きつけられる。そして哲学はそれに対して、あらゆるものの中でもっとも真剣な様子で答えようと努める。「どうすれば苦しまずにいられるか？」という問いが、第一に哲学を必要とする問題のひとつだ。哲学は倦怠の相に入り、非人称的な不安や、知識欲には、ますます無関係になって、瞑想を荒廃させ、人を途方にくれさせる真理に対しては、人を慰める真理を持ってくるようになる。

荒廃し、奴隷化したギリシャが、休息の処方と、苦悩の治療薬を待ちのぞんで、エピキュロスに期待したのは、そのような種類の真理だった。その時代における彼の位置は、ちょうど、今日の心理学者のそれだった。彼もまた彼なりに、「文明の不安」を告発したのではなかったろうか？（あらゆる混乱と洗練の時代に、つねにフロイド的な人間が魂の交通整理を試みる）。哲学は、ソクラテスによるよりは、エピキュロスによってはるかに巧みに治療術のほうへ傾いていった。人を癒すこと、とりわけ自分を癒すことが、エピキュロスの野心であった。人間を死の恐怖と、神々の恐れから解放しようと欲したのに、彼は自分で、その両方の恐れにとらえられていた。彼が自慢にしていたアタラクシー（心の平安）は、彼にとって普段の経験ではなかった。彼の「感

じやすさ」は有名だった。学問に対する侮蔑は、その後、彼が非難されるもととなったが、往々にして「傷ついた心」の産物であることは知られている。この、幸福の理論家は病人だった。彼は、人の言うところによれば、日に二度も嘔吐していたという。「魂の乱れ」をこれほどまで嫌うには、いったいどれほどの悲惨の中にのたうちまわっていたのだろう！　静謐をほんの少しでも獲得することができたときには、きっとそれを弟子たちのためにとっておいたことだろう。報恩の心あつく、淳朴な彼らは、師に賢者の評判を与えたのだ。われわれは彼の同時代人よりはるかに錯覚を持つことが少ないから、容易に彼の垣根の内側をのぞくことができるのだが……

聖パウロ

彼はキリスト教をして武骨な宗教にし、旧約聖書のもっとも忌み嫌うべき伝統、すなわち非寛容や、粗さや、田舎風といったものを持ちこんだ。その点、彼をいかに非難しても十分ではないだろう。彼は少しも関係もなければ理解もできないものの中に、なんという無遠慮さで入ってくるのだろう！　彼の、処女性や、禁欲や、結婚についての考えは、まったくへどのでそうなものだ。彼は愚かさの規準を設け、いまもわれわれの本能を麻痺しつづける制約をつみ重ねたのだ。

彼には古代の予言者たちの抒情もなければ、悲歌的とか、宇宙的な調子もない。あるものは、セクト的な精神と、彼らにおいては悪趣味で、町人たちのおしゃべりか、たわごととされていたものばかりだ。彼は風俗に極度に引きつけられた。それについて話しだすやいなや、意地の悪さでふるえだすのが見てとれる。彼は、都市にも引きつけられた。そして、人間と神の関係には、

人間同志の関係ほどの関心を示さなかった。例の書簡をくわしく検討してみても、倦怠とか、繊細さ、内省とか卓越さなど、いかなる場合にも見出すことはできないだろう。そこにあるのは憤慨と、あえぎと、下層民のヒステリーと、知識、および知識の孤独に対する無理解ばかりなのだ。いたるところに仲介者がいる。親族関係がある。一族の気分だ。聖父、聖母子、天使、聖者。知性のあとは少しもなく、はっきりした概念もひとつもない。〈理解〉しようとするものも一人もない。罪とつぐない。悪徳と美徳の簿記。問いのない宗教、神人同形論の行きすぎ。それが提案する神に対して、私は赤面せざるをえない。そのようなものは、失墜させねばならない。もっとも、いまの時点で言えば、いずれにしろその神はもう余命がない。

老子にしても仏陀にしても、有形の存在になどなろうとはしない。信仰の手管を侮蔑する彼らは、われわれを瞑想へいざない、その瞑想が空をうつことがないように、そこに限界をもうけている。道（タオ）とかニルヴァナがそれだ。彼らは人間についてちがった考え方をしている。

すべてを一個の至高の存在に帰さねばならないのだったら、どうやって瞑想することができよう？　詩篇や、祈りによっては何も捜すことはできないし、何も発見できない。人間が神を擬人化し、それにすがるのは怠惰のさせるわざだ。ギリシャ人たちは、神々が不充分に思えてきて、哲学に目ざめた。オリュンポスが終ったところから、概念が始まる。思考することは、敬うことをやめることだ。それは神秘に対して反抗し、その失墜を求める。

★

改宗者は、それまで神に無関係であった教理を受け入れることで、自分自身にむかって一歩をふみ出したつもりになる。しかし実際は、自分の困難さをごまかすだけなのだ。不安全性——これが彼の支配的な感情だが——からのがれるために、彼は偶然が与えてくれる理念に盲目的にとびつく。いずれ「真理」を獲得したら、他人に対して、かつての不確実さで、かつての恐怖で報復をしてやろう。それが改宗者の典型たる聖パウロの場合なのだ。彼の雄弁な様子のかげには、それを抑えようとしてどうしてもうまく行かない不安が顔を出す。

あらゆる新入りと同様、彼はその新しい信仰によって性格を変えられると思っていたし、手紙においても、説教においても、けっして口にしないでいた彼のためらいも克服することができると思っていた。われわれはもう、彼のやり方にだまされない。それでも、多くのすぐれた人たちがたぶらかされてきた。それは実は、人々が「真実」を捜して、〈特殊ケース〉には興味を示さない時代のことだった。この使徒がアテネで歓迎されずに、どんなにしても反抗的な人々しか見いださなかったのは、そこではそのころまだ人々が〈議論〉をしていて、懐疑主義がなくなるどころか、あいかわらずしっかり地歩を占めていたからだ。キリスト教の駄弁はそこでは発展することができなかった。そのかわり同じものがコリントス、この、弁証法にそむいた下層の街を誘惑したのだった。

庶民たちは、悪口をあびせかけられ、おどかされ、啓示を与えられることを欲し、軽々しい問題でうちくだかれることを欲する。彼らはやかましいおしゃべりが好きなのだ。聖パウロは、そ

ういった人物だった。古代において、ずばぬけて、巧みで、抜け目がなかった。彼が立てた大騒ぎのこだまが、まだ聞こえてくる。彼は演壇にあがってわめきたてるすべをこころえていた。ギリシャ・ローマ世界にお祭りの調子をもちこんだのは彼ではないだろうか? その時代の賢者たちは沈黙と、忍従と、放棄という、実践不可能なことを説いていた。彼はより巧妙な魅力たっぷりなメニューをもって登場した。それが賤民たちを喜ばせ、繊細な人々を落胆させたのだ。彼のアテネに対する報復は完全だった。彼がはじめに勝利を収めていたら、その憎悪はもう少しおだやかなものになっていたかもしれない。これほど重大な結果を招いた敗北は他にあるまい。そしてわれわれが、不具の雷撃を受け、十字架にかけられた古代教徒で、深く忘れられない通俗性、二千年の通俗性を課せられた古代人であるとするなら、それは、この敗北のおかげなのだ。

★

非ユダヤのユダヤ人、堕落したユダヤ人、裏切りもの。彼の呼びかけや、歓誘や、暴力から立ちのぼってくる、不誠実な印象の源がそこにある。彼はいかがわしい。彼はあまりに、〈確信ありげ〉にふるまう。どこから彼をとらえたらいいのか、どうやって定義していいのかわからない。彼は歴史の交叉点のようなところに位置していたから、さまざまな影響を受けたにちがいない。数多くの道のあいだでためらったのち、彼はひとつの、〈正しい〉道を選んだ。彼のような人間は、確実な賭けをする。後世という意識にとりつかれ、彼らの行為が引きおこすにちがいない反響のことを考える彼らが、ひとつの現実に身を捧げるなら、それは〈効率的な〉犠牲としてだ。

私は、だれに対して恨んでいいかわからないときには「書簡集」（「ローマ人への手紙」から「ピレモン人への手紙」まで）をひろげる。するとただちに安心させられる。おあつらえむきの人間がつかまる。彼は私を恍惚の状態におとし入れ、私を慄えさせる。彼を〈目近か〉から、同時代人として憎むために、私は二十世紀を抹消し、彼の旅程についてまわる。彼の成功は私を落胆させ、人々が彼に苦しみを与えるときは、ほっとした気持ちでいっぱいになる。彼が私に伝える激怒を、私は彼にふりむける。しかし、残念なことに、ローマ帝国がとったのはそのような態度ではなかった。腐敗した文明はその悪と契約を結び、それを蝕むビールスを愛し、聖パウロのごとき人物を尊敬もしなくなり、勝手に歩きまわらせておく……まさにそのことによって、その文明は敗れ去り、疲れはてて、終ってしまったことを告白するのだ。腐肉の臭いが使徒たちを引きよせ、刺激する。この貪欲で多弁な墓堀り人夫たちを。

こんにちでもなお、われわれに嫌悪の入りまじった恐怖を呼びおこす「ムーサの敵」たち、この狂人たちの攻撃性の前に、豪華に光り輝いていた世界が道をゆずった。古代教は、彼らを皮肉でもって遇した。それは力なき武器であり、微妙な味わいには無頓着な群れを抑えるには、あまりに高貴な武器だった。推論する繊細な者たちと、祈る愚昧な者たちとでは比較にならなかった。侮蔑と苦笑の高みに凍りついているものは最初の攻撃で破れてしまうだろう。なぜなら、下層のものの特権である精力はつねに下方から来るからだ。

古代の恐怖のほうが、キリスト教の恐怖より数倍ましだった。この熱にうなされた頭脳、突飛

な悔恨を抱く魂、遅れてきた社会の快適さの夢に対して立ちあがる破壊者たちは、良心をさいなみ、それをもって「心」を作ろうとした。彼らの中でももっとも有能なものが、腹黒さをもってそれに専念した。その腹黒さは、はじめ、すぐれた人々を反撥させたが、やがては彼らに刻印を押し、ゆるがし、言いようもない企てに引きずりこんだのだ。

ギリシャ・ローマ世界の夕暮れは、それでも、もっとほかの敵、もっとほかの約束、もっとほかの宗教にふさわしかった。キリスト教のおとぎ話が易々としてストイシズムを窒息させたことを考えながら、どうして進歩の影を認めることができようか！　もし、ストイシズムが繁栄し、世界をわがものにすることができたなら、人間は、完全にではないまでも、ほとんど〈おしまい〉になっていただろう。義務的になったあきらめが、不幸をおおしく耐えること、声を抑え、冷静に、われわれの無を直視することを教えてくれただろう。詩は、われわれの風俗から消え去っていたかもしれない。詩なんかどうでもかまわない！　そのかわりに、われわれは、つぶやき声ひとつもらさずに試練に耐える能力をかち得ただろう。だれも責めないこと、悲しみにも、喜びにも、悔恨にも応じないこと、世界との関係を、敗北の諧調ある遊びに変えること、澄みきった心の死刑囚として生きること、神にすがったりせず、むしろ神に警告を与えること……それはできない相談だ。あらゆるところから、あふれ出してきたストイシズムは、自分の原則に忠実に、じたばたせずに死ぬ優雅さを持っていた。知恵の廃墟の上にひとつの宗教が打ち建てられる。その新たな宗教に用いられる手管は、けっして知恵には使えない。人間は、いつでも立ったままよりは、

跪いて絶望することを好むだろう。救いを求めるものは彼らの卑劣さであり、その疲労であり、慰めなきところに高くのぼり、そこに傲慢さの権利を求めることの不可能性なのだ。名誉を失ったものはだれでも、それまで彼を生かしてきた希望につきそわれて死ぬ。「理想」に向かってはいつくばり、そこに埋没することは、群衆と説教家にまかせておけばいい！　孤独というものは、与えられた条件であるよりは、むしろひとつの使命なのだ。思想や、行為や、態度の歴史を復習してみれば、〈未来〉というものはつねに賤民たちの共犯者であったことがわかるだろう。マルクス・アウレリウスの名を持ちだして説教をしたりすることはできない。彼は自分自身にしか、語りかけていないのだから、彼には弟子もなければ、その一党もない。しかし人々はあいもかわらず寺院を建てて、そこである種の書簡をあきるほど引用する。そのような状態が続くかぎり、私は、これほど巧みに彼の苦しみにわれわれを引きつけた人間を、憎悪をもって追求してゆくだろう。

ルター

信仰をもっているというだけではすべてではない。その上に、その信仰を呪いのように受けとめ、神の中に、敵と、死刑執行人と、怪物とを見、それにもかかわらず、そこに人間の手に入るかぎりの、そしてそれを夢みているあらゆる非人間性を投影しながら、彼を愛してやらなければならない……教会は、それをもってぼんやりした存在に、退化し、愛すべきものにした。ルターはそれに抗議する。神は「間抜け」でもなければ、「お人よしな精神」でもなく、われわれに尊敬を求める「間男」でもない。それは「燃えさかる火」であり、「悪魔よりも恐ろしい」狂人であ

り、われわれを好んで虐げるものだ、と彼は主張する。ルターが、神に対して、臆病な敬意を持っているというのではない。時に応じては、彼は神を拒絶し、あるいは自分と対等に扱う。「神が私を守ってくれず、私の名誉を救ってくれないなら、彼はその恥を受けるだろう」。彼は膝まづき、平伏することも知っていたし、大胆にふるまい、挑発的な言葉で懇願し、吐息から叱責に移ることも、〈論争家として〉祈ることも知っていた。彼の目には、崇拝するにも、悪口をあびせるにも、あらゆる言葉が、どんなに汚いものでもかまわなかったのだ。神に懲罰を宣することで、彼は人類に新しい意味を与えた。そして彼は、人間の中において、造物主の悲惨と被造物の悲惨をすりかえるのだ。去勢された敬虔さも、不安も、もうありえない、攻撃性はほんの少しでも信仰を高める。神はおとなしい呼びかけには耳をかさない。彼は大声で呼び立てられ、こづかれることを望み、自分とその一族のもののあいだに誤解が生じることを好むのだ。教会はその誤解を取りのぞこうとやっきになる。教会はその信者たちの〈文体〉を監視して、それを天によって断罪するのだが、天のほうは呪いとか、悪罵とか、臓腑の叫びとか、あるいは神学や良識の検閲を無視し……理性の検閲をさえ無視する表現などにしか反応しない。

この理性が価するもの、それを哲学者たちに求めてはいけない。哲学者たちの商売は、教会をいたわり、擁護することなのだ。その秘密をさぐるには、自分を犠牲にして、それを自分の身体でつかんだものたちに聞いてみるがいい。ルターが、教会を売春婦と呼んだのは、たんなる偶然ではない。教会は本質的に、それなりのやり方で売春婦なのだ。教会は猿まねと、移り気と、破

廉恥とで生きているのではないか？　教会は何ものにも縛られず、何ものでも〈ない〉から、万人に身をゆだねることができるし、要求することもできる。正しいものも、邪悪なものも、殉教者も暴君も。教会が奉仕しない理念は一つもない。それはすべてを同一の面に、言い落としも、甘さも、いかなるえこひいきもなく並べる。だれでもその恩恵をうける。教会をわれわれの最大の富のように言うのは、素樸なものだけだ。ルターはその仮面をはいだ。悪魔の訪問を受けることは、万人に許されたことではないのは本当だ。

★

これらの精神は、誘惑に身を投じ、悪と親しく交わりながら暮らしている。それを逃れようとしても、もっと強くそこにひき戻されるばかりだ……「私は彼を首にさげて持ち歩いていた」とルターは言っている。「彼は私のかたわらに、私のベッドの中で、妻よりもひんぱんに私と寝た。」彼はしまいには、こう自問している「悪魔は神ではないのだろうか」。

彼の信仰は港であるどころか、意識的な探し求めた難破であった。それは彼にこび、彼を彼の目に偉く見せる危険であった。純粋な宗教は不毛だろう。宗教において、深いもの、辛辣なものは神的なものではなく、悪魔的なものなのだ。教会から悪魔との交わりを払いのけてやろうとすることは、教会を無力な、甘ったれたものにし、堕落させることだ。救いが現実のものであると信ずるには、前もって、失墜が現実のものであることを信じなければならない。あらゆる宗教的な行為は、地獄の認識からはじまる。——それが信仰の第一の材料だ。——天は、〈その

あと〉にしかやってこない。修正者として慰めとして。それは、われわれがつりあいと均衡の趣味から求めるぜいたくであり、蛇足であり、付随的なものだ。悪魔だけが〈必要〉だ。それを欠く宗教は弱まり、崩れ去り、冗長で、屁理屈をこねる信仰になる。いかなることをしてでも救いを求めようとするものは、宗教の分野で華々しい活動をすることはできない。

宗教改革の功績、それは良心の眠りをかき乱し、ローマ法皇庁の麻酔剤を拒否し、善良な神と安易なサタンのイメージに、あいまいな神と全能の悪霊のイメージを対置させたことだ。救霊予定説は、ルターはそれを承知していたが、非道徳的な考えだった。彼にとって、それを支持し、推進することは理屈以上のものだった。彼の使命は諸精神にぶつかって騒ぎを起こし、彼らの苦しみをいやまし、彼らを不可能な希望に追いつめることだった。ひと言で言えば、エリートの数を減らすことだった。彼はある点においては、敵の暗示に屈したことを認めるだけの誠実さをもっていた。そこから信者たちの大多数を断罪した彼の大胆さが説明されるだろう。彼は道を迷わせようとしたのだろうか？　その点は疑いもない。予言者たちの破廉恥が彼らの教義や、その犠牲者たちと和解させてくれる……

★

希望することに向いていないにもかかわらず、彼は解放者の相を持っている。彼から直接出ている解放の動きは、ひとつやふたつにとどまらない。彼が、神の絶対の権威を要求したのは、その他のあらゆる形の権威を一掃するためだったのだから。「君主でありながら、山賊でないなん

てことはほとんど不可能だ」と彼は言っている。反乱の格言は美しい。もっと美しいのは、異端の格言だ。ヨーロッパが教会分裂の連続によって定義され、その栄光が邪説の集団に帰するというなら、それは神のおかげなのだ。数々の革新者の祖である彼は、楽天主義という、革命に恥を塗る悪徳を持たない点で、彼らよりまさっていた。われわれよりも、ずっと罪の源の近くにいた彼は、人間を解放するということは必ずしも人間を救うことにはならないのを知っていた。

中世とルネサンスのあいだで、どちらにも属さず、両立しがたい倦怠と衝動に引き裂かれていた彼、苦悩するラブレーは、弱体化し色あせつつあったキリスト教に活力を吹きこむには、だれよりも適任だった。それを暗くするにはどうすればよいかを、彼だけが知っていた。彼の信仰は〈どす黒い〉ものだった。パスカルの信仰であっても、キエルケゴールの信仰であっても、彼の信仰のかたわらでは色あせて見える。前者はあまりに作家的だし、後者はあまりに哲学的すぎる。しかし彼、農夫的な神の強さを持っていた彼は、善の力と悪の力とともに組み打ちするに必要な本能を持っていた。彼の親しげで、心地よい粗雑さは決して人を斥けない。彼において嘘なものは何もなく、古典的な使徒のようなところはまるでない。すなわち学者的な憎悪も、念入りに仕あげられた激烈さもない。彼の遠慮をしない恐怖にはユーモアの諧調がのぞいている。それが奇妙なことに、十字架の主唱者たちに欠けているものだった。ルター？　それは人間的な聖パウロだ。

樹液と血の不眠、生あるものを横切るパニックに襲われたあとで、われわれは孤独のもっとも古い眠気と、知識ゼロの状態に戻るべきではないだろうか？　過ぎ去った世界が通夜を要求するとき、われわれは、鉱物の無関心、完全な麻痺をうらやむ。それは生きているもの、魂をもつべく定められているものすべてが避けることのできない悩みの外にいるものだ。石は自己に確信を持っていて、何も要求したりしない。それに対して、木は黙って要求し、動物は悲痛な叫び声をあげ、言葉の一歩手前でのたうちまわる。沈黙と叫びの時代は、われわれによって解放されるのを空しく待っている。われわれが彼らの通訳になってやるのを待っているのだ。言葉からの脱走者であるわれわれは、もう区別のない時代、光がひろがる以前の、闇と恍惚をしか待望しない。始原の暗さのただ中の、絶えることなき恍惚。その痕跡をわれわれはときおり身内のより深いところに、あるいは神の周辺に見出す機会を与えられる。

自己憐愍のかなたへ

自己について感動的に話すものを敗者だと思ってはいけない。そのような人間にも、彼を脅かす危険から身を守るだけの元気が残っているのだ。だからこそ、自分について不平を言うがいい！　それが、活力を置きかえるやり方なのだ。彼は、彼にできる方法で自己を確立する。彼の涙は往々にして攻撃的な意図を隠している。

それにまた、彼の抒情や厚顔を、弱さのしるしだと思ってはならない。抒情も厚顔も内にこもった力、発展や拒否の能力から出てくるのだ。彼は状況に応じて、そのどちらかを使う。武装は

十分。それでも、彼は地平なき実存の慰めを知らないわけではない。おだやかな、苦しみをたっぷりと吸いこみ、敗北に到達したことをとてもほこりにしている実存。だから彼は幸福の中にそっとしておこう。そのかわり、自分を哀れと思えなくなった人間、自分の悲惨を払いのけ、彼の本性と、その声の届かぬところに捨ててしまう人間に注目してみよう。嘆きと嘲けりの手段を捨てて、彼は対象として据えた彼の生と連絡することをやめてしまう。彼の苦しみ自体が、自我から離れたところに突然やってくる。彼がそれを記録するのは、それを卑少化し、それをもって事物とし、それを物質に帰すためなのだ。彼自身も含めてだれも、彼がいまなお何に対して反応するか知らない。賢者たちは途方にくれ、それから顔をそむける。しかし、もしかしたら、狂人たちは、彼に対して憐れみ、ないし嫉妬を覚えるかもしれない。彼が、理性を失うことなく、彼らより遠くまで行ったのだということに気づくならば。

深淵の楽しさ

あらゆる解決や、知識の操作を停止するあらゆる誘惑に対する敵意、あらゆる決定的なものに対する憎悪、信者がそれを覚えるときには、彼は救いの魅力に負けてしまったことで自分を罰そうとしか思わない。そうやって彼は、罪を発明し、あるいは彼自身の「闇」の中に戻ってゆく。闇はたんに作りだされるばかりにとどまらず、もっと有効に信仰にとりつき、それを揺すぶり、それをして光明の中の黒点とする。

私は宗教的な思想家の書いたものを読み、彼らの驚愕の中にころげまわり、それをむさぼり食

うことをやめようと思ってもやめられない。パスカルの驚愕ぶりには、きわめて満足する。そして彼がどこまで現代人であるかを知ってうれしくなってしまう。ロマン主義は彼のテーマを薄めただけだった。セナンクールは冗長なパスカルだ。シャトーブリアンは口先だけのパスカルだ。最近の心理学の材料で、彼が取り扱ったり、予感したりしていなかったものはほとんどない。それどころか、彼はそれ以上のことをしている。宗教を疑惑でいっぱいにし、それを意志的な昏迷と同一視することによって、不信者たちの目に宗教の威信を回復したのだ。野心家で矛盾に満ち、彼なりの方法で無遠慮だった、この天と地獄のゴシップ記者は、おそらく聖者たちに嫉妬の念を起こし、彼らと肩を並べることもできず、彼らに対抗するには苦悩に満ちた信仰しかないことを怨んだにちがいない。しかしそれは幸せな苦しみだった。それなくしては、彼はせいぜい退屈な『フィオレッティ』（『聖フランチェスコの小さな花』、十四世紀イタリアの聖人伝）か、眠気を催すような『信仰生活入門』（一六〇八、フランソワ・ド・サル著）しか残さなかったろう。

　恩寵よりは倦怠のほうがより多く彼にとりついていたと言えようか。彼はそのことをたえず考え、それをわれわれの本質、われわれの精神の「毒」、「心の奥底に住む」原則にしていた。彼は感じるふりをしていただけだと言ったら、それ以上にでたらめなことはない。われわれは慈悲や信仰のふりをすることはできる。信念によって祈ることもできる（それが彼の場合だ）。手を組み合わせ、その場に応じた態度をとることもできる（それを彼はすすめている）。しかし倦怠は、いかなる実践も、伝達も、方法もわれわれに与えられていない。いかなる教義もそれをほめあげ

ることはしない。いかなる信仰も、それを許しはしない。それは呪われた感情だ。パスカルがその願いを聞きとどけてやっていたのは、それを自己のうちに見つけ、おそらくその毒を愛していたからだ。彼は「栄光」にとりつかれていたのと同じように、倦怠にとりつかれていた。彼が栄光について語るとき、それが彼にとっては、われわれの虚栄を告発する手段でしかないと考えることがむずかしいほどの鋭さが見られる。彼は、われわれがいかに栄光を必要とするかを語り、さまざまの委曲をつくしてそれを分析して見せる。それは、疑わしい本性を暴露するたぐいの細心さだ。栄光の妄執のかげには、往々にして倦怠の働きがひそんでいる……

あらゆる道徳家同様、不純で、われわれを苦しみと、傷とにしばりつけるのに汲々としていた彼は、自分を憎むこと、自己の恐怖の苦しみを味わうことを教えてくれたのかもしれない。もし、われわれの良心が蚤を繁殖させるものであり、われわれが恍惚のペスト患者で、腐敗の熱愛者であるなら、その責任は彼に帰せられよう……

彼は霊的であるとともに官能的であり、われわれの無意味さの上にかがみこむときにはよろこびにふるえるのが感じられる。われわれの虚無は、彼の陶酔なのだ。彼は、われわれを抹殺するようなものすべてに身をふるわせ、無限と極小のあいだのコントラストに興奮し、われわれの腐敗の光景に通として参加する。彼こそ、芸術にわれわれの悪から喜びの本質を引きだす道を開いたのではなかっただろうか？

自分を憎むことの楽しさ、深淵の楽しみ！　自分のかたわらにその深淵を見ていたものを憐れ

むことはやめよう。彼はおそらく、そこから歓喜を汲みとっていたにちがいない。ただ、名誉を保つために、恐怖を覚えるふりをしていたのだ。どんなに偉大な精神でも、こと、彼らの快楽に関することとなれば、嘘をつかないものはいない。深淵をのぞきこむこともそのひとつだ。それを赤くならずに認めること、そのためには近頃のような厚顔無恥が必要だった。この、われわれ自身の秘密に対して、だれもがいだく好奇心が。そこで、「心の奥底」の探求は、われわれをパスカル的な「闇」の最後の表現である無意識の発見に導びかざるをえなかった。

解放への第一歩

本質的な経験をすること、外見の世界から解放されること、それを実現するには大きな問題をかかえていてはいけない。だれでも、神について論説することはできるし、形而上的な見せかけを装うこともできる。読書、会話、余暇がそれを与えてくれる。見せかけだけの不安を抱いたものほどありふれたものはない。なぜなら、あらゆるものが、不安でさえも習得できるからだ。

しかし、本当の不安、本性的な不安を抱いたものが存在しないわけではない。そういう人たちは、言葉に対する反応のしかたで見わけられる。言葉の無能力さを見わけるもの、言葉の失敗についてまず苦しみ、ついで喜ぶもの、それは疑いもなく解脱した精神、あるいは解脱しようとしている精神だ。なぜなら、われわれを事物に結びつけているものは言葉であり、前もって言葉と絶縁しなくては事物から解放されることはできないからだ。言葉に信頼をよせるものは、たとえ、あらゆる知恵の頂点にいようとも、隷従と無知の中にとどまる。その逆に、言葉に反逆するもの、

あるいは恐怖をもって言葉に背をむけるものは解放に近づく。この恐怖は習得することもできなければ、伝達することもできない。それはわれわれのより深いところで形成されるものだ。錯乱の力によってそれを感じるに至った哀れな狂人は、真の知識に一層近く、それを感じることができない哲学者より、一層「解放されて」いる。哲学は非本質的なものを排除するどころか、それを引き受け、それに満足するからだ。哲学が展開するあらゆる努力は、われわれに、言葉と世界との二重の無用さを認識させまいとするのではないだろうか？

皮肉の言語

われわれがどんなに楽園に近づいても、皮肉がやってきて、そこから遠ざけてしまう。「おまえたちの大昔の、あるいは未来の幸福の観念は無力だ。郷愁をふり捨て、時のはじまりと終りについての幼稚な妄念を捨てるがいい。死んだ時間である永遠は、弱いものだけが関わるものだ。瞬間が働くに委ね、それがおまえたちの夢を解消するのを待つがいい」と皮肉は言う。

知識に視線をふり向けようか？　皮肉がその無力さと滑稽さを教えてくれる。「事物を問題の次元にまで落として何になるのか？　おまえたちの知識は、たがいに抹殺しあい、時間的に最後のものはけっして最初のものにうちかちえない。〈すでに知っていること〉の中に閉じこめられたおまえたちは言葉のもの以外、どんな材料ももっていない。思考は存在には参与しない。」

そしてわれわれが驚嘆の心をもって、九年間も壁を向いて瞑想にふけっていたあのインドの坊主のことを考えるときにも、さらに皮肉が介入して、その坊主はそれほどの努力のはてにどこに

たどりついたかと言えば、出発地点の無になのだと教えてくれる！「精神の冒険がいかに滑稽なものかわかっただろう。外見の世界を大事にして、それから目をそらすがいい。外見の背後に、なんらかの基盤、なんらかの秘密があると思って捜してはいけない。何ものにも基盤だの秘密だのはないのだ。錯覚を掘っくり返し、存在する唯一の現実に危害を加えようとしてはならない」と皮肉が口をそえる。皮肉はこんな言い方に、なじませてくれる。しかし、そのときわれわれの形而上的経験とそれをこころみるようにしむけるモデルとの双方は危険にさらされざるをえない。皮肉がユーモアの度をませば、絶対そのものである、この〈時間の外の〉未来から、われわれは永遠にしめだされてしまう。

残虐という豪奢

行為と思考にとって必要不可欠のものである恐怖は、適当な量であれば、われわれの感覚と精神を刺激してくれる。それなくしては勇気ある行為も、また卑劣さも……存在しない。ひと言で言えば、恐怖なくしていかなる行為もありえない。しかし、それが度を越えて、われわれを取り囲み、われわれを越えてしまうと、それは有毒な原理に変わる。それがローマの皇帝たちのばあいだ。彼らは暗殺されることを予感していたし、感じてもいたので、虐殺によって心を慰めていた……はじめて陰謀が発覚するとき、彼らのうちに怪物が目覚め、解放される。そして彼らは、残虐さの中に、恐怖を忘れるために身を潜めたのだ。

しかし、われわれただの凡人にとって、他者に対して残虐さをふるうという奢侈は楽しむことと

ができないから、われわれ自身、われわれの肉体と精神とに、自分の恐怖政治を実践し、それをぶちまけるのだ。そのとき、われわれの内なる暴君がうち慄える。行動しなければならない。怒りをぶちまけ、報復しなければならない。われらの内なる暴君が報復するのはわれわれに対してだ。われわれのつつましい状態がそれを求める。恐怖のまっただ中で、帝国を持たないために、自分自身の良心しかいじめぬき、苦しめるものがないネロが、ひとりならずわれわれのうちにいることが明らかにされる。

微笑の分析

狂気がすきをうかがっているかいないか、〈笑い方〉を見てみればわかる。そこには、不快に似た印象がありはしないか？　そうだったら、恐れることなく精神病理医のつもりになってよい。一人の人間に属していず、よそから、〈もう一人のもの〉から来るように見える微笑は疑っていい。それはたしかにもう一人のものから、つまり、はっきりと姿を現わす前に、待ち、準備し、形成されている狂人から出ているのだ。

われわれから発する束の間の光の微笑は、続くべき時間だけ続き、きっかけとなった機会、ないし口実以上に延長されることはない。それはけっしてわれわれの顔の上にとどまらず、気がつかれることもめったにない。それは、与えられた一つの状況に密着し、瞬間の中に消え去ってしまう。もう一人のもの、あの疑わしいもののほうは、それを生みださせた事件のあとまで生き残り、ぐずぐずと同じことをくり返し、どうすれば消えることができるのかさえわからない。まず

はじめに、彼はわれわれの注意を求め、われわれの気をひく。ついでわれわれを困らせ、かき乱し、われわれに取りついてしまう。われわれとしてはそれを抽象しようとしても、追い返そうとしてもどうにもならないのだ。それがわれわれを見つめ、われわれはそれを見つめる。それをごまかす方法は少しもなく、巧妙に人の心に忍びこむ力に対しては防ぐすべもない。それがわれわれに引きおこした不快の印象は、ますます深くなり、恐怖に変わってゆく。しかしそれには完結する能力がないから、われわれの話し相手から切り離され、独立したもののように広がってゆく。自己の中の微笑、恐ろしい微笑、いかなる顔も、たとえばわれわれの顔も包んでしまうことのできる仮面。

ゴーゴリ

ある種の証言は、たしかに稀ではあるが、彼を聖者のように紹介している。もっと一般的には、彼を亡霊のように見ている。アクサコフはゴーゴリの死の直後に、つぎのように言っている。「彼は生前、ほとんど生きている人間のような印象を与えていなかった。だから、死体が大嫌いで、見ることとさえできない私も、彼の亡骸を前にしてそのような感じを覚えなかった。」

彼は一時も離れることのない寒さに苦しめられていて、たえずこう言っていた。「がたがたする。がたがたする。」彼は国から国を経めぐり、医者にかかり、病院という病院を遍歴した。内的な寒さはどんな気候のもとでも癒されることはなかった。彼にはどんな愛人も知られていない。伝記作者たちは、公然と、彼が不能であったと言ってはばからない。不能、それ以上、人を孤独に

する苦しみはない。不能者は内的な力を秘めていて、それが彼を特異にし、近づきがたく、逆説的に、危険にする。彼は人に恐怖を与える。動物界をぬけ出してきた動物、いかなる人種にも属さない人間。本能が見捨てるような生。彼は失ったものすべての代償として高くのぼっていった。それは精神に好まれた犠牲であった。たとえば不能のねずみなど想像できるだろうか? 齧歯類は、この生殖という行為をみごとになしとげる。人間については同じように言うことはできない。例外的であればあるほど、人間は、存在の鎖を免れるこの大いな能力の欠如を持っている。このような人間には、われわれを動物学の総体に近づける行為以外のあらゆる行動が許されている。性はわれわれを平等にする。それはわれわれから神秘を取り除く……ほかのさまざまな欲求や仕事とは比較にならないほど、それはわれわれを同類と対等の立場に置く。それを実践すればするほど、われわれはみんなと同じになる。獣的であると考えられている行為のただ中でわれわれは市民としての資格を獲得する。性行為ほど〈公け〉のものはない。

のぞむとのぞまぬとにかかわらず、禁欲というものは、個人を、種の上方であるとともに下方である地点に置き、聖者と愚者、この、われわれの気を引き、あるいは、うちのめすもののまざりものにする。そこから修道士に対するあいまいな憎悪が生じる。それは、そもそも、妻を拒否する男、〈われわれと同じ〉であることを拒否した人間に対して抱く憎悪だ。彼の孤独を許すことはできないだろう。それは嫌悪の念を催させるのと同時に、われわれを辱しめるものだ。挑発と言ってもいい。欠陥が持っている奇妙な優越性! ゴーゴリは、ある日、愛に負けるようなことがあれば彼は

「ただちに粉みじんになってしまう」だろうと告白した。われわれを根底からゆさぶって、誘惑するこのような告白は、キェルケゴールの「秘密」、「肉体の中の刺」を思わせる。しかし、このデンマークの哲学者にはエロチックな本性があった。婚約に破れたことと、その失恋は、彼を一生苦しめ、神学的な著作にまで刻印を押している。それでは、ゴーゴリをスウィフト、このもう一人の「雷撃を受けた者」と比較したらどうだろう？　そのときには、この後者が、愛する機会とは言わないまでも、少なくとも犠牲を作る機会を持っていたことを無視することになるだろう。ゴーゴリを規定するには、ステラもヴァネッサもいなかったスウィフトを想像してみる必要がある。

★

「『検察官』や『死せる魂』の中で、われわれの目の前で生きている人間たちは、『何ものでもない』。そして『何ものでもない』ことによって、彼らは『全て』なのだ」とある伝記作者は言っている。

彼らにはたしかに、「実体」がかけている。そこから彼らの普遍性が出ている。チチコフ（『死せる魂』）とかプリウシュキンとかソバケヴィッチとかノズドレフとかマリノフとか『外套』の主人公とか『鼻』の主人公とかは本質にまで還元させられたわれわれ自身でなくていったい何だろう？　「無の魂」とゴーゴリは言う。それはある種の偉大さに達している。すなわち、平板さの偉大に。〈賤民〉のシェクスピアとか、われわれの気まぐれや、ささやかな夢や、日々の織糸を観察することに専念するシェクスピアと言うこともできるだろう。ゴーゴリほど、日常的なもの

の透察において進んでいたものはないのだ。現実性を追求するあまり、彼の作中人物たちは存在しないようになり、われわれが完全に自分の姿を見出すような象徴に変わってしまう。彼らは失墜するのではなく、はじめからずっと落ちているのだ。どうしても『悪霊』のことを考えざるをえない。しかし、ドストエフスキーの人物たちが、その限界をめがけて飛び立つときに、ゴーゴリの人物たちは、彼らの限界へあともどりするのだ。一方は、彼らを越える呼び声に答えるように見え、他方は、彼らの限りない平凡さにしか耳を傾けないように見える。

ゴーゴリは、生涯の最後にあたって悔恨にとらえられた。彼の人物たちは、悪徳とか、俗悪とか、汚濁でしかなかったと彼は考えた。彼らに美徳を与え、彼らをその堕落から救ってやらねばならなかった。そこで『死せる魂』の第三部が書かれた。しかし、きわめて幸いなことに、彼はそれを火に投じてしまった。彼の人物たちは、「救われる」ことはできなかったのだ。それは狂気の行為と考えられたが、実は、芸術家の良心のためらいから来るものだった。作家が予言者を抑えたのだ。われわれは彼の中にある残忍性や、人間への侮蔑と、呪われた世界のヴィジョンを愛しているのだ。どうして敗北的な戯画などががまんできたろうか？　償いがたい損失だとあるものは言う。しかし、それはむしろ幸福な損失だった。

★

晩年のゴーゴリは、もうひとつの暗い力に取りつかれていて、それをどう扱ったらいいか知らなかった。彼は、ときおり、瞬間的覚醒が訪れるだけの仮死状態の中に溺れていた。亡霊の覚醒

だった。「不安の発作」を距離を置いて保つことを許していたユーモアは消えてしまった。みじめな冒険がはじまった。友人たちは彼を見捨てていった。彼は『書簡抄』を公表するという狂気のさたまでやった。それは、彼自身認めていたように、「読者に対する平手打ちであり、友人たちに対する平手打ちであれば、自分に対する平手打ちでもあった」。スラブ主義者や、西欧主義者は、彼を否定した。彼の著作は、権力と、隷従との称讃に、反動的な饒舌になった。不幸なことに彼は、マトヴェイという、芸術の理解できない、狭量で、攻撃的な神父と交わっていた。神父は彼に、告解僧、ないし拷問官のような力をふるっていた。その神父から受け取る手紙を彼は、肌身離さず持って歩いて、くり返し読んでいた。愚昧と白痴による治療、そのかたわらでは、パスカルの〈愚かになれ〉という教えさえ、ただの機智にすぎない。作家の才能が尽きたとき、彼の霊感の空隙を埋めたものは、良心の導師の無能さだった。ゴーゴリにおけるマトヴェイ神父の影響は、プーシキンのものより、はるかに大きかった。後者はゴーゴリの才能を力づけたが、前者は、その才能の残りかすを抑えつける役をした……ゴーゴリは説教を垂れるだけでは満足せず、さらに自分を罰そうとした。彼の作品は、ファルスに、百面相に近づいていた。すなわちひとつの普遍的な意味に。彼の宗教的な苦しみはそれを感じずには、いられなかった。

ほかのものたちは、彼の悲惨は当然のむくいであり、それによって、人間の顔を変形した大胆な罪のつぐないをするのだと言うかもしれない。私にはその逆の方が本当のように思える。彼は正しく見たことの代償を払わねばならなかったのだ。芸術の分野において、つぐなうべきは、わ

われわれの罪ではなくてわれわれの「真実」、すなわち、われわれが本当にのぞき見たもののほうなのだ。彼の作中人物たちはそれを追求していた。クレスタコフ家の人々、チチコフ家の人々、彼はそういった人たちを彼自身の告白によって、いつも自分の中に持っていた。彼らの人間性以下のものが彼を押しつぶしていた。彼はそれらの人たちを一人も助けなかった。芸術家として彼にはそれができなかったのだ。彼は才能を失ったとき、救いにおもむこうとした。ところが作中人物たちのほうで、それをさまたげたのだ。そこで彼は、心にもなく、彼らの空虚さに忠実にとどまらねばならなかったのだ。

ここで私が考えているのは、摂政期（それについてサン＝シモンは「生まれたときから退屈している」と言っている）でも、ボードレールでも、「伝道の書」でも、悪の存在しないような世界に住んでいる悪魔の、その内的な休業状態でもないもの、すなわち自分自身に対して祈りをふりむける者のことだ。その段階において、倦怠は、一種の神秘的な威厳を身につける。「絶対の感覚はすべて宗教的である」とノヴァーリスは言っている。時間とともに、倦怠はゴーゴリの中で信仰にかわり、彼にとって、絶対の感覚、すなわち、宗教となっていたのだ。

言葉の創造

私は、何を一番羨むかと聞かれたら、ためらいもなくこう答えるだろう。言葉のただ中に休息し、言葉は現実そのものと照応しているとか、日常の中に分散した絶対であるなどと言って、それを問題にしたり、記号と同一視したりすることはせず、本能の同意にしたがって、そこに素樸に

生きるものだと。逆にまた、言葉を見破ったり、その奥義や無を見わけたりするものを嫉妬しようとは思わない。そのような人にとって、現実との自由な意志の交換はない。そんな人は道から遠ざかり、危険な自律性に追いこまれ、自分におびえるようなところに達しているのだ。言葉は彼を逃れてゆく。彼はもうそれを捕えることはできないのだが、なおも郷愁にも似た憎悪をもって追いつづけてゆく。彼は、もはや苦笑いか、ため息と共にしか言葉を発することができない。もう彼は、言葉と心を通じあえないのに、それでも言葉なしにはやっていけない。そしてまさに、言葉からもっとも遠くはなれたそのときに、一層、言葉にしがみつく。

★

われわれのうちに言葉が引きおこす不快は、現実がよびおこすものと、まったく別物ではない。言葉の奥底に垣間見る空虚は、事物の根底に把握されるものを思わせる。二つの認識、二つの経験、そこから、対象と象徴、現実と記号のあいだの差異が出てくる。詩的行為においては、この差異は分裂の相を取る。承認されている意味と、受けつがれた世界、それと伝統的な言葉から、本能によって身をひきはがした詩人は、もう一つの秩序を求めて、明証性の虚無と、あるがままの視覚に挑戦する。彼は言葉の創造に参加する。

★

真実がついに発見されて、万人に強制されるような世界、真実が勝ちほこって、近似や、可能の魅力を押しつぶしてしまう世界を想像してみるがいい。そこでは詩など考えられるまい。しか

し、詩にとって幸いなことに、われわれの真理は、仮構と区別することがほとんどできないから、そこに登場する義務はない。したがって詩は、われわれの世界と同じく、真実でもあれば嘘でもあるような、固有の世界を形成する。しかし、それはそれほど広くも、強力でもない。数でいったらわれわれのほうがずっと多い。われわれは無数であり、われわれなりの慣習は、統計学だけが与えることのできる力を持っている。この利点のほかに、もうひとつ馬鹿にできない利点がある。使い古された言葉の専売権を手中に収めるということだ。嘘の数量的な優越によって、われわれはつねに詩人たちを上まわり、論述の正当性と詩の異端性のあいだの論争はけっして終らない。

★

どんなに懐疑主義の誘惑を受けないものでも、実用言語に対して覚える激昂は弱まって、やがては許容するようになってゆく。はじめはあきらめて服従し、ついで認めることになる。事物の中には、言葉におけるほどの実体がない以上、その非概念性にも慣れてゆき、成熟からであれ、あるいは疲労からであれ、人間は言葉の生命に介入することを放棄する。言葉の虚無を見破ってしまった以上、それに、いまひとつ意味を追加したり、それを揺すぶったり、改革しようとしたりして、なんになるのだろう。懐疑とは言葉の上におおいかぶさる微笑だ。……かわるがわる重みをはかってみたあとで、その作業が終ってしまえばもうそれは考えなくなる。「文体」について言えば、それにまだ人が身を捧げることができればの話だが、その責任を負うものは無為かぺ

てんかのどちらかだけだ。

詩人のほうは、問題を別なふうに判断する。彼らは、言葉を真剣に取り扱う。そして、自分なりの言葉をひとつ作りあげてしまう。詩人の特異性は、それぞれの言葉に対する非寛容さに由来する。平凡な言葉や、使い古された言葉にとうていがまんできない彼らは、言葉によって、そして言葉のために、苦しむべく定められているのだ。それでいながら彼らは、言葉によって救われようと努力し、言葉の甦生の中に自分の救いを求めようとする。事物に対する彼らのヴィジョンがいかなるものであれ、彼らはけっして本当の否定者にはなりえない。言葉に若さを回復させようとし、言葉に新しい生命を注ぎこもうとすることは、一種の狂言、ずばぬけた迷いを思わせる。創るということ、――詩的な意味で――は言葉の共犯者と刺激剤になること、すなわち、偽ニヒリストになることだ。あらゆる言葉の創造は明晰さを犠牲にして発展する……

疑問に対する答や、なんらかの根本的な啓示を詩に求めてはならない。詩に「神秘」を与えたらきりがない。それなのに、どうして詩の助けなど求めるのだろう? どうして――ある種の瞬間に――詩に頼るようにさせられてしまうのだろう?

言葉のただ中に放り出されるとき、われわれは言葉にほんの少しの感動も伝えることができない状態に落ちる。そして、言葉がわれわれ同様に無味乾燥で、堕落しているように見えるときに、また精神の沈黙が、物体の沈黙より一層重く見えるときに、われわれは自分の非人間性の恐怖に捕えられるところまで下りてゆく。明証性よりはるか遠いところに漂流するとき、われわれは、

突然、沈黙の中に襲いかかってくる言語の恐怖——詩だけが、われわれの確信と疑いの一時的な喪失を慰めにやってくるような目まいの瞬間——を知る。そのように詩とは、われわれの〈否定的な刻限〉の絶対であり、すべての刻限の絶対ではなく、言葉の世界における不自由さから派生するもののみの絶対なのだ。詩人は、自分の救いを言葉によって得ようとする怪物であり、世界の空虚を、空虚の象徴そのもので埋めようとする（なぜなら言葉はそれ以外のものであろうか？）ものである以上、どうして彼らの例外的な錯覚についていってはいけないのだろう？　われわれが日常言語の仮構を見捨て、もっとほかの、厳密ではなくとも大胆な言語を捜そうとするときには、詩人はいつでも頼みの綱になる。そのときには、われわれのもの以外のあらゆる非現実が好ましく、会話や祈りによって日常化した言葉よりも、一行の詩の中に、より多くの本質があるように思われはしないだろうか？　詩が分りやすいものであるか、難解であるか、有益であるか、無償のものか、それは、そのときには、二義的な問題でしかない。苦心の作か、啓示か、それはどうでもいい。われわれ凡人は詩に対して、論述の抑圧と、恐怖から解放してくれることしか望まない。それに成功するとき詩は〈ほんの一瞬だけ〉われわれの救いになる。

さまざまの理由から、言語は、一般大衆と詩人にしか役に立たない。言葉によって眠りこんだり、それと戦ったりすることで利益を得るものとすれば、その逆に、言葉を検討して、その嘘を発見しようとするときには、なんらかの危険を覚悟しなくてはならない。言葉に従事するもの、言葉の上にかがみこんでそれを分析するものは、言葉を疲れさせ、それを亡霊に変えてしまうよ

うになる。そのようなものは言葉と運命を分ちあう以上、その報いを受けねばならない。どんなものでもいいから、ひとつの単語を選んで、それを何回もくり返し、検討してみるがいい。その単語は力を失ってゆき、その結果として、〈われわれの中の〉何ものかが消え去ってしまうだろう。ついでほかの単語を取りあげ、そうやって続けてゆくがいい。やがてわれわれは、不毛性の電撃的な地点、言葉の創造の対極に達するだろう。

★

人は、深淵に片足をつっこまずには、言葉に対する信頼を撤回することはできないし、その安全性を脅やかすこともできない。言葉の虚無は、われわれの虚無から出てくる。言葉は、もはやわれわれの精神と一体をなさず、まるで、一度としてわれわれに仕えたことがないようにさえなる。言葉は実存するのだろうか？　その実存を認識はしても、感じることはできない。言葉がわれわれを去り、われわれが言葉を去るということは、なんという孤独だろう！　われわれはたしかに自由にはなる。しかし、言葉の横暴がなつかしくてならない。言葉は、かつて、事物とともにいた。いまや、言葉は消え去り、事物は言葉についで消え去ろうとし、われわれの視線のもとで見るまに小さくなってゆく。あらゆるものが小さくなり、あらゆるものが消え失せる。どこに逃げて行くのだろう？　どこから無限をのがれることができるのだろう？　物質はちぢこまり、大きさを捨て、占めていた場所を空にする……そして、われわれの恐怖がひろがり、場所を占めて、世界のかわりをつとめる。

非人間を求めて

われわれは卑劣にも、自分の無の感情のかわりに、一時的な無の感情を置いた。一時的な無は、ほとんど不安をかきたてないからだ。われわれはそこに、多くの場合、約束とか、断片的な不在とか、打開されうる行きづまりなどを見ようとする。

長いあいだ私は、自分と他人についてすべてを知っている人間、賢者にして、悪魔であるもの、神のような見とおしをそなえているものを捜そうとして夢中になっていた。そのような人間を見つけたと思っても、そのつど検討を加えてみると、がっかりせざるをえなかった。新たに選ばれたものもどこかに欠点や、汚点を持っていた。彼らを人間の低さにまで引きおろすような無意識の片隅、あるいは弱さの片隅があったのだ。彼らの中には、欲望だとか、希望などの痕跡やかすかな悔恨が読み取れたものだ。彼らの破廉恥も、絶対に不十分なものだった。なんという失望だったろう！　私はなおも探索を続けたが、その時々の私のアイドルは、いつでもどこかに欠点を持っていた。〈人間〉がそこに現存し、あるいは隠れ、仮装し、あるいはすりかえられていた。私はやがて種の絶対的な支配を理解するようになった。そしてもう、非人間とか、完全に無によって浸透された怪物など夢みることはなくなった。そんなことを考えるのは、馬鹿なことだった。絶対の明晰さなどというものが、人間の諸器官の現実と一致しえないものである以上、そんなものはありえるはずがなかった。

自己を憎むこと

自己愛ということは容易なことだ。それは保存本能から発するものだから、動物でさえほんの少し堕落していれば、それを知っているだろう。もっと難しいのは、人間だけにしかできないこと、すなわち、自己への憎悪だ。自己憎悪は、人間を楽園から追放したのち、人間と世界をへだてる距離を大きくし、瞬間と瞬間のあいだで、そのあいだに広がる空隙の中で、人間を目覚めさせておくためにできるかぎりの努力をする。意識が出てくるのは、その自己憎悪からであり、したがって人間という現象の出発点を求めるべきはその中なのだ。私は自分を憎む、ゆえに私は人間だ。私は絶対に私を憎む。ゆえに絶対に人間である。意識しているということは、自己と分断されていること、自己を憎むことだ。この憎悪は、知恵の木に樹液を供給すると同時に、われわれの根底に働きかける。

ここに、外に生き、自己から遠ざかった人間がいる。彼を生者の内に数えることは、彼が生に対して保っている接触が表面的なものでしかない以上、まちがっているだろう。彼においては死との接触であっても、それ以上ではない。そのどちらにも正確な場所を見出すことができないために、彼は、その第一歩からごまかしてしまう。闖入者、偽の生者、偽の死者、ぺてん師。意識、この、存在するところのものに対する非参加、何ものとも一致しないという能力は、創造の経済学の中には予告されていなかった。彼はそれを知っている。しかし、それを最後までやりとげ、そこに滅びる勇気も、助かるために、それを押しのける勇気も持っていない。生まれつきの異邦人であり、自己のただ中に一人放りだされ、この世からも、あの世からも解放されている彼は、

いかなる現実とも、完全に結びつくことがない。半分しか現実のものではないときにどうしてそんなことができるだろう？　それは〈実存を持たない〉存在なのだ。

精神へ向かう彼の歩みは、いずれも、生に対する誤ちに等しいものだ。もう一度、事物を復縁するためには、意識の盲目の動きに限界を設けてはならない！　しかし、反省をしない状態（そこでは彼の罪障の感覚は消滅するだろう）から、彼は捨てることもできなければ、捨てようとも思わない、この自己憎悪によってへだてられている。彼は人々の列や、救いへの踏みならされた道からそれて、その〈興味ある〉動物という評判を保ちうるためにたえまなく革新してゆく。

典型的な束の間の現象である意識を、彼は爆発点まで押し進め、それとともにくだけ散る。彼は自分を破壊することによって、その本質にまで身を高め、使命、すなわち彼自身の敵となることをなしとげるだろう。生が物質を誤らせたのなら、彼は生を誤らせたのだ。その経験はくり返されるだろうか？　それはいささかも次の時代を約束するようには見えない。彼こそ、自然が犯した最後の気まぐれだと、あらゆるものが思わせる。

仮面の意味

われわれの思考は、どんなに進んでいっても、またどんなにわれわれの利益から離れていても、ある種のものの名前を呼ぶことだけはためらう。それはわれわれの最後の恐怖なのだろうか？思考はそれを隠し、われわれに手加減し、とり入ろうとする。そうやって、数々の試練のあとで、「宿命」がはじめて姿を現わすとき、思考はそのむこうでは、あらゆる探索が対象を失うようなひ

とつの限界、ひとつの現実をそこに見させてくれる。しかし思考が言うように、本当にこのような限界、このような現実があるのだろうか？　どうも信じがたい。われわれをそこにしばりつけ、それを押しつけようとするとき、その思考が疑わしく見えるのだ。それは限界点などではあろうはずもなく、それを通してもう一つの力、至高の力が現われるようなものであることを、われわれは十分に感じている。われわれの思考がいかに技巧を弄し、努力をかたむけてそれを隠そうとしても、われわれはやがてはそれを見定め、それを本来の名で呼びさえする。そしてあらゆる現実の肩書きを併せ持っているように見えた宿命のほうは、もうただの姿にすぎない。ただの姿？　それでさえない。それは偽装であり、ただの仮象であり、それをもってこの力が、〈われわれにぶつからずに〉われわれを破壊するのだ。

「宿命」は仮面にすぎなかった。死以外のものはすべて仮面なのだから。

悲劇の伝染

悲劇の主人公がかきたてるものは、憐れみの情ではなく、羨望の念だ。この仕合せ者の苦しみを、われわれはまるで本来われわれに帰属するはずなのに、彼がごまかしてしまっているかのようにむさぼり味わう。どうしてそれを彼の手から取り返さずにいられよう？　いずれにしても、それはわれわれに運命づけられていたのだから……われわれは、それをはっきりと確保するために、自分のものであると宣言し、拡大し、けたはずれの大きさにする。彼のほうは、われわれの前でいかにじたばたしたり、うめいて見せたりしても無駄で、われわれを感動させることはでき

ない。なぜなら、われわれは彼の観客ではなく、彼よりもよく〈彼の〉不幸を耐えることのできる、客席における競争者であり、ライバルなのだから。われわれはその不幸を引き受け、〈舞台の上の〉可能性以上に誇張する。われわれは彼の運命を担い、彼よりずっと早く彼の敗北まで駆けてゆき、彼に対してはせいぜい優越の微笑でも向けてやるのだ。その間、われわれは、われわれのほうにだけ、罪または殺人と、悔恨または贖罪の功徳をつかんでいる。われわれの傍において、彼はなんだろう、その苦悩はなんといいかげんに見えることだろう！　彼のあらゆる苦痛は、われわれが担っているのではないだろうか、彼が演じてみようとして、どうしても成功しない犠牲者の姿を、われわれは象徴しているのではあるまいか？　しかし何という侮辱だろう！　最後に死ぬのはやはり〈彼〉なのだ！

言葉の外

われわれは文学の中にとじこめられているかぎり、その真理を尊重し、それに実体を与え、その虚無に肉づけしようと努力する。まちがいもなく、悲しい状態だ。しかし、それよりも悪いことがある。それは、この種の真理を超越して、しかも、知恵の真理は手に入れることができないというやつだ。どんな方向をとればよいのか？　どんな精神の領域に腰を落ちつけることができるのか？　そのとき人は、もう文学者ではないのに、表現を侮蔑しながらなおも書きつづけるのだ。使命の残りかすを保ち、それを捨てる勇気がないこと、それは知恵とはかかわりのない、悲劇的とさえ言えるあいまいな立場だ。知恵というものは、まさに文学的であれ、他のものであれ、

あらゆる使命を根こそぎにする勇気のうちにあるものだからだ。不運にも、文芸の道を一度たどったことのあるものは、いつまでも表現に対する崇拝や、言葉だけがその恩恵を受けるような迷信を持ちつづける。才能を持ちながら、それをいいかげんにしたり、恐れたりしているものは、確信もなく、必然的に失敗するような計画や制作にとびこんでゆく。それは言葉と沈黙のあいだで宙ぶらりんになった見習い、自己を表現し、自分の名前にしがみつくようなものには拒否されている空隙への栄光を、それでも手に入れたように言うみじめな男だ。「本当の生」は言葉の外にある。

しかし、言葉はわれわれを迷わせ、支配している。われわれは言葉から世界を出現させようとまでしたのではなかっただろうか？　われわれの起源をどこかのおしゃべりな神の饒舌か、即興に求めたのではなかっただろうか？　それは宇宙開闢を、言葉の幻の古代に帰することだ！　文学は、これはすぐに気がつくことだが、きわめて古い時代にさかのぼる。なぜなら、われわれにはいささかも錯覚が不足したことはなく、文学に物質の最初の出現を帰することとさえ恐れなかったからだ。

嘘の必要性

生涯のはじめに、致命的な真実をのぞき見たものは、それなしにはもう生きることができなくなってしまう。それに忠実にとどまったらどうなるだろう？　だめになってしまうだけだ。それらの真実を忘れ、否定すること——それが彼にとって、生と妥協し、知と耐えられないものの道

を去るための唯一の手段なのだ。嘘、行為を推進するようなあらゆる嘘を追い求め、その嘘を崇拝し、それによって救いを得ようとする。いかなる妄執も彼を誘惑する。それが彼の中で好奇心の魔を抑えつけ、彼の精神を動かなくしてくれればいいのだ。そこで彼は、祈りとか、その他のあらゆる気まぐれに助けられて、思考の流れを止め、知性の責任を捨て、寺院か、気ちがい病院の中に埋もれてしまったことの幸福を味わうものたちをうらやむのだ。彼もまた、錯誤の陰、愚昧さの隠れみののもとに喜ぶことができるなら何でも与えることだろう! 彼はそれをやってみようとする。「難破を避けるために賭けをしてみよう。頑固さや、気まぐれや、大胆さによって生きつづけよう。呼吸するということは私を魅惑する迷いだ。空気が私から逃げてゆく。大地は足もとで揺らぐ。私はありとあらゆる言葉を呼びおこし、一体となって祈りになるように命じた。言葉は無力に押し黙ってじっとしていた。そのために私は叫び、叫ぶことをやめられないのだ。『なんでもいい、私の真実以外のものなら!』」

これこそ言葉と縁を切り、それを除けものにしようとしている者だ。これほど長いあいだ待望してきた盲目を祝っているとき、不快が彼を襲い、勇気がなくなってゆく。彼は知識の報復を恐れ、明晰さの回帰と、彼があれほど苦しめられてきた確信の出現を恐れるのだ。あらゆる保障を失って、彼の救いの道が新たなカルヴェリオのように見えるためにはそれで十分なのだ。

懐疑の未来

素樸さ、楽天主義、寛大さ——そういったものは、園芸家とか純粋科学の専門家とか、探険家

などには見られるが、政治家や、歴史家や、坊主にはけっして見られないものだ。前者は同類なしでもすむけれど、後者は同類たちをもって彼らの活動、ないし研究の対象とする。人は人間の傍でのみ、気むずかしくなる。人間を思考の対象とし、研究し、助けようと欲するものは、遅かれ早かれ、人間を軽蔑し、嫌悪するようになる。最大の心理学者である司祭は、その職業上、同胞たちにいささかの信用も置くことができなくなった人間、もっとも覚醒した人間の見本と言える。そこからあのものわかりのよさそうな様子、手管、嘘の柔和さ、深い破廉恥が出てくる。彼らのうちで聖性に近づいていったものたち、これは本当のところきわめて稀であるけれど、もし彼らが信者たちをもう少しよく観察していたら、とうていそんな状態に達することはできなかったにちがいない。彼らははぐれ者であり、原罪に対して好奇の心を持って——かつての寄生者として——生きることのできない、〈悪しき〉司祭たちなのだ。

人間についてのあらゆる錯覚から目ざめるには、告解所の知恵と百年の経験を必要とするだろう。教会は人間が救われるものだと信じたり、あるいは非寛容に満足することができるにはあまりに老巧であり、あまりに裏の裏を知りすぎている。教会は、無数の熱狂的な人たちや、疑わしい人たちと格闘したあげくに、ついに彼らを見抜き、やがてそれに飽き、彼らの疑惑や苦しみや告白を嫌悪するようになったにちがいない。人の魂の秘密の中の二千年！　教会にとってさえ、これは長すぎた。今まで奇跡的に嫌気の誘惑から身を守ってきた教会も、いまやついに屈服しようとする。教会は自分が引き受けた人々の良心をうるさく思い、それにうんざりする。もうどん

な悲惨も、どんなけがらわしいことも教会の興味をかき立てない。われわれは、教会の同情と、好奇心をすりへらしてしまったのだ。教会はわれわれみんなのことを、隅から隅まで知りぬいているので、われわれを軽蔑しわれわれがあちこち走りまわって、ほかの場所を捜すのをほっておいてくれる……すでに熱狂者たちが教会を去った。まもなく教会は懐疑主義の最後の隠遁所となるだろう。

恐怖の変遷

ルネサンス以来、科学はわれわれに、敵意もなければ、助けてもくれない自然の中に生きているのだと信じこませてきた。その結果、われわれの恐怖の保有量は減ってしまった。それこそ重大な危険だった。なぜなら、恐怖とは、われわれの与件の一つであり、実存と平衡の条件の一つだったのだから。

恐怖は、われわれの状態に密度と活力を与え、信仰心と皮肉をとぎすまし、憎悪と同じく愛情も鋭くし、感情のひとつひとつを高め、刺激していた。恐怖が迫れば迫るほど、われわれは、その状態に満足した逃亡者になっていた。そのとき、われわれは、不安や危険に飢え、あらゆる勝利、ないし敗北の機会に飢えていた。恐怖は限度を知らず、なりふりもかまわず、無法者としての才能と、その情熱をふりまいたのだ。それをわれわれは恐れ、かつ大切にしていた。われわれの恐怖に対する熱狂は、恐怖がわれわれに与えてくれる戦慄に比例して増大していった。その支配からのがれることなど、だれも考えてはいなかった。われわれは、それに縛られ、制御されて

いた。その一方では、それがわれわれの勝利や敗北を、これほどまでに堂々と指弾するのを見て満足至極だったのだ。しかし、変遷の外にいるように見えた恐怖も、やはり変遷、それももっとも残酷なものを知らねばならなかった。それを追放しようと必死になっていた「進歩」の打撃を受けた恐怖は、とりわけ十九世紀に、身をひそめるように臆病になり、まるで恥ずかしいかのように姿を消し、ほとんど消滅してしまいそうになっていった。今世紀はもう少し明晰であったから、その事態に警告を発するようになった。どうやってその救助に飛んでいったらいいのか、どうやって、あの昔の状態に戻し、当然の権利を回復させてやることができるのか？　と人々は考えた。科学そのものも、それに手をかした。恐怖は、脅威になり、恐慌の種になった。そして、この、繁栄に欠くことのできない大量の恐怖をわれわれが保存していることは、いまやたしかになった。

到達したものたち

深みに慣れ親しんだものにとって、「神秘」は何ものでもない。彼らは神秘についてどんな風にも話しはしない。それが何であるかも知りはしない。彼らはその中に生きている……その中で彼らが動いている現実は、それ以外のものを含まない。それより低く、それより彼岸的な地帯はけっしてない。彼らはあらゆるものより低く、あらゆるものより彼岸的なのだ。超越性に満服し、精神の操作よりも、精神にしがみつく奴隷状態よりも、より高く、彼らはその尽きることとなき非好奇心の上に寝そべっている……宗教も形而上学も彼らをわずらわさない。すでに測りえぬものの

の中にいるときに、何を測ってみようと言うのだ？　満足、おそらく彼らは満足しているだろう。でも彼らはあいかわらず自分たちが存在しているかどうか知らないのだ。

われわれは、与えられた現実の背後に、もうひとつの現実を追求するかぎりにおいて、また、絶対そのものを越えてもなお探求しつづけるかぎりにおいて自分を確立するのだ。神学は神で行きどまるのだろうか？　とんでもない。それはさらに高くのぼって行こうとする。ちょうど本質をすべて洗いざらいしらべたあげく、そこに腰を落ちつけようとはけっして思わない哲学者のように。そのどちらも、最後の原則にしばりつけられることを恐れ、秘密から秘密をわたりあるき、説明のできないものを讃美し、羞恥の念なしにそこにおぼれる。神秘、なんという宝物だろう！　しかしそこに到達したと思い、それを知りつくし、そこに住みついていると思うことはまた、なんという不幸だろう！　もはや探求はない。神秘はそこにいる。手の届くところに。死者の手の届くところに。

悲しみの屑

I　突然あらゆるものから遠く、あらゆるものの存在しない点にすべってゆく。自我、それはひとつのラベルだ。私の顔と平行に、私は自分の視線の中で、自分を凝視する。あらゆるものが、もうひとつのものだ。すべてが他だ。どこかにひとつの目がある。だれが私を見ているのだろう？　私は恐怖を覚える。やがて、私は私の恐怖の外に出る。

瞬間の外、私という人間の外にいて、どうやって時間に参加することができよう？　持続はミ

イラ化し、生成は既成となる。もはや呼吸すべき、叫ぶべき、ひとかけらの空気もない。息は否定され、観念は口をとざす。精神はすぎ去った。私はあらゆる聴覚を泥の中に引きずり、骸骨の指にはまった指輪ほどにも世界に執着しない。

II 「ほかの連中は前進するのが嬉しいらしいが、おれは後ずさりがいい」とある浮浪者が言った。幸せな浮浪者よ！ 私は後退さえしない。私はとどまるのだ……そして現実そのものが、私の疑いによって固定されてとどまる。自分に対して疑いを抱けばそれだけ、私はそれを事物に投影し、私の不確定さについて事物に復讐する。すべてがとどまればいい、そうしたらそのときから、私はどんなものであれ、なんらかの地平に向けて一歩をすすめようと思うことも、することもできなくなる。世界を前にした怠惰が、私を、〈この〉瞬間に釘づけにする……しかし、その怠惰をゆすぶるために、私の本能を呼びさますやいなや、私はまた別の怠惰に落ちる。メランコリーという名の悲劇的な怠惰に。

III 肉と、器官と、各細胞の恐怖、本源的、化学的な恐怖。私の中のあらゆるものが風化する。この恐怖でさえも。精神はなんという脂、なんという悪臭の中に住みに来たのだろう！ この肉体の毛穴という毛穴からは悪臭が漂って、あたりを臭くする。それは、地球の幾何学を変容させる腫れ物にくらべて、それよりけがらわしくないとは、とても言いがたい血がねばりついたごみのかたまりにすぎない。超自然の嘔吐！ 私に近づいてくるものは、みな、彼らを待ちかまえている鉛色の宿命という腐敗の段階を、知らずに示しながらやってくる。あらゆる感覚は不吉であ

り、あらゆる快楽は墓穴的だ。どんなに暗いものであってもいいが、なんらかの瞑想が、快楽の結論に——悪夢に——高まることができるだろうか？

本当の形而上学者は、放蕩者の中に捜してみるがいい。ほかのところにそれを見つけることはできないだろう。われわれが自分の虚無、すなわち、気晴しが今のところ隠していてくれている深淵に気づくのは、感覚を疲労させ、犠牲にするときでしかない。精神はあまりに純粋で、あまりに新しすぎて、この古い肉体を救うことができない。肉体の腐敗は、われわれの目の前でどんどん広がってゆく。その光景を前にしては、われわれの破廉恥でさえ後ずさりし、涙とともに消え去らねばならない。われわれにはもっとほかの苦しみ、これほど耐えがたいものではない光景がふさわしかったのだ。事実、肉体による救いも、そもそも魂による救いさえありえないのだ。私の日々の一覧表を作ってみれば、おそらくそのどれもが、それだけで多数の地獄の用を供するに足りるものばかりだろう。

『黙示録』の中に、「神の刻印」を額に押されていないものを最悪の苦しみが待ち構えていると書いてある。あらゆるものが容赦されても、彼らだけはだめなのだ。彼らの苦しみは、さそりに刺された者の苦しみに似ている。彼らはむなしく死を求める。死は彼らの内にあるにもかかわらず……

「神の刻印」を押されていないこと。それがどういうことなのか、せめてそれがわかれば！

Ⅳ　私の心にかなったティベリウス、私は、彼の辛棘さか、その残虐さを、彼の島好みを、ロ

ードス島で過した若き日々と、カプリ島の老年を思う。彼が好きなのは、彼にとって同胞というものが考えられないように見えるからだ。そしてまた、彼がだれも愛さなかったからだ。痩せ細り、膿だらけで、氷のような怪物だった彼を暖めることができたのは恐怖だけだった。彼には流謫の情熱があった。彼みずから作った追放者のリストの冒頭には、彼の名前が書いてあるのではないかとさえ思われた……生きていると感じるためには、恐怖を感じ、また、恐怖を人々にかきたてなければならなかった。彼のほうであらゆる人間を恐れていたから、あらゆる人間のほうでも彼を恐れることを彼は求めなかった。彼は人の顔を見るのがひどく嫌いだった……スウィフトのように一人っきりの、別の時代のアジ・ビラ作者、人間以前のアジ・ビラ作者。あらゆるものが私を去るとき、〈私までが私を去る〉時、私はこの二人のことを思う。そして彼らの嫌悪と残虐さにしがみつき、彼らの目まいに身を支える。私が私を離れるとき、そう、そのとき私は彼らのほうへ向かう。そのとき、私を彼らの孤独から引き離すものは何もない。

V　だれにとっても、幸福は、きわめて大胆な興奮だから、それを感じるやいなや、人はそれに対して警戒し、その新しい状態について疑問を抱く。そのようなものは、過去にはまるでなかった。彼らが卑小な安全から外へふみ出すのはそれが初めてなのだ。予期しない明りが彼らを慄えさせる。まるで粉々になった楽園を照らすために、彼らの指先に太陽がぶらさがっているように。彼らがそれによる解放を待ち望んでいた幸福は、どうしてこんな様相をしているだろう？　どうすればいいのか？　もしかしたら、それは彼らに与えられたものではないかもしれない。も

しかしたら、何かのまちがいで彼らの上に落ちてきたものかもしれない。彼らは手も足も出せないとともに、引きつけられて、それを彼らの性質にとり入れ、もしそれが可能なら、永遠に所有しようとつとめる。しかし、その用意がまったくできていない彼らは、それを、まさに享受するために、昔からの恐怖に付属させねばならない。

Ⅵ 信仰そのものは何も解決しない。われわれはそこに心の傾きと欠点を持ちこんでくる。幸福であれば、それはわれわれが生まれたときに分け前としてもらってきた幸福の量をふやしにやってくる。生まれつき不幸であれば、それはわれわれにとって苦しみの増加、われわれの状態の悪化としてしか現われない。〈地獄的な〉信仰。楽園から永遠に追放されているわれわれは、もうひとつおまけの苦しみ、責苦のように、その郷愁を感じる。祈ってみるがいい。祈りはその苦しみを和らげるどころか、追慕と、悔恨と、苦しみを倍加する。実際、だれでも自分の信仰の中に、自分が持ってきたものを見出す。信仰によって選ばれたものは、よりよく彼の救いを味わい、追われた者は、より一層、その悲惨の中にのめりこむ。解けない問題を解決するには、信ずるだけでいいなどとどうして考えられよう？　信仰などというものはない。あるものはただ多様で、あい矛盾する信仰の形ばかりなのだ。われわれの信仰はどんなものであろうと、それにいかなる助けも期待してはならない。それはたんに、われわれがずっと前からいたところから、ほんの少しだけ余分に進むことを許してくれるだけだろうから……

Ⅶ われわれの快楽は、失われもしなければ、消え去りもしない。それは独特の方法で、苦し

みと同じほどに刻印を押す。もう永遠に失われてしまったと思われたその中の一つが、なんらかの危機からわれわれを救って、われわれの知らないうちに、かかる幻滅、かかる自棄や、放棄の誘惑に対して戦ってくれる。それはわれわれのうちに、気がつかない新しいつながりを生み、恐ろしいもの、残忍なものしか保存しない記憶の傾向とつりあいを保つような、小さな希望を山ほど強化してくれる。なぜなら記憶は買収できるものだからだ。それは、われわれの苦しみの原因を支え、われわれの苦しみに〈身売り〉したのだ。

VIII　カッシアヌス（三五〇頃—四三〇頃、教会著作者）、エヴァグリウス（五三六頃—六〇〇頃、教会史家）、聖ニルス（三六〇頃—四三〇頃、教会著作者）によればアケディア（鬱病）より恐しい悪霊はないという。それにかかった修道僧は、その最後の日まで苦しめられるという。そんな修道士は窓にはりついて外を見つめ、だれでもいいから話をし、自分を忘れるために訪問客がこないかと待つ。

あらゆるものをかなぐり捨てたのちに道を誤ったことに気づく。孤独の中に待ちくたびれながら、しかもそれを離れることができない！　一人の成功した隠者がいれば、千人の失敗した隠者がいる。この敗者たち、この落伍者たちは祈りの無効性を骨の髄まで知りぬいている。人々は彼らを歌によって回復させようとし、彼らに狂喜や、喜びの訓練を課したものだ。悪霊の犠牲であった彼らは、いかにしてその声をあげ、だれに向けて語るべきだったろう？　時代から離れているのと同じほど、恩寵からも遠く、彼らは幾時間も、その不毛さを彼らの空隙の具体的なイメージである砂漠の不毛さに比較しては過ごすのだった。

私も窓にはりついてみるが、神の国の不毛さ以外、いったい何にこの不毛さをたとえたらいいのだろう？　それでも〈もうひとつの〉砂漠が私を悩ませる。どうしてそこへ行って、人間の臭いを忘れないのだ！　私は神に隣りあって神の悲嘆と永遠を嗅ぐことだろう。私の中に、ひとつの遠い独房の思い出がよみがえるその瞬間に、私はその永遠を夢に見るのだ。前世で、私はいかなる僧院を見捨て、裏切ってきたのか？　そのとき、途中で途切れて、そのままになった祈りがいま私につきまとう。その間、私の脳髄の中ではいかなるものともしれぬ天が出来てはまた壊されてゆく。

IX　アリ！　アリ！　ある回教僧は、この言葉以外、いかなる言葉とも妥協することをやめて、どんな状況においても、他の言葉をけっして発しなかった。それだけが、彼の沈黙の行に自ら許した違反であった。

祈り、神への譲歩、〈言葉の綾〉そして、言葉が予想させるあらゆる自己満足。この回教僧は、根本的なもののために身を捧げ、仮象の象徴である言葉を犠牲にしたのだ。言葉にたよるものはすべて、絶対に背を向ける。その他の方面でどんなに大きな信仰に身を捧げ、一命を犠牲にしようとも。あらゆるもの、その中にはより当然のこととして、あらゆる聖人も入っている。アッシジの聖フランチェスコは、その弟子や敵と同様、駄弁家であった。たったひとつのこと、たったひとつの言葉が大事なのだ。われわれが話すのは、この唯一のものを発見しなかったからであり、将来も発見できないからなのだ。

X　祖国を自ら進んで失おうとするものだけが信頼するに足りる。それに成功すれば怪獣を殺したことになる。それは、行動し勝利しようと努めていたかぎりにおいて怪獣だったのだ。われわれは純粋さ、この後退の総和の犠牲の上にしか進歩できない。汚れへの衝動に支えられ、貫ぬかれているわれわれの行為は、われわれを楽園からへだて、失墜と現世への執着を強化する。われわれのうちに、存在することの古き罪をかきたてず、強化もせずに、前へ進む動きはひとつもない。

存在を追い払うだけでは十分ではない。事物も追い払い、憎み、ひとつひとつ殺していかねばならない。われわれの原初の不在を覆うために、宇宙の進化を逆にたどろう。そしてわれわれには、死ぬことについての羞恥心が欠けているなら、この世におけるわれわれの痕跡と、われわれがかつてあったころの思い出という思い出をすべて抹殺しよう。どこかの神がわれわれに、あらゆるものを捨て、あらゆるものを裏切る力を与えてくれないだろうか、名前のない大胆な卑劣さを！

空虚の狂宴

芸術家とは、自分の得意の分野を離れられず、存在の狭い範囲の中でうごめくものだ。彼の物の見方は片よっている。その才能は不具だ。天分があっても、自分の視覚と、〈決定的な〉ヴィジョンを与えてくれた不幸とに囚われて、身動きもできない。

どんな才能もないということは、なんという特典、なんという自由だろう！　あらゆるものが与えられている。すべてのものが自分のものになる。空間を支配して、ひとつの対象から別の対

象に、ひとつの世界から別の世界に自由に飛び移る。世界は足もとにある。幸福の本質に一挙に達する。存在の零点における昂奮。置き換えられた生。息吹きの状態、呼吸する永遠、いかなる神秘の重みも受けない永遠の状態に入った生。

神でさえ、いたるところにいなければならないという、遍在性の奴隷となった囚人なのだ。神より自由で、解放されているわれわれは、不在を享楽する。そして思いのままに、その不在を探検する。欠落の物質、聞こえないため息、生と死の実践を失うことの喜び。

★

才能を持った人間は憐れむべきだ。画家はいまなお、色彩から何かを引き出すことができるのだろうか？　詩人は、疲れはて、眠りに落ちた言葉を呼びさますことができるだろうか？　あらゆる音の組み合せが考えられてしまった時代に、音楽家にはどんな未来があるのだろう？　彼ら、極度に不幸なものたちは、みな不可解な世界に進んでゆく。彼らが、その芸術の行きづまりと、廃嫡者としての条件を忘れられるように、彼らを最後の心づかいで包んでやり、その取り乱しようも、馬鹿にしないようにしなくてはいけない。彼らを黙らせることは、われわれの好運を吹聴することになる。摂理は、われわれから重荷と、才能の宿命を取り除いてくれたのだから、許してやろう。摂理は、われわれから、あらゆるものを奪い去ると同時に、われわれにすべてを与えてもくれたのだ。われわれの充実した貧しさが、彼の憐れみから出ているのか、手落ちから出ているのか、われわれの光は、それを見きわめることを許してくれない。それでも摂理は、くらべ

もののない好意を示してくれたようだ。われわれに欠けている才能は、すべて担保をとってあるのではないだろうか？　何ものでもないこと——それは無限の手段であり、絶えまないお祭りなのだ。

★

芸術家は、いっときも休むことなく、その混乱を維持し、力を浪費し、不幸と幸福を自分のために作り出し、生み出さなければならない。賢者は、いかなる作品も試みず、不毛であることに努力し、決して使わない精力を積み重ねる。賢者は、表現や伝達、すなわち芸術に糧を与え、それを正当化するあらゆるものを捨てて、真実を手に入れる。芸術とは、真実なものの障害であり、嘘の手段なのだ。賢者は創作能力を抑えつけ、行為と動きを抑制し、恍惚と昂奮の助力を拒否する。（〈天才的な〉賢者など、いはしない）。悲傷を貪欲に求める悲劇にしても、この貪欲さの舞台である歴史にしても、賢者の関心を引くことはない。彼は、そのどちらも超越して、元素に帰り、創ることも、神、ないし悪魔を模造することもやめて、天使と白痴について、彼らのずばぬけた馬鹿さかげんについて、長い瞑想にふける。彼は、〈明晰さという手段〉によって、その痴呆状態に達しようとするのにちがいない。

自己の源泉を汲みつくして涸れはててしまうのは、〈創造者〉に特有なことだ。力は彼を見捨て、妄念の強さは弱まってしまう。活力や理性は保ちえても、戦慄の能力については、そうはいかない。老いてしまえば最後なのだ。賢者のほうは、その逆で、生涯の最後にあたって完成し、勝ち

を収める。賢者が〈おしまいになる〉ということは、けっして考えられない。それに対して、この表現は、ある瞬間から以後の、あらゆる芸術家にあてはまる。ひとつの作品は自己破壊の欲望から起こり、生を犠牲にして成り立つ。賢者は、このような欲望をおぼえることがないか、あるいは克服してしまうかだ。彼の最大の野心は跡かたもなく消え去ることなのだ。しかし、その消滅への意志の中にある、あまりに大きな力が、われわれを引きつける。彼の秘密は、われわれには容易にはのぞけない。瞬間ごとに身を破壊せずに、どうして実存することができるのだろう？しかしこの秘密は、われわれがわれわれ自身に、われわれの最後の現実に近づくときに明らかになる。言葉はそのとき、あらゆる効用、あらゆる意味を失ってくる。視線がそれ自身のうちに収斂して、物質の世界とは異った世界を自由にするかのようだ。事実、この世界はもはや認識の領域には入らず、記憶の中にも生き残らない。われわれは、言葉を支えもしなければ、それを承認しようともしないもののほうを向いて、特質のない幸福の中に、形容詞のない戦慄の中に、ゆったりとくつろぐ。神のうちなる午睡……

肯定から肯定へ経めぐるものがいる。——彼らの生涯は、ウイの連続だ……彼らは、現実、またはそのように見えるものを喝采し、それを公言することを少しもためらわない。どんな異常事であっても、彼らに説明できないものはないし、結局、「よくあることだ」と片づけられてしまう。彼らは、哲学に影響されれば、それだけ一層、生と死の光景に対して、〈よき観客〉になる。

もう一方の、否定に慣れ親んだものにとって、肯定することは、たんに喪神の意志のみならず、自己に対する努力、ひとつの犠牲を要求される。ほんの少しのウイでも、彼らにとってはどんなに高くつくことだろう！　なんという背信！　ウイは、それだけでは、けっしてすまない、ひとつのウイは、もうひとつのウイを求め、どんどん続いてゆく、彼らはそれを承知している。それでいてどうして、簡単にその危険を冒すことができるだろう？　とは言うものの、ノンの安全性も、彼らをいらだたせる。そこで彼らのうちには、なんでもいいから肯定したいという必要と好

奇心が生じる。

否定すること、精神を解放するのに、これ以上のものはない。しかし否定は、それを獲得し、自分のものにしようと努めるとき以外には、実りをもたらさない。それは、一旦、獲得されると、われわれをがんじがらめにしてしまう。前と同じような鎖。隷属のための隷属、それくらいなら存在の隷属に向かったほうがいい。それは、ある種の苦しみなしにはありえないものであるけれど。まさに、虚無との接触と、目まいの安楽さから逃れなければならないのだ……

★

神学者たちは、ずっと前から気づいていた。希望は忍耐の産物であることに。そこにはさらに、謙譲の、と付け加えるべきだろうか。傲慢なものには、希望する〈時間〉がない。……彼は、待つことを望みもしなければ、できもしない。そこで、彼は、自分の性格をねじ曲げるのと同じく、事件をも強要する。そして、絶望し、腐敗し、反逆を汲みつくしてしまったときになって放棄する。彼にとって、いかなる中間的な形もありえない。彼が明晰であること、それは否定できない。しかし、忘れてはならないことは、明晰さというものは、愛することができないために、他人のみならず、自分自身とも袂を分つ人々に特有のものなのだ。

★

最大のウイは死に対するウイだ。それを言うには、いろいろなやり方がある……

自分の不在のとりこになって、ひっそりと暮らし、忍び足で道を歩き、だれにも目をとめない

ような白昼の亡霊がいる。その目にも、そぶりにも、少しの不安もない。彼らにとって外界が存在することをやめた以上、彼らは、あらゆる孤独に服従する。放心と解脱を求める彼らは、未曾有なものの思い出と、確信の近さとのあいだの、非公然の世界に属する。彼らの微笑は、無数の恐怖の克服と、恐るべきものに対して打ち勝った優しさを思わせる。彼らは事物の中をつっきり、物質を貫通する。彼らは自己の起源に達したのだろうか？　あるいは彼らの中に明りの源を発見したのだろうか？　いかなる敗北も、いかなる勝利も、彼らを揺すぶらない。彼らは、太陽からも独立し、彼ら自身だけで充足する。死が彼らを照らし出す。

★

われわれの本質に食いこむ腐食の作用が、いかなる瞬間に働くのか、それは定めがたい。ただ、そこから空隙が生じ、そこに、われわれの破壊の観念が段階的に住むことだけはわかっている。漠然とした、ほとんど形も定まらない観念、それはあたかも、この空隙自体が考えるかのようだ。ついで、われわれのより深い所で、響きも高らかな変容が起こり、その激しさが衝動を与えてくれると同時に、それより一層、われわれを麻痺させてしまうような音色がわきおこる。われわれはそのとき、恐怖、ないし郷愁にとらえられる。死が頭上に、あるいは同じ位置にいる。もし、その音色が、そこから出てきた空隙を永続させるなら、それは恐怖にちがいない。もしそれが、空隙を充満に変えるなら、それは郷愁のほうだろう。われわれは体質に応じて、死の中に存在の不足、ないし超過を見る。

★

恐怖は、年を経てから獲得される時間の認識に影響する前に、まず、空間の感覚、直接性、〈堅固さ〉の幻などに打撃を与える。空間は縮小し、消え去り、空気のように透明になる。恐怖は空間に取ってかわり、拡散し、それを引きおこした現実と死とに代わる。われわれの経験はすべて、自我と、この恐怖との間の交換に帰着する。恐怖は自律的な現実としてそそりたち、われわれを、対象のない戦慄、無償のおののきの中に孤立させる。……やがては死ぬのだということを忘れかねないほどに。しかし、恐怖が、われわれの根本的な関心に取ってかわろうとするのは、それを同化しようとも、汲みつくそうともせずに、ひとつの誘惑のように温存し、孤独のただ中に位置させるときでしかない。そこから一歩を進めれば、われわれは死についてではなく、死の〈恐怖〉についての不品行者となる。克服することのできない恐怖については、みな同じだ。恐怖は、それを生みだした動機から離れて、独立した、暴君的な現実になる。「われわれは恐怖の中に生きる。したがって、われわれは生きていない。」この仏陀の言葉は、恐怖が世界に広がる段階で身を保つかわりに、われわれは、恐怖をひとつの終り、閉ざされた世界、〈空間〉の代替物にする、という意味だろうか。恐怖に支配されるとき、われわれの事物についてのイメージは変形する。恐怖を抑制することも、開発することもできないものは、やがては自己であることをやめ、自己同一性を失う。恐怖は、それに対して身を守るときしか、実りをもたらさない。恐怖に屈するものは、けっして自己を見出すことはなく、自分自身に対する裏切りをくり返し、やが

ては死を、それを認識することの恐怖のもとに窒息させてしまう。

★

ある種の問題は、厳密さを欠くところから魅力が生じる。ちょうど、それが引きおこす矛盾した議論のように。困難さが増せば、不可解なものの愛好者は大喜びする。

死について、「資料集め」するために、生物学の本を読んでみても、公教要理同様、なんの助けにもならない。死が〈私に〉関係するかぎり、それが、原罪の結果として約束されているのであれ、細胞の脱水作用によってそうなるのであれ、どっちでもいいことだ。

知性の面とはいささかの関係もないそれは、あらゆる私的な問題と同じく、〈知識なき〉知恵に関わっている。私は、そこらの哲学者よりも、一層の鋭さをもって死について語った数多くの文盲に近づいたことがある。彼らは、経験によって崩壊の要因を見破ったのち、死に対して全思考を注入し、その結果、死は非個性的な問題であるかわりに、彼らの現実、彼らの死となっていた。

しかし、文盲であろうとなかろうと、死について絶えまなく考えているものの大部分は、死の苦しみの予感におびえて考えているのだ。死の苦しみは、われわれの消滅の過程の中の一事件であり、われわれの持続と共に発展する過程の中の一事件にすぎないのだから、幾世紀、幾万年を生きるとしても、その恐怖の原因は少しも変わらないことには、彼らは、一瞬たりとも気がつかない。生は、ビシャ（一七七一～一八〇二、フランスの医者。）が考えていたように、死に抵抗する機能の総体であるどこ

ろか、むしろ、われわれを死に導いてゆく機能の総体なのだ。われわれの実質は一歩ごとに減少してゆく。しかし、この減少を、ひとつの刺激剤、有効性の原則にすることにこそ、全努力を傾けなければならないのだ。非在の可能性から利益を引き出すすべを知らないものは、自分自身に対して異邦人のままにとどまる。操り人形、自我を与えられた物体、持続でも永遠でもない中性の時の中に眠りこんだもの。生きること、それは、われわれの非現実性の持ち分を有効に使うことだ。われわれの内なる空隙にふれて、慄えおののくことだ。操り人形は、自己の空隙に対して無感覚のままとどまり、それを見捨て、弱まってゆくままにする……

★

発芽的な退行、根底への下降、死は、われわれがよりよく自己同一性に接近し、それを回復することができるためにのみ、それを破壊する。死が意味を持つのは、死に対して、生のあらゆる属性を与えるときだけなのだ。

死は、はじめのうち、つまり、死に対する最初の認識のうちこそ、崩壊と消耗のように見えはしても、その後、時の無価値と、各瞬間の無限の価を知らせることによって、精力増強剤的な力を発揮しはじめる。われわれのむなしさのイメージしか与えてくれないとしても、まさにその点において、死は、このむなしさを絶対に作り変え、そこに執着するように、われわれにすすめるのだ。そのようにして、われわれの「死ぬべき」側面を復権したのちに、死は、われわれの全時間のひろがり、勝利の末期を自分のものとする。

思考を、どんなものであろうとも墓などに固定し、自分の腐敗に賭けてみたりして、何になるのだ。精神の価値をおとしめるような死骸に類するものは、われわれをして、腺の疲弊と、悪臭と、そして放埒のけがれとに帰着させる。生きていると称するものは、死骸の観念をごまかしているか、超越しているかのかぎりにおいてしか生きていない。死ぬことの物質的な事実について、いくら考えても、何ひとつ、ろくな結果は出てこない。肉体の「哲学」を筆写させられ、その結論を押しつけられたりするくらいなら、それを知る前に、私はみずから命を断ってしまうだろう。なぜなら、肉体が教えてくれるものは、すべて、私を容赦なく滅そうとするのだ。肉体は幻影を嫌悪しないだろうか？　それは灰の代弁者として、つねに、われわれの嘘や、駄弁や、希望を反駁しにくるのではないのか？　それなら、肉体の言い分は無視し、〈それ自身の〉明証性に対する戦いに力づくで加えさせてしまおう。

死との接触のうちに若返るには、そこに全精力を投入し、キーツにならって、死に対して半ば恋人のような愛着を抱くか、ノヴァーリスのように、それを、生を〈ロマンチック〉にする原則とするか、どちらかでなければならない。ノヴァーリスが、死への郷愁を、肉感にまで押し進め、また事実、死の〈淫欲者〉であったとしても、死の中にまったく内的な「至福」を汲みとることはもう一人のもの、クライストを待たねばならなかった。彼は死ぬ前に、「予感さえしない至福の渦が私をとらえた」と書いた。彼の死は、敗北でも、放棄でもなく、ひとつの幸福な怒り、典型的で慎重な狂気、絶望の稀な成功だった。ノヴァーリスこそ、死を「芸術家とし

て」感じた最初のものだというシュレーゲルの言葉は、クライストのほうに、ずっと正確にあてはまるように私には思える。彼ほど、死ぬ用意のできていたものはほかにない。彼の、比類なく完璧な、技巧と趣味の傑作である自殺の前では、他のどんな自殺も、すべて無用になってしまう。

☆

春のような消去、深淵であるよりは、むしろ成就としての死は、愛と同じく、われわれをはるかな高みに持ちあげるためにのみ、目まいを与えてくれる。愛と死が接しあうのは、たんにひとつの面ばかりではない。そのいずれも、われわれの存在の枠を、はじけ飛んでしまうくらいまでねじまげ、われわれを弱めると思えば強化し、充実の回り道によって破壊する。その双方の、根本的であると同時に、切り離しえない要素の中には、本質的にあいまいなものが含まれている。愛が、ある程度まで、われわれを破滅させるとすれば、それは、なんというひろがりと傲慢さの感覚を通してなのだろう！　そして死が、われわれを完全に滅すなら、それはまた、なんという戦慄によってなのだろう！　その戦慄の感覚によって、われわれは自己の中の〈人間〉を超越し、自我の偶然性を超越するのだ。

それらはいずれも、その中にわれわれが欲望と衝動を投影し、あらゆる力を傾けて、そのあいまいな性質に協力するかぎりにおいてのみ、われわれを定義するものである以上、わずかでも、知性の遊戯に与えられた外的な現実のように見るかぎり、必然的に把えがたいものとなる。人は、愛にも死にも潜りこみはするが、それらについて考えたりはしない。それを味わい、共犯者

とはなっても、その重みをはかってみることはしない。それゆえ、肉欲に転換されない経験は、すべて中途半端な経験なのだ。あるがままの感覚に制約されねばならないのだったら、それらは許容しがたいものに見えるだろう。われわれの本質と、あまりにも相異していて、似ても似つかないからだ。人間にとって、死を自分の性質に同化し、あるいは、肉欲に変成させることができるのだったら、それは、大いなる失われた経験とはならないだろう。しかし、死は、人間の中で、〈一歩離れた〉ものとしてとどまっている。死は死のまま、人間が人間であることとは異ったところにとどまっている。

死がわれわれに、〈局限状況〉としてと同時に、〈直接的与件〉として現われることは、また、その二重の現実、あいまいな性格、われわれがそれを感じる方法に固有な逆説の証明でもあるのだ。われわれは死のほうへ駆けてゆく。しかも、われわれはすでに死の中にいるのだ。死を生にとり入れるときでさえ、われわれはそれを、未来の中に置くまいとしても置いてしまう。ひとつの避けがたい矛盾によって、われわれはそれを、現実、われわれの現実を破壊する未来のように解釈する。恐怖が、空間の感覚を規定する助けになったなら、死は、われわれに、時間的広がりを、本当の意味で開いて見せてくれる。というのは、死がなかったら、時間の中にいるということは何も意味しないか、せいぜい、永遠の中にいるのと同じことになってしまうからだ。だからこそ、死の伝統的なイメージは、そこからのがれようとどんなに努力をしても、いつまでもついてくるのだ。病者たちに主たる責任を帰せられるべきイメージ。この方面における専門能力を病

者たちに認めるのに、人はやぶさかではない。好意的な偏見が、彼らに「深み」の役割を与える。その大部分は、愕然とするほどの愚劣さを示すものではあるけれど。だれでも身のまわりに、オペレッタ的な、不治の病人を見ているのではあるまいか？

病者は、だれにもまして、死によって自己を確立しなければならないはずだ。しかし彼は、死から身を引き離し、それを外部へ投影しようと努力するのだ。死を自分の中に認めることより、それを逃れることのほうが楽だから、彼はそれを切り捨てようと、あらゆる手だてを工夫する。彼は、その防衛反応をもってひとつの方式とし、ひとつの教義とさえするのだ。健康な凡人たちは、彼を模倣し、追随することに随喜の涙を流す。しかし、それは凡人だけだろうか？　いや、神秘家だって、ごまかしの手段を用い、逃避と遁走戦術を実践する。彼らにとって、死は越すべき障害、彼らを神とへだてている垣根、持続の中の最後の一歩にしか、すぎないのだ。現世のうちから、恍惚という跳躍台によって、時のかなたへのジャンプが、時には実現する。それは、至福の「発作」しか与えてくれない瞬間的な跳躍だ。彼らは、欲望の対象に達しようと思うなら、決定的に消え去らねばならない。そこで彼らは、そこに達する助けとして、死を愛し、それが、なかなかやってこないと言って憎むのだ。アビラの聖テレサを信ずるなら、魂は、その創造者しか憧れない。しかし、「それと同時に、魂は、死なければ創造者を所有することができないのを知っている。そして、死は自由になるものではない以上、魂は、死の欲望に死ぬほど身をこがし、実際、死の危険を招くほどになる」。つねに、死をしてひとつの偶発事、もしくは手段と

し、それを現存として考えるかわりに、(彼岸への)通過に還元してしまおうとする欲求、つねに、死を捨てさろうとする欲求がある。そして宗教が、死をしてひとつの口実、ないし、こけおどし、——あるいは宣教の道具——にしかしないなら、死を認め、それに正当な権利を回復させるのは無信仰者のつとめなのだ。

各人は、その死の感情として〈存在する〉。その結果、病者や神秘家の経験を、偽ものと断罪することは、どんなにその解釈を疑問に思っても、できないだろう。われわれは、いかなる基準も機能しない土地に立っている。そこには確信があふれ、あらゆるものが確信化している。なぜなら、そこでは、われわれの真実は感覚と一致し、われわれの問題は態度と一致しているからだ。それに、瞬間ごとに、死以外の経験に引きずられてゆくときに、いかなる「真実」を渇望できるのだろう? われわれの「宿命」自体が、この根元的な、それでいて変わりやすい経験の展開、その諸段階でしかないし、さまざまな死に様が練りあげられる、あの〈秘密の時間〉を、この外見的な時間の中に翻訳することでしかない。宿命を説明しようと思ったら、伝記作者は従来のやり方を捨てねばならないし、外見的な時間、自身の本質を破壊しようとする存在のあせりへの傾斜を是正しなければならない。ひとつの時代についても同じことが言える。その時代の社会制度や年代を知ることは、内的な経験を洞察することにくらべて、そう重要なことではない。制度や年代は、その内的な経験の記号なのだ。戦闘にしろ、イデオロギーにしろ、英雄にしろ、聖性にしろ、蛮行にしろ、いずれも内的な世界の幻影であり、その内的世界こそ、われわれは求めるべ

きなのだ。あらゆる国の人々は、それぞれの仕方で滅びてゆく。人々は、なんらかの消滅の規制を完成させ、それを同胞たちに強いるのだ。それに対しては、最良のものたちであっても、避けたり、免れたりすることはできないだろう。パスカルや、ボードレールのような者も、死を遠巻きにする。前者は、死を救いの探求に還元し、後者は、それを生理学的な恐怖に還元した。死が人間を押しつぶしても、彼らにとっては、人間性の内部に死がとどまっていることに変わりはない。それとは、まったく逆に、エリザベス朝の時代の人々や、ドイツ・ロマン派の人たちは、死を、ひとつの宇宙的な現象、バッカス祭的な生成、活力を与えてくれる虚無、そして最後に、その中に身を浸け、それと直接の関係を保たねばならないひとつの〈力〉にした。フランス人にとっては、大事なのは、——物質の欠落、ないし、ただの不作法としての——死そのものではなく、同胞を前にしたときのふるまい、別れの戦術、虚栄の計算が要求する端正さ、などといった、ひとことで言えば〈身の処し方〉のほうなのだ。それは自分自身との戦いではなく、他者との闘争だ。細かいところや、変わりやすいところに注意することが大切な見世物。フランス人の芸術は、あげて、いかに〈公衆の面然〉で死ぬかにかかっている。サン=シモンは、ルイ十四世や、皇太子や、摂政の臨終の苦悶は描かなかったが、その死の〈光景〉は描いたのだ。宮廷の習慣、その儀式と豪奢との感覚を、すべての民衆が受けついでいる。華やかであることに恍惚とし、最後の吐息に、若干のきらびやかさをそえるのに夢中になる。そのためにカトリック教が有用だったのだ。カトリック教は、われわれの死に方が、救いにとって根本的なことであり、罪は、「みごと

な死」によって贖われると言っているのではないだろうか？　疑わしい考えだ。しかしそれは、一国家の道化役者的な本能にぴったりあてはまり、また、こんにちにおけるより一層強く、過去において、名誉とか尊厳の観念に結びつき、「正しき人間（紳士）」の様式に結びついていた。そこで大事だったことは、神のことはさておき、まず、会衆、つまり、優雅な野次馬や、社交界の告解僧的な人々の前で、面目を保つということだった。息絶えるなどということではなく、証人の前で自分の評判を維持し、彼らからのみ、終油の秘蹟を与えられることをのぞんで、〈祭式をとりおこなう〉ことだったのだ……自由思想家であっても、一人のこらず、みな、きちんと死んでいった。世評への配慮が、償いえぬものに勝っているかぎり、また、死ぬことが人間にとって孤独を捨てること、最後にひと花咲かせることを意味する時代、フランスが、何にもまして、死の苦しみのすぐれた専門家であった時代の習慣に、従うかぎりは、そうだったのだ。

★

それでも、死の経験の「歴史的」側面を強調することによって、死の本来の性格をよりよく知ることができたと言うのは疑問だ。というのも、歴史とは、存在の非本質的な様態、われわれのわれわれ自身に対する不誠実さのもっとも有効な形、形而上学的な拒否、唯一の重要な出来事に、われわれが対置させる数々の出来事の集団でしかないからだ。人間に働きかけようとするものはすべて、――宗教も含めて――グロテスクな死の感情のしみをつけている。そして隠者たちが、砂漠という歴史の否定の中に逃げこんだのは、その、より純粋な、本物の感情を求めてのことだ

ったのだ。彼らは正当にも、砂漠を天使に比較している。その双方ともが、罪や、時間の中への墜落を知らないからだと言う。砂漠というものは事実、共時的存在の中に翻訳された持続を思わせる。不動の流出。空間の呪いを受けた生成。隠者は、孤独をいや増し、自己の不在を豊かにするよりは、むしろ、自己の中に死の諧調を高めるために、そこに引きこもる。

この諧調を聞くためには、われわれの内に、ひとつの砂漠を用意しなくてはならない。それができたとき、和音はわれわれの血に流れ、血管はひろがり、われわれの秘密は、生の源と同じく、われわれの表面に現われて、そこに、嫌悪も、欲望も、恐怖も、恍惚も、暗くて明るい祭式の中に溶けあわさる。死の曙がわれわれのうちに立ちあがる。宇宙の歓喜、諸天体の炸裂、無数の声！　われわれは死であり、すべてもまた死だ。死は、われわれを押し流し、運び去り、岸に投げあげ、あるいは空間の外へ投げとばす。死は大古より汚されず、時によっても磨耗されていない。死の讃仰の共犯者たるわれわれは、大古からの死の新鮮さを感じる。そしてまた、この、他のいかなるものとも似ても似つかない時、死に属し、われわれを絶え間なく作っては、また壊してゆく時をも感じる。死がわれわれを握り、死の苦しみの中に永遠にとどめておくかぎり、われわれには決して、死ぬぜいたくは許されない。われわれは、どんなに運命の科学を持ち、宿命の百科全書たろうとも、何も知らない。なぜなら、われわれの中ですべてを知っているものは死なのだから。

★

陰気な世界にのめりこんでいた青春、たったひとつの考えのとりこであった青春の終りごろ、自分をいためつける、ありとあらゆる力に仕えるようになったのはどうしてだったか、私はいま思いだす。ほかの考えは、もう興味を引かなかった。それらがどこに導いてゆくか、どんなものに収斂してゆくか、私は知りすぎるほど知っていたのだ。自分にとってたったひとつの問題しかないときに、さまざまな〈問題〉にかかずらわっていて何になったろう? 私は、自我の結果として生きることをやめて、死が私に仕えることができるようにした。それほどまで、私は自分のものではなかったのだ。死は私の恐怖と、それに私の名前までも持っていて、私の視線の代わりになり、あらゆるものの中に、その尊厳のしるしを見せていた。すれちがう一人一人の中に、私は死骸を見た。あらゆる匂いの中に、私は腐敗を嗅いだ。あらゆる喜びの中に最期の渋面を見た。私はどこにいても、やがて首を吊るものと、その間近かに控えた彼らの亡霊にぶつかった。他者の未来は、私の目を通して見すかしている者にとっては、いかなる神秘も含んでいなかった。私は、まじないにかかっていたのだろうか? そう思いたいくらいの気持ちだった。そのときから、いったい、何に対して反応すればよかったのだろう? 無が、私の聖餅だった。私の中のあらゆるもの、私の外のあらゆるものが、亡霊に化体していた。私は無責任に、良心からは極めて遠いところにいて、ついには名のない元素の状態、不可分の酔いに身を委ね、断じて私の存在を復権するまい、混沌の文明人に戻るまいと決意を固めるようになっていた。

死の中に、空隙の肯定的な表現や、被造物を呼びおこす要因を見ることもできず、眠りの遍在

性の中に響く呼び声を聞くこともできなかった私は、虚無を空んじて、その知識を受け入れていた。いまでも、宇宙を生じせしめる自己暗示を認めないでいられない。それでも私は、自分の明晰さに抗議する。どんなことをしてでも現実が欲しいのだ。私が感情を覚えるのは卑怯さからだ。それでも私は卑怯になろうと思い、自分にひとつの「魂」を与え、直接さの渇きのとりこになり、私の明白さを打ちこわし、どんなことをしてでも、自分の世界を見つけたいと思うのだ。私は、存在のかけらに満足し、何ものかが、目の前であれ、よそであれ、存在していると思う幻影に満足していたら、何も発見することができないだろう。私は、偽りの大陸の征服者になることだろう。だまされたままになるか、命を捨てるか、ほかに選択の余地はないのだ。死の回り道によって生を発見したものたちにもひとしく、私は、手あたりしだいのごまかしに身を投じ、失われた現実を思いださせてくれるものなら、なんにでもとびこんでゆくだろう。

★

非在の日常性の傍にあっては、存在するということはなんという奇蹟だろう！　それこそ未曽有のこと、〈起こりえないこと〉、例外的な状態だ。そこに達したいという欲望、その入口をぶち破って一気に占拠したいという欲望を除いて、そこに力をふるうものは何もない。

〈実存すること〉、それこそ私が、こりもせずに獲得しようと苦心している習癖だ。私は他者をまねようとする。それに成功した抜け目のない奴たち、明晰さを捨てたものたちをまねてみようとする。彼らの秘密と、希望までも奪ってみようとする。そのとき私は、生に連れもどしてくれ

る下劣な行為に、彼らとともにしがみつくことで有頂点になるだろう。ノンは私を疲れさせる。ウイは私を誘惑する。否定の能力と、そしておそらく、否定自身をも使い果たして、どうして私は、通りに飛びだして、私こそ真実の戸口にいる、それだけが価値ある唯一の真実の戸口にいると、あらんかぎりの声で叫ばないのだろう？　でも、それがどんな真実なのか、私はまだ知らないのだ。私は、それに先だつ喜びしか知らない。喜びと、狂気と、恐怖と。

世界中に警告を発し、私の幸福、決定的なウイ、出口のないウイを見て、世界中が驚愕するさまを見守る勇気を私から奪うのは、——おかしく見えはしないかという恐れではなく——この無知のほうなのだ……

★

われわれにおいて、活力は狂者としての力から来る以上、恐怖や疑いに対置させられうるものは、錯乱の確信と、その治療法だけでしかない。まさに錯乱を押し進めて、われわれ自身を、源泉に、起源に、原点に変え、あらゆる方法によって、われわれの〈世界創造的瞬間〉を増殖させようではないか。そのときこそ、われわれの内から時間が放射され、われわれの内に太陽がのぼり、光線をふりまき、瞬間を照らし出す。われわれは、そのときだけ本当に存在する……事物は、実存に至ったことに驚愕し、光の変容の中に驚きをぶちまけようと騒ぎ出す、そのおしゃべりが聞きとれる。あらゆるものが、異常さの習慣を獲得するためにふくらみ、拡散する。奇蹟の世代。すべてがわれわれのほうに収斂する。なぜなら、すべてが、われわれから出ているからだ。しか

し、それは本当にわれわれ自身から出ているのだろうか？　精神は、これほどの光と、突然、永遠化してしまった、このような時間を認識できるのだろうか？　そしてだれがわれわれの内に、このふるえる空間、この怒号する赤道を生み出すのだろう？

★

もっとも古い明証性である、死の苦悶についての偏見を打破することができると思うのは、われわれの譫妄の力について誤解することにちがいない。事実、何回かの発作のおこぼれのあとで、われわれは、パニックと、吐き気と、悲しみ、または死骸の中に、この存在の屑、死の否定的な感情の結果の中に落ちこんでしまう。どんなに大きな失墜でも、それを、錯乱の特権を回復させてくれるような秩序にすることができれば、有用なものにもなるのだ。ここでもまた、初期の隠者たちが手本になる。彼らは、心霊的な水準を高めるには、自分自身との恒常的な衝突をどのように維持すべきか、教えてくれるだろう。教会の一教父が、彼らのことを「砂漠の闘技士」と呼んだのは当然のことだった。彼らは戦闘家だった。彼らの緊張の状態、自己に対する敵意、その闘いは、想像を絶するものだった。中には、日に七百回も祈りをささげたものもいた。ある者たちは、その祈りが一回終るごとに、数を数えるために石を落としていた……気の狂いそうな算術、私は、彼らの内の比類ない傲慢さに感心させられる。彼らの持ちものの中でも、もっとも貴重なもの、〈彼らの誘惑〉と戦っていた、これら偏執狂者たちは、けっして弱虫ではなかった。彼らは、誘惑の結果として生き、戦う相手を見つけるために誘惑を亢進させるのだった。彼らの

欲望は、あまりにも激しい調子で描かれている。それは、われわれの感覚を刺激し、どんな淫らな作家も喚び起こせなかったような戦慄を覚えさせる。彼らは、「肉体」を裏返しに讃美しようと示し合わせていたのだ。肉体が、それほどまでに人を魅惑するものとすれば、その誘惑に打ちかったことは、なんというほまれであろうか！　彼らは、神話の巨人たちより、はるかに手に負えない悪がしこい巨人たちだった。神話の巨人たちは、その単純な頭では、精力を蓄えるものとして、自分の恐怖の威力を考えることができなかったのだ。

われわれにとって、挑発されたものでない自然の苦しみは、あまりにも不完全だから、それを増やし、強化し、ほかのもの、人工的なものも作り出さねばならない。肉体は、ほっておくと、われわれを局限された地平に閉じこめてしまう。しかし、ほんの少しでも、それを苦しめれば、肉体は、われわれの認識をとぎすまし、視野を広げてくれる。精神とは、肉体が耐えた苦しみの、あるいは、みずから課した苦しみの結果なのだ。隠者たちは、彼らの病苦の不十分さを補うすべを知っていた……世界を相手に戦ったのちに、彼らは、自分に対する戦いに入らねばならなかった。その周囲のものたちにとって、それは、なんという安心だったろう！　われわれの残虐さは、他者に対してあまりにも注意深い本能から来るのではないだろうか？　われわれが、いっそう、自分自身に精神を集中し、自分を自分の危険な傾向の中心、および、その対象とすることができれば、非寛容さの総体は減少するのだ。初期の修道会が、人類に残しておいてくれた恐怖の数が、どれほどのものか数えることはできない。これら隠者たちは、もし俗界にとどまっていたら、ど

んな残虐さを示したことであろう！　その当時の人々にとって一番ありがたかったことは、彼らが霊感によって、その残虐性を自分自身に対してふるおうとしたことだった。もし、われわれの習俗が穏和にならざるを得ないなら、われわれは、爪をわれとわが身に向けることと、砂漠の技芸を再評価することとを学ばねばならないだろう……

★

どうして、この癩を、あの苦行者たちの文学が与えてくれるおぞましい例外を、裸にしてさらさなければいけないのだ？　と言うかもしれない。人はなんでも非難するものだ。修道士も、その確信もともに大嫌いな私も、彼らのけたはずれぶり、その意志的な性格、辛辣さには舌を巻かずにはいられない。これほどの精力には何かの秘密があるだろう。宗教の秘密といったものが。もしかしたら、それらの宗教には、とくに問題とするほどの価値がないかもしれない。しかし、すべて生きているもの、すべて実存の基本たるものは、宗教的な本質に参与しているのだ。簡単に言おう。われわれが崩れ去るのを防いでいるもの、呼吸もできないほどの確実性からわれわれを守ってくれる嘘という嘘、それらはすべて宗教的なのだ。永遠の分け前を僭称し、恒常性が私を取り巻くように想像するとき、私は、こわれやすく、無用な自分の存在の明証性を踏みにじり、他人をも、自分をもあざむいているのだ。しかし私は、そうでもしなかったら、ただちに消え去ってしまうだろう。われわれは、われわれの仮構が続くかぎり生きてゆく。実存することは、ひとつの信条告白、真理に対するひとつの抗議、絶えることなきひとつの祈りにもひとしい。……

不信者と狂信者とは、生きることを承知したときから、深いところで似かよってくる。なぜなら、そのどちらも、一人の人間に刻印を押す唯一の決断をしたのだから。観念といい、教義といい、いずれもただの外面であり、気まぐれと偶然にしかすぎないのだ。もし人に、死ぬ決心ができないのだったら、その人と他者のあいだには、いかなる相異もない。その人は、みな同じ状態で、大いなる信者である、生きとし生けるものの群れの中の一人にすぎない。それでもなお、呼吸しようとするのなら、その者はまさに、聖性に近づき、叙聖されるに価しよう……

もし、それ以上に、自分自身に不満で、性質を変えようと思うなら、人は二重に信仰告白をすることになる。その者は、ただひとつの命の中で、二つの生を欲することになるのだ。それこそまさに、苦行者たちが、死をして死なないことの様式とし、不眠の行と、叫びと、夜の格技とに満ち足りていたときに、目指していたものだった。彼らを模倣し、超越さえすることは、彼ら同様に理性を虐待したときに実現できることかもしれない。「だれであれ、私以上に狂った者が私を導くように」と、われわれの渇きが言う。われわれの透視力のにごり、ないし、曇りだけが、われわれを救ってくれる。それが完全な透明さを保っていたら、身内に巣食う狂者、幻影と争いのうちの最良のものを与えてくれる狂者が、われわれから奪われてしまうだろう。

あらゆる生の形は、生を裏切り、改変させてしまう以上、本当の生者は、最大の不調和を引き受け、快楽と苦しみとに熱中し、その双方の相異を合致させ、あらゆる〈明瞭な〉感覚と、あらゆるまざり気のない状態を拒否するものだ。内的な乾燥は、〈明確なもの〉が、われわれに働き

かける領域から出てくる。それは、われわれが、あいまいさ、すなわち、生まれつきの混沌に捧げる無訴権の最期から出てくる。われわれの混沌は、たえず錯乱を新たにしながら、われわれを不毛から守ってくれているのだ。そして、ありとあらゆる学派、ありとあらゆる哲学が反応するのは、この奇特な要素、この混沌に対してなのだ。それを大切に扱わないと、われわれの最後の可能性もなくなってしまう。すなわちわれわれの身内の死を支え、刺激し、その老化を防いでいるものを……

★

死をして生の肯定とし、その深淵を救いの仮構とし、明証性に反対する議論を尽くしたのち、われわれに意気銷沈が襲いかかる。われわれの苦汁と本性、すなわち良識の魔の報復だ。一時、鳴りをひそめていた良識の魔は、盲目となろうとするわれわれの意志の弱さと、滑稽さとを告発しに立ちあがってくる。情容赦もなきヴィジョンと、われわれの失墜に力を貸したものや、真理の毒に慣れたものの過去、そしてそこから知識の原則を引きだすためには、いったいどれだけの年月、われわれみずからの亡骸を見つめて過ごさねばならないのだろうか！　しかしわれわれは、自分たちの疑いや、確信や、全智全能の性癖に反して考えることを学ばねばならず、とりわけ、〈もうひとつの〉死、われわれの肉の腐敗とは両立しない死を自分たちのために作りあげねばならない。そして、そののちに、分解されえないもの、何ものかが実存するという観念に同意しなければならないのだ……

無は、おそらくずっとたやすいものだった。存在の中に〈溶けこむ〉ことは、なんと苦しいことなのだろう。

訳者あとがき

これは、「バルカンのパスカル」と呼ばれる、現代の特異な思想家、E・M・シオランの、三番目の作品の全訳である。タイトルを直訳すれば、『実存することの誘惑』となろうか。『存在の誘惑』と紹介されていることもあるようである。しかし、ヴァレリーに傾倒していた時期のあった作者にとって、この誘惑は『海辺の墓地』の終章、「いざ生きめやも」という誘いと無関係ではあるまい、「実存すること」というのは、もちろん「生きる」ということである。しかし、この作品の発表の年代と、作者の思想の系譜を見れば、キエルケゴール以来の「実存」の概念をふまえていることもたしかである。もっとも、作者は「実存」の思想家と言われることを嫌うらしい。読むことが自分から離れない唯一の悪徳だと言うシオランは、驚くほど広く、雑多な知識を貯え、あるときは、タキトゥスが自分の全思考形式を決定したと言い、あるときは、ジョゼフ・ド・メーストルこそ自分の教師だったとボードレールのようなことを言い、ヴァレリーはもう嫌いになった、近ごろは、ますます文学に近づいているなどとも言っていた。レッテルを貼られることを嫌うのだろうか、自己韜晦だろうか？「体系以外のあらゆるものをめざす」思想家。

この作品の初版は一九五六年、ガリマール社より、エッセー文庫の八十二巻目として出た。訳出に使用したテクストは初版年の第四刷であり、今年に至っても、新たな版が出たが、一部の誤植修正以外、本文に異同はない。

本書には、英訳、独訳、スペイン語訳があり、翻訳にあたっては、原作者から、書きこみつきの英訳を貸してもらって、それを参照した。The Temptation to Exist. translated by Richard Howard, Quadrangle

Books. Chicago. 1968 である。

同書の巻末に、作者自身のノートによる略伝と称する紹介があるが、シオランは、だれにでも、この種のノートを用意しているようである。これを防波堤として、これ以上、自分の中に立ち入ってもらいたくないのかもしれない。それを、訳者自身が作者からもらったノートによって一部修正しながら、訳してみる。

「私は一九一一年四月八日、ルーマニアのカルパチアの村、ラシナリに生まれた。父はギリシャ正教の司祭だった。一九二〇年から二八年まで、シビン中等学校に通った。一九二九年から三一年まで、ブカレスト大学の文学部に学び、三六年まで同大学の大学院で哲学を学んだ。一九三七年、ブカレスト・フランス学院の奨学金を得てパリに来て、以来、ずっと当地にいる。私は国籍を持っていない。——これこそ知識人にとって、もっとも理想的な状態だ。しかしそれとともに、ルーマニア人という起源を放棄したことも一度もない。どこかの国を選ばなければならないのなら、私はいまでも自分の国を選ぶだろう。戦前に私は、大なり小なり哲学的性格を持った論文を、種々、ルーマニア語で書いていた。フランス語でものを書くようになったのは一九四七年ごろからである。それは、私がこころみたものの中で一番きびしい経験だった。この、精密で、高度にきたえあげられた、正確な言葉は、私にとって狂人の拘束衣にもひとしいほど窮屈に思われた。いまでもまだ、フランス語に対してなんの苦労もおぼえないとは言えないことは白状しなければならない。この、不自由さの感覚こそ、文体の問題や、書くことの異常さについて考えさせてくれたものである。私の著作はすべて、大なり小なり自伝的なものだ——あるいは、自伝から抽出したものだと言ったほうがいいかもしれない。」

ルーマニアは伝統的にフランス文化の浸透の強い国である。文明の辺境に生まれ、大陸の中華の文明や言語としてのフランス文明やフランス語を、半ば売国奴のような心をもって貪欲に吸収せざるを得なかった人人の中には、本物の絶望や、本物の革命を人間の条件として育んできた人たちが少なくなかった。チューリッヒでダダを起こしたツァラもルーマニア人だった。シオランの友人で、言語に対する根本的な懐疑と問い

かけから新しい演劇を作ったイヨネスコもルーマニア人なら、現在シカゴで、世界の人類学的思考に革命的な視点を提供しつづけているミルチア・エリアーデも、フランス語でものを考えるルーマニア人だ。

地理的に地中海文明に属しながら、ギリシャ文明からも、ローマ文明からも、あるいはそののちのヨーロッパ文明からも、つねに最遠端の辺境と見なされてきたルーマニアは、たしかに、あらゆる文明を距離をおいて見るのに絶好の位置にあったのかもしれない。

そしていま、離郷の身を雑種都市、パリに一人養うシオランは、いかなる伝統にも、慣例にも濁らされることのない透明な視線を未来に投げかける。オデオン座の前の〝屋根裏部屋〟からは、陰鬱なパリの街並みがよく見渡せた。街路樹にとりまかれ、辻々に噴水や彫像を配し、服飾店や香水店が妍を競う小粋な街、パリも、シオランの屋根裏部屋から見れば、錯綜した煙突が、暖炉の煙や炊煙を濁った空へ細々と吐き出す貧しい光景しか見せていなかった。

百年前に、この町が、山羊髭の皇帝の命によって〝近代的〟に改造されたとき、同じ高さに整えられた家並みの最上階は、すべて、階下の金持ちの傭う、女中、下男の屋根裏部屋とされていた。華麗な文明の最上階は、貧窮の花園であり、汚濁の煙を吐き出す〝終末〟の処理場でもあった。いま、そのそれぞれの屋根裏部屋には、かっての貧者の末裔たちにまじって、奇嬌な夢をつむぐ偏屈な孤独者たちが内奥の薄明に瞳をこらしている。時代はめぐっても、パリの屋根裏が、繁栄の虚飾にそむく暗闇を、天空へむかって吐きつづけていることにかわりはない。だからこそ、パリの空はあんなにも暗いのだろうか？

そして、やがて、その暗い空とまざりあってゆく川向こうの靄と、その下に消えてゆく灰色の家並みを眺めていると、そこが荒涼たる砂漠であるかのような幻にも襲われる。近くに見える屋根裏部屋の明かりとり窓は、砂漠の隠者たちの洞穴か、庵のようにも見える。

そこから、えたいの知れぬ呪詛の声も湧きおこる。断末魔の文明の苦悶と、すでに腐りはじめた肉体の臭気、その瘴癘の気、ときおりのぞかれる、窓の奥の貧しい男女の痴態は、砂漠の聖者を襲う悪霊の変幻とも見える。それら、薄暗い〝白昼〟の幻を見晴るかすシオランの部屋は、まさに中世か、さらには古代の修道

士の独房にも似た、無装飾の裸壁に、粗末な寝床がひとつ、板一枚の机に、藁椅子があるだけ、それでも、ちりひとつなく清掃された室内には、身の引きしまるような厳しさがはりつめていた。

ここでおそらくシオランは、孤独な「砂漠の闘技士」として、われとわが身を鞭うって、その〝明晰な懐疑〟をとぎすましているのだ。なん度おとずれても、その白い壁に囲まれた四角い空間は、人の匂いも、生のぬくもりもとどめてはいなかった。それはまるで、純粋な懐疑の住まいをさえ思わせた。ところが、そのような、冷たい無機質の独房の中にいる哲学者は、またなんと人間くさい、素材な〝生者〟だったのだろう。

大学の講壇で、哲学や文学を説いていた学者たち、大出版社の参与として、顧問として、金文字、皮装の豪華本の書棚を背に、まがい(?)マホガニーのデスクに陣どった文学者たち、彼らの、虚構の栄光に安住した傲慢な薄ら笑いは、彼、シオランは持っていなかった。しかも、砂漠の隠者の住み家にいながら、その肉体も、愛憎も、いささかも枯れ細ってはいない。聖者の永遠の見習い。煩悩のありすぎる修道士。もしかしたら、金のないエピキュリアン、女のいない放蕩者、夢の中の美食家かもしれない。

彼が、無国籍者であることを知性にとって理想的な状態だと言うのは、あらゆる束縛を脱れることを安易に求めてのことではない。無国籍であるがゆえに、法の保護も与えられず、ありとあらゆる差別と圧迫を受け、病気ひとつするのにも、たえず野たれ死にの恐怖を覚えなければならない。そのような不自由さ、あるいは迫害をわれとわが身に課することによって精神をとぎすまそうというためなのだ。

たとえば巷に出てみる。地下鉄道の駅という駅には、色あさぐろく、精桿な顔つきの女たちが、子供を抱いて、立て膝の独特な坐り方で、物乞いをしている。諸民族大移動のころ、はるか東方のインドに近いあたりを発って、ボヘミヤ地方を通過し、西へ西へと進んできた流亡の民、ゲルマン諸部族の国盗り合戦のさなかにはじき出されて、ついにひとつの国も、ひとつの村も自分たちのものにできなかった落伍者たち、彼ら、ジプシーたちは、いままで長い歴史の中を占者として、遊芸人として、独自の言語と風俗を頑なに守りながら、西欧文明の繁栄が、他人の土地と、弱小民族の犠牲の上に成りたってきた根なし草であることの生

き証人として生きつづけ、いまその、はかない民族の遺産を固守するために、〝他国〟の法の保護も、教育も、職業の機会も、土地も、住み家も、すべて拒否して、地下の駅頭で物乞いをして生きてゆく。

多種多様な国籍のものが入り乱れる人種の交錯点、パリで、無国籍であるということは、ほかでもない、これら全的な拒否者、たとえばジプシーの物乞いと身をひとつにすることなのだ。シオラン自身、自分の起源を、民族移動の落伍者の裔と言ってはいないだろうか？　国籍を持たないこと、それは、人類の起源としての楽園への郷愁を抱きつつ、あらゆる進歩と文明の理念に疑いの目を向け、日々、祖国から、言葉の上でも、感覚の上でも、信仰の面でも遠ざかってゆく歩みが、死の深淵へ滝のように落ちこむときに、全価値の逆転の奇跡が現われはしないかと、絶望的な期待を反芻しつづけることではあるまいか？　祖国を捨て、父母の言語を捨て、その父母を捨て、職業を捨て、求めて貧苦を味わう、〝苦しみのシバリス人〟。その懐疑は、われわれの日常的な生の反射本能に鋭く、アンチテーゼとしてつきささる。

しかもそれは、たんに困難な苦難の実践と、自己嗜虐と、かつてのわが国の私小説作家のような貧苦と破滅への惑溺、を結果する懐疑ではなく、クロード・モーリァックの言うように、懐疑することさえをも懐疑する、恐るべく強靱な懐疑なのだ。彼の心の中には、なんという悪魔が住んでいるのだろう？　ひとつの装飾もない隠者の部屋の藁椅子の上で、苦悩の奥底に真理のかけらを求めるような聖者をよそおい、つつましく手を組んで、暗い瞳を伏せながら、この偽隠者は、なんという瀆聖、なんという淫夢に、心を捧げているのだろう。

平常人であることを拒否し、屋根裏の独房にこもったのちに、こんどは、聖者であることを拒否し、自分の本性にそむいてまで、それを曲げてまで、悪魔であることを実践しようと必死の努力をする。そして、悪を実現しえたのちには、それをもまた否定して、こんどは何になろうというのだろう？　つねに現在へのアンチテーゼ者として、永遠の反抗者として反自我を際限もなくつむぎだすデミュルゴス。白昼の砂漠の白き墓の中に、黒い太陽を捜してさまよい、しかも、その大げさな反抗者の身ぶりまで、内心、侮蔑し、一人、笑いとばす悪魔。

われわれの愚かしさを、彼自身の中に投影されるその愚かしさを、痛裂な皮肉で笑いとばす彼の哄笑、泣きだしそうにひきつらせた顔で、声にならない笑いに息をつまらせ、身をよじっていたシオラン。ページをめくるごとに、その哄笑が聞こえてくる。パリの街を歩いていると、どこかで、その悪魔の笑い声がするように思える。ふりあおぐと、家並みの最上階のあたり、低い空と境を接する、〃高く低い〃地獄から、そんな声が聞こえる。パリの空には、悪魔の笑いがひろがっている。あそこにもシオランがいる。ここにもシオランがいる。

福祉国家の歪みだろうか、個人主義の行きすぎだろうか、フランスでは、若者は老人とともに住まず、老人は早くから老人年金を受給して働かず、昼日中から、彼ら、無為の一人暮らしの若年寄りたちは、飲み屋の屋台にへばりついて濁った眼で、往来の若者たちに悪罵の声を浴びせている。五十代で多額の年金を獲得して、人生は楽しまねばならぬと、再就職を拒否し、意見のちがう子供たちとも縁を切って、場末の屋根裏部屋に居をかまえた彼ら、彼女たちは、七十、八十で死ぬまでの、二〜三十年に及ぶ長い隠棲の年月のあいだに、第一流の皮肉屋になってゆき、人の世の狂気を、それに少しも関わることなく観察しつづけたあげく、見えるものと自己とを同化するに至り、やがては狂った頭悩で、家並みの最上階にとじこもったまま、だれも訪れるものもなく、話し相手もなく、そのかわりに、狭い明かりとり窓をあけて、低い往来めがけて、自己と世界と一族と、その他ありとあらゆるものへの悪罵を終日、吐きつづけるようになる。パリは、たしかに、髪ふりみだした狂女たちの罵声と嬌声に満ちていた。そしてそれら、屋根裏の狂女たち（というのは、狂いつつ老いてゆきながら、いつまでも死ぬことのないのは男より女に多いからだが、）の笑い声と、ついでにその悪意に歪んだ顔までが、なんとシオランのそれに似ていたことだろう。

こんなことを書いてゆくと、訪ねてゆくたびに歓待してくれ、この翻訳にあたっても種々、教示してくれたシオランの優しい人間味を歪めて伝えることになるだろうか？　いや彼が、アンチキリストとして、苦悩の中に悪魔の哄笑を実現している以上、そしてまた、人は生まれおちていらい、日々、刻々と罪を重ね、いっそう楽園から遠ざかっているということ、人間の最大の罪がこの世に生を享けたことであり、人間の最大

の失敗は、日々、死に損なっていることだと彼が考えている以上、あれほど優しく、透明な心も、あの醜い笑いに歪んだ悪魔の面をかぶらなければならないのだ。

教会のレリーフなどで、悪魔はよく、臀部に第二の顔を持っていて、髭もじゃのその顔が、思わず身ぶるいするような卑猥な笑いをたたえて、こちらをじっと見ていたものだ。彼は何を笑っているのだろう? そこに笑うべきものがなかったら、そんな笑いはできはしない。シオランは何を笑っているのだろう? それが彼自身の醜さだとしても、それはまた、われわれの醜さでなくてなんだろう。

篠田知和基

訳者略歴
篠田知和基（しのだ　ちわき）
1943年　東京に生まれる
　　　　東京教育大学大学院卒（仏文専攻）
現　在　名古屋大学助教授
著　書　『幻影の城』（思潮社）
訳　書　デュリー『ネルヴァルの神話』，ネルヴァル『阿呆の王』，リシュ『ネルヴァル』（以上思潮社），ケロール『その声はいまも聞える』，『ひとつの砂漠の物語』（以上白水社），『ノディエ幻想短篇集』（岩波書店），『De Serpents galants et d'autres（日本民話集）』（Gallimard）ほか
現住所　名古屋市千種区青柳 7-29-3

実存の誘惑　E. M. シオラン選集 3
1975年7月10日初版第1刷発行
1993年8月10日初版第2刷発行
著　者　E. M. シオラン
訳　者　篠田知和基
発行者　前島　俶
発行所　国 文 社
東京都豊島区南池袋1-17-3
電話　03(3987)2865
印刷　長野印刷
製本　並木製本
ISBN4-7720-0158-1